# 東系良

(大阪府茨木市)

発 掘 調 査 概 報 I (本 文 編)

1979年6月

東奈良遺跡調査会

# 東系良

(大阪府茨木市)

発 掘 調 査 概 報 I (本 文 編)

1979年6月

東奈良遺跡調査会

地下に眠る文化、先人達の自然を舞台とした様々なドラマや其の営なみは、現在に生活する我々と今尚大きな関連をもって生きているのです。然し其れを実証する貴重な財産であるべき埋蔵文化財も急ピッチな開発の煽りを受け、辛うじて各地域で緊急的な発掘調査をなされているのが現状です。

はからずも国際都市大阪のベッドタウンとして、発展の一途を辿りつつあった本市におきましても、昭和39年に日本初の本格的自動車道路である名神高速道路が整備され、同44年には隣接する吹田市で開催された日本万国博覧会会場の一つの玄関的役目を担った事等が契機となって、都市化に伴なう各種の開発事業が急激に進み其の一方で貴重な埋蔵文化財が、不本意乍ら破壊の危機に立たされました。そこで其の保存保護が急務とされた次第です。

今回東奈良遺跡の発見も、小川水路の改修、下水道工事等によるものであり、 其の遺物の多大さ貴重さ等から緊急に遺跡の性格と、規模を詳しく調査する必要 性が生じたのであります。更に此の附近にも住宅開発の波が押し寄せ、阪急南茨 木駅が設けられた事等も発掘調査の大きな発端となった事は申す迄もありませ ん。

幸いにして阪急電鉄株式会社においては、此の趣旨をご理解載き、大阪府教育 委員会と本市の三者に依る協議の結果、「東奈良遺跡調査会」が結成され、名実 共に本格的調査の第一歩を踏み出したのであります。

百聞は一見に如かずとか、人間誕生以来培かわれて来た歴史の証を、現実に 見、或は手に触れ実感として受け止め乍ら、当初の予想を上廻る成果を上げて調 香は今も続けられております。

此々に、昭和47年~同48年迄の調査報告と致しまして若干の資料を提供するものであります。

最後に発掘調査に従事された方々及び調査関係者各位に感謝の意を表しますと 共に、生きとし生ける者として、今後共文化財の保存保護について認識昂揚を、 敢えて念願するものであります。

茨木市教育委員会教育長

桑 田 栝 身

- Ⅰ 本概報Ⅰは、阪急電鉄南茨木駅周辺の住宅開発事業等に伴って、昭和46年7月より、同48 年8月までに実施した発掘調査の概要をとりまとめたものである。
- 調査にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課主査・田代克己(現帝塚山短期大学助教授)を調査部長、茨木市教育委員会社会教育課長・奥田勉(現総務次長兼課長)を事務部長として行った。
- 発掘調査については、阪急電鉄株式会社・秀和レジデンス株式会社・山文商事株式会社・ 三愛石油株式会社の各位に御協力を得たことに感謝いたします。
- IV 本文の執筆は、各遺構は井上直樹、弥生式土器及び考察は前田千津子(旧性・寺田)、土 師器は山口衣代(旧性・西尾)が行い、それぞれ井上直樹・白井忠雄が補佐を行った。須恵 器は宮脇薫、石器は白井忠雄・木器は山尾真由美が行い、実測図の作成は各々の担当者の 他、山内ちづ子が行った。遺構・遺物の写真撮影は寿福滋氏が行った。

尚、本書作成には旧・新調査会メンバーの多大な協力を得た。

- ▼ 木器の材質鑑定は、暁学園短期大学教授理学博士・嶋倉巳三郎氏に依頼し、その結果を掲載した。
- VII 本書の編集は、田代克己・奥井哲秀が担当した。

#### 現調査会組織

理事長 桑田栝身 茨木市教育委員会教育長

理事 藤沢一夫 四天王寺女子大学教授

理事 免山 篤 茨木市文化財愛護推進委員

理事 中平 敏 茨木市教育委員会指導部部長

元調查部長 田代克己 元大阪府教育委員会文化財保護課係長

事務部長 久保田吉温 茨木市教育委員会社会教育課長

事務主任 吉岡成昭 茨木市教育委員会社会教育課長代理

調查主任 奥井哲秀 茨木市教育委員会文化財係主事

東奈良遺跡調査会メンバー

井上直樹·宮脇薫·松岡良憲·大野恵三子·白井忠雄·石田治雄·高田敬子·岩鼻圭子·谷本喜代子·森木芳子

#### 旧調杳会メンバー

中井貞夫・兼康保明・松下彰・藤沢真依・阿部幸一・前田昇治・小坂茂樹・福本孝弘・岡本広義・森田孝一・柏原平治・前田千津子・山口衣代・山尾真由美・山内ちづ子・巽清子・渡辺雅子・浜田恵三子・他、近畿大学考古学研究会・追手門学院大学考古学研究会の参加をみた。

# 本 文 目 次

第1章	調	査に至る迄の経過	1
第Ⅱ章	遺	跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
第Ⅲ章	調	査の概要	
	1.	経過	7
	2.	調査地区の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
第Ⅳ章	遺	横	12
	1.	F-7-E•F地区·····	12
	2.	H-5-I・M地区······	14
	3.	H-3-J ⋅ K ⋅ M ⋅ N ⋅ O ⋅ P地区····································	17
	4.	H-3-B・C・F・G・H地区	21
	5.	I − 3 − B • C • F • G • H地区····································	32
	6.	F-4-N、G-4-B地区······	-33
	7.	A-6-F·G·I·J·K地区······	49
	8.	A-6-F地区·····	54
第Ⅴ章	遣	<b>i</b> 物 ······	-56
第1		、	
<i>&gt;</i>  3 <b>1</b>	1.	小川水路	
	2.	F-7-E•F地区····································	
	3.	H-3-H地区·······	
	4.	F-4-N、G-4-B地区····································	
	5.	A-6-F•G•I•J•K地区······	
第 2		土師器	
7,7 2	1		L35
	2.	H-5-I•M地区·············	
	2. 3.	H-3-N•P地区·······	
	<ol> <li>4.</li> </ol>	H-3-G地区•井戸4号····································	
	5.	H-3-G地区。溝 I-3 ···································	
第3		須恵器····································	
第4		石器	
<i>₩</i> =	- NH	— III	

第Ⅵ章	考	察	245
	1.	7—4—N地区方形周溝墓の供献土器について	245
	2.	- 器焼成実験から観た黒斑	246
	3.	5杯型土器と台付鉢型土器の杯部と脚部の接点について······	254
	4.	]転台について	255

# 図 版 目 次

## 図版 1 東奈良遺跡周辺図(附図)

- 2 割付け図(附図)
- 3 東奈良遺跡の航空写真

## F-7-E • F地区

- 4 (上) 遺構全面(東より)
  - (下) 遺構全面(西より)

## H-3-J • K • M • N • O • P地区

- 5 掘立柱建物跡群
- 6 (上) 井戸状遺構
  - (下) 竪穴住居跡

## H-3-B • C • F • G • H地区

- 7 第』遺構面
- 8 (上) 竪穴住居跡 La (南より)
  - (下) 竪穴住居跡 I a (北より)
- 9 (上) 竪穴住居跡 **I** b (南より)
  - (下) 竪穴住居跡 ▮ c (南より)
- 10 (上) 井戸 4号
  - (下) 土器群 a · b · c

## $I-3-B \cdot C \cdot F \cdot G \cdot H$ 地区

- 11 (上) 東半遺構
  - (下) 西半遺構

## F-4-N、G-4-B地区

- 12 第1号方形周溝墓
- 13 (上) 第1号方形周溝墓(供献土器)
  - (下) 第1号方形周溝墓(最終面)
- 14 (上) 第1号方形周溝墓內木棺墓1・2号
  - (下) 第1号方形周溝墓南溝供献土器
- 15 (上) 第8号土坛墓
  - (下) 第1号井戸

- 図版 16 (上) 第 大形土拡
  - (下) 第 大形土城 木製品
  - 17 (上) 第 【大形土坎
    - (下) 第 ▼大形土拡 木製品

## $A-6-F \cdot G \cdot I \cdot J \cdot K$ 地区

- 18 (上) 方形周溝墓群(東より)
  - (下) 方形周溝墓群(北より)
- 19 (上) 第1号方形周溝墓東溝供献土器
  - (下) 遺構(北より)

## 弥生式土器

- 20~24 F-7-E・F地区 出土の土器
- 25~36 F-4-N、G-4-B地区 出土の土器
- 37・38 A-6-F・G・I・J・K地区 出土の土器

## 土 師 器

- 39 F-7-E・F地区 出土の土器
- 40 F-7-E・F地区 出土の土器

H-5-I・M地区 出土の土器

41 H-3-O・P地区 出土の土器

H-3-G地区 出土の土器

42~62 H-3-G地区 溝 I-3 (大溝) 出土の土器

## 須恵器•石器•木器

- 63 各地区出土の土器
- 64 各地区出土の石器
- 65 各地区出土の石器・土製品
- 66・67 F-7-E・F地区 出土の木器
- 68・69 F-4-N、G-4-B地区 出土の木器
- 70 H-3-G地区 出土の木器
- 71 F-4-N、G-4-B地区 出土の板状原材
- 72 F-7-E·F地区 遺構実測図
- 73 H-5-I M地区 遺構実測図
- 74 H-5-M地区 壺棺墓実測図

- 図版 75 H-3-J・K・M・N・O・P地区 遺構実測図(附図)
  - 76 H-3-B C F G H地区 第 L 遺構面実測図 (附図)
  - 77 H-3-B C F G H地区 第 **Ⅰ** 遺構面実測図 (附図)
  - 78 H-3-C地区 竪穴住居跡 I a 実測図
  - 79 H-3-C地区 竪穴住居跡 I b · c 実測図
  - 80 H-3-G地区 井戸4号実測図
  - 81 I-3-B F G H地区 遺構実測図 (附図)
  - 82 F-4-N、G-4-B地区 遺構実測図(附図)
  - 83 F-4-N、G-4-B地区 土層図 (附図)
  - 84 F-4-N地区 第1号木棺墓
  - 85 F-4-N地区 各遺構土層図
  - 86 F-4-N地区 各遺構土層図
  - 87 F-4-N地区 第1号方形周溝墓南溝供献土器実測図
  - 88 G-4-B地区 第 I 大形土拡実測図
  - 89 F-4-N地区 第Ⅰ大形土拡実測図
  - 90 A-6-F・G・I・J・K地区 遺構実測図 (附図)
  - 91 A-6-K地区 第1号方形周溝墓東溝供献土器実測図
  - 92 小川水路採集の土器・石器
  - 93 F-7-E・F地区 包含層・第3号土拡出土の土器

  - 96 F-4-N地区 包含層・マウンド出土の土器

  - 98 "

"

- 100 G-4-B地区 第 大形土拡出土の土器
- 101 "
- 102 G-4-B地区 第 大形土坂出土の土器
  - F-4-N地区 東第 ▮ 溝出土の土器
- 103 F-4-N地区 第 ▼大形土坂 (東端土器群) 出土の土器
- 104 A-6-F・G・I・J・K地区出土の土器 第1号方形周溝墓供献土器
- 105 A-6-F・G・I・J・K地区出土の土器 第1号方形周溝墓供献土器
  - H-5-I・M地区出土の土器 溝状遺構・壺棺
- 106 F-7-E・F地区出土の土器
- 107 H-3-N、H-3-O、H-3-G地区出土の土器

```
図版108 H-3-G地区 溝I-3 (大溝) 出土の土器
   109
                       //
   110
                        //
   111
                        //
   112
                        11
   113
   114
   115
   116
   117
                        //
   118
   119
   120
   121
        各地区出土の須恵器
```

- 122 "
- 123 各地区出土の石器
- 124 "
- 125 各地区出土の石器・土製品
- 126 F-7-E・F地区出土の木器
- 127
- 128 F-7-E・F地区、F-4-N、G-4-B地区 出土の木器
- 129 F-4-N、G-4-B地区出土の木器
- 130 H-3-G地区出土の木器
- 131 G-4-B地区出土の板状原材

# 挿 図 目 次

第1図	小川水路採集の銅鏃と銅鏡・・・・・・・・3
第2図	小川水路近景(北より昭和54年3月撮影) 3
第3図	東奈良遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第4図	地区割細分図5
第5図	発掘調査風景5
第6図	木槌の出土状況······12
第7図	竪杵の出土状況・・・・・・13
第8図	掘立柱建物跡15
第9図	壺棺墓
第10図	土器群C出土土器······32
第11図	第 7 号土
第12図	第 8 号土
第13図	南溝供献土器44
第14図	北溝供献土器
第15図	井戸第1号出土土器
第16図	第   大形土拡出土土器
第17図	第 ▮ 大形土竑出土土器
第18図	第1号方形周溝墓供献土器·····50
第19図	東壁面土層図・・・・・・55
第20図	溝 【 − 3 (大溝)出土土器 … 147
第21図	溝 【 − 3 (大溝)出土土器 … 148
第22図	須恵器杯蓋 1
第23図	" 5 ····· 221
第24図	" 8 ····· 222
第25図	木器材質鑑定顕微鏡写真244 • 245
第26図	" 244 • 245
第27図	" 244 • 245
第28図	" 244 • 245
第29図	" 244 • 245
第30図	東第
第31図	杯部と脚部のとりつけ方法
第32図	<i>"</i> 255
笙33図	// 255

第34図	東奈良遺跡出土土器・土製品の黒斑256・257
	焼成実験土器の黒斑(1~10)・描き継ぎ(11、12)と木葉底(13~15)…256・257
第36図	土器焼成実験( $1\sim6$ )・脚部のとりつけ方法( $7\sim10$ )256・257
第37図	杯部と脚部の接合実験・・・・・・256・257

# 表 目 次

第1表	調査経過表
第2表	掘立柱建物跡の規模18
第3表	井戸状遺構の規模・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第4表	第1号方形周溝墓各溝の規模36
第5表	木棺墓・土坂墓の形態と規模42
第6表	各地点標高
第7表	各方形周溝墓の規模・・・・・・
第8表	F-4-N、G-4-B地区弥生式土器の形態と呼称(折込)
第9表	H-3-G地区溝 I-3 (大溝) 土師器の形態と呼称(折込)140 • 141
第10表	板状原材木取り模式図及考察242
第11表	各溝の供献土器群集計表(百分率)
第12表	焼成土器の観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第13表	黒斑の位置関係分類表・・・・・・・・・・・249
第14表	黒斑の位置観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	東奈良遺跡出土土師器編年図表附図
別 表	

弥生式土器観察表

土師器観察表

須恵器観察表

石器•土製品観察表

# 第1章

# 調査に至る迄の経過

大阪、京都を結ぶ交通の要路にあたる茨木市は、其の立地と交通 網に恵まれた事から、工場用地、住宅地として大阪を核とする衛星 都市化が急速に進み、農村から都市への転換を余儀なくされた。此 の様な生活基盤の変化は、何百年もかかって培かわれた古い茨木の 町並を次第に奪い去り、長閑な田園地帯は、工場用地や宅地へとそ の歴史的風土は開発の波に呑み込まれ大きな変貌をとげつつある。

摂津市に隣接する茨木市の南西部は、此れ迄交通機関に恵まれなかったことから、国鉄東海道線沿いに工場が建設された他は、近年 迄特に目立った大規模な開発はなく広々とした田園風景を保っていた。

然し、日本万国博覧会の開催を契機に交通網の整備がなされ、阪 急南茨木駅の誕生を見、大阪中央環状線がひかれると言う好条件か ら、新たな住宅地として浸蝕される様になって来た。

此の様な状況下に於いて、昭和45年から同47年にかけて、水捌けの悪かった茨木の市街地を流れる小川水路を浄化する為の改修工事が、茨木市土木課によって随時行なわれ、同46年春、東奈良2丁目にさしかかった際、パワーショベル等で掘り上げられた土砂の中に多量の遺物(土器・石器・木器)が混入しているのが発見された。

此の第一発見者は、近くに住む市立玉櫛小学校と、市立南中学校の児童、生徒諸君であり、彼等は毎日のように、残土の中から根気よく遺物の表面採取を行ない、其れを各々の学校に届けた。その中で、美沢町の日高史雄、水尾町の西岡伸哲両君による多量な採集品の中には、銅鏃、木製品等も含まれており、その重要性等から事態を重視した学校側より本市教育委員会に第一報が入った。

此れ迄茨木市の南部における遺跡の存在は確認されておらず、この連絡を受けた市教委は、状況を把握する為現地に赴むいた結果、現地表面下約 1.7mの黒色粘土層中より弥生時代及び、古墳時代の遺物等が出土していることを確認した。

その後、この地域で阪急電鉄株式会社によるマンション建設が計画された為、市教委によって試掘が行われ、其の結果、奈良、東奈良、沢良宜西、天王、若草の各町にまたがるかなりの範囲に遺跡が広がることが確認された。遺跡の発見は、各新聞で報道され、広く一般にも周知される様になったが、一方遺跡の保存、保護について大阪府教育委員会、茨木市教育委員会、阪急電鉄株式会社との三者で幾度となく協議が重ねられ、同年7月、本格的な発掘調査の必要

性から、府教委、市教委の合同のもとに「東奈良遺跡調査会」が結成され、調査が実施されることとなった。

調査期日	発	掘出	也 域	調査目的	調査主体	遺	構	遺	物
昭和46年7月20日~ 9月30日	東奈良?	2丁目	$1745-2$ $500 extit{m}^2$	寮建設にともな う事前調査	東奈良遺跡調査会	溝、円型大 袋状土歩等 (弥生時	形土坛、 等 代後期)	弥生式土器 V)、土師器 ~布留)、須 石器、木器、	(Ⅱ <b>~</b> (庄内 恵器、 瓦器
昭和46年11月21日~ 11月30日	東奈良	3丁目	316、393	小川水路の改修	茨木市 教育委員会	溝(時期	不明)	弥生式土器、 器、須恵器 (古墳時代	
昭和46年12月13日~ 12月18日	沢良宜四	国35—	-1、36—1 44 <i>m</i> ²	ガソリンスタン ド建設にともな う緊急調査	茨木市 教育委員会	住居跡	代前期) 時代?)	弥生式土器、 器	. 土師
昭和47年1月27日~ 1月31日、2月23日	東奈良名	2丁目	402番地	小川水路の改修	茨木市 教育委員会	わき水のた調査不能	こめ	弥生式土器、 器、須恵器、 石剣、銅鏃	
昭和47年 5 月17日~ 5 月22日 6 月25日~ 8 月 6 日	沢良宜		— 1 17,998 <i>m</i> i	小学校建設にと もなう事前調査 および範囲確認 調査	茨木市 教育委員会	壶棺 (弥生時 住居跡、 (奈良~平	代後期) 井戸、溝 安時代)	弥生式土器、 器、須恵器	. 土師

第1表 調査経過表

小川水路採集遺物について

弥生式土器 (図版92 1 ∼16)

石器 (図版92 1~7)

銅鏃・銅鏡 (第1図 1~4) ここに報告する弥生式土器、石器、銅鏃、銅鏡は、上記の小川水 路改修工事に際して掘り上げられた排土中より、日高史雄・西岡伸 哲両君が採集した遺物の一部である。報告を行うに際して、日高史 雄・西岡伸哲両君の資料提供に対して心より感謝するものである。

弥生式土器は、前期( $1 \cdot 2 \cdot 3$ )と中期( $5 \cdot 7 \cdot 8 \cdot 9 \cdot 10 \cdot 11 \cdot 12 \cdot 13 \cdot 14$ )と後期( $15 \cdot 16$ )の各時期を通じて採集されており東奈良遺跡における弥生時代の存続期間の長さを如実に物語っている。個々の詳細については土器観察表を参照されたい。

採集された石器は、磨製石鏃(1)と打製石鏃(2~6)と打製石庖丁(7)等である。打製石鏃は、平基式(2・3・4)と凸基無茎式〔円基式〕(5)と凸基無茎式〔尖基式〕(6)の3形式が見られる。これらの内、畿内地方で異例な遺物は打製石庖丁(7)である。打製石庖丁は、畿内地方において出土例が少なく瀬戸内地方(香川県の西半部・岡山県の瀬戸内側等)に多く出土している。東大阪市西石切町植附遺跡出土の打製石庖丁について指摘されている様に、東奈良採集の打製石庖丁においても瀬戸内地方より運ばれて来た石器であり、畿内と瀬戸内の交易を推定する事が出来るだろう。

採集された銅鏃(1・2・3)・銅鏡(4)は、それぞれの形式 的な特徴から弥生時代後期の時期であろう。銅鏃(2・3)は、表 面に鋳造時の鬆が残存しており、東奈良において銅鏃等を製造して いることを暗示する遺物である。銅鏡は、弥生時代後半から古墳時 代初頭にかけての小型仿製鏡である。文様は、磨滅がひどく不明確 であるが一応実測図を挙げておく。

これら代表的な遺物の他にも、多量の弥生式土器片・土師器片・ 石鏃(弥生時代)・剝片(サヌカイト製)と数点の木器が含まれている が、小川水路改修工事における新発見の遺跡であったため、そこに 存在したであろう遺構は不明である。しかし、出土した遺物等によ り弥生時代から古墳時代の遺構群が存在していた事は確実である。

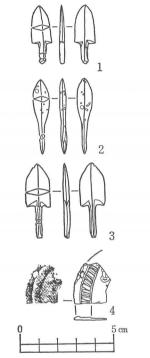
今日の東奈良遺跡における、多くの新しい発見は、この小川水路 において見い出された多量の遺物が原点であり、そこに小川水路発 見遺物の意義がある。



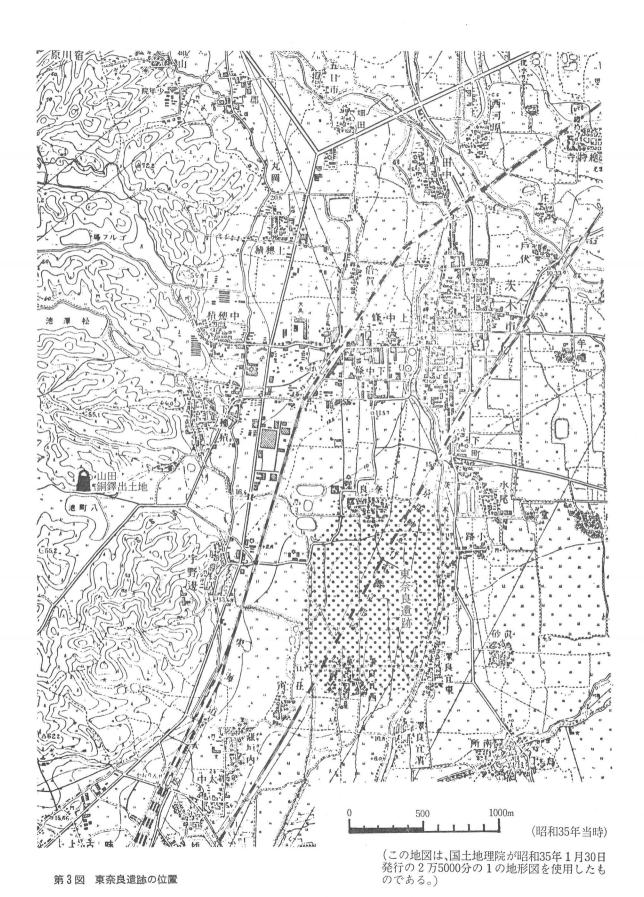
第2図 小川水路近景(北より昭和54年3月撮影)

小川水路改修工事中に出土した遺物は、今回報告した遺物以外にも多くの人々によって採集されており、今後機会あるごとに少しでも多く紹介していきたいと考えており、採集された方々の御協力をお願いいたします。

注 1 大阪府史第1巻 古代編 I 昭和53年 P469~P470 打製石包 丁と植附遺跡



第1図 小川水路採集の銅鏃と銅鏡



\_ 4 \_

## 第Ⅱ章

# 遺跡の位置と環境

東奈良遺跡は、大阪府茨木市東奈良、奈良、沢良宜西、天王、若 草町の一帯に所在し、弥生時代前期に始まり中世に及ぶ大集落跡で ある。

遺跡は、すぐ西方に千里丘陵をひかえ、北は老坂山地、東及び南は西南流する淀川にはさまれた沖積平野上に位置する。

明治初年、遺跡の西方吹田市山田別所から銅鐸一口が出土していることから、遺跡の存在は予想されてはいたが、1960年代にはまだその実体は明らかでなかった。

1971年から開始された小川水路の改修工事によって、大量の遺物が発見されて以後、数次の調査が行なわれ、一方銅鐸の鎔笵等が発見されたこともあって、三島平野における大規模な低地の遺跡として知られるようになった。

三島地域において現在までに知られる弥生時代初期の集落跡としては、東奈良遺跡、目垣遺跡、耳原遺跡、柱本遺跡、安満遺跡があり、いずれも弥生時代前期に始まるものである。これらの遺跡は、すべて標高5~10m程度の低地に存在しており、他地域の弥生時代前期の集落立地と変りがない。周辺の低湿地が水田として利用された結果と言えるであろう。

弥生時代中期には、郡遺跡、宿久庄遺跡、郡家川西遺跡、天神山 遺跡などが増加し、特に安満遺跡を中心として、天神山遺跡、慈願 寺山遺跡、芝谷遺跡、古曽部遺跡、紅茸山遺跡、萩ノ庄遺跡等の存 在が知られており、安満遺跡を母村とするまとまりがあるのではな いかとも言われている。

弥生時代後期には、東奈良遺跡の周辺に新芦屋遺跡、中条小学校 遺跡、上中条遺跡などがみられ、郡遺跡の周辺には、郡児童公園遺跡、地蔵池南遺跡、上穂積遺跡、倍賀遺跡などがみられるようにな る。耳原遺跡の周辺には、太田遺跡、総持寺遺跡、安威遺跡などが 現われ、郡家川西遺跡周辺には津之江遺跡、その他天神山遺跡の周 辺では真上遺跡の存在が知られる。

弥生時代前期から後期まで続いて集落の営まれた遺跡と比べて、 後期に出現するものは小規模なものがほとんどである。大規模な集 落と周辺の小集落がどの様な関係にあったかについては、単に母村 と分村と言うだけでは解決し得ない多くの問題を含んでいるわけで あり、目下のところ不明としか言いようのないのが現状であろう。

東奈良遺跡では、銅鐸をはじめ、銅戈、勾玉などの鋳造に関係す

る遺物が多く発見され、注目されることとなったが、このことは、 単に三島地域のみにかかわらない大きな問題を含んでいると言わね ばならない。銅鐸の製作とその配布に限っただけでも問題は大き い。このことをふまえた上で、三島地域で東奈良遺跡が占めた役割 等について今後追求されねばならないであろう。

古墳時代には、三島平野の背後の丘陵地にいち早く前期古墳が築造されはじめる。紫金山古墳、将軍山古墳、弁天山古墳群などよく知られたものも多く、これらの古墳を通して各々の地域のまとまりをうかがうことができる。

東奈良遺跡では、巾10m、深さ3mで2段に掘り下げた、少なくとも500m以上一直線に続く大溝が発見されている。溝の時期を弥生時代にするか古墳時代とするかについては、今後さらに検討すべきものと考えられるが、比較的大規模な古墳と比べても、その土木量は圧倒的である。この溝からは、すでに弥生時代にはみられない、人員を大量動員し得る背景が浮び上ってくるわけであり、古墳時代の初期にこの三島地域で東奈良の人々がはたした役割にも大きなものがあったと予想されるのである。

大溝は短時間の間に砂で埋没してしまい、5世紀以降東奈良では 人々の生活した痕跡はほとんど無くなる。奈良~平安時代にかけて わずかに掘立柱建物が検出され集落が営なまれたことがわかるが、 かっての大規模な集落のおもかげはない。この時期には律令制下嶋 下の郡衙の置かれた郡遺跡周辺が、この地域の中心となったのであ る。

## 第Ⅲ章

## 調査の概要

## 阪急電鉄社員寮

(F-7-E • F地区)

## 山文商事ガソリンスタ ンド

 $(H-5-I \cdot M$ 地区)

東奈良遺跡は、昭和46年4月、小川水路改修工事及び、下水道管 埋設工事中に発見されて以来、多くの箇所において緊急発掘調査を 行って来た。今回の概報は、昭和46年7月から昭和48年7月にかけ て行った調査地区のものである。以下調査年度を追って記述を進め て行く。

昭和46年7月、さきの小川水路の東側、茨木市東奈良2丁目745

番地の2 (東奈良遺跡地区割り、F-7-E・F地区) に、阪急電鉄株式会社の社員寮が建設されることとなり、試掘調査を行った結果、遺物包含層が確認され、昭和46年7月20日より調査面積約500㎡の発掘調査を行った。まず包含層迄一気に造成土、耕土床土を、ユンボにより現地表面下約2.5m迄掘り下げると、全面に黒色粘土層があらわれた。当初黒色粘土層は2層にわけられると思われたが判別困難であることから、ベースの青灰色粘土層迄下げることとした。然し遺物の出土量が多い上に、連日の雨天に悩まされベースの面が完全に検出されたのは8月中旬であった。その結果弥生時代後期から古墳時代にかけての溝状遺構、円形大形土拡、袋状土拡が検出され、9月30日に全調査を終了した。

下一7一E・F地区調査中の昭和46年8月、阪急電鉄京都線南茨木駅南東約200mの中央環状線沿い、茨木市沢良宜西35—1、36—1(東奈良遺跡地区割り、H—5—I・M地区)に、山文商事がガソリンスタンドの建設工事を行った時、大型タンクを地中に埋めるために掘り出された土砂中より、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土していることを中学生から通報を受けた茨木市教育委員会では、工事主体者である山文商事株式会社に現状保存を依頼し、大阪府教育委員会文化財保護課の指導を受けた。協議の結果、用地内で地下の遺跡に影響を受けるガソリンスタンド事務所のみの発掘調査を実施することになった。昭和46年12月13日より18日にかけて、ほぼ南北に2×22mのトレンチを設定し、発掘調査を行った。その結果、平安時代頃の柱穴跡、古墳時代前期の壺棺墓・弥生時代後期の溝状遺構を検出した。

## 天王小学校

(I-1, J-1地区)

昭和47年の春から同年11月、天王小学校(I-1、J-1地区)の 建設に先立って、大小3ヶ所の試掘調査及び発掘調査を実施し、現 在の東奈良遺跡の範囲が確認された。

## 阪急電鉄マンション

昭和47年10月、阪急電鉄京都線南茨木駅週辺に大規模なマンション建設が計画されていることから長期的な発掘調査を考えて、新に

東奈良遺跡調査会が結成された。同時に東奈良遺跡地区割りをも設 定し、本格的な発掘調査に備えた。

昭和47年11月1日より、阪急電鉄株式会社、駅前ハイタウン第一期分譲マンションA、B、C3棟の発掘調査を開始した。まずH一3一J・K・M・N・O・P地区に位置するB棟から調査を行った。当マンション建設計画地区は、全面に  $1.5\sim2$  mの造成土が旧耕土面に盛られていることから、この撤去作業を行い、更に耕土床土をユンボのバケットに鉄板を取り付けて、平削りを行いながら取り除いた後、本格的な発掘調査を行った。

## B棟

(H-3-J・K・M・ N・O地区) 同地区は、昭和47年11月1日より12月30日にかけての2ヶ月間にわたって、約1,270㎡の調査を実施した。当調査地区は、現地表面下約2.5mに位置しており、雨天、湧き水による冠水等、困難を極めたが、遺構が少なく比較的短期間で終了できた。

調査開始後すぐに、調査地区東半 (H-3-O・P地区) より平安時代のものと考えられる約 150ケ所の柱穴跡、更に同下層より古墳時代前期の堅穴住居跡一基、調査地区西半 (H-3-M・N・O地区) より、古墳時代前期の井戸状遺構が多数検出された。この井戸状遺構が検出された面を当調査地区最終遺構面と考え、ユンボにより、調査地区中央部を東西に、深さ 1.6mの「すじ掘り」による土層調査を行い全調査を終了した。

#### C棟

(H-3-B・C・F・ G・H地区) C棟はさきのB棟の北約35mに位置する。昭和48年1月より3月25日にかけて、約940㎡について発掘調査を行った。同地区は遺構面が二面存在し、第【遺構面より掘立柱建物跡、方形周溝状遺構、溝状遺構、井戸等が検出された。更に下層約0.2mより、古墳時代前期の堅穴住居跡、井戸、大小の溝状遺構、土器群等が検出された。遺構調査終了後の3月20日に実施した「すじ掘り」土層調査のさいに検出された古墳時代前期の巨大な溝は、わずか4日で掘り上げるという緊急調査を余儀なくされた面もあったが、これは東奈良遺跡の重要性を知らしめた。

### Α棟

(I-3-B·C·F· G·H地区) A棟は、B棟の南約40mに位置し、さきのC棟と並行して、昭和48年1月中旬より2月10日にかけて、約1,050㎡について発掘調査を行った。調査は他の調査地区同様、造成土、耕土、床土をユンボにより取り除き、薄く堆積する茶褐色粘土層を手掘りによって除去した後、ベースと考えられる赤褐色粘質土層を検出した。遺構は他の地区に比較すると非常に少なく、少数の柱穴跡、大形土拡、近世

**阪急電鉄南茨木駅舎** (F-4-N、G-4 --B 地区) の池(沼)の跡のみであった。2月9日に最終調査の「すじ掘り」 +層調査を調査地区中央部、東西方向に行い全調査を終了した。

昭和48年3月、南茨木駅周辺の高層マンション建設に伴い、南茨木駅の駅舎増築並びにショッピングセンターの建設が、阪急エンジニアリングによって計画され、昭和48年3月24日より、茨木市奈良305の1の発掘調査を行った。

当地区は、すでに存在する駅舎の東側にあたる上に、周囲には中央環状線、近畿自動車道が走り、大形下水道が埋設されている状態であった。更に遺構面が現地表面下約 2.5mに位置することから、調査中たび重なる雨による造成土の崩壊により遺構の一部を埋め、土砂の取り除きに手間取っている内に又崩壊するという状態が繰り返され、調査の長期化を生み、遺構の一部がたび重なる冠水の為大きく変化するという困難な調査が続いた。調査面積は、当初約 150 ㎡であったが、方形周溝墓の検出により調査地区を敷地いっぱいまで拡張し、約255㎡になった。

当地区では、弥生時代中期の方形周溝墓、木棺墓、土坂墓、多量の木製品を含む大形土坂、井戸、柱穴等が多数検出された。遺構検出終了後、北東~南西の壁面沿いに、深さ1mの「すじ掘り」土層調査を行い、7月14日に全調査を終了した。

秀和レジデンスマンシ ョン

(A-6-F・G・I・ J・K地区) 昭和48年3月、H-3-B・C・F・G・H地区調査中、茨木市 奈良町19番地に、秀和レジデンス株式会社が中高層マンションの建設を予定している事を知った。建設予定地が東奈良遺跡内に位置することから、工事主体者と協議を行い、昭和48年3月16日に試掘調査を実施し、その結果、弥生時代から古墳時代の土器を包含する土層を検出し、緊急発掘調査が、東奈良遺跡調査会に要請された。同年4月下旬より、調査面積約1,600㎡の当地区の調査を開始した。調査は先ずユンボによって耕土床土を取り除き、厚さ0.4mの灰褐色粘土層を手掘りによって掘り下げ、遺構面を検出した。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓5基、土拡等を検出し、遺構調査終了後、他地区同様調査地区中央部に、深さ1.2mの「すじ掘り」を東西方向に設け、土層調査を行い昭和48年6月下旬に全調査を終了した。

三愛石油ガソリンスタ ンド

(A-6-F地区)

又同地区において、三愛石油株式会社によるガソリンスタンド建設計画の申請があり、 $A-6-F\cdot G\cdot I\cdot J\cdot K$ 地区終了後継続調査を行う事になった。ガソリンスタンド建設予定地はA-6-F

地区に位置し、昭和48年7月上旬より地下埋設タンクと事務所の建設される所のみの約200㎡の調査を行った。

当地区では、土器を包含する薄い土層以外全く遺構は検出されず 7月下旬に全調査を終了した。

以上が今回の概報に記載した調査地区の調査経過である。

調査地区の設定

昭和46年4月、東奈良遺跡発見以後、阪急電鉄の家族寮(F-7)、山文商事ガソリンスタンド(H-5)、天王小学校(I-1・J-1)など大小8カ所の発掘調査ならびに試掘調査により、東奈良遺跡の範囲は、北は奈良町、東は元茨木川を越え玉櫛、西は大正川、南は沢良宜浜付近に至る東西約1,100m、南北約1,400mの極めて大規模なものであると考えられるに至った。この遺跡の範囲の中には、本来他の名称がつくべき所もあるが、将来この地域に大規模な開発が予想され、細い概念にとらわれずに埋蔵文化財の破壊を未然に防ぎ、遺跡を大規模につかみ、総合的に調査・保存することを含んで範囲を設定したものである。(図版2)

このように東奈良遺跡の範囲が拡大され、大規模な開発計画があることにより、長期の広範囲な発掘調査が予想されることから、遺跡の将来を見越して範囲を明確に区分しておく必要が生じた。

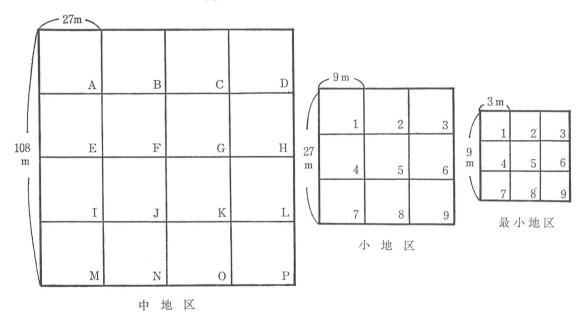
東奈良遺跡も調査が進むにつれて、奈良・平安時代の遺構が存在することが判明し、また将来も同時期の遺構検出が予想されることから、条里制にのっとった地区割りが必要とされた。そこで問題となるのは、基準線の設置であるが、東奈良遺跡の範囲内には、比較的水田面が多く残っており、条里をつかみやすく、地図上よりほぼ南北・東西に通った道路 (畦) を基準とし、磁北より $N-6^{\circ}28'-E$  にふった基準線を設け、これを東西南北に拡大して地区割りを行った。すなわち、大地区を 108m四方に取り、最小地区を 3 m四方とした。これにより、大地区を南北に $A\sim M$ 、東西に $1\sim 10$ にわけ中地区を設け、北西より $A\sim P$ 地区とした。次に中地区を 9 mにわけ小地区を設け北西より  $1\sim 9$  地区と称し、さらに小地区を 3 mにわけ最小地区を設け同様に  $1\sim 9$  地区と称し、さらに小地区を 3 mにわけ最小地区を設け同様に  $1\sim 9$  地区と称することにした。また東奈良遺跡の略号を1 に、調査地区の名称は、たとえば1 に、 1 第4 図)

この地区割り設定により、検出遺構・遺物にもこの表記がされ、

相互関係を正確に把握することができ、将来東奈良遺跡の古代史地 図をも作製することが可能になった。

次に、基準標高は、茨木市沢良宜西の蓮照寺境内の三角点 (O・P-8.129m) を基準として使用している。

(注) 今回の概報に記載している阪急家族寮  $(F-7-E\cdot F$ 地区)、山文商事ガソリンスタンド  $(H-5-I\cdot M$ 地区)は、この地区割り設定以前の調査のため、地図上よりひろった地区割りを使用している。



第4図 地区割細分図



第5図 発掘調査風景

第IV章 遺 構

**F-7-E・F地区** 

層位

溝Ⅰ



第6図 木槌の出土状況

当調査地点で検出された遺構は、北西から東へ流れる浅くて幅の広い溝(溝I)と、東西に蛇行しながら流れるV字溝(溝I)、直径約2m、深さ1m前後のものを含む九個の円形大形土拡、溝Iによって切られた8個の袋状土拡などの他、柱穴かと考えられる若干のピットを検出した。また調査地点の中央部から西寄りにかけて腐蝕した植物遺体や自然流木を多量にまじえた、非常に粘りの強い黒色粘土層が堆積した南北に広がりを見せる沼状のよどみと思わせる大きな落ち込みのあるのを確認している。

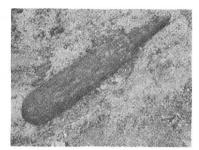
造成土を取り去ると、かっての水田面が姿を現わす。其の耕土と床土 (第1層) を約 1.2m掘り下げると淡黒色粘土層 (第2層) が現われる。第2層には、瓦器、磁器の小破片、木製品、自然流木等が包含されているが、遺構は検出されなかった。約 0.3mの第2層を除去すると、粘りの強い黒色粘土層 (第3層) が現われる。唐古第『様式から、第『様式にわたる弥生式土器、土師器、須恵器が自然流木とともに含まれており、数回にもわたって押し流されて、繰り返し堆積したと考えられるが、包含層が全く黒色であるため明確に堆積の実態をつかむことはできなかった。約 0.5mの第3層を取り除くと淡青白色の非常に粘り強い粘土層 (第4層) となる。遺構はこの第4層に掘り込んだ状態で検出されている。

今回の調査地点内では、北西から南東方向に約11m検出した。溝の幅は約 $5\sim6$ mであるが、南北2本の流れにわけることができ、北側の流れを溝I-N、南側の流れを溝I-Sと呼ぶ。

両水路より出土した土器から判断して、溝 I-S は唐古第 V 様式の時期に形成され古墳時代前期まで使用されており、溝 I-N は古墳時代前期より形成されている。両水路からは、多量の土器の他、多量の流木と溝 I-S より木槌(図版 128-8)さらに石鏃(図版 123-4)や剝片が少量出土している。

溝I-Nの流れが地上から姿を消したのは、中世の始め頃と考えられる。其の最終的な流れの中に、流木や植物の堆積層が認められ

溝Ⅱ



第7図 竪杵の出土状況

溝Ⅱ

沼池状の落ち込み

円形大形土垃

ることから、多少とも流れの存在した根拠としてあげることができ よう。

調査地点内を東西に蛇行しながら走る幅 $1.5\sim2$  m、深さ0.6m前後のV字溝で、約30m検出した溝の南側の肩には、数本ではあるが、直径 $5\sim6$  cmの木杭(図版127—6.7)とその抜け跡が認められた。

溝が形成されたのは唐古第V様式の時期で、古墳時代後期頃までかなり長期間にわたって使用されている。また溝の土層面を観察すると、溝の使用期間中に拡張をおこなった事が判る。

中央部より西側の溝の調査は、湧き水と壁面の崩壊のため溝の底まで十分に調査を実施することができなかった。この部分の北側の肩には、竪杵2点(図版127—4.5)と用途不明の加工木2点が乗った状態で検出されている。他に溝より、有頭棒(図版126—3)、異形木器(図版126—2)、自然木が出土した。

溝 I には幅 1 m、深さ 0.2mの小支流溝 II を有している。溝 II からは、壺型土器 (図版94-36) が出土している。

調査地点の中央部より西側に、深さ 0.7m前後の不整形な落ち込みが南北に連らなり検出された。落ち込み内の南北の土層断面から判断すれば、土砂の堆積は、黒色粘土や暗灰色粘土が下部に沈澱し、上部には流木や、植物遺体を多量に含む腐蝕土層や、砂層が認められる。沼地状の落ち込み底部より、唐古第 V様式の壺(図版95—43)、器台(図版95—51・52)等と共に、木製の腰掛け(図版126—1)1点が出土している。

円形大形土拡は、大きく3群にわけることができる。溝  $\mathbb{I}$  と溝  $\mathbb{I}$  にはさまれた東側の地点で4基(2基ずつ切り合った状態で検出)、沼地状落ち込みの西側で4基と東側に1基を検出した。

土拡は、最大のもので上口径 2.5m (第7号土坂)、最小のものは上口径1.3m (第1号土城) で、平均して上口径1.5m前後のものが多い。深さは土拡の肩から計って、最も深いもので1m (第3号土城)、浅いもので0.25m (第6号土城) で、平均して深さは0.45m前後である。

土拡は、淡青灰色の粘りの強い粘土層 (第4層) を掘り込んで作られており、土拡の底に粘性の強い灰色粘土層が認められるほかはほとんど腐蝕土が土拡内に充満している。東側の1群、第3号土拡の底近くに唐古第 V 様式の甕形土器(図版93—15)が横転した状態で出土した。これと同様の円形大形土拡が下中条遺跡からも検出され

ており、土拡中の遺物も同時期のものである。

円形大形土拡の時期は、土拡内遺物を全く含まないものであるが、2群とも唐古第 V様式の時期と考えてよいだろう。

袋状土坎

調査地点の北東のすみに、溝 I によって切断された 8 基の袋状土 拡が検出された。溝 I によって切断されているため詳細な点は不明確であるが、ほぼ上口径0.8m、深さ0.3m程の下ぶくれの土拡である。第13号土拡からは唐古第 V 様式の壺形土器を出土したほか、各々土拡内からも多少の土器片が出土した。(第13号土拡の遺物は、調査中盗難を受けた。)今回の調査では検出することができなかったが、袋状土拡群と接する東側の壁面にも袋状土拡の一部が認められ、唐古第 V 様式の甕型土器の破片を包含していた。

尚、袋状土拡群の付近には、北から南の溝に向って若干の傾斜が 認められ、土拡の最上面に多数の弥生式土器の破片が散乱してい た。

土器は唐古第▼様式のものがほとんどであった。

其の他の遺構

以上 $1\sim5$  迄で述べて来た遺構の他に、ビットが若干検出されているが、どのような遺構があったか把握する事は出来なかった。

小結

今回の調査で検出された遺構は、其のほとんどが弥生時代後期(唐古第V様式)の時期に形成され、2本の溝状遺構(溝 $I \cdot II$ )のみが、それ以降長く使用されていたと考えられる。又、各々の遺構からの出土遺物や切り合い関係から推定するなら、溝 $II \longrightarrow$  袋状土 拡・円形大形土拡、溝 $I-S \longrightarrow$ 溝I-Nという形成順序と、袋状土拡・円形大形土拡—→溝 $I-S \longrightarrow$ 溝I-Nという廃絶順序を追うことが出来る。

H-5-I · M地区

当地区より検出された遺構は、奈良~平安時代頃の柱穴遺構とA10地区より検出された古墳時代前期の壺棺1基、A1、2地区に検出された溝状遺構である。以下層位と時期の新しい遺構から記述を進める。

地区割りの設定

山文商事ガソリンスタンド調査地区の地区割りは、現調査会結成以前であったため、地区割りはなく任意に北より2 m割りに、 $A_1$ 、 $2\sim A_{11}$ 地区と設定している。(現東奈良遺跡調査会の地区割りを地図上よりあてはめると、H-5-I・M地区に位置する。)

また、基準標高も同様に未設定ではあるが当調査地区は、地図上より現耕土面に7m等高線が突出している位置にあたる。

層位

柱穴遺構

当調査地区の層位は、A<sub>1</sub>地区において地山と思われる青灰色粘土層まで掘り下げる試掘を行ない、またトレンチ東壁面を利用して土層調査を行なった結果、第1層・耕土、第2層・灰色粘土層、第3層は2層にわけられ、上層がやや砂質の強い淡灰色土層、下層がやや粘質の強い淡灰色土層にわけられる。以下第4層・茶褐色砂質粘土層、第5層・黄土色粘土層、第6層・青灰色粘土層にわけられる。第1~6層までは、ほぼ全面に見られたが、第5層・黄土色粘土層はA<sub>1、2</sub>地区に検出された溝内に堆積していた層位である。他の地区においては、第5層が灰色砂質土層に変化しており、さらにA<sub>9</sub>地区附近からは、黒灰色砂質土層に変化し多量の弥生時代から古墳時代の土器を包含する層になる。(図版73)

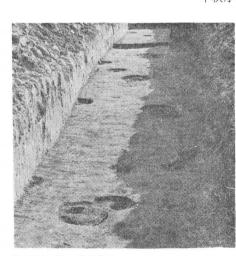
第3層中間層の淡灰色粘質土層より、柱穴遺構が2カ所検出されたが他に続くものがなく、掘り方も不明確であった。

第4層・茶褐色砂質粘土層上面より第5層・灰色砂質土層に掘り込まれた柱穴は、上層のものより残りはよく、土層断面より柱穴上部の掘り方が削平されていることも考えられる。検出された柱穴は、不秩序な配置で検出された。柱穴の掘り方は、円形あるいは方形に近いものもあり、柱自体は円形である。掘り方の径、あるいは一辺が0.16~0.2m、柱自体の径は約0.06mを計る。各々の柱穴は不秩序に並んでいるが、掘立柱建物跡復元の可能性のあるものとし

ては、東壁面に接し検出された3本の柱穴がある。柱間隔約7m、各々の柱穴間約3.5m、検出時の柱穴の深さ約0.16~0.2mを計る。しかし、建物自体が調査地区より東に位置するため、詳細は不明である。他の柱穴遺構からは、建物跡を復元することができなかったが、この面において附近に集落が存在していることが考えられる。

掘り方内の堆積層は、掘り方内に橙色砂質土、柱穴内には灰色砂質土が堆積しており、柱自体の存在は見られなかった。また、遺物も少なく、須恵器片が出土したが、時期は断言できない。層位的には、奈良~平安時代のものと推測される。(図版73、第8図)

 $A_{1,2}$  地区において、第4層・茶褐色砂質粘土層下層より砂層と 粘土層の互層状態が検出され、古墳時代前期と思われる壺型土器片 (図版  $105-1\sim3$ ) が出土した。この堆積層を追うと、第5層青 灰色粘土層をベースとした溝状遺構になった。しかし、調査地区と



第8図 掘立柱建物跡 溝状遺構

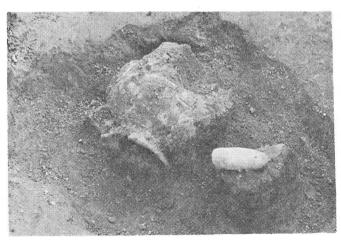
壺棺墓

調査期間の関係から、溝底部および溝方向は確認できなかった。調査地区内において1m以上掘り下げたが、依然として砂層の堆積層が続き相当規模の大きなものになると考えられる。

A<sub>10</sub>、<sub>11</sub>地区の第4層・茶褐色砂質粘土層取り除き中に、下層より黒灰色砂質土層があらわれ、多量の土器片 (弥生時代中期~古墳時代前期) が出土した。

なおこの包含層取り除き中に、壺棺を検出したが掘り方の一部を破壊したために掘り方の上口に不明確な部分がある。第5層・黒灰色砂質粘土層と第6層・青灰色粘土層とを掘り込み東西に長軸をもつ楕円形のものであり、長軸約1.2m、短軸約1m、深さ約0.4m程のものと考えられる。

壺棺は、口縁部を北東に取り、横位に安置してある。さらに壺棺取り除き後、堀り方底部の東よりに不整形な落ち込みが見られ、その部分に弥生時代中期の壺あるいは甕型土器の底部があたかも壺棺の安定をはかるために敷いたような状態で出土した。掘り方内の堆積層は周囲の土層と非常に似ており、第Ⅰ層・黒灰色砂質粘土層、第Ⅱ層・灰色粘土層にわけられた。各層に、周囲の土層で検出された同時期の土器片が含まれていることから、壺棺を安置した後に掘り出した土を再び埋めもどしたことが推測される。(図版74、第9図)



第9図 壺棺墓

壺棺は、復元口径0.2m、高さ0.436 mを計る古墳時代前期のものである。 (図版105-4)

壺棺の口縁部西上約 0.2m附近に、河原石 (図版125-50) が出土した。この石は、壺棺墓との位置関係から標石とも考えられる。また、壺棺墓の周囲の第5層・黒灰色砂質粘土層には、弥生式土器唐古第Ⅳ様式~古墳時代前期にかけての土器片が多数出土したが、その多くは残りが悪いものである。

(注) この編は、昭和46年12月24日に茨木市教育委員会より発行された 「茨木市文化財調査略報 I 」を追加・変更したものである。 H-3-J・K・M・ N・O・P地区

層位

歴史時代の遺構 掘立柱建物跡 H-3-O・P地区 当調査地区における遺構は、調査地区東半において、平安時代頃と考えられる掘立柱建物跡と多数の柱穴跡を第1層・茶褐色砂質粘土層面より、平均遺構レベル・標高(O, P)6.080mにおいて検出した。さらに、H-3-P地区の第2層・淡灰色砂質粘土層より古墳時代前期の竪穴住居跡を平均遺構レベル・標高(O, P)5.724mにおいて検出した。しかし、西半・H-3-J・K・M・N地区には、第1層に遺構らしきものが認められず、第3層・黄褐色粘土層面において弥生時代後期から古墳時代前期にかけての井戸状遺構・溝状遺構・土器群が、平均遺構レベル・標高(O, P)5.440mにおいて検出された。以下層位及び、時代の新しいものから記述を進める。

当調査地区の層位については、床土下層より調査地区南壁面の一部において調査を実施し、さらにユンボにより、標高〇・P4mまでの層位調査を行った。(選耕土・床土までは、すでにバックホウにより除去している。)

第1層は、調査地区全面に観られた弥生式土器、土師器、須恵器を包含し、歴史時代の遺構面を有する茶褐色砂質粘土層。第2層は、古墳時代前期の遺構面を有する淡灰色砂質粘土層。第3層は、調査会地区割り「W-60ライン」付近より西に観られ、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面のベースである黄褐色粘土層。第4層は、同じく「W-60ライン」より東に観られた黄褐色砂質層。第5層以下は、「すじ掘り」より調査したものである。第5層以下は、一部の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構のベースとなる灰色粘土層。第6層、黒色粘土層、第7層は、「W-60ライン」より西側に淡灰色砂層。第8層は、「W-60ライン」より東側の暗灰色砂質粘土層。第9層、黒色粘土層と以上のようにわけられる。しかし、「W-18ライン」より東側においては、第5・6・8・9層が消え、砂層の堆積層に変化し、標高4m以下まで続くと考えられる。

(注) 後日行った調査によって判明したことであるが、この砂層の堆積は、H-3-G地区において検出された溝I-3と堆積状態が以通っており、また溝方向も一致することから、同一の大溝がH-3-P地区にも存在していたものと考えられる。

調査地区東部において、第1層・茶褐色砂質粘土層上面より掘り 込まれた柱穴遺構が多数検出された。その中より5棟の掘立柱建物 跡が復元された。

今回検出された柱穴遺構の掘り方は、円形あるいは方形を成し検

出時の深さ約0.2~0.6mを有する。その多くは、掘り方自体だけであったが、一部には柱穴跡あるいは柱根を残すもの、柱穴底部から河原石を出土したものもある。

復元された掘立柱建物跡 5 棟は、第4号棟を別にして、主軸を南 北あるいは東西に取り、集落跡的形態をもつが、今回検出された建 物跡は、その西端に位置し、他のものは調査地区の東に伸びること が推測される。

当地区より、検出された掘立柱建物跡ならびに柱穴の時期は、掘り方内より出土した土師器片、黒色土器片、瓦器片と層位的相対年代を参考として、平安時代中期(11世紀頃)のものと考えられる。

復元された掘立建物跡は、北より掘立建物跡1号・2号……と 称して、第2表に記述する。

No. 規模	1 号	2 号	3 号	4 号	5 号
桁 行	不明	3 間	3 間	2 間	3 間
桁行長	小 奶	5.8	6.4	3	6.4
梁 行	2 間	不明	3 間	2 間	2 間
粱 行 長	3.6	小り	6.0	2.75	3.7
主軸	N-6°-E	N-6°-E	N-6°-E	N-26°-W	N-6°-E
掘り方の形態	円形	円形・方形	円形・方形	円形	円形
径・深さ	0.24, 0.4	0.2~0.3, 0.1~0.4	0.2~0.3, 0.2~0.6	0.2, 0.2	0.2, 0.2~0.4
備考	。桁は調査地区の 南へ伸びる。	。梁は調査地区の 東に伸びる。	・掘立柱建物跡 2 号と重複、東側に 1間の廂を持つ が、同様のものが 南側にあり定かで ない。 2本の柱穴 底部に河原石。	。他の4棟と主軸を異にし、時期差も考えられる。	。東側梁の部分 に、柱間 0.8mの 廂を有す。廂柱径 0.06~ 0.1、深さ 0.1を計る。

第2表 堀立柱建物跡の規模(単位はm、掘り方・柱穴の深さは検出時のもの)

古墳時代の遺構 竪穴住居跡 H-3-P-1・2 地区 調査地区東北隅において検出された竪穴住居跡は、第 2 層・淡灰色砂質粘土層を掘り込んで存在する。住居跡の平面形態は、隅丸方形を成す。住居跡の規模を知るため、調査地区北側の一部を拡張した結果、南北の長さ 6.4mであることが明らかになった。しかし、東西の長さは、調査を行えなかった関係上不明である。また住居跡の軸は、N-14°-Wに取る。 住居跡の検出時の床面の深さは、肩より約 6 cmと浅く、砂質粘土層を掘り込んでいるため、住居跡側壁

と床面はもろい。住居跡の掘り方の深さが浅いことから、新しい時 期に掘り方の一部が、削平を受けていることも考えられる。住居跡 内の床面より柱穴跡が、4カ所検出されており、その内、住居跡南 側に東・西に並ぶ2ヵ所の柱穴跡が、住居跡の主柱と考えられる。 各々の柱穴の掘り方は、東側径0.34mの円形で、検出時の深さ 0.2 m、西側径0.24mの円形、検出時の深さ約0.21mを計る。柱間隔 は、約 2.3mと住居跡の規模に比較して狭くなっている。北側の主 柱は、調査地区の関係から検出することができなかった。住居跡内 には、他に、南・北に各々の1カ所のピット状遺構が検出されてい る。北側のピット状遺構は、切り合いが観られ、隅丸方形を成し、 一辺約 0.5m、検出時の深さ約0.17mを計る。南側のピット状遺構 は、住居跡南壁面沿いに、不整形な形態を成す。このピット状遺構 は一部調査地区外にあるため、規模は不明確であるが、東西長軸 1.4m以上、南北1.1m、検出時の深さ約0.1mを計る。掘り方は、 上口よりゆるやかな傾斜をもって底部に落ちこみ、底部は白色砂層 となり、ピット内には黒色砂質粘土の堆積が観られた。当ピットよ り、古墳時代前期の高杯型土器(図版 107-7)が、押しつぶされ た形で出土した。この2カ所のピット状遺構は、貯蔵穴あるいは炉 跡と考えられる。さらに、住居跡西壁面沿いに幅0.06m、検出時の 床面よりの深さ約0.03mと浅く細い溝が検出されている。検出され た溝は、ごく一部であったが、本来は住居跡内を全周していたもの と推測される。

当竪穴住居址の時期は、住居跡内より出土した土器より古墳時代 前期のものと考えられる。

前述の柱穴遺構、竪穴住居跡の西側全域において、第3層・黄褐色粘土層をベースとする井戸状遺構・溝状遺構が検出された。

井戸状遺構・溝状遺構は、柱穴遺構がなくなるH-3-O-6地区より西にあらわれ、特にH-3-N地区では集中的に検出された。これらの遺構は、各々が関連しあいながら、不秩序な配置、不整形な形態を成して検出されたが、その状態から、無造作に掘られた遺構と考えられる。

今回検出された井戸状遺構・溝状遺構は24基あるが、その内、形態、掘り方の深さから井戸と考えられる可能性のあるものは、8基あり、その内1基は、近代の井戸枠をもつものであった。以上井戸状遺構の詳細は、ピット番号に合わし、第3表に記述する。

弥生時代後期から古墳 時代にかけての遺構 H-3-M・N・O 地区 井戸状遺構 H-3地区の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構であるため、 非常に浅い土拡においても、井戸としての能力 (湧き水程度のもの) をもつことも考えられるが、地下水を汲みあげる深い竪穴を掘った 井戸は当地区において検出されていない。

NT	t.rl.	D'	, Tick	態	規	規		底部標高	備	考
No.	地	Ø	形	忠	長軸	短軸	深さ	14.0.15.10	7/用	7-9
P-3 a	H-3-1	N—1	楕円形		2.0	1.6	0.47	5.057	P — 3 a は、P 込んで存在する	
Р—3 ь	Н—3—1	N-1	長方変形	Í	2.6	2.1	0.44	5.141		
P-4	Н—3—1	N-1, 2	円形 2 段	没素掘り	径]	1.64	1.09	4.512	南側に溝(幅1 0.239m)を伴	
P-8	H-3-1	N-1, 4	変形 2 段	受素掘り	径 2	2.6	0.93	4.537		
P-15	H-3-I	N—6	円形に近2章	丘い 没素掘り	1.9	1.6	0.6	4.729	完形の甕形土器 1) 出土。	器(図版 107 —
P-16	H-3-1	N-6, 9	鍵穴形- 2月	一部 殳素掘り	3.3	2.1	0.77	4.505		
P-18	H-3-6	O-2	円形素排	屈り	径	2.6	1.15	4.100	H-3-N・C 模のもの。	)地区 最大規

第3表 井戸状遺構の規模(単位はm、深さは検出時のもの、底部標高はO・P)

### 溝狀遺構

多くの溝状遺構の中で、P-5がもっとも溝の形態をもつものである。調査地区H-3-N-2地区の南壁面より表われ、北々西より南々東に連なり、検出長約6.4m付近で途切れる。幅1.4~1.8m、深さ約0.35mを計り、溝内の堆積層は、第1層・黒褐色砂質粘土層、第2層・赤褐色砂質粘土層、第3層・灰色砂質粘土層、第4層・黒色腐植土層にわけられる。第1・2層より少量の土器片が出土した。

また P-23も同様に溝遺構の形態をもつものであるが、この溝は、近代に掘り方上口部分に大きく削平を受けている様子が観られ、明確な肩は検出されなかった。溝は、H-3-O-8地区の南壁面よりあらわれ、南東から北東に連らなり、検出長約8 m付近でやや西向きに方向を変え途切れる。溝幅 $1\sim1.4$ m、深さ0.1m前後と浅い。溝内には灰色砂層の堆積が観られ、溝内より、須恵器の大形甕型土器(図版122-34)が出土している。

他の溝状遺構については、明確に溝と判断できるものは少なく、 長楕円形土城の形態を成すものであった。

ビット状遺構であるH-3-N-7地区のP-19は、南壁面以南にその中心が位置するため明確な形態は不明であるが、南壁面の土

層から、第4層・黄色砂層より掘り込まれており、深さ約0.5mを計る。ビット内には、茶褐色砂質粘土層の堆積が観られ、多量の土器片が出土した。その多くは破片であり、残存状態も悪かった。その中に、壺形土器の口縁部から胴部にわたるものが一点含まれている。(図版107-5)この土器より、当遺構の時期は、古墳時代前期のものと考えられる。

土器群a、b

H-3-N地区の井戸状遺構の間に、2ヵ所の土器群が検出された。その北側を土器群 a、南側を土器群 bと称する。土器群 a は、南北約1.5m、東西1.2mの楕円形を成す部分に、遺構面より約0.2~0.4m浮いた状態で、土器が集中して出土した。同じく、土器群 a の南西約8 mに検出されたのが土器群 b であり、南北約1.9m、東西約1 mの部分に土器が多量に出土した。両土器群とも同じ性格をもつものと思われ、それは第1層・茶褐色砂質粘土層中に含まれ、古墳時代前期の遺構面より浮いた状態が観られる点である。また、土器の残存状態は非常に悪く、細片化していた。

H-3-E・C・F・ G・H地区 当調査地区において検出された遺構は、一応2層の遺構面にわけることが出来る。第1遺構面には、古墳時代中期の方形周溝状遺構と時期不明のビット群、溝、井戸、竪穴住居跡が検出された。

第 』 遺構面においては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて 竪穴住居跡、井戸、大小の溝、土器群等の遺構が検出された。

同遺構面に於いて、弥生時代中期の土器群が出土したが、遺構としての性格が薄い、然し溝 I-2は、遺構の切り合い関係、下層より出土した土器より弥生時代中期頃のものであることから、弥生時代中期からの生活面の存在も考えられる。

以下層位、第【遺構面より記述を進める。

層位

当調査地区では、調査地区南壁面の一部と、西壁面の土層調査を 実施した。更に調査地区のほぼ中央、N-75ラインに沿って最終遺 構面よりバックホウにより標高4m付近迄約1.3~1.6m掘り下げ、 遺構面下層の層位状態を調査した。其の結果、耕土・床土をバック ホウにより取り除いた後の南壁面の土層は、調査地区東半 (W-37 ラインより東側)に於いて、床土下層に第1層・須恵器、埴輪片を包 含する茶褐色砂質粘土層、第2層・淡灰色粘土層、第3層・淡灰色 砂質土層、第4層・橙色粘土層、第5層・灰色粘土層に分けられる 整った層位が観られた。然し西半 (W-37ラインより西側)において は、第1層、茶褐色砂質粘土層の下層より、複雑な砂層と粘土層の 互層状態を呈し、この層は、東半の第3層淡灰色砂質土層と第4 層・橙色粘土層の間にもぐる。この互層は大別しても20層以上を呈 し、調査地区のW-39ライン以西全域に、北北西から南南東に連なった状態が観られた。この層位は、調査地区西壁面にも観られ、第 5層、灰色粘土層まで厚さ約0.5~0.6mあり、今回は全体を同一層 として扱い第4層と称する。

また、「すじ掘り調査」より第6層、黒色粘土層、第7層、灰色粘土層、第8層、黒色粘土層が、ほぼ水平に堆積する比較的整った層位が観られた。然しこの層位も、第5層、灰色粘土層と、第6層黒色粘土層の間に、W-32ライン付近から東側には第6・7・8層をも切り込んだ砂層の堆積に変化する。この砂層の堆積は、標高(O・P)3.9m以下迄続き、更に下層に続いていると考えられるが、湧き水による壁面の崩壊の為追跡調査を断念した。又同じ様な砂層の堆積が、W38~W46ラインの間にも観られ、同じく第5・6・7層をも切り込んで存在する大形の溝状遺構が検出され、砂層の下層より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器が出土した。大形溝状遺構の詳細については後述する。

調査地区西半において、黄白色砂層と茶褐色砂層をベースとした 溝状遺構がみられた。当溝は、南北に連らなり、N75ライン付近か ら西へほぼ直角に曲り、方形周溝状を呈する。仮に南北に連なる溝 を東溝、東西の溝を北溝と称する。

今回検出の東溝は、検出長約  $11.5 \,\mathrm{m}$ 、幅約  $2 \sim 2.75 \,\mathrm{m}$ 、深さ約  $0.3 \,\mathrm{m}$  の規模をもち、北溝に関しては、東溝と北溝の接点付近において、不明瞭な部分があるが、検出長約  $5 \,\mathrm{m}$ 、幅約  $2 \,\mathrm{m}$ 、深さ約 $0.3 \,\mathrm{m}$  を計る。東溝は直線的ではなく、やや弓状になっている。両溝とも溝肩より底部にかけて、非常にゆるやかな傾斜で落ち込み、溝底部には起伏があり、溝幅に対して深さが浅いのが特徴である。

溝内には、3層の堆積がみられ、第1層・黒灰色砂層、第2層・ 茶褐色砂層、第3層・灰色粗砂層にわけられる。溝内より出土した 遺物は少なく、東溝東肩(H-3-F-4地区)において、第2層茶 褐色砂層より古墳時代中期後半の ®(図版 121 -23)と少量の須恵 器片が出土したのみである。

溝 I — 1 の性格は、溝が方形周溝状に廻っていることから、方形 周溝墓の可能性もあるが、周溝内の台状部には主体部と思われるも

第 | 遺構面 古墳時代から 歴史時代の遺構 溝 | 一 1

(方形周溝状遺構) (H-3-F、G 地区) のがなく、不秩序に並ぶ時期不明のピットが検出されたのみである。又、盛土と思われるものも検出されていない。調査範囲の関係上、不明確であるが、方形周溝墓と考えた場合は古墳時代中期頃の規模の大きなものになる。そこで今回は方形周溝状遺構として扱うことにする。

溝 [ - 2

溝 I-2は、溝 I-1の東溝の途中よりあらわれ、南東から北西に連らなっており、北端はピット状遺構によって終っている。当溝は、土層断面よりみると、溝 I-1 より古く又溝 I-1 により一部溝肩が削平されている。溝 I-2 は、調査地区内においての検出長約10m、幅0.7m、深さ約0.3mを計り、溝内には灰褐色砂層の堆積がみられたが、遺物は全く包含していない。

さきの溝北端に検出されたビット状遺構は、上口径 0.5m、深さ 0.52mを計り、溝 I — 2 と同時期に存在するものと考えられる事から、簡単な井戸状遺構、或は水溜めの様な遺構の可能性もある。

溝 1 − 3

溝I-3は、溝I-1の南端東肩付近より現われ、北北東に延び調査地区中央部付近で途切れる。調査地区内においての検出長約8.5m、幅 $0.5\sim1$ m、深さ約0.66mを計る。溝内には茶褐色粗砂層の堆積がみられたが、遺物は全く包含されていない。

溝 I 一 3 は、層位の項において述べた様に、溝検出地区が複雑な砂層と粘土層の互層状態がみられる所である事から、此の堆積層の一部を掘り抜いた可能性がある。又溝肩も砂層の堆積層の為、はっきりせず、溝遺構としては疑わしいものである。

柱穴遺構

(H-3-H-4地 図) 調査地区内の南東部と西部に、少数の柱穴が検出された。これらの柱穴は、不秩序な配置で検出され、建物遺構を考え出す様なものは、極くわずかの柱穴のみであった。

建物遺構の可能性があるものとしては、調査地区南東部に於いて 検出された5本の柱穴の内、東西に連らなる4本の柱穴が、2~2.3 mの間隔をもち、秩序よく並んでおり、東西方向3間の堀立柱建物 跡が考えられるが、南北に関しては調査地区の関係上不明である。 各々の上口径約0.2m、深さ約0.25mを計り、柱穴内には、暗灰色 砂の堆積がみられたが、時期を決定する遺物は出土していない。

調査地区南西に、溝 I — 3 の東肩を一部切り込んだ落ち込みを検出した。非常に狭い範囲での検出の為、規模形態等は不明確であるが、検出された部分から想定すると、方形或は隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。

竪穴住居跡【

(H-3-G-4地 区) 当竪穴住居跡 I の軸方向は、検出部分より西北西から東南東にもち、検出時の掘り方の深さは、約0.06mと浅いものである。竪穴住居跡内には灰褐色砂質層の堆積が見られたが、時期を決定する遺物は出土していない。住居跡の肩、床面は黄白色砂層と非常に軟弱なベースである。床面より、柱穴が1ケ所検出されている。柱穴上口径0.2m、深さ0.12mを計る。又住居跡の壁面付近に、炭化物が棒状になった状態で集中して出土した。この炭化物は、床面より約0.06m程浮いた状態で出土したが、住居跡の建築用材の焼け跡の可能性もある。

其の他の遺構

(H-3-D・H地 区)

第Ⅱ遺構面

弥生時代後期から 古墳時代前期の遺構

竪穴住居跡Ⅱ

(H-3-C-8・ 9地区)

竪穴住居跡 **Ⅱ a** 

調査地区東部(H-3-D・H地区)に、大小の落ち込みが4ヶ所 検出されている。落ち込み内には、何れも灰色砂質層が堆積してお り、時期を決定する遺物は出土していない。各々の落ち込みは形態 も不整形で規模もまちまちである事から、自然の落ち込みと考えら れる。

層位の項で述べた第2層・第3層・第4層を掘り込んだ弥生時代から古墳時代前期の遺構としては、3回以上の建て直しをおこなった竪穴住居跡を中心とし、井戸・大小の溝遺構が多数検出された。此等の遺構の内、竪穴住居跡 【と井戸4号、大溝(溝II-3)との関係は、非常に興味ある資料となった。(図版77)

調査地区北部に於いて、淡灰色砂質粘土層を切り込んだ隅丸方形の竪穴住居跡が検出された。当住居跡は、3回以上の建て直しが行なわれている事が判明した。新しいものから竪穴住居跡 【 a — 【 b — 【 c と称する。

最も新しい竪穴住居跡 **1** a (図版78) は、軸をほぼ磁北に取る隅丸方形の竪穴住居跡である。当住居跡は、南北 6 m、東西 6 m、検出時の深さ約0.15mを計る。住居跡内には、7個の柱穴と炉跡・貯蔵穴を各々1個、コの字形のベット状遺構をもつ。

柱穴は、住居跡内のみにみられ、住居址の周囲等には検出されていない。住居跡内の7個の柱穴跡から、配置関係より、4個の主柱を組み合わせると、南北2.8m、東西3mとなる。各々の柱穴は円形で上口径0.16m、検出時の深さ0.3m~0.4mを計る。(尚、北東に位置する柱穴のみが上口径0.8mを計る)。各々柱穴内には暗灰色砂質粘土、或は黒色砂質粘土が堆積していたが、柱自体は検出されていない。

炉跡は、住居跡中央部に位置し、円形を呈し上口径0.76m、検出

時の深さ0.14mを計る。掘り方は、上口より底部にかけて急傾斜で落ち込み、底部は平坦になっている。炉内には、炭化物と灰の堆積層が見られ、掘り方壁面に炭化物の付着がみられた。貯蔵穴は住居跡内南東部に位置し、平面形が三角形に近く、南北約1m、東西約0.9m、検出時の深さ約0.29mを計る。掘り方は上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は非常に小さく擂鉢状を呈している。内部は、灰色砂質層の堆積が見られた。

更に、当住居跡の特徴としては、東、北、西側にかけてコの字形のベット状遺構をもつ点である。このベット状遺構は、住居跡の側壁に沿って、約 $1\sim1.2$ mの幅をもって床面より0.04m程度高くなっている。(尚、ベット状遺構が住居跡の南側の部分にないことから、南側が住居跡の入口と考えられる)。北側のベット部分西寄りに、幅0.26m、深さ0.1mの溝が掘ってあるが、用途は不明である。

住居跡の側壁に沿う様に北側から西側にかけて細い溝が、不明瞭ながら廻っている。この溝は、全体的に痕跡程度しか残っていないが幅約 0.1m、深さ約0.03mを計る。今回検出された住居跡においては、住居跡を全周していないが、本来は側壁に沿って廻っていたものと考えられる。

住居跡内には、2層の堆積層が見られ、ベット状遺構上面迄第1層・暗茶褐色砂質粘土層、第2層はベット状遺構より床面にかけて厚さ約0.04~0.05mの炭化物と灰の堆積層になっている。この堆積は、中央炉跡内にもみられた。第1・2層にも、又床面等にも時期を決定する遺物は検出されていない。第2層炭化物と、灰の堆積層から、住居が火災にあった可能性をも示している。

竪穴住居跡Ⅱb

竪穴住居跡 ▮ aの床面とベットを深さ0.1~0.2m程淡灰色砂質粘土層を取り除くと下層より、更に1基の竪穴住居跡 ▮ b(図版79)が検出された。さきの竪穴住居跡 ▮ aをひとまわり縮小した形で存在すると考えられる。然し、住居跡 ▮ bは、住居跡 ▮ aによる攪乱と更に下層の住居跡 ▮ cの関係も相俟って、より複雑化を呈しており、規模形態を想定するのが困難な住居跡である。

竪穴住居跡』 bは、軸を磁北とほぼ同じ方向に取り、東西 5.6m 南北 5.6mを計る隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。主柱穴 4個 の間隔は、東西 3 m、南北2.84mを計り、南側の 2 本の主柱穴が、住居跡』 a と重複することになる。南東主柱穴の北西に接するように柱穴が存在し、住居跡』 a の南東主柱穴に切り込まれているこの

柱穴が住居跡 I bの南東主柱穴の可能性もあるが、他の主柱穴の配置関係から一致しなかった。各々の柱穴は円形で上口径 0.2~0.24 m、検出時の深さ0.2~0.4mを計る。柱穴内には、暗灰色粘質土が堆積していたが、柱等は検出されていない。

住居跡 I aに見られたベット状遺構は、住居跡 I bには検出されていないが、床面がかなりの攪乱を受けて起伏があり、当時の床面を想定するのが困難であることから、ベット状遺構が存在していた可能性もある。又同様に、炉跡・貯蔵穴等も明確なものは検出されていないが、住居跡南側に、複雑なピット状遺構が重複して検出されており、これが炉跡、或は貯蔵穴であった可能性もある。

住居跡 II b の東、西、南、北側の側壁沿いの一部に細い溝が廻り、溝幅 $0.2\sim0.4$ m、深さ約0.1mと細く浅いため途中途切れる部分もあるが、ほぼ全周している。又溝内に小さなピットが数ケ所検出されたが、ピットと溝の関係は不明である。

竪穴住居跡 ▮ c

竪穴住居跡 I c (図版75) は、住居跡 I a、I bと軸方向を異にした更に規模の大きな住居跡である。住居跡 I c b、住居跡 I a、I bと重複する部分は、複雑化を呈し、柱穴、炉、ベット遺構等の付属物も不明瞭な部分が多少あるが、さきの住居跡外の部分は、明確に残っており、規模、性格を想定する事が可能であった。

住居跡 I cは、住居跡 I a、II bの西側のベースとなった黄褐色粘土層を取り除くと、下層の黄色粘土層をベースとし、住居跡西側に検出されていた溝状遺構を西側壁とし、北側壁の一部が調査地区よりはみ出し、東側壁は北側の一部が残り、南側は住居跡 II a、II bとおしい時期の攪乱を受けている。又住居跡の南側も住居跡 II a、II bと新しい時期の攪乱を受けているため、明確なものは残っていない。

住居跡』 cは、軸をN-24°-Wに取り、東西7.2m、南北7.2mを計る隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。主柱穴は、10個の柱穴の中より、配置関係から4個の柱穴を組み合わせると、東西4m、南北3.6mの間隔を有する。各々の柱穴は円形を成し、北西、南西の柱穴の上口径0.3m、検出時の深さ0.4m北東、南東の柱穴の上口径0.24m、検出時の深さ0.25mを計る。柱穴内に暗灰色粘質土或は黒色粘質土が堆積しており、柱自体は残っていない。

住居跡 $\| \ c$ は、住居跡 $\| \ a$ と同様に、西、北、東側壁に沿って、ベット状遺構をもつ。ベットの幅は $1 \sim 1.4$ mを有し、床面より0.1m程高くなっている。住居跡 $\| \ c$  も住居跡 $\| \ a$  と同様に、南側にベ

ットを検出できなかった。これは、住居跡 I a、II bと新しい時期の攪乱によるものとも考えられるが、やはり南側は住居の入口の為ベットがなかったと考えられる。炉跡・貯蔵穴は、住居跡 II a、II bの中央付近に、複雑なピット状遺構が重複しており、位置関係から炉跡・貯蔵穴の可能性もあるが、定かでない。

又、住居跡  $\| \ c$  と同じ位置において、南西と北西の主柱穴付近に、各々1個の明確な柱穴が検出された。この2個の柱穴から更に1回の建て直しの可能性もある。東側の主柱穴が残っていないため、住居跡の複元はできないが、竪穴住居跡  $\| \ d$  は、3回以上の重複が明らかであり、時期を決定する遺物は検出されていないが、住居跡の形成順序は、住居跡  $\| \ c \rightarrow$  住居跡  $\| \ b \rightarrow$  住居跡  $\| \ a$  と考えられる。又住居跡の形態から、弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられ更に後述する竪穴住居跡  $\| \ o$  南側より検出された井戸4号、西側の大溝(溝 $\| \ a \rightarrow$  3)が、弥生時代後期から古墳時代前期にあたるものと判明しており、これらを参考として、ほぼ同時期のものと考えられる。

## 井戸状遺構

東奈良遺跡には、多数の井戸状遺構が検出されており、当調査地区も例外でなく、7基の井戸状遺構が検出されている。然し、全部が井戸とは考え難く、一概に断定できない。7基の内、井戸としての能力を有するものと考えられる3基を抽出して記述する。

## 井戸1号

井戸1号は、調査地区南東部の溝状遺構の中に位置する。溝 I ー 2 を切り込んで存在する井戸1号は、素掘りの円形二段掘りのもので、上口径約2.2m、上口より二段目上口までの深さ0.5m、二段目上口径 1.1m、2 段目上口より底部迄の深さ0.67m、一段目上口よりの深さ1.17m、底部標高 (O・P) 4,870mを計る。

(H-3-H-4地 区)

> 井戸内には、2層にわけられる堆積層が見られ、第1層・茶褐色 砂質粘土層、第2層・暗青灰褐色粘土層にわけられたが、井戸の時 期を決定する様な遺物は出土しなかった。

## 井戸2号

調査地区東北部に第 | 遺構面において検出されていた自然の落ち込みの下層より、井戸状遺構が検出された。この井戸 2 号は、楕円形素掘りの井戸で、上口長軸1.8m、短軸1.3m、深さ1.15m、井戸底部標高 (O・P) 4.944mを計る。井戸の東肩は、さきの自然の落ち込みにより削平されている。

(H-3-H-9、 H-3-H-3地 区)

井戸内には、2層にわけられる堆積層が見られ、第1層・暗茶褐色砂質粘土層、第2層・暗灰褐色粘土層にわけられる。第1層は、

東に伸びる自然の落ち込みの堆積層と同一のものである。堆積層中 よりは、時期を決定する遺物は出土していない。

井戸4号 (H-3-G-3地 区) 井戸4号は、第【遺構面において、調査地区中央部より検出された。第【遺構面においては、井戸自体も大きく変化し、当調査地区最大規模のものになった。

井戸4号は、当初ほぼ円形に近い2段素掘りのもので、上口長軸2.4m、短軸2.2m、下段上口径1.5m、深さは上段上口より下段上口まで約0.6m、下段上口より底部まで約0.6m、上段上口より底部まで約1.2m、底部標高(O・P)5.024mを計る。井戸内には第1層・茶褐色砂質粘土層、第2層・青灰色粘土層の堆積が観られ、第2層下層、井戸底部より、古墳時代前期の土器が出土した。この土器の出土のため、この面を井戸4号の一時期の底部として扱った。出土した土器は、井戸底部よりわずかに浮いて、底部中央に位置する。(図版80)出土した土器には、完形の甕型土器(図版107-9・10)、口縁から頸部を欠く壺型土器(図版107-12)、完形の土錘(図版125-41)が各々1点あり、その他甕型・壺型土器片がある。これらの土器の出土状態から、単に埋没する時に入ったものではなく、意識的に井戸に投入されたものと考えられる。

井戸4号は第『遺構面において、井戸上口付近が大きく変化し、すりばち状に落ち込み、細い溝状遺構が派生する。このすりばち状の落ち込みは、不整形なもので自然に形成されたような形を成している。井戸の深さも第3層・暗灰色粘土層の取り除きにより、さらに深いものになり、すりばち状の落ち込み上口よりの深さは1.81m、底部標高(O・P)4.377mを計るものになる。第3層中より、3種型土器(図版107—11)・椀型高杯(図版同13)が出土した。

井戸4号は、前述の竪穴住居跡 I の南々西 2.5mに位置し、同時期と考えられることから、住居跡の重複関係と相俟って、相当長期間使用されたことが考えられる。

溝状遺構は、井戸と同様に、東奈良遺跡においては非常に多数検出されている。H-3地区においては、非常に規模の大きな溝を含み、大・小20本程の溝状遺構が検出されている。今回は、その内おもだったものを記述する。溝の番号は、調査地区東側より記してお

**溝Ⅱ 一1** (**小**溝群) (H-3-D·H地区) 調査地区東北部に、8本以上の小溝が列なっている。各々の溝は、溝間隔は一定でないが、同一方向にほぼ平行に列なっており、

滍

-28 -

り、それに従って記述を進める。

また溝幅・深さ・堆積層も似ていることから、同じ性格の溝と考え、小溝群として扱う。

溝I-1 (小溝群) は、北々西から南々東に列なり、 $N-14^\circ-W$  の方向を取る。各々の溝の間隔は、 $1.65\sim 2$  mを有し、溝幅  $0.2\sim 0.5$ m、深さ $0.15\sim 0.2$ mを計る。溝内には、灰色砂層の堆積が観られ、時期を決定するような遺物は出土していない。

各々の溝は、調査地区中央付近(N-75ラインの南北1 m前後)で消えている。また、小溝群が消える付近に、小溝の下層より、小溝群に直交する形で、溝幅0.3m、深さ0.2m程の溝が検出された。この溝も小溝群と同様のものと考えられる。このような性格をもつ溝は、床土中あるいは歴史時代の遺構面で検出することはあるが、古墳時代前期の遺構面での検出例は当遺跡にはなく、初めての検出である。このように小規模の溝が同一方向に列なるのは、不明確であるが、当時の水田の残存遺構とも考えられる。

**溝Ⅱ−2** (H−3−D・H地 区) 調査地区を南北に連なる溝I-2は、前述の溝I-1(小溝群)・ 井戸1号より古くから存在するものである。溝幅 $1\sim1.5$ m、深さ $0.2\sim0.3$ mと溝幅に比較し、深さが浅く溝底部の広い溝である。溝の方向は、N-4°-Wに取る。溝内には2層の堆積層がみられ、第1層・茶褐色粘土層と第2層・黒色粘土層にわけられる。

溝北部は、溝 Ⅱ 一1 (小溝群) との関係から複雑化を呈しているため、一部溝 Ⅱ 一2 の肩を消失している。溝 Ⅱ 一2 の底部のレベルは、北から南に向かって低くなっており、比高差は約0.1m程ある。溝内より、第1層から古墳時代前期の土器、第2層より弥生時代中期の土器片が少量出土している。

**溝Ⅱ−3** (**大溝**) (H−3−C・G地 区) 溝Ⅱ一3は、前述のごとく、第Ⅰ遺構面より複雑な砂層と粘土層の互層がみられ、この状態が第Ⅰ遺構面に至っても続いていることから、洪水などによる自然堆積と考えた。しかし、調査地区内の全遺構調査終了後実施したユンボによる「すじ堀り」の時に、当地区において深さ 1.6m程の下層の砂層中より大量の土器片が出土するに至り、調査の結果、非常に規模の大きな溝であることが判明した。(溝Ⅱ一3は、調査期間の関係上緊急調査に終ったため、平面図・写真等はなく土層断面図のみを記す。)

溝 ■ -3 は、5 層以上の沖積層(第5~第8層、さらに第9層・灰色 粘土層) を掘り抜いており、溝の肩は2段にわけて掘られている。 溝上段上口幅7 m以上、上段上口より二段目上口までの深さ1.4~ 1.5m、二段目上口幅  $2 \sim 3$  m、二段目上口より底部までの深さ0.6  $\sim 0.8$ m、溝上段上口より底部までの深さは約  $2 \sim 2.4$ mに達し、溝底部の平均標高  $(O \cdot P)$  3.700mを計る。

溝内の堆積層は、場所(地区)により大きく相違するが、比較的整った層位がみられるH-3-G-3地区において、大別すると10層にわけられる。(この層位も細別すると20層以上になり、また地区によって溝上口より、砂層と粘土層の複雑な互層が溝内へ流入する堆積がみられた。)

第1層・黄色砂層、第2層・白色砂層、第3層・淡灰色粗砂層、 第4層・灰色徴砂層、第5層・黒色腐植土層、第6層・暗灰色徴砂層、第7層・黒色腐植土層、第8層・暗灰色砂層、第9層・黒色腐植土層、第10層・暗灰色粗砂層にわけられる。堆積層中の遺物の包含状態は、第1~第4層まで全く遺物を含まないが、第5~第9層までに、少量の土器片と植物遺体を含む黒色腐植土層より2点の木製品が出土した。この木製品は、鋤(図版130—17・18)と用途不明の木製品1点である。溝二段目上口より底部に堆積する厚さ0.4m前後の第10層・暗灰色粗砂層より、古墳時代前期の土器が、完形品をも多量に含みコンテナバットに150箱以上出土した。しかも緊急調査であったために全容を把握することができなかったことから、それ以上包含されていたことが考えられる。

出土した土器は、甕型土器がほぼ半数を占め、壺型土器・高杯型 土器・器台型土器・鉢型土器・甑型土器(図版108~120)等、当時 使用されていたほぼ全器種の土器に及んだ。

溝 ■ - 3 の性格は、緊急調査であったために不明確な点が多いが 溝肩が整った 2 段の掘り方を持つことから、自然に作られた溝とは 考え難く、人工によって 5 層以上の沖積層を幅 7 m以上、深さ 2 m 以上掘り下げたか、あるいは自然水路を改修したことが考えられ る。何故にこれほどの規模の溝をつくり、また溝の下層に時期の限 られた土器が多量に入っているのか、問題の多い溝 ■ - 3 である。 さらに溝内の堆積状態から、長期間使われていたとは考え難く一時 期に何らかの関係で埋没したと考えられる。

後日当調査地区 (H-3-G地区) の北々西 110m付近の調査地区 (G-3-A地区) の調査により、同じ溝を検出していることから、東奈良遺跡西部を北々西から南々東に縦走していることが考えられる。 (この大溝に関しての詳しい報告は、G-3-A地区の調査報告に記述

する。)

#### 十器群

 $(H-3-H-1 \cdot 2 \cdot 4 \cdot 5$  地区)

調査地区東南部において、第1層・茶褐色砂質粘土層を取り除き中に、多量の土器が集中する形で出土した。第1層よりの掘り方はなく、第2層・黄白色砂質粘土層を掘り込んだ痕跡もないため当土器群の性格が非常につかみにくいものになった。出土時この土器群は、コの字形に連なっているような状態がみられたが、大きく3カ所にわけられた。便宜上東より西へ、土器群 a・b・cとわけて記述を進める。

#### 土器群a

(H-3-H-2・ 5 地区) 土器群の東端に位置する土器群 a は、南北約1.15m、東西約0.65mの不整形な形の部分に集中して出土した。当土器群の最高レベルは、第 『遺構面より約0.2m高くなっており、最低レベルは第 『遺構面より約0.05mを計るが、どちらも第 1 層・茶褐色砂質粘土層中に含まれてしまう。土器群 a は、古墳時代前期のみで、出土した器種は壺型土器・甕型土器・高杯型土器等の破片と共に完形品に近いものもあったが、土器表面の剝離が激しく残存状態が悪かった。

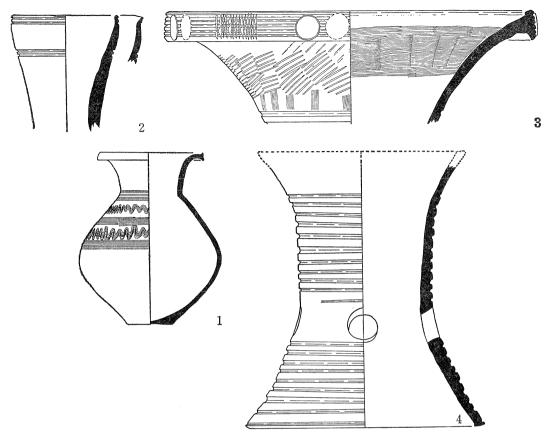
## 土器群 b

(H-3-H-4・ 5地区) 土器群 a・c間に、東西に連なる少量の土器の集中がみられた。 当土器群 b には、長楕円形の落ち込みが検出された。落ち込みは、 長軸をほぼ東西に取り、長軸約3.2m、短軸約0.8m、深さ0.25mを 計り、上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部には起伏が ある。内部には、茶褐色砂質粘土層の堆積がみられた。当土器群 b の土器の量は他の土器群に比べ少なく、さきの長楕円形の落ち込み にもごく少量の土器片が出土したのみである。土器群 b も土器群 a と同様に、古墳時代前期のもので甕型・壺型土器片によって形成さ れている。

## 土器群c

(H-3-H-1・ 4地区) 土器群 c は、土器群の西端に位置し南北に連なる多量の土器が集中する土器群である。南北約3.4m、東西約0.6~1 mの間に集中しており、土器群 c も土器群 a と同様に第1層・茶褐色砂質粘土層中に入り、遺構的性格を持つ掘り方は検出されていない。

土器群 c の特徴は、土器群 a · b では古墳時代前期の土器が出土したのに対して、弥生時代中期 (唐古第Ⅲ様式新~第Ⅳ様式)の土器によって形成されている点である。土器群 c での検出器種は、壺型土器・甕型土器・器台型土器・高杯型土器等の土器片があり、その多くは破片で、土器表面の剝離が激しく残存状態は非常に悪かった。完形品に近いものとしては、壺型土器(第10図—1・2)、器台型土器(第10図—3・4)がある。



第10図 土器群C出土土器 土器番号1・2・3・4 34

G・H地区

層位

池 (沼)  $(I-3-F-4 \cdot 5 \cdot$ 7 • 8 地区)

 $I-3-B \cdot C \cdot F \cdot I-3-B \cdot C \cdot F \cdot G \cdot H$ 地区では、遺構が非常に少なく、柱 穴跡、大形土拡等のみであった。以下層位より記述する。

> 当調査地区では、他調査地区とは異なり、単純な層位がみられ た。第1層・耕土、第2層・床土、第3層・淡茶褐色粘土層、第4 層・赤褐色粘土層に分けられ、第4層が遺構面になった。以下「す じ掘り」土層調査より第5層・灰色砂質層、第6層・黒色粘土層、 第7層・灰色砂質層と分けられた。第3層には弥生式土器、土師 器、須恵器、瓦器片が少量包含されている。

> 調査地区西南隅において、床土の下層より方形の落ち込みが検出 された。堆積層はヘドロ状の黒色粘土層が観られ、層中より近世の 瓦片、土瓶、茶碗片等の陶器類を出土した。又2段になる肩の中段 には、杭が打ち込まれていた。

> 近傍の人の話によると、明治時代迄この付近は、池或は沼であっ たという談話を聞いており、近世のものと考えられる。

## 大形土坛

(I-3-G-8・9、 H-7地区) 調査地区東南部に一部検出された大形土坂は、ベースの赤褐色粘土層を掘り込み作られており、深さ0.3~0.4mを計る非常に浅いものである。掘り方は、なだらかに落ち込み、土坂底部はほぼフラットになっている。

形態はやや歪みがある隅丸長方形をなし、東西10m、南北 1.5~2 m以上を計り、更に南へ広がる非常に大形のものである。

土拡内には、茶褐色粘質土層の堆積が観られたが、時代を決定するような遺物は出土しなかった。又、土拡肩、底部より、直径 0.2 m、深さ 0.3m前後の柱穴址が 4ヶ所検出されたが、土拡との関係は不明確である。

柱穴跡

大形土拡の北に、不秩序な配置で4ヶ所の柱穴跡が検出された。 いづれも直径0.2m、深さ0.3m程のものであり、その内の一ヶ所の 柱穴跡に、柱根がわずかに残っていた。

F-4-N、G-4-B 地区 当調査地区において検出された遺構は、比較的時期の新しいを考えられる大小の溝状遺構と弥生時代中期の方形周溝墓・土坂墓・大形土坂・井戸・ピット遺構などがある。

歴史時代の遺構と考えられるものは、5本の小さな溝状遺構と弥 生時代中期の遺構の一部を破壊した形で検出された大形の溝状遺構 である。

弥生時代中期の遺構としては、方形周溝墓1基を中心とし、土拡墓5基、大形土拡2基、井戸1基、ピット群などが所狭しと検出された。方形周溝墓には、木棺墓2基、土拡墓8基が検出され、多量の供献土器を有していた。2基の大形土拡は、多量の木製品を包含する特異な土塩である。

以下、層位と時期の新しい遺構から記述を進める。

当調査地区で層位(造成土を除く)は、調査地区・北北東から南南東の壁面を利用して土層調査を行った。(図版83)

第1層・耕土、第2層・床土、第3層・黄褐色砂質粘土層、第4層・茶褐色粘土層、第5層は2層にわけられ、上層の第5層 a は黒灰色砂質粘土層、下層の第5層 b は灰褐色砂質層である。第5層以下は、複雑な砂質層の堆積が観られ、南に向って流れ込むような堆積状態になっている。以下各層の詳細を記述する。

第 $1 \cdot 2$ 層の現耕土・床土面は、F-4-N地区においてフラットであるが、G-4-B地区において急激に層位が約 0.8mも上昇

層位

している。この部分においては、第3・4・5 a層がなく、全て砂層の堆積層に変化する。

第3層・黄褐色砂質粘土層は、厚さ約 0.2mを計り、G-4-B 地区を除いて全面に観られ、瓦器、須恵器、弥生式土器片が少量出 土している。

第4層・茶褐色粘土層は、厚さ約 0.2mを計り、北より南にわずかづつ下がりながら全面に観られ、上面に歴史時代の細い溝状遺構とG-4-B地区には大形溝状遺構の肩を不鮮明ながら検出している。第4層には、唐古第■様式(新)~第Ⅳ様式の土器片を包含している。

第5層a・黒灰色砂質粘土層は、F-4-N-5・7・8・9地区の調査地区内・南西部から南東・北東部にかけて堆積しており、厚さ約 0.4m以上におよぶ所もある。第5層aには、唐古第 II 様式(新) ~ 第 IV 様式の土器を多量に包含している。しかし、土器の残存状態が悪く、破片の状態で出土したため、土器による第4層との年代差は把握することができなかった。

第5層b・灰褐色砂質層は厚さ 0.2m前後を計り、第5層 a が観られた以外の調査地区の北東部から南西部・F-4-N-4・5地区に観られ、少量の唐古第 II 様式(新)~IV様式の土器片を包含している。第5層 a・bの面においては、複雑な砂層と粘質土層の堆積層である。当調査地区においては、調査終了後西壁面沿いに深さ約1mの「すじ掘り」を実施し、弥生時代中期の遺構面下層の土層調査を行い、細別すると約120層にわけられる堆積層が観られた。「すじ掘り」が浅かったため、この複雑な砂層の堆積状態を理解することは難しいが、非常に大規模な溝あるいは川、または大きな洪水による流入などが考えられる。今回検出された弥生時代中期の遺構は、この第5層以下の砂層あるいは砂質粘土層上に位置している。

古墳時代以降の遺構 溝 I (小溝群)

これらの小溝群は、ほぼ東西に走り、溝幅 $0.2\sim0.6$ m、深さ 0.1m前後と小規模なものであり、溝間隔も  $0.5\sim3$ mと一様でない。

溝内には、白色砂層・黄白色砂層が堆積しており、時期を決定する ような遺物は出土されていない。

溝 I (小溝群) は、調査地区全域に存在したと考えられるが、規模が小さいため調査中の削平、あるいは近世における整地によって削減したものと考えられる。このような溝は、他の調査地区においてもしばしば検出されており、旧耕土跡とも考えられる。

溝Ⅱ

(G-4-B-1・ 2地区) 調査地区南部に非常に規模の大きな溝 II が検出された。溝 II は、 床土より下層の第3層・黄褐色粘土層に不明確ながら掘り込まれて おり、第4・5層 a をも掘り込み、さらに下層の複雑な砂層を掘り 込んで存在したことが考えられる。

堆積している砂層は、第1層・耕土、第2層・床土を約 0.8mも押し上げたような様子が観られ、このため砂層の堆積層は 3 m以上に達する。溝 II の規模・形態は、調査地区の関係から把握できないが、溝の方向は、ほぼ東西に走り、調査地区東側においてやや北側に蛇行している。また調査初期において、溝北肩付近に 3 本の杭らしきものが検出されたが、造成土の崩壊のため破壊され、溝との関係は得られなかった。溝の堆積砂層よりは、時期を決定するような遺物は出土していない。溝の時期は、層位の関係から、比較的新しい近世以降のもので、相当長期間使用されていたと考えられる。

この溝 II は、この溝に並行して埋設されている大形下水道が、この付近の関発以前に存在した小川を改修して作られた記録があることから、溝 II がこの小川に関連したものとも考えられる。

第1号方形周溝墓は、調査地区中央部において検出された。方形 周溝墓の方向は方位とは一致しないが、ここでは便宜上、北東一南 西に連なるものを北溝として、これに平行するものを南溝、直交す る2つの溝を東・西溝とし、北溝から東溝の外側を走る溝を北第 溝、東第 『溝と称する。

各々の溝の形態・規模は、直線的でなく、溝幅・深さも一定でない。各々の溝の規模は、北溝長約8.5m、幅は最大約2.4mにも及ぶが、これは、溝を切り込んで作られた第6号土広墓によるものと推測される。深さ平均0.36m。東溝長約6.6m、幅約0.5~0.6m、深さ平均0.4m。南溝長約7.4m、幅約1m、深さ平均0.4m。西溝長約5m、幅約0.5~0.6m、深さ平均0.35m。北第『溝長約4.8m、幅約1.2m、深さ平均0.3mを計る。

弥生時代の遺構第1号方形周溝墓(F-4-N-5・8・9 地区)

各々の溝は、上部の大きく開いたU字形を呈し、溝の底部は平坦でなく起伏がある。また、北第『溝・東第』溝は他の溝よりも、溝幅の割りに浅い点が特徴である。

溝内の堆積層は、各々の溝によって多少の差異があり、また土器の包含の有無によっても異なる。全溝を通して大別すると、第1層・灰褐色砂質土層、第2層・黒灰色砂質粘土層にわけられる。

第1号方形周溝墓の特異な点としては、北第『溝・東第』溝の存在である。北溝の中央北側付近より、北溝の幅を極端に狭めて北第 『溝が掘られている。北溝と北第『溝の関係は、土層断面(図版85 - 1)より北第『溝が北溝を掘り直して作られていることがわかる。包含する土器の量も北第『溝が多い。さらに北第『溝は、東溝と幅約1mの台状部により完全にわけられ、平行して走る東第『溝になる。東第『溝は、後述する第』大形土城の北側で消える。東第『溝と第』大形土城の前後関係は、土器の時期差では把握できなかったが、層位的には、東第『溝は、第』大形土城埋没後掘られ、南溝付近まで伸びていたと考えられる。また、東第『溝と東溝の関係は、土層断面(図版82)より、東溝埋没後東第『溝が掘られており、土器は東第『溝のみに出土した。

さらに特異点としては、西溝と南溝間が約 1.3mとぎれ、陸橋部を形成している点である。

方形周溝によって区画された台状部は、東西約 7.6m、南北約 6 mと東西にやや長い長方形を呈している。北第 『溝・東第 『溝によって区画された台状部の東西長は、約8.75mとなる。主軸 (木棺墓の長軸と平行する軸を主軸とする。) 方向をN-24°-Wに取り、台状部の中央には、2基の木棺墓が平行して並び、その周囲には、同じる上拡までた場合。 と共立として、周溝内にも土拡墓と推定されるものが、北溝と西溝(単位は m)に各々1基あり、陸橋部にも1基の土城墓を有する。

(各々の溝の規模は、第4表にまとめて記述しておく。)

第1号方形周溝墓より検出された明確な木棺墓は2基である。他にもプラン的には、木棺墓の可能性をもつものがあるが、一応確実に木棺を有するものを木棺墓として、他のものは土坂墓の部類に入れて記述する。2基並行する木棺墓の西側を第1号木棺墓、東側を第2号木棺墓と称する。

第1号木棺墓(図版84)は、残存木棺の一部である底板から、組

溝名	構長	溝幅	溝の 深さ (平均)	備	考
北溝	8.5		0.36		土 広墓と っているた
西溝	5.0	0.5	0.35		
南溝	7.4	1.0	0.4		
東溝	6.6	0.55	0.4		
北第川溝	4.8	1.2	0.3		
東第Ⅱ溝			0.8	( )の中 3第Ⅱ大刊 伸ばしi	の溝長は、 杉土拡まで こ場合。

第4表 第1号方形 周溝墓各溝の規模 (単位は*m*)

主体部 (木棺墓)

第1号木棺墓

み合わせ式木棺と推定される。しかし、木棺の蓋板・長側板・短側板は残っていなかった。残存底板自体も腐植がひどく、南北両側端がなくなっており、また底板中央部も厚さが1cm程度になっている。残存底板の大きさは、幅0.6m、長さ1.6m、厚さは比較的残りのよい東・西側端において約5cmを計る。木棺は材質鑑定によりコウヤマキと判明した。なお、遺体・副葬品などは出土しなかった。注 (①鑑定は、暁学園短期大学教授、理学博士・嶋倉已三郎)

木棺埋置のための掘り方は、幅約 0.8m、長さ約2.23mを計る長方形を呈し、残存底板より幅においてやや広い程度であるが、長さにおいては、底板自体が腐植しているためか、ゆとりがある。木棺検出前の掘り方の平面形は、側板の張り出しが四方に明瞭に残り整った形を成していた。しかし、側板の張り出しの部分の掘り方は浅く痕跡だけというものであった。因みに、比較的残りのよい木棺墓東北の張り出しの掘り方の深さは、0.02mを計る。同様に木棺埋置のための掘り方の検出時の深さは、約0.08mである。

主軸に直交する掘り方のたち割りの結果、掘り方東・西壁面沿い 底部に、不明瞭ながら黒灰色砂質粘土層のU字形の落ち込みが土層 断面にみられたが、木棺の側板の掘り方あるいは排水用の細い溝と も考えられる。底板の底部には、黒色砂質粘土層が検出された。

この層は土層断面より観ると、底板は平坦であるが、下層は起伏があり不整形なものであり、弥生式土器の破片も出土している。この点から、この黒色砂質粘土層は、木棺安定のために埋められたものと考えられる。さらに下層は灰色砂質層、掘り方の肩は淡灰褐色砂質層になっていることから、木棺墓自体が不安定な砂質層上に立地することが観察された。

第2号木棺墓

第2号木棺墓は、第1号木棺墓と約0.3mの間隔をおき、東に平行して並んでいる。第2号木棺墓の木棺は、第1号木棺墓に比べて 残存状態が悪く、残存木棺の1部から第1号木棺墓と同じく組み合 わせ式木棺と推定される。

組み合わせ式木棺の底板の残存幅0.3m、長さ0.8mを計るが、底板中央部は腐植し、東西側端が残っている状態である。短側板・長側板・蓋板・遺体といったものは、痕跡すら認めることはできなかった。

木棺埋置のための掘り方は、幅0.8m、長さ1.6m、検出時の深さ 0.12mを計る長方形というより、ゆがんだ隅丸方形を成している。 主軸と直交するたち割りの結果、底板の下には黒色砂質粘土層が検 出されたことから、第1号木棺墓と同じ目的で充填されたものと推 測される。また、掘り方の肩、底部は灰色砂質層になっているが、 第1号木棺墓のように、掘り方東・西壁面沿い底部にU字形の落ち 込みは観られない。

土址墓

第1号方形周溝墓の台状部には、土坂墓と考えられるものが5基 ある。この中には、平面的には木棺墓の可能性をもつものもある が、木棺が検出されていないものは、土坂墓と称している。なお土 坂墓の名称は、北より1号・2号・3号……と記述する。

第1号土纮墓

第1号土拡墓は、台状部の一番北側に位置し、北溝に接する土拡墓である。最大長1.7m、最大幅1m、検出時の深さ0.25mを計る。長軸を主軸よりやや東にふり、隅丸方形の胴張りの掘り方をもち、土拡底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、土拡底部は平坦でない。土拡内には、暗灰褐色砂質粘土層が堆積しており、遺物は出土していない。

第2号土址墓

第2号土城墓は、台状部の一番東に位置し、東溝に土城墓の一部がかかり、東溝を掘り込んで作られている。長方形の掘り方をもち、幅0.7m、長さ1.25m、検出時の深さ0.17mを計り、長軸を主軸に直交する。土城底部へは、東西よりゆるやかな傾斜をもって落ち込むが、南北からはやや急傾斜に落ち込んでいる。土城底部は、平坦になっており幅0.36m、長さ0.6mの規模を計り、土城上口の規模に比べると非常に小さくなっている。

土拡内の堆積層は、第1層・灰褐色砂質層、第2層・暗灰褐色砂質粘土層にわけられる。各々の層からは、少量の弥生式土器片が出土している。

第2号土城墓と東溝との関係は、土層断面から、第2号土城墓が 東溝が埋った後に掘り込まれたことが判明した。(図版85-2)

第2号土城墓の平面形は、木棺を埋置するのは困難であるとも考 えられる。

第3号土纮墓

第3号土城墓は、台状部の北西に位置し、第1号木棺墓と掘り方の南東部を接している。長方形の掘り方をもち、幅0.7m、長さ1.2m、検出時の深さ0.09mを計り、長軸を主軸に直交している。掘り方の形態の特徴は、平面形が長軸に比べ短軸の長い正方形に近い形を成し、土城底部は平坦であるが検出時の深さは非常に浅い点である。土城内には、暗灰褐色砂層が堆積しており、遺物は含まれてい

## ない。(図版86-1)

第1号木棺墓との相互関係は、第3号土坂墓が掘り方の南東隅を 第1号木棺墓に切られており、第1号木棺墓埋置以前に、第3号土 坂墓が存在していることが推測される。

## 第4号土纮墓

第4号土城墓は、台状部の南東に位置する。隅丸長方形の掘り方をもち、幅0.7m、長さ1.5m、検出時の深さ0.15mを計り、長軸を主軸に平行して位置している。掘り方上口より土城底部には、やや急傾斜で落ち、底部は平坦であるが、ゆがんだ隅丸の長方形を成している。土城内には、暗灰褐色砂質粘土層が堆積しており、少量の弥生式土器片が含まれている。

第4号土坂墓は、形態的に木棺墓の可能性も強いが、検出時に上層の土層断面より、土層から木棺あるいは掘り方の存在の調査を試みたが、それらしき跡は検出できなかった。

## 第5号土纮墓

第5号土拡墓は、台状部の一番南に位置し、南溝に接するように掘り込まれている。楕円形の掘り方をもち、短軸0.8m、長軸1m、検出時の深さ0.25mを計り、長軸を主軸に直交している。掘り方上口より土拡底部にはゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち形を成している。土拡内には、第1層・黒色粘土層、第2層・黒色砂質粘土層の2層の堆積が観られ、両層から少量の弥生式土器片が出土している。(図版86-2)

#### 周溝内土址墓

第1号方形周溝墓の周溝には、土坂墓と推定されるものとして、 北溝の第6号土坂墓と西溝の第7号土坂墓の2基がある。しかし、 両土坂墓ともに、土坂墓と決定する要因は少なく、単に土坂墓と推 定される箇所において、溝の幅が広がり、溝底部が深くなることの みである。

#### 第6号土纮墓

第6号土 拡墓は、北溝中央付近の溝幅が大きく広がり、多量の供献土器下層の溝底部にすりばち状の落ち込みを検出した部分に位置する。

溝幅が約1.2m広がる点である。

第6号土拡墓の推定規模は、短軸1.2~1.5m、長軸 1.7~2m、 検出時の深さは北溝外肩より約0.55mを計り、長軸を北溝とほぼ平 行に取る。土拡内には2層の堆積層が観られ、第1層・多量の供献 土器を包含する黒色砂質粘土層、第2層・少量ながら土器片を包含 する黒色粘土層にわけられる。この堆積層は、北溝の堆積層よりや や粘質が強く黒色であることが相違している。(図版86-3)

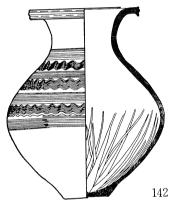
第7号土城墓は、西溝中央付近の幅が約0.36m広がり、溝底部も深くなる所に位置する。第7号土城墓の推定規模は、短軸約1m、長軸約2m、検出時の深さは溝外肩より0.55mになり、深さにおいて周囲の溝底部より約0.2m深くなっている。土城底部は、平坦でなく非常にゆるやかな傾斜をもって南北の溝底部より落ち込み、すりばち形になっている。

土拡内には4層の堆積層が観られ、第1層・灰褐色微砂質層、第2層・暗灰褐色微砂質層、第3層・炭化物を含む暗黒灰色微砂質層、第4層・黒灰色粘質砂層にわけられる。この層位は、西溝全体に観られ、特別な相違はない。(図版85-5)

また、第7号土城墓の中央、第 【層上から、完形に近い唐古第 **【** 様式 (新)の壺型土器 (第11図─142)が1点出土した。この土器は、溝に直交するように、口縁を東に向けて横位になっており、西 溝で出土した唯一の土器でもある。

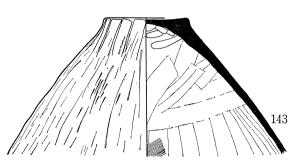
> 土坂内には3層の堆積層が観られ、第1層・ 灰褐色砂質層、第2層・炭化物を含む黒色砂質 粘土層、第3層・灰色砂質粘土層にわけられ る。前述の土器底部は、第1層中より第 I 層上 面に位置している。(図版86-4)なお、この 土器は、底部のみであるため明確な時期は不明 であるが、唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式のも のであると考えられる。(第12図-143)

第7号土纮墓



第11図 土坂墓出土土器 34

第8号土纮墓



第12図 第8号土纮墓出土土器 1/4

第8号土拡墓は、主体部以外において最も土拡墓としての可能性 が強い。また、第8号土拡墓は、第1号方形周溝墓との前後関係あ るいは陸橋部の意味を考え直す土拡墓として興味深い。

## 方形周溝墓周囲の 土城墓

第1号方形周溝墓の東・西・南・北には、土坂墓と推測される土 坂が5基検出された。この中には、第10号土坂墓のように周溝を切 り込んで存在するものもあり、方形周溝墓との前後関係も興味深 い。

## 第9号土纮墓

第9号土拡墓は、北溝の北に位置し、短軸0.8m、長軸1.6m、検出時の深さ0.42mの楕円形を呈し、土拡上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち形である。長軸を北に取り、第1号方形周溝墓の主軸よりやや東に振っている。土拡内には、灰褐色砂質粘土層の堆積が観られたが、土器などの遺物は含まれていない。

## 第10号土纮墓

第10号土拡墓は、第1号方形周溝墓北西の北溝と西溝の接する箇所に、切り込むように検出された。平面形は隅丸の長方形を呈し、幅0.6m、長さ1.25m、検出時の深さ0.45mを計り、長軸はN-21°-Wに取っている。土拡の掘り方は、2段掘りになっており、上口より深さ約0.2m付近までゆるやかな傾斜で落ち込むが、それ以下は急傾斜で落ち込んでいる。2段目の肩の規模は、幅0.4m、長さ0.7mの隅丸の長方形を呈し、掘り方上口の規模より小さく、土拡底部は平坦になっている。

土拡内には4層の堆積層が観られ、第1層・灰褐色砂質層、第2層・灰褐色粘質砂層、第3層・黒灰褐色砂質粘土層、第4層・炭化物を含む黒色砂質粘土層にわけられる。(図版86-5)4層ともに、唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式の土器片が出土している。

#### 第11号土纮墓

第11号土拡墓は、第1号方形周溝墓の東溝と東第**『**溝との間の台 状部に検出された土拡をいう。土拡墓と判断する根拠は少なく、単 なる土拡の可能性もあるが、堆積する土層と周囲の関係から土拡墓 の可能性も考えられるため、今回は土拡墓として取り扱っている。

土拡内には、遺物を全く含まない黒色粘土層が堆積している。ま

た、東溝・第11号土拡墓・東第 | 溝を直交させた土層断面より、東 溝と東第 | 溝によって第11号土拡墓が切り込まれていることが観ら れる。さらに、土拡墓の南西側の一部も第 | 大型土拡によって切り 込まれている。

これらの関係から、第11号土坂墓の規模・形態は、把握が困難であるが、円形に近いもので直径約1.6m、深さ約0.6m程度のものと推測される。土坂の掘り方は、肩から底部にかけてゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち状を呈している。また、第11号土坂墓は、層位関係から、方形周溝墓築造以前に存在していたことが考えられる。

## 第12号土址墓

第12号土拡墓は、第1号方形周溝墓南溝の南約1mに位置し、円形に近い掘り方をもち、短軸0.75m、長軸0.85m、検出時の深さは0.35mを計り、長軸は方形周溝墓の主軸と一致する。掘り方は、肩から底部には急傾斜で落ち込み、底部には起伏があり南から北にゆるやかに傾斜している。また、土拡内の南・西壁に小ビットが検出されたが、土拡墓に伴うものか、後世のものかは不明である。

土拡内には、3層の堆積層が観られ第1層・黒灰色砂質層、第2層・炭化物を含む黒色粘土層、第3層・灰色砂質粘土層にわけられ、第1・2層より唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式の土器片を少量出土している。(図版86-6)

## 第13号土纮墓

第13号土 広墓は、第1号方形周溝墓の南西に検出された第17号土

遺 構 No.	形態	長 軸	短 軸	深さ	備考
第1号木棺墓	長方形	2.23	0.8	0.08	木棺検出
第2号木棺墓	隅丸方形	1.6	0.8	0.12	木棺検出
第1号土纮墓	隅丸方形	1.7	1.0	0.25	
第2号土纮墓	長方形	1.25	0.7	0.15	
第3号土広墓	長方形	1.2	0.7	0.09	
第4号土広墓	隅丸方形	1.5	0.7	0.15	
第5号土纮墓	楕円形	1.0	0.8	0.25	
第6号土城墓	楕円形	1.7~2.0	1.2~1.5	0.5	推定規模
第7号土纮墓	楕円形	2.0	1.0	0.55	
第8号土坛墓	円形	直径	0.8	0.55	陸橋部の土坂墓
第9号土坛墓	楕円形	1.6	0.8	0.42	
第10号土坛墓	隅丸方形	1.25	0.6	0.45	
第11号土址墓	円 形	直径 1.6		0.6	
第12号土址墓	楕円形	0.85	0.75	0.35	·
第13号土纮墓	楕円形	1.2	1.0	0.32	推定規模

第5表 木棺墓・土城墓の形態と規模(単位は加)

拡に掘り込まれていることが、第Ⅳ 号土拡内の土層断面より検出された。結果的には土城墓の掘り方を破壊しているため、第13号土城墓の規模は、長軸約 1.2m、深さ約0.32mと考えられる。同様に土層断面より観た土城墓の形態は、平面形は楕円形を呈し、肩から底部にかけてやや急傾斜で落ち込み、底部はすりばち状になっていたものと考えられる。

第13号土拡墓内の堆積層は、第 IV 号土拡と類似しており、2 層にわけ られ第1 層・黒色砂質粘土層、第2 層・白青緑色粘土層のブロックを含 盛土

調査地点名	平均標高 (O・P)
盛土第Ⅰ層上面	6.500 m
盛土第Ⅱ層上面	6.240 m
第1号木棺墓底板	5.800 m
南溝外肩	5.700 m
北溝外肩	5.850 m
東第Ⅱ溝外肩	5.511 m
西溝外肩	5.940 m
	<u> </u>

第6表 各地点標高

む黒灰色砂質粘土層である。

(各々の土坂墓・木棺墓の規模は、第5表にまとめて記述しておく。)

第1号方形周溝墓確認後、調査地区を拡張し方形周溝墓の残り½の検出を試みた結果、茶褐色粘土層がゆるやかな傾斜で不明瞭ながら方形に落ち込み、裾は黒色砂質粘土層に変化した。特に、方形周溝墓の東南側において、著しい落差が観られた。

これらの点から盛土の存在を確認することができたが、層位的に 茶褐色粘土層と方形周溝墓の裾に広がる黒色砂質粘土層を取り除かなければ、実際の方形周溝墓の規模を知るための周溝が検出できないために除去すると、南・東側の裾より多量の唐古第 II 様式(新) ~第 IV 様式の土器が出土した。これらの土器は、後に方形周溝墓の南溝・東第 II 溝の供献土器と判明し、明確な第1号方形周溝墓の規模・形態が検出された。

第1号方形周溝墓の盛土は、さきの土層断面より、方形周溝墓中央付近から非常にゆるやかな傾斜で下がってゆき、周溝付近から急傾斜で落ち込み、周溝上では溝内の堆積と周囲からの堆積が入り複雑な堆積が観られる。盛土は、整った3層の層位を呈しており、第1層・唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式にかけての土器を包含する茶褐色粘土層、第2層・ごく少量の弥生式土器片を包含し、多量の鉄分の落ち込みが観られた灰褐色砂質粘土層、第3層・全く遺物を含まない灰色砂質層にわけられる。各々の層の厚さは、方形周溝墓中央部において、第1層・約0.25m、第2層・約0.18m、第3層・0.25m以上を計る。第1層は、周溝上に大きく流出しており、多量のまとまった土器が出土しているが、それに比較すると第2層以下には、全く土器を包含していないと言っても過言ではない。

第1層・茶褐色粘土層を盛土の最上層とした場合の盛土の高さ(比高差)は、当調査地区において弥生時代中期の遺構面が北より南に向って低くなっていることも関係し多少相違があるが、南溝外肩より約0.8m、北溝外肩より約0.65mを計る。同様に、第2層・灰褐色砂質粘土層とすると、南溝外肩より約0.54mになる。

盛土の第1層・茶褐色粘土層は、調査地区全域に観られた第4層・茶褐色粘土層と同名であり、包含土器も唐古第■様式(新)~第 IV 様式と同時期のものであるが、盛土の第1層は方形周溝墓上にレンズ状に堆積しており、調査地区全域に観られた第4層と異なるものと思われる。

第1号方形周溝墓の問題点である北第 I 溝・東第 I 溝は、東・西・南・北の溝によって区画された方形周溝墓の拡張とも考えられるが、しかし、この拡張を示すような層位が盛土の土層断面には観られなかった。整った盛土の層位は、東溝を埋めて、東第 I 溝まで伸びている状態で検出された。

盛土の参考資料として、盛土中央部における各層の標高と木棺底板、各々の溝外肩の平均標高を第6表に記述する。

第1号方形周溝墓には供献されたと思われる土器が、北溝・北第 『溝・南溝・東第』溝内および盛土の上面と、さきの溝の外側にも 多量に出土した。東溝・西溝内には、ごく少量の土器片が出土した が、供献土器と思われるものは一切出土していない。

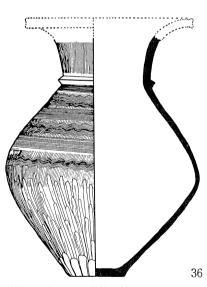
西溝において検出された第7号土坂墓上の壺形土器は、他の 溝に観られ供献土器とは性格が異なり、土坂墓自体の供献土器 とみられる。供献土器の多くは完形品あるいは完形品に近いも のが少なく、周溝内および周溝上、周溝外において出土してい る。

周溝より検出された供献土器は、2、3層に重なり合い不規則に並んでおり、その状態から溝内に落ち込んだようになっており、溝外へ大きくはみ出している土器もある。また、供献土器出土の溝においては、供献土器が全て溝底部より浮いており、特に、南溝では溝底部より約0.1m以上、最高0.4mも浮いている土器もある。しかし、北溝より検出されたほぼ完形の唐古第 【様式(新)の壺形土器(図版99-65)が、溝底部に接し横転した状態で出土し、その状態から北溝底部に立てられてい

たものが倒れたものと思われる。この1点の土器を別として全ての 供献土器は浮いた状態で出土した。(図版87)

供献土器の内で東第 I 溝の土器は、溝内・溝上に堆積した第 5 層 a・黒灰色砂質粘土層と関係し、外部からの二次的堆積とも考えられる上に、後述する第 I 大形土拡の堆積層と関係し、複雑さを増した。一応溝内より出土した土器を供献土器として扱う。

供献土器



第13図 南溝供献土器 ¼



第14図 北溝供献土器

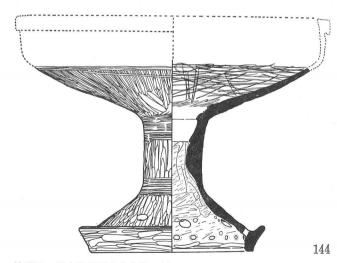
その他の遺構 第1号井戸 (G-4-B-2地 区) 第1号方形周溝墓の供献土器は、その大多数に亀裂が入っており、完形個体といえるものは北溝の壺型土器、南溝の水差型土器(図版98—51)、台付鉢型土器(図版98—50)の3個体のみである。また完形に近い個体も少なく、大多数が壊れており、残存状態も非常に悪いものばかりである。北溝・北第『溝・東第』溝・南溝の供献土器の時期は、各々の個体を観れば時期差はあるが、堆積状態の上、下ならびに各々の溝別といった大きな面を観れば、時期差を明確に把握できない。しかし、東第』溝の供献土器は、土器量が最も少なく、また時期もやや下がるものがある。

南溝から出土した完形の水差型土器・台付鉢型土器には、底部に 焼成後内側から打ち欠いた不整形な孔があり、また、これらの土器 には外面に朱が塗られている。なお、北溝の黒灰色砂質粘土層中よ り蛤刃石斧(図版124-34)、柱状石斧(図版124-26)、石鏃(図 版123-11)が、西溝より用途不明の磨製石器(図版124-18)など の石器も出土した。

第1号方形周溝墓の南西約3 mにおいて、時期不明の溝 I (大溝) による、掘り方の一部を削平された第1号井戸を検出した。第1号井戸は、円形二段素掘りのもので、上段上口径約3 m、検出時の深さ2 m、底部標高(O・P)3.740mを計り、上段上口から深さ約0.6 m付近までゆるやかな傾斜で落ち込み、それ以下はほぼ垂直に落ち

込んでいる。

井戸内には2層の堆積層が観られ、第1層・黒灰色砂質粘土層、第2層・腐植性の強い黒色砂質粘土層にわけられる。第1層は、二段掘り井戸の二段目上口まで堆積しており、この土層は調査地区の南側に観られた第5層 a・黒灰色砂質粘土層と同一のものと考えられ、多量の唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式の土器を包含している。第2層は、二段目上口より底部まで堆積しており、井戸底部付近に、杯の一部を欠いた生焼けの唐古第 II



第15図 第1号井戸出土土器 1/4

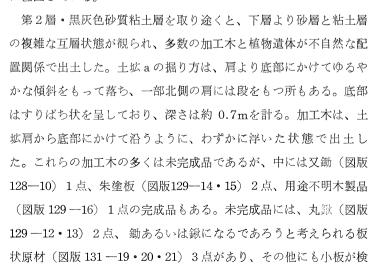
第 | 大形土城 (F-4-N-7地区)

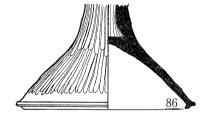
様式(新)~第 Ⅳ 様式の高杯型土器(第15図-144)が出土した。

第1号方形周溝墓の西約3m・調査地区南西隅において、第 I 大形土拡を検出した。時期不明の溝 I (大溝) によって南西側の一部

を削平されている上に、土拡の一部が調査地区外に存在するため、明確な形態・性格を把握することはできなかったが、楕円形の掘り方をもち、長軸を北々東一南々西に取るものと考えられ、推定長軸約6m、短軸約5m、深さ最大約0.75mを有する大形土拡と推測される。土拡内には18層にわけられる堆積層が観られる(図版88)が、大別すると3層にわけられる。第1層・黒灰色砂質粘土層は、調査地区の南西から東側に観られた第5層 a と同一の自然堆積と考えられ、多量の唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式の土器が出土した。第2層・黒灰色砂質粘土層あるいは黒色粘土層は、第 I 大形土拡内のみに観られたもので、多量の唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式の土器と共に、多量の植物遺体が出土した。第3層・黒色砂質粘土層(一部、黒色砂質粘土層と砂層の互層が観られる部分がある。)は、多量の唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式の土器と共に、加工木と植物遺体を包含する層になる。

第 | 大形土拡は、2 カ所の土拡にわけられ、土層断面の観察から掘り直しが1 度実施されていることが明らかである。北側に位置する土拡は推定3 mを計り、南側の土拡は一部のみの検出のため、規模は不明確であるが、推定径約2 m程度のものと考えられる。北側の土拡を第 | 大形土拡 a、南側を第 | 大形土拡 bと称する。土層断面の層位より第 | 大形土拡 bが第 | 大形土拡 a より新しく掘り込まれたのがわかるが、土器による時期差は、把握できなかった。また、第 | 大形土拡全体の掘り方は、調査地区全体に観られた第 6 層以下の砂層の堆積層上に掘られているため、底部・肩は全て砂層上に位置している。





第一大形土城 a

出された。これらの加工木と共に、唐古第 II 様式 (新) ~第 IV 様式 の甕型土器 (図版101-93)、壺型土器 (図版100-71) と土製品の 紡錘車 (図版125-44) が土拡底部より出土した。

第 | 大形土城 b

土層断面より第Ⅰ大形土拡 a が埋没後、新たに南側に掘られており、2層の堆積層が観られる。第1層・黒色粘土層には多量の植物遺体と共に、唐古第Ⅲ様式(新)~第Ⅳ様式の土器を包含する。第2層・黒色砂質粘土層には加工木と植物遺体を包含する。土拡 b は、調査地区の関係から詳細は不明であるが、調査地区西北に広ろがっていると推測され、原木を切り出した角材1点も、大部分は壁面より奥に入っていた。

第 I 大形土拡の目的が、加工木、土器などを放棄するためのものか、意図があって置いたものかは今回の調査のみでは判断できない。さらに方形周溝墓・土拡墓が埋置された付近に、同時期のものと考えられる多量の木製品と土器を包含した大形土拡が存在する点に関しては、第 1 号方形周溝墓の北溝より蛤刃石斧・肩平片刃石斧が出土していることから、第 I 大形土拡が方形周溝墓と何らかの関係があることも考えられる。

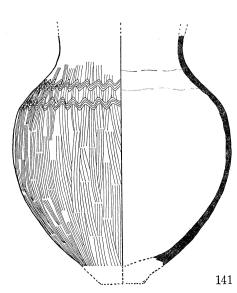
調査地区東端・第1号方形周溝墓東南約 1.5m付近において、大 形土拡の一部を検出した(図版89)。この第 I 大形土拡も第 I 大形 土拡と同様に調査地区の関係から一部のみの検出を余儀無くされた ため、規模は調査した範囲内のものを記す。長軸約 3.5m、短軸約 2 m、検出時の深さ約0.5mを計る。

第『大形土坂の堆積層は、3層にわけられるが、上層の2層は前述の第1号方形周溝墓東第『溝の堆積層と同一であり、多量の土器が出土した。第3層以下は、5層の砂層の堆積層が観られたが、細別せずに灰褐色砂層として扱う。この灰褐色砂層の下層には、加工木と植物遺体、少量の唐古第『様式(新)~第『様式の土器を包含している。

第 ▼ 大形土拡の掘り方は、淡灰色砂質層を掘り込み、南側よりゆるやかな傾斜で落ち込み、北・西側よりやや急傾斜で切り込まれている。土拡底部は、すりばち形をなし、底部が土拡の北よりに位置している。

第 ▼大形土広より出土した遺物には、加工木として、柱 状石斧の柄の未完成品(図版 128 —11) 1点、一部加工が 観られる原材 2点と、弥生時代中期と思われる東海型の壺

**第Ⅱ大形土城** (F-4-N-9地 区)



第17図 第Ⅱ大形土拡出土土器 ¼

型土器(第17図-141)1点と少数の土器片がある。

第 ▼大形土拡は、出土した原材が調査地区の東壁面の相当奥まで入っていることから、調査地区の東北にさらに広ろがっていることが考えられる。当土拡は、第1号方形周溝墓の東第 ▼ 溝が掘られる以前に存在していたことは判明しているが、第1号方形周溝墓改修以前との前後関係は不明である。いづれにしても、時期差があまりみられない方形周溝墓と共存することは今後の研究を待ちたい。

第Ⅱ土拡

(F-4-N-5地 区) 調査地区北端において検出された第 土拡は、一部のみの検出のため規模・形態は不明である。掘り方は、上口よりゆるやかな傾斜で落ち込み、検出時の深さ約0.45mを計る。土拡内には暗灰色粘土層と黒色粘土層の堆積が観られ、唐古第 様式(新)の時期の土器が出土した。また、土拡のたち割りの結果、自然木の株が立ったまま検出された。

第IV土址

(G-4-B-2地 区) 調査地区南端において検出された第**IV**土拡は、時期不明の溝**II** (大溝)に掘り方の一部を削平され、前述の第13号土拡墓によって中央部を破壊されている。

第Ⅳ土拡は、隅丸方形の土拡に溝状遺構が派生した形を呈す。隅丸方形の土拡は、東西約2.8m、南北2.2m以上、検出時の深さ0.3mを計り、掘り方の上口よりゆるやかな傾斜をもって落ち込む、土拡内には、黒灰色砂質粘土層が堆積しており、唐古第■様式(新)~第Ⅳ様式の土器を包含している。また、土拡底部より砥石(図版125-48)が出土した。土拡東肩に2カ所のピットをもち、各々の上口径約0.3m、深さ0.25mを計り、暗灰色砂質粘土が堆積している。また土拡底部南よりに、長軸約0.5m、短軸0.44m、深さ約0.15mの楕円形のピットがあり、同じ黒灰色砂質粘土が堆積していた。

第17土城の北と東に伸びる短い溝は、北側の溝が、幅約 0.8m、深さ約0.12m、検出長 1 mを計り、溝内の堆積層は黒灰色砂質粘土層である。また溝北端に上口径 0.3m、深さ0.18mのピットを有する。東側の溝は、幅0.54m、深さ0.1m、検出長約1.5mを計り、溝内には黒灰色砂質層の堆積が観られる。溝東端と西端に各々1カ所のピットがあり、東端のピットは上口径0.5m、深さ0.3m、西端のピットは上口径0.16m、深さ0.12mを計る。

ピット群 (F-4-N-4地区) 第1号方形周溝墓の西側において、十数個のピットが検出され、 また他の地区においても小数のピットが検出されている。これらの ピット群の中には、柱穴といえるものと単純な土拡と思われるものもあり、各々のピットの規模もまちまちである。また無秩序に並んでいるため、建物跡なども復元できない。これらのピットは、第 V 層より掘り込まれていることから、弥生時代中期頃のものと考えられる。

A-6-F・G・I・J・K地区では、弥生時代中期の方形周溝 墓が調査地区の東半全域に5基検出された。以下層位及び各方形周 溝墓について記述する。

層位

当調査地区の層位については、調査地区2方向、北・東壁面を残して調査を行い、遺構調査終了後当地区内中央部を東西方向に深さ1.2mの「すじ掘り」によって遺構面下層の調査を行った。

その結果、第1層・耕土、第2層・淡茶褐色粘土層、第3層・弥生時代中期~奈良・平安時代頃の土器片を包含する灰褐色粘土層、第4層・生活面である淡灰褐色粘土層となる。以下「すじ掘り」による遺構面下層の層位は、E-261ライン(A-6-J-6地区)付近を界に東・西に相違がある。東においては、第5層・茶褐色土層、第6層・青灰色粘土層、第7層・灰色粘土層、第8層・黒色砂質粘土層となり、西においては第5層~第8層はなく、第9層・黄褐色 礫層、第10層・青灰色礫層になる。

第3層・灰褐色粘土層は、調査地区西半 (A-6-F・J地区) において浅く、後世に相当攪乱を受けており、攪乱層の一部は第4層におよぶ所も観られた。第4層・淡灰褐色粘土層は、調査地区全域に観られたが、調査地区東半 (A-6-G・K地区) においては溝状遺構、下層の層位も関連し、入り乱れた状態が観られた。遺構面下層に関しては、調査地区東半と西半とは大きく相違し、第5層~8層は沖積層、第9層~10層は洪積層と思われる。

方形周溝墓

今回検出された5基の方形周溝墓は、互いに周溝の一部を共有しており、東・西・南・北に連なっている。各方形周溝墓の周溝は磁北より約20°東に振っている。調査地区内において方形周溝墓が連なった状態で検出された点から観て、調査地区外の東・南・北にも伸びると考えられ、事実その可能性が考えられる遺構が観られたが、今回は明確な5基の方形周溝墓を記述する。5基の方形周溝墓は、前述の第4層・淡灰褐色砂質土層を切り込んで造られており、周溝底部は、第7層・灰色粘土層まで至る部分もある。全体に、今

第1号方形周溝墓 (A-6-K-4・ 5・7・8地区) 回検出された方形周溝墓の残存状態は悪く、主体部は一切残っておらず、供献土器も一部の方形周溝幕に出土したのみである。

5 基の方形周溝墓は、便宜上東より第1号、第2号……第5号 方形周溝墓と称して、記述する。

調査地区東南隅より検出された第1号方形周溝墓は、周溝が磁北より N-20°-E にふっている。周溝は直線的であるが、溝幅、深さに相違がある。南・西溝は、溝幅が比較的狭く、北・東溝は後世の攪乱の為か、大きく広がる部分がある。溝の深さは、溝底部に起伏があり、また調査地区全体に遺構面が南に向って低くなっており、溝の深さも相対的に南に向って深くなっている。各溝は、上口の大きく開くU字形を成し、多少の相違はあるが、茶褐色砂質層と暗灰褐色粘質土層の堆積が観られた。西溝は、第2号方形周溝墓の東溝との共有関係から、南北に張り出している。しかし、北側の張り出しに関しては、後世の攪乱によるものと考えられる。また、東溝・南溝の一部も、溝の外肩が調査地区外に伸びている点から、第1号方形周溝墓の東・南に他の方形周溝墓が存在している可能性が考えられる。

第1号方形周溝墓の規模は、北溝長9m、幅2m、深さ0.35m、 東溝長11m、幅 1.4m、深さ0.35m、西溝長10m、幅 1.4m、深さ 0.4mを計る。

方形周溝によって区画された台状部には、主体部と考えられる遺構はなく後世に削平されたものと思われる。また同様にマウンドと考えられる堆積は、方形周溝墓たち割りのすじ掘りによっても観られなかった。なお台状部と溝外肩の比高差は 0.3m前後ある。ただ台状部中央部より南溝にかけて、長軸5 m、短軸2.1m、深さ0.2mの弓なりの楕円形の土拡2号が検出され、土拡内には、茶褐色砂質層の堆積が観られた。しかし、この土拡2号が、方形周溝墓の主体部とは考え難く、後世に掘り込まれたものと考えられる。

供献されたと思われる土器は、東溝9点以上、北・南溝に各1点が出土したが、完形品に近いものは少なかった。供献土器は、台状部から溝への肩と溝底部、溝外肩に出土した。その大部分は溝肩・底部に接している。供献土器の内完形に近いものとしては、東溝の壺型土器(図版104—11・12)、高杯型土器(図版105—20)、北溝の甕形土器(図版105—17)、南溝の壺型土器(図版104—13)がある。この内11と12には、焼成後内側から打ち欠いた不整形な孔があ



第18図 第1号方形周溝墓供献土器

る。これらの供献土器から、第1号方形周溝墓の時期は、弥生時代 中期(唐古第Ⅲ様式)と考えられる。

第2号方形周溝墓は、第1号方形周溝墓の西に位置し、第1号方 形周溝墓の西溝と東溝を共有し、また北に位置する第3号方形周溝 墓の南溝と北溝、西に位置する第5号方形周溝墓の東溝と西溝を共 有する関係に位置する。

周溝は、南東隅の一部が調査地区外にあるが、全周せずに北東部において約3mの間、周溝はとぎれ陸橋を有する。周溝は、磁北よりN-20°-Eにふれているが、各方向の溝は幅・深さともに他の方形周溝墓の周溝共有関係あるいは後世の攪乱を受けたのか、相違がある。特に、第5号方形周溝墓と共有する西溝は幅4mにもなるが、共有しない部分は約1mと非常に細くなる。同じく、溝の深さも北溝と西溝には深さの差が0.4mあり、特に北溝が深くなっている。東溝は第1号方形周溝墓の西溝と共有しない部分が深くなっている。

第2号方形周溝墓の規模は、北溝長7.5m・幅2m・深さ0.6m、 東溝検出長 9.5m (推定長12m)・幅2m・深さ0.3~0.5m、南溝検 出長7m (推定長11.5m)・幅 2.3m・深さ 0.2m、西溝長13m・幅 0.8~4m・深さ0.2mを計る。

周溝によって区画された台状部には、主体部が第1号方形周溝墓と同様に検出されなかった。同様に供献土器も、周溝・台状部よりは一切出土しなかった。台状部には、中央部から北に伸びる2条の溝状遺構 (溝  $I \cdot II$ ) が検出されたが、層位的関係から後世に掘り込まれたものと考えられる。

第3号方形周溝墓は、第2号方形周溝墓の北溝と南溝を共有し、また第4号方形周溝墓と周溝の一部を共有する関係を成して位置する。第3号方形周溝墓の周溝は全周せず、北・東溝が他の周溝の半分程度の長さになっている。また、周溝の深さ・底部に落差があり、北溝と西溝においては西溝が約0.2m深くなっており、東溝と南溝においては南溝が0.5m深く、西溝と南溝においても南溝が約0.2m深くなっている。周溝はN-20°-Eにふっているが、溝幅は他の方形周溝墓と同様相違があり、溝肩も不鮮明な部分がある。

第3号方形周溝墓の規模は、北溝長5 m・幅2 m・深さ 0.3 m、 東溝長6 m・幅1.5 m・深さ0.3 m、 南溝長9.2 m・幅2 m・深さ0.6

第**2**号方形周溝墓 (A-6-J-6・ 9、K-4・7地

区)

第**3**号方形周溝墓 (A-6-J-3、

(A-6-j-3、 K-1・4地区) m、西溝長さ7.3m・幅1m・深さ0.5mを計る。

周溝に区画された台状部には、他の方形周溝墓と同様に主体部は 検出されず、第2号方形周溝墓から伸びる溝状遺構(溝I・II)が 検出されたのみである。供献土器は、西溝の台状部側の肩上の一部 から土器片が集中して出土したが、供献土器であるかは定かでな い。

第4号方形周溝墓 (A-6-F-9地 区) 第4号方形周溝墓は、第3号方形周溝墓の北西に位置し、第3号 方形周溝墓の周溝の北西部と第4号方形周溝の南東部を共有する。

第4号方形周溝墓の周溝は、磁北より約20°東にふっており、全周する。周溝幅・深さも他の方形周溝墓に比べ整っているが、第3号方形周溝墓と共有する南東部の周溝が広くなっている。

第4号方形周溝墓の規模は、北溝長 6.5m・幅 1.2m・深さ0.15m、東溝長7m・幅1~2.7m・深さ0.2~0.35m、南溝長 4.5m・幅0.8m・深さ0.2m、西溝長7m・幅 0.5m・深さ0.15mを計り、5基の方形周溝墓中最も小型である。

周溝に囲まれた台状部には、他の方形周溝墓と同様に主体部は検 出されず、また周溝・台状部より供献土器も観られなかった。

第**5**号方形周溝墓 (A-6-J-4・ 7・8・**5**地区) 第5号方形周溝墓は、第2号方形周溝墓の西南に位置し、第2号 方形周溝墓の西溝の一部と東溝を共有する。

第5号方形周溝墓の周溝は、磁北よりN-20°-Eにふっており、 全周するものと思われるが周溝の一部が調査地区外にあるため定か でない。周溝の残存状態は他の方形周溝墓に比較して悪く、溝幅が 広く、深さは浅くなっており、後世に削平を受けた様子が北溝の溝 肩に観られる。

第5号方形周溝墓の規模は、北溝長13m・幅一部推定 3.1m・深 さ0.2m、東溝検出長10.5m・(推定12m)・幅不明・深さ0.2m、西溝 長14m・幅3m・深さ 0.2mを計り、5基の方形周溝墓中最大規模 を持つ。

周溝によって区画された台状部には、主体部は検出されず、また 供献土器も出土しなかった。

今回検出されたA-6-F・J・K地区の5基の方形周溝墓の築造時期は、供献土器の残存状態が悪く把握が困難であるが、第1号方形周溝墓の東溝より出土した壺型土器より、弥生式土器唐古第 II 様式(古)の時期のものであることから、他の方形周溝墓もこれに追従すると考えられる。

	東辺長	西辺長	南辺長	北辺長	東溝幅	東溝深さ	西溝幅	西溝深さ	南溝幅	南溝深さ	北溝幅	北溝深さ
1号	11.0	10.0	8.0	9.0	1.4	0.35	1.4	0.4	1.2	0.35	2.0	0.35
2号	$9.5 \\ (12.0)$	13.0	7.0 (11.5)	7.5	2.0	0.3 7 0.5	0.4 ? 4.0	0.2	2.3	0.2	2.0	0.6
3号	6.0	7.3	9.2	5.0	1.5	0.3	1.0	0.5	2.0	0.6	2.0	0.3
4号	7.0	7.0	4.5	6.5	1.0 ? 2.7	0.2 7 0.35	0.5	0.15	0.8	0.2	1.2	0.15
5号	$ \begin{array}{ c c c c c c c c c c c c c c c c c c c$	14.0	4.5 (11.5)	13.0	2.0	0.12 ? 0.4	3.0	0.2		0.2	3.1	0.2

第7表 各方形周溝墓の規模(単位はm)、( )内は推定規模を示す。

## 土坛

(A-6-J • K地 区) 4基の土拡が検出された。この他にも土拡らしき遺構があるが、その状態から自然形成による落ち込みと考えられるため、明確な土拡のみ記述する。4基の土拡は、楕円形・隅丸方形のすりばち状の形態を成し、内部には茶褐色砂質土層あるいは黒褐色粘質土層の堆積が観られ、周囲の遺構から土拡基の可能性もあるが、明確な根拠がないため土拡として扱う。以下東より土拡1号……土拡4号と称して記述する。

当調査地区より検出された5基の方形周溝墓の間あるいは中に、

## 土拡1号

(A-6-K-2・ 5・6地区)

# 土城 2 号

(A-6-K-5 • 7、K-8 • 1地 区) 土拡1号は、第1号方形周溝墓の北約3mに位置し、ややゆがんだ隅丸方形を成し、南北1.6m、東西1.6m、深さ0.24mを計る。土 拡上口より底部にはやや急傾斜で落ち込み、底部は平坦に近い。土 拡内には、茶褐色砂質土層の堆積が観られ、年代を決定するような 遺物は出土していない。

土拡 2 号は、第 1 号方形周溝墓の台状部の中央より南溝にかけて 掘り込まれている。長軸をほぼ磁北に取っており、長軸長約5 m、 短軸長約2.1m、深さ約0.2mを計る弓なりの楕円形の土拡である。 土拡上口より底部にはゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でな くすりばち状を成す。土拡南側の掘り方は、方形周溝墓南溝の掘り 方と切り合って消失しているが、土拡内の堆積と周溝内の堆積層が 互いに似かよった茶褐色砂質土層であるため、不明確であるが土拡 が後に掘り込まれたものと考えられる。土拡内より時期を決定する 遺物は出土していない。

## 土城 3 号

 $(A-6-K-1 \cdot$ 

 2·3·5·6地 区) m、短軸長約1.5m、深さ0.3mを計る楕円形の土拡である。土拡上口より底部にはやや急傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち状を成す。土拡内には、黒褐色粘土層の堆積が観られたが時期を決定する遺物は出土していない。

土城 4号

 $(A-6-J-3 \cdot 4$  地区)

土拡4号は、第3号方形周溝墓西溝に接するように位置している。長軸を北東から南西に取り、長軸長約2.6m、短軸長約2.3m、深さ約0.3mの楕円形を成す。

溝状遺構

(A-6-J-3・ 6地区) 調査地区中央部西よりに溝状遺構がほぼ南北に2条平行して走り、第2・3号方形周溝墓上を縦走しており、両溝は約1mの間隔をもって平行しているが、途中で消失している。以下東側の溝を溝上、西側を溝上と称して記述する。

溝I

溝」は、検出長18.2m、幅 1.3m、深さ0.15mを計る上口の大きく開くU字溝である。溝内には、黒褐色粘質土層の堆積が観られた。

溝Ⅱ

溝 **』**は、検出長10.5m、幅 1.2m、深さ0.15mを計る上口の大き く開くU字溝である。

溝 【・ 【は、遺物が出土していないために時代は不明であるが、 層位的には、弥生時代中期の方形周溝墓より新しいものと考えられ る。

A-6-F地区

A-6-F地区では、遺構は全く検出されず、層位のみ記述する。

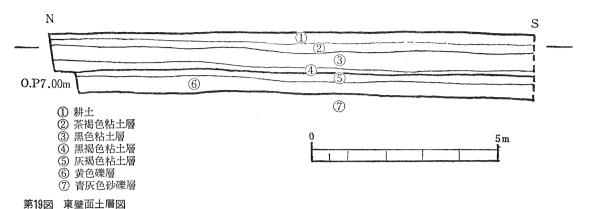
層位

層位調査は、南壁と東壁面で行い、東壁面沿いに深さ0.6mの「す じ掘り」調査による下層の調査を行った。

第1層・耕土、第2層・茶褐色粘土層の床土、第3層・黒色粘土層、第4層・弥生時代~平安時代頃の土器片を包含する黒褐色粘土層、第5層・生活面に当る灰褐色粘土層、第6層・黄色礫層、第7層・青灰色砂礫層にわけられる。第3層・黒色粘土層は、遺物は皆無に近く、A-6-F・G・I・J・K地区に観られず、当地区のみのものであった。第4層・黒褐色粘土層は、A-6-F・G・I・J・K地区に観られたが、東へ厚く西へ薄くなっており、当地区において厚さ約0.1~0.2mを計る。包含されている遺物の量も少なく、時期判断の困難な弥生式土器・須恵器・瓦器片のみであった。第5層以下は全く遺物を包含しておらず、A-6-F・G・I・J・K地区と同様生活面と考えられる。(第19図)

遺構

当調査地区においては、全く遺構は検出されず、フラットに続く 淡灰褐色粘質土層が観られたのみである。この状態はさきのA-6  $-F \cdot I$  地区にも観られたものであり、遺構の空白地帯(グランド) と考えられる。



# 第V章

# 遺物

## 第1節 弥生式土器

小川水路改修工事に伴 う採集土器 小川水路改修工事の時に、黒色粘土層中より多量の土器が採集された。その内、主だったものを器種別に記述する。

壺形土器(図版92-2~8・16) 2・3は、いずれも肩部片であり、沈線文を施す唐古第【様式(新)のものと考えられる。5は、同様に肩部破片であるが、櫛描直線文(3条)を施す唐古第】様式と考えられる。7は、口縁部が外反し端面で上・下に肥厚し、下方へたれる。8は、外反する口縁部をもち上げた受口状の口縁。端面に凹線文を施す。いずれも唐古第】様式に位置する。16は、二重口縁型土器。筒状の頸部から大きく外反し、段をもってさらに外反、端部で僅かに上・下に肥厚する。段部外面に細い凹線文、2対のうず巻き状浮文を施す唐古第▼様式の新しい時期と考えられる。4・6は、いずれも壺型土器底部破片であるが、4には木葉痕が残る。唐古第『様式と考えられる。

獲型土器(図版92-12~14) 12は、口縁部が「く」の字形に外反し、端部が僅かに肥厚し凹線文を施す。体部は張りが小さくなだらかな形を成し、外面上部に刷毛目、下部はヘラ磨きを行い、内面中位より下位にヘラ削りが観られる。13は、口縁部が「く」の字形に外反し、端部は僅かに上・下に肥厚し、凹線文を施す。体部は張りが小さく刷毛目を行う。14は、口縁部が頸部より丸く外反し、端部で僅かに上方へ肥厚し細い凹線文を施し、全面に刷毛目を行う。いずれも唐古第■様式(新)と考えられる。

高杯型土器(図版92-9~11) 9は、杯部が水平にのび、内端に1条の凸帯をもち、外部が下方へ折れ曲り、ヘラ磨きを行う。唐古第■様式(新)に位置する。

複合土器(図版92-10) 10は、破片であるため、結合器種は不明であるが、器台が端部で大きく折れ曲り、凹線文と棒状浮文を施す。

器種不明土器(図版92—15) 15は、口縁部が外面では段をもら外反し、端部で上方へつまみ上げ、内面は直線的に外反する。外面の段部に下方へ肥厚する痕が残る。上段に竹管文を施し、下段はタタキ目、横なでを行う。

**F-7**-E・**F**地区出 七の土器

第3層 · 黑色粘土層

壺形土器(図版93-1~4、6~8) 1・2は、口縁端部の破片のみであるが、いずれも大きく外反し端面で下方へ僅かに肥厚する。2は、口縁端面に指頭圧痕による刻目文を施す。この刻目文は、親指を端面に当てて、人差し指によって粘土をつまむように刻目を付け、それを右回りに施文する。1は、櫛による刻目文・同波状文を施す。いずれも唐古第Ⅱ様式に位置すると考えられる。3は、筒状の頸部から大きく外反する口縁部、口縁部端面にヘラによる刻目文を施す。4は、頸部より短く外反し、口縁部端部で下方へ短く肥厚し、端面に櫛描波状文を施す。3、4は唐古第Ⅲ様式と考えられる。6~8は、唐古第Ⅴ様式に位置すると考えられる。6は、口縁部が短かく直線的に外反し胴部は肩部がやや張り、最大径を中位にもち丸味がある。7・8は、7が口縁部を欠くが、長頸壺である。胴部は張りの小さい縦長形をなす。肩部にヘラによる記号のようなものが記されている。

**甕型土器**(図版93-9~11) 9は、頸部から「く」の字形に外反し、口縁部端部で上方につまみ上げ、凹線文を施す。唐古第Ⅳ様式に位置する。10は、底部のみであるが、荒いタタキ目と一部に刷毛目を行う。底部の張りが大きく唐古第 V 様式 (新) と考えられる。11は、口縁部が頸部より「く」の字形に外反し、口縁部端部は僅かに下方へ肥厚し浅い凹線状の凹みをもつ。体部は張りの小さい、丈高の高い器形を成し、2 段の荒いタタキ目を行う。唐古第 V 様式に位置する。

高杯型土器 (図版93-12・13) 12・13は、いずれも脚部であるが、12が柱部より裾部へなだらかに広がり、端部で上・下に肥厚する。13は、中空裾広がりの柱部より、大きく広がる裾部をもつ。

**鉢型土器**(図版93-5) 5は、把手が4ヵ所につき、各々に2 孔1対の孔があり、体部上位に櫛描簾状文を施す。

壺型土器 (図版93-14) 14は、短かい頸部より外上方へ開き、

土城3号

口縁部端部で上・下に肥厚する。肩部内面にヘラ削りを行う。

甕型土器 (図版93-15) 15は、口縁部が頸部より「く」の字形 に外反し、端面で上方へ肥厚する。体部は最大径が中位にあるが、 張りの小さい丈高を成し、2段に別けられるタタキ目を行う。近江 ~山城系の甕型土器と考えられる。いずれも唐古第▼様式の古い時 期に位置すると考えられる。

溝Ⅰ一S

唐古第Ⅳ様式から第Ⅴ様式の新しい時期のものまでが出土した。

**壺形土器**(図版94−16~22、24) 16~18は、いずれも口縁部が 頸部より漏斗状に開き、端部で肥厚する。16は、口縁部端部で上・ 下に肥厚し、凹線文を施す。18は、口縁部端部下方に粘土紐貼り付 けによって肥厚し、凹線文を施す。19は、筒状の頸部より短かく外 反し、口縁部端部で僅かに小さく肥厚する。20は、丸味のある肩部 より、外反する口縁部をもつ。21・22・24は、いずれも外上方へ直 線的に立ち上がる口頸部をもつ。21は、長頸壺。口縁部端部で僅か に外へ開く、22は、やや長く立ち上がり、端部外面に浅い凹線文を 施す。24は、頸部のくびれが小さく短く立ち上がり、口縁部端部へ 器壁が薄くなる。

**甕型土器**(図版94-23、25~27) 25は、なだらかな肩部より外 反する口縁部。口縁部端部に凹みがある。23は、肩部の張りが大き く、くびれた頸部より大きく外反し、口縁部端部が僅かに上・下に 肥厚する。肩部内面にヘラ削りが観られる。底部26・27は、いずれ も底部にヘラによる記号のようなものを残す。

高杯型土器 (図版94-29~32) 29・30は、いずれも杯部上段が 外反し、端部で僅かに水平にのびる。30は段部で僅かに下方へ肥厚 する。脚部31は、裾部端部で上・下に肥厚し面をもつ。

唐古第V様式の土器が出土した。

**壺型土器**(図版94-33) 33は、口縁部が斜上方へ直線的にの び、体部は張りの小さい長胴形をなす。体部外面にタタキ目を残 し、口縁部外面・体部内面に刷毛目調整を行う。外面には濃く煤の 付着が観られる。

甕型土器(図版94-34) 34は、口縁部が頸部よりなだらかに外 反する。体部は張りの小さいなだらかな形をなし、2段に別けられ るタタキ目、肩部に刷毛目を行う。

高杯型土器(図版94-35) 35は、脚部のみであるが、柱部より 裾部へなだらかに広ろがり、柱部に凹線文を施す。

溝Ⅱ

溝Ⅱ

沼地状落ち込み

**壺型土器**(図版94-36) 36は、口縁部端部を欠くが、長頸壺と 考えられる。頸部が鋭くくびれ、肩部が大きく張る器形を成す。

当遺構は、その堆積層がさきの包含層(第3層・黒色粘土層)と似ており、別けられなかったため、出土土器には他の遺構より時期が古い唐古第 II 様式から第 V 様式のものまである。

臺型土器(図版95-37~44) 37・38は、短く漏斗状に開く口縁部をもつ。37は口縁部端部外面に列点文を施し、38は口縁部端部が上・下に肥厚し、凹線文を施す。39は、頸部のみであるが、断面三角形の貼り付け凸帯文の上に棒状浮文を貼り付けている。40~42・44は、時期は異にするが、いずれも長頸壺である。40は、口縁部端部で僅かに内弯し、凹線文・円形浮文を施す。42は、頸部に円形竹管文・ヘラ記号を施す。44は、体部の張りの小さい長胴形をなし、外面に刷毛目を行う。43は、口縁部が筒状の頸部より水平に折れ曲がり、端部に凹線文を施す。体部は、肩部がやや張り最大径が上位にある球形の器形をもつ。器壁全外面に刷毛目を行う。

**甕型土器**(図版95-45) 45は、口縁部が頸部より「く」の字形に外反し、端部で上・下に僅かに肥厚し、凹線文を施す。体部は肩部がやや張り、底部へなだらかなカーブを描く。2段にタタキ目、一部に刷毛目を行い、内面には刷毛目調整を行う。

**鉢型土器**(図版95-46) 46は、突出平底底部より丸味をもって立ち上がり、頸部をもち、外反する口縁部。

高杯型土器(図版95-48~50) 48・49は、杯部底部より内弯ぎ みに広がり、杯部上部で直口ぎみに立ち上がる。49は、杯部上部外 面に3条の凹線文を施す。脚部50は、杯部下段が水平にのび、柱部 に刻目文・櫛描直線文を施す。

器台型土器(図版95-51、52) 51・52は、いずれも鼓胴形をなす。51は口縁部端部外方に断面三角形の貼り付け文を施す。

H-3-H地区出土の 土器

土器群c

H-3-H地区を中心に、土器群Cより、唐古第■様式~第▼様式の土器が出土した。

土器群 c は、唐古第 Ⅲ様式(新)~第 Ⅳ様式の各器種の土器が、 包含層中に集中的に出土した地点である。

**壺型土器**(第10図−1、2) 1は、ほぼ完形で出土した。口縁 部は、漏斗状に開き、端部で水平にのび、端面で僅かに上・下に肥 厚する。体部は、最大径を中位にもち、丸味のある形を成す。文様 は、全面の剝離が著しく定かでない箇所も多いが、頸部より櫛描直 線文・同波状文を交互に施し、同直線文で終わる。

2は、長頸壺と呼ばれるもの。細い頸部よりやや開き傾向での び、端部で僅かに内弯する。端部の一カ所が僅かに下方へ下がり、 片口をもつ。文様は、2段に凹線文を施す。

器台型土器(第10図-3、4) 3は、口縁部のみであるため壺との判別が困難。端部で上・下に肥厚し凹線文・円形浮文・刻目文を施す。頸部に凹線文を施し、タタキ目が残る。

4は、口縁部を欠くが、形態より、端部は丸く終わるものと考えられる。鼓胴形を成し、底径が大きい。文様は、凹線文を2段に施し、その間に大きい4孔の透し孔を穿つ。

F-4-N、G-4-B地区出土の弥生式土 器

当調査地区においては、弥生式土器として唐古第 ■様式から第 IV 様式にかけてのものが主に出土した (一部第 II 様式のものが含まれる)。その大多数は、方形周溝墓の供献土器と2基の大形土拡から出土したものである。以下器形分類を行い、方形周溝墓の各周溝、大形土 拡を各遺構別に記述する。なお各土器の仔細は土器表を参照願う。

F-4-N、G-4-B地区土器の器形分類 東奈良遺跡の弥生時代中期 (F-4-N、G-4-B地区)の土器を、壺型土器・甕型土器・鉢型土器・高杯型土器・器台型土器・蓋型土器に分類、それぞれ下記のように細分化して呼称する。(第8表)

**壺型土器** 

**壺型土器A** 球形に近い胴のはった器体に、筒状の頸部を持ち外反する口縁部をもつ壺である。口縁部の形態により、壺 $A_1$ 、壺 $A_2$ 、壺 $A_3$ 、壺 $A_4$ と4 形態に分けることができる。 壺 $A_1$ は、口縁部端面が肥厚することなく漏斗状に開くもので、 壺 $A_2$ は、口縁部端面が上下僅かに肥厚する。頸部は太く、そのまま胴部まで広がり、胴部の最大径を計る位置は、中位よりも下位にある。 壺 $A_3$ は、口縁部端面が斜め下方あるいは直下に大きく肥厚する。 頸部は短く細い。胴部はなだらかなカーブを描き、最大径が中位にある。 壺 $A_4$ は、頸部より漏斗状に開き、口縁部端面下に、断面三角形凸帯を付けて面をもたせたものである。

**壺型土器B** 漏斗状の頸部を持ち口縁部が受口状のものである。 受口の状態により壺 $B_1$ 、壺 $B_2$ の2種にわける。 壺 $B_1$ は、受口部 を持ち上げて成形しているもので、 壺 $B_2$ は、受口部を上下に貼り 付けて成形しているものである。

**壺型土器** C あまり例のない土器であり、当遺跡では少例しかみられない形体を呈している。筒状の頸部は太く、端面は外方へ僅かに折れ曲っており、口縁端面は丸く終る。

壺型土器D 筒状の頸部が直口するもので、いわゆる長頸壺型土器である。壺 $D_1$ は、口縁部が僅かに内弯し、壺 $D_2$ は、口縁部が僅かに外弯する。

**壺型土器 E** (短頸壺) 口縁端面は内外共に丸みを持ち、外面は僅かに下方へ折れ曲っており、小さくくびれる太い頸部から僅かに広がりを持ち胴部に至る。最大径は下位にあり、底部が小さい。

壺型土器F (無頸壺) 壺 $F_1$ は、内方にやや傾斜して立ち段状口縁部を持ち、胴部は稜を持ちやや算盤玉球形を成す。 壺 $F_2$ は、腰にはっきりとした稜を持ち内弯して立つ口縁部を持つ。

壺型土器G(水差型土器) 口縁部の形態から、壺 $G_1$ 、壺 $G_2$ 、壺 $G_3$ の3種がある。壺 $G_1$ は、少しの広がりを持つ筒状の口縁部に、把手側の口縁をえぐり取っているもので、 壺 $G_2$ は、口縁部が直口し、把手の付加されている反対側は広がりを持ち、把手側は下っている。壺 $G_3$ は、筒状の頸部で直口する。

壺あるいは無頸壺に、高坏あるいは器台等を結合したものである。

**甕型土器A** 口縁部は外反するが、内外共に頸部に丸みをもつものが多い。口縁径と胴部径とが同率のものが多い。

**甕型土器 B** 「く」の字形に外反する口縁部、端部は立ち上がりを持つ。外端面は、凹線文を施されているものが大多数である。最大径部は上位にあり、底部にかけてゆるやかなカーブを持ち終る。

**甕型土器** C (大形甕型土器) 丸みを帯びた頸部より「く」の字形に外反する口縁部、端面は僅かに立ち上がりを持つ。胴部はあまり張り出さないが、全体の器形としては丸みを持つ。

**鉢型土器A** 頸部より丸みを持ち「く」の字形に外反し、胴部に おいても丸みを持つ。破片のみでは甕型土器と区別し難い。

鉢型土器B 椀形の器形で、口縁端面は内へ肥厚するものが大多数である。

鉢型土器C 底部より大きく広がり、口縁部付近で立ちあがるや

複合土器

獲型土器

鉢型土器

や深鉢。

高杯型土器

**鉢型土器** D 胴部に稜を持ち内方へ傾斜し、段状口縁部を持つ。 **高杯型土器** A 高杯 A<sub>1</sub>は、 大きく外反した浅い杯部、端面は、 水平になり内外に肥厚する上端に凹線文を持つものもある。高杯 A<sub>2</sub>は杯部端が直立して立ちあがる。

高杯型土器 B 内方に傾斜し立ち上がり、体部に稜を持つ。杯端面は平らである。これは、当遺跡において少例しか見られない。

高杯型土器C 高杯 $C_1$ は、 水平に広がった口縁部内端に1条の 凸帯を持ち、外端は下に折れ曲る。 高杯 $C_2$ は、杯端部が水平に短くのびる。

蓋型土器

つまみ部を持ち笠形を成す。

器台型土器

口縁部は、水平な部分を有し、それより下方に折れ曲り長く垂下する。

脚部

高杯型土器、鉢型土器、器台型土器等の脚部。

包含層

遺構の項でも記述したが、弥生式土器が出土したのは第4層、第5層 a・b よりである。しかし、層位的時期差がみられないために一括して記述する。

**壺型土器A2** (図版96-1、2) 1は、漏斗状に開く口縁部を持つ。端部は、上下に肥厚する。文様は剝離が著しく不明である。 2は太い頸部より外反し、端部で下方へ肥厚する。

壺型土器A3 (図版96-3、5) 3は、口縁端部が水平にのびて折れ曲り下方へ垂下する。端部に凹線文、大形の円形浮文、頸部に凹線文を施している。5は口縁部内面でつまみ上げ、端部で上下に肥厚する。端部外面の凹線文上にヘラによる刻目文・円形浮文を施している。伊勢地方にこの器形の壺型土器が知られる。

**壺型土器 B** $_1$  (図版96-4)  $_4$  は、受口状の口縁部を持ち凹線 文を施している。

**壺型土器**C(図版96-6) 6は、当調査地区において1例のみ出土した壺である。頸部より直立して立ち上がり、口縁端部で外方へ肥厚する。

**鉢型土器B**(図版96-8) 8は、斜上方へ大きく広がる体部から稜を持って直口し、口縁端部で内面に肥厚する。 文様は凹線文と刻目文を施している。

その他の土器・台付鉢脚部(図版96-10~12、16) 10~12は、 いずれも柱状部からなだらかに広がり端部で上方へ肥厚する。11は

型土	1	A 1		E 短頸壺	<b>鉢</b> 型土	A	脚部	Α 1	
韶		A 2	器	F 無頸 - F 1	器	В		A A 2	
	A A			F 2		C		Аз	
	A			G G 1		D		В	
	E	A COMMITTEE TO THE PARTY OF THE	複		福	A		С	
	В	32	合土器			A			
_	C		甕 型 土 器	A B		В			
					مئية-	СС			
	D	100000		С	蓋型土器器器				
					台				

第8表 F-4-N・G-4-B地区 弥生式土器の形態と呼称

柱状部に凹線文、12は裾部に断面三角形の貼り付け凸帯文、刻目文を施している。

マウンド内の土器

方形周溝墓のマウンドと思われる茶褐色粘土層のレンズ状の堆積 層中より、点数は少ないが土器が出土した。

壺型土器A<sub>2</sub> (図版96—17) 17は、口縁部が太い頸部から大き く外反し、端部は上下に肥厚する。端部外面に凹線文、頸部に管状 の櫛原体による波状文、直線文を施している。

**壺型土器A**<sub>3</sub> (図版96—18) 18は、口縁部が水平にのび折れ曲 り垂下する。端面に凹線文と大形の円形浮文を施している。

**甕型土器A**(図版96—20) 20は、口縁部が頸部より水平に折れ 曲り端部で僅かに肥厚する。最大腹径が口縁径より小さく底部へ細 くなる。

**甕型土器**C(図版96—19) 19は、口縁部が斜上方に外反し、端部は上方へ僅かに肥厚する。

その他の土器

台付把手付鉢型土器(図版96—22) 22は、短い脚部を持ち底部 よりなだらかに立ち上がり、把手痕を残す。脚部端に凹線文を施し ている。

複合土器(図版96-21) 21は、壺部が底部より丸く立ち上がり、中位より内傾して段状口縁部を持つ。器台部は端部が短く垂下し凹線文を施している。他の文様、調整は風化が著しく不明。

第1号方形周溝墓

第1号方形周溝墓の北溝・南溝・北第 I 溝・東第 I 溝より供献土器と考えられる唐古第 II 様式(新)~第 IV 様式の土器が出土した。

南溝

**壺型土器A**(図版97-25~35、第13図-36) 南溝出土の壺型土 器Aは、壺A<sub>8</sub>が大多数を占め、次いで壺A<sub>2</sub>がみられる。

壺 $A_2$ ・26、29~31について述べると、26は頸部がやや細く、口縁端面に櫛描波状文、頸部に凹線文を施す。29は口縁端部が短く下方へ折れ曲がることから $A_4$ に近い。29~31は頸部に指頭圧痕文を貼り付けている。

壺A3・27、28、32~35は、口縁端部で上方に僅かに肥厚する28、32、折れ曲る27、33~35がある。いずれも装飾が豊かで、凹線文・櫛描波状文・同直線文・同列点文・同扇状文・円形浮文等を施してある。特に後者は全装飾を用いるものが多い。口縁端部の凹線文は幅の狭いものを5~8条施し、大きく垂下するものほど多い。これに小形の円形浮文を加飾する32・35と、大形の円形浮文の27、34がある。口縁端部内面に櫛描列点文・同扇状文を施す27、32、

34、35がある。頸部をみると櫛描文のみの4以外は、凹線文を施し、35のみ貼り付け断面三角凸帯文がみられる。唯一の完形品である35は、肩部から胴部にかけて櫛描波状文に初まり、同直線文で終る文様が交互に施されている。仕上げはいずれも内外面ともに刷毛目、或いはナデを用い、体部も残る35は、体部外面にヘラ磨きを用いている。36は、口縁部を欠くため器種は不明である。頸部はやや細く、胴部の張りもやや小さい。頸部に断面三角形貼り付け凸帯文、肩部より最大径部までに櫛描直線文で初まり、同波状文を交互に施し、同波状文で終る。

**鉢型土器**C(図版98-37) 南溝出土の鉢Cは少なく、他に破片が10点出土した。37は口縁外面に4条の凹線文が施されている。

**鉢型土器 D**(図版98-38~42) 鉢 D は南溝出土の大多数を占め、他に破片で5点出土した。いずれも段状口縁を持つ。38は段状口縁部に凹線文、39、40の体部に櫛描波状文と同直線文を、42は同簾状文を施してある。41は口縁端部上面に同波状文が施されている。仕上げは、風化の著しいものが多いが、ヘラ磨き、あるいはナデを用いたものが多い。42は、「円板充塡法」を用いた脚部の付く台付鉢である。また、胎土、施文から河内地方よりの搬入品と思われる。

器台型土器(図版98-43) 口縁部を欠いているが、折れ曲り垂下するものと思われる。口縁部内面には櫛描扇状文を、頸部には凹線文を施してある。

**甕型土器A**(図版98—44) 44は、丸みのある頸部から外反する 口縁部を持ち、体部はなだらかなカーブを描いて内外面ともに刷毛 目を行っている。なお45は、甕底部と考えられ内外共にヘラ削りが みられる。他に南溝より、破片であるが甕Aが7点と同Bが19点出 土している。

高杯型土器 $C_1$ (図版98—47) 南溝より出土した高杯は高杯 $C_1$ が多く、47以外の他に 9点出土した。いずれも口縁端部片のみが多い。47は、端部の折れ曲った面に円形浮文を施してある。

脚部A<sub>3</sub> (図版98—48) 48は、柱状部が短く裾部へなだらかに 広がり端部で上下に肥厚し凹線文を施す。柱部から裾部にヘラによ る鋸歯文と直線文を施してある。この文様は、播磨地方よりの搬入 と考えられる。

壺型土器 $F_2$  (図版98-50) 南溝より1点のみであるが、壺 $F_2$ 

(台付無頸壺) 50が出土した。体部に 5 条の凹線文と細かな櫛描波状文を施し、脚部は裾へなだらかに広がり端部で上下に肥厚する。仕上げは、全面にヘラ磨きを行っている。口縁端部から脚部裾部まで放射線状に朱が塗布され、また体部底部に焼成後の穿孔がみられる。

**壺型土器 G**<sub>1</sub> (図版98-51) 同じく南溝より壺G<sub>1</sub>(水差型土器) 51が1点出土している。口縁部は端部へ僅かに広がり、体部は最大径が下位にあり張りが大きい。口縁端部上面に刻目文、端面に4条の凹線文、以下体部最大径まで櫛描直線文を施し同波状文で終る。 51も50と同様把手付近に朱痕があり、底部に焼成後の穿孔がある。 他に水差型土器の把手片が3点出土している。

北溝・北第Ⅱ溝

北溝と北第 I 溝の相違は、遺構の項でも記述したが定かでなく、 唯一壺型土器 A<sub>2</sub> (65) のみが北溝より出土したことが確認できた。 (第14図)

**壺型土器A**(図版99-52・53・65) 北溝・北第 ▮ 溝では、壺 A₂が壺A₃より多く出土している。

壺A2・52、65は、いずれも口縁端部外面に細い凹線文を施してある。65は北溝の底に立った状態で出土した完形品であるが、太い頸部のまま胴部へ広がり最大腹部は下位にあり張りがある。文様は口縁端部内面に管状の扇状文、頸部に櫛描波状文、同直線文、肩部よりこれを繰り返し直線文で終る。仕上げはヘラ磨きを行う。壺A2は破片で18点出土した。

**壺型土器B**(図版99-54・55) いずれも受口状口縁部を持ち、 壺 $B_155$ は受口部に凹線文とヘラによる刻目文を施してある。 他に 破片で4点出土した。

**壺型土器 G**3 (図版99-58) 58は、口縁端部を欠くが、筒状の口縁部と思える。体部の張りが大きい大型の水差型土器である。頸部から肩部に櫛描直線文・同波状文を交互に施してある。他に壺Gと思われる破片 1 点と把手 3 点が出土した。

**甕型土器 B**(図版99—64) 64は、体部中位を欠くが、口縁部は「く」の字形に外反し端部が僅かに上方へ肥厚し、体部は上位で張り底部へ続き内外面とも刷毛目で仕上げ、外面下位にヘラ削りがみ

られる。他に3Aが10点と3Bが17点、3EC22点の破片が出土した。

高杯型土器A(図版99-61) 61は、杯部が浅く斜上方に立ち上がり端部で内面肥厚し、一条のヘラ描き沈線文が施されている。

**鉢型土器**C(図版99─57) 57は、小型のもので把手を持つと思われる。口縁部に4条の凹線文と刻目文が施されている。他に鉢B59は大きく内弯し端部で内面肥厚し、8条の凹線文を施している。

**鉢型土器 D**(図版99—60) 60は、無文の段状口縁部を持ち、体部に櫛描直線文と同波状文を施してある。他に鉢型土器 Dとして段状口縁部が無文のものが 2 点、凹線文を施すものが 6 点出土した。また同脚部62・63がある。

器台型土器(図版99-56) 56は、 口縁端部が壺 A4と同様折れ 曲り垂下し凹線文、円形浮文を施している。この器形の器台型土器 は、口縁部のみでは壺型土器 A3との区別が困難である。

東第 ▮溝は、北第 ▮溝から続く東溝の外側にめぐる周溝で、他の 周溝に比べ土器の出土量は少ない。

**壺型土器A2**(図版102—110) 110は、口縁端部で両面肥厚し櫛 描簾状文が施されている。太い頸部よりそのまま胴部へのび、櫛描 直線文と同波状文を施してある。他に同破片が3点と口縁端部に凹 線文を施した破片が2点出土した。

**壺型土器A3**(図版102—111) 111は、折れ曲り垂下する口縁端 部全面に、ヘラによる刻目文を施している。他に凹線文を施するの が7点出土した。

**壺型土器 B** $_1$ (図版 $_102-113\cdot 114$ ) いずれも、受口部に凹線文を施し、 $_114$ は端部で内面肥厚する。

**壺型土器**D₁(図版102−112) 112は、頸部が細くしまり、口縁部中位で僅かに張り端部へ内弯する。文様は、口縁部から頸部にかけて凹線文と櫛描波状文が施されている。

**壺型土器 E** (図版102-115) 115は、 口縁端部が内外共に丸みを持ち、外面は僅かに下方へ折る。太い頸部より体部は、最大径が下位にあり底部は小さい。頸部に 2 孔 1 対の孔がみられる。

器種不明土器(図版102—116) 116は、 体部が大きく張り断面 三角形の貼り付け凸帯に刻目文を施す。唐古第【様式とも考えられ るが、この場合包含層の混入と考えられる。

**甕型土器C**(図版102-120) 口縁部は、「く」の字形に外反し

東第『瀟

端部で上方へ僅かに肥厚する。体部は張りがなく口縁径と同率である。頸部には貼り付けによる指頭圧痕文がみられる。他に甕底部121~124があり、121・122には木葉痕がみられる。また同甕片が9点出土した。

**鉢型土器 C**(図版102−117) 117は、 口縁部が直口に立ち上がり段状口縁部がない。端部に刻目文・櫛描直線文・同波状文を施している。 同D118は、段状口縁部を持ち円形浮文を施してある。鉢型土器脚部 C119は、 短く裾部までなだらかに広がり裾部に凹線文を施してある。

第一大形土纮

第1大形土拡出土の弥生式土器は、深さ約 0.7mの土拡内に堆積 した黒色粘土層と土拡底部の木製品と共に出土した。

**壺型土器A**(図版 100 -68~70・72~74) 第 I 大形土広も方形 周溝墓供献土器と同様に、壺型土器A<sub>3</sub>、A<sub>4</sub>が主力である。

壺A<sub>2</sub>、69・70は、いずれも口縁端部が上下に肥厚し細い凹線文、 頸部から肩部に櫛描直線文を施している。70は、土坂の南肩より出 土した。

壺A<sub>3</sub>、72~74は、いずれも端部で折れ曲り大きく垂下する。端面に5条の凹線文と72に小形円形浮文、他に大形の円形浮文を施し、72の口縁端部上面に櫛描列点文が施されている。

**壺型土器 B**<sub>1</sub>(図版100-75) 75は、受口状の口縁を持ち凹線文が施されている。

壺型土器  $F_1$ (図版  $100-66\cdot67$ )  $66\cdot67$ は、無頸壺と呼ばれる ものでいずれも算盤球形の体部を持ち、口縁端部は、66が丸みのあ る段状口縁、67は面のある段状口縁を持ち凹線文を施している。

器種不明壺型土器(図版100-71) 71は、 胴部片のみであるために器種は定かでないが、最大径が下位にあり稜を持って底部へ続く。文様は、櫛描直線文・同波状文を交互に施し同波状文で終る。 仕上げは最大径まで刷毛目、下位はヘラ磨きを行っている。 胴部の形態から壺型土器 A3、壺型土器 Fと考えられる。

壺型土器 G<sub>3</sub> (図版100-82) 82は、把手を欠くが器形から水差と考えられる。口縁部は直口して立ち上がり凹線文を施し、肩部から胴部へ櫛描直線文を施している。

**甕型土器A**(図版101-87・88) 87は、 頸部より丸く外反し端 部で上下に僅かに肥厚し、頸部に櫛描波状文と2孔1対の小孔が2 カ所にみられる。同88は、小型で口縁径と胴部最大径が同率の器形 を成す。

**甕型土器 B**(図版101-89~93) 89~93は、 口縁部が「く」の字形に外反し、端部で上に立ち上がり凹線文を施している。体部はあまり張り出さずなだらかな器形を成す。同93は、唯一の完形品であり、木製品とともに出土した。

**甕型土器 C** (図版101-94~96) 94~96は、 口縁径30cm~40cm の大形品である。口縁部は「く」の字型に外反し端部は肥厚し面を持つ。肩部がやや張る器形を成す。

高杯型土器A(図版 $102-102\sim104$ ) 高杯 $A_1$ 、 $102 \cdot 103$ は直口の杯部を持ち、杯部外面に凹線文が施こされている。 103は、端部上面にも凹線文を施している。高杯 $A_2$ 、104は、前者とやや異なり杯部がゆるやかに内弯し立ち上がり端部で内面に肥厚する。端部外面に凹線文を施している。

高杯型土器 B(図版102—105) 105は、 当調査地区より 1 例の み出土した器種である。杯部は稜を持って内傾して立ち上がり、端 面上部に平らな面を持つ。仕上げは、外面に刷毛目、内面にナデを 行っている。無頸壺、鉢としては器高が浅く、高杯として扱ったが 判別は困難である。

高杯型土器 C<sub>2</sub> (図版102—106) 106も当調査地区より1例のみ出土した器種である。 高杯 C<sub>1</sub>と似た器形を成すが、端部の凸帯と外端が下に折れ曲がらず、水平にのびるのみである。摂津加茂遺跡の高杯に類似品をみる(弥生式土器集成・本編)。他に、高杯脚部107~109がある。

**鉢型土器A** (図版100─81) 81は、 □縁部が短く折れ曲る。体 部は、張りがない。

**鉢型土器 B・C**(図版100−78・79) 鉢 B78は、 口縁部が内弯 して立ち上がり端部で内面に肥厚する。外面には凹線文を施してあ る。鉢 C79は、口縁部が直立して立ち上がる。

**鉢型土器 D** (図版100-76・77・83) 76は、口縁端部上面が内側へ下り、櫛描波状文を段状口縁部外面と頸部に施している。77・83は、段状口縁部と体部に凹線文、その間に77は櫛描波状文、83はヘラによる刻目文が施され、他に台付鉢の脚部として80(図版100)・100(図版101)がある。 100は、短く裾までなだらかに広がり、裾部に凹線文と大きい円形透し孔がある。

複合土器 (図版101-99) 99は、 壺と器台を結合した複合土器

と呼ばれるものであり、器台部と口縁部の結合部分のみ検出した。 垂れ下り部に凹線文の上から一部に刻目文、円形 浮文 を施している。

**甕用蓋型土器**(図版 101 —84・85) いずれも笠形を成し、84は上 部が凹みを持ち、85は細いつまみ状のものを持つ。

蓋型土器(第16図-86)は、形は高杯脚部を成すが、裾部内部に 多量に煤が付着しており、蓋に転用したと思われる。器型は裾端部 で横、下に肥厚する。

東端土器群(第 I 大形 土拡) 東端土器群は、第 I 大形土拡上より多量に出土した土器の集中群である。遺構の項でも記述したが、方形周溝墓・東第 I 溝の供献土器との判別が困難な面がある。

**壺型土器A**<sub>1</sub>(図版103—126) 126は、口縁部が漏斗状に開き端部は丸く終る。文様は口縁端部外面に刻目文、内面に竹管文、頸部外面に櫛描波状文を施している。

壺型土器 A2 (図版103—125・127~129) 125は、口縁端部を欠くが長い頸部から僅かに広がる。頸部に櫛描直線文を施している。127・128は、太く短い頸部から広がり口縁端部で上下に肥厚する。いずれも、口縁端部外面に櫛描波状文、頸部から肩部へ同直線文を施し、128は口縁端部内面にも同波状文を施している。129は、口縁端部で上面に肥厚し、頸部に貼り付け指頭圧痕文を施している。

**壺形土器A**3 (図版103—130) 130は、口縁端部で折れ曲り下方 へ垂下し、この内外面に竹管文を施している。

壺型土器 D(図版 $103-131 \cdot 132$ ) 壺 $D_2$ 、 131は細い頸部から口縁部へ少し開き、同 $D_1$ 、132は細い頸部から直立して立ち上がり口縁部で内傾する。 文様は、132は口縁端部から頸部へ円形浮文、櫛描直線文、同波状文、断面三角形貼り付け凸帯文を施している。132は同じく凹線文、ヘラ描き刻目文を施している。

壺型土器 F₁ (図版103—133) 133は、底部より大きく張り出し、稜を持って内傾する。口縁部は段状口縁部を有し凹線文を施し、体部最大径上位に櫛描直線文、同波状文を施している。これは、第 ▮ 大形土拡最下層より出土した。

**壺型土器**(第17図−141) 141は、第 【大形土拡底部の木器群と 共に出土した。文様、器形より東海系の土器と考えられる。体部は 肩が張り、最大径が中位よりやや上に位置する。肩部に角張った波 状文が施され、全面に縦方向の荒い刷毛目を行っている。 **甕型土器A**(図版103—137) 137は、 口縁部は丸みを持って外 反し、口縁径が胴部最大径を凌ぐ。

**鉢型土器 B**(図版103—134) 134は、 台付鉢である。鉢部は内弯する椀形を成し、端部で内面肥厚する。口縁部から体部へ凹線文が施され、端部に2孔1対の孔を2カ所あけている。脚部は、短くなだらかに広がり端部で上下に肥厚する。文様は、柱部にヘラによる凹線文、裾端部に竹管文、底部端に2カ所の刻目文を施している。

**鉢型土器A**(図版103-135) 135は、 口縁部は頸部から丸みを 持って外反し、端部は丸い。他に鉢型土器の脚部片136がある。

**甕用蓋型土器**(図版103-140) 140は、 笠形を成し上部につま みを持ち、やや器高が高い。

その他の遺構 土城 7 号

方形周溝墓西溝中央部の土城墓7号上より検出された壺型土器 A3 (第11図-142) は、口縁部が短い筒状の頸部より外反し、端部 で上下に僅かに肥厚し凹線文を施している。体部は丸みを持ち最大

径が中位にある。肩部より最大径部に櫛描直線文・同波状文を交互

井戸1号

井戸1号底より高杯型土器(第15図-144)が出土した。杯部は、 杯上部を欠くが、杯底部より大きく開き稜を持って屈折し段状口縁

部を持つものと考えられ、内面に細かい不規則な方向へのヘラ磨き を施している。脚部は、太い中空柱部より裾部へなだらかに広が り、端部で上下に大きく肥厚する。文様は、柱部上下にヘラによる

直線文(凹線文風)、裾部に上段6孔、下段27孔の円孔を施している。仕上げは、外面に縦方向のヘラ磨き、内面はヘラ削りの後にナ

デを行っている。山陽地方系の土器と考えられる。

A-6-F・G・I・ J・K地区出土の弥生 式土器 当調査区においては、遺物包含層(灰褐色粘質土層)中より、弥生 式土器・土師器・須恵器・瓦器等の各時期にわたる土器片が出土し ているが、その出土量は他地区と比較すると非常に少なく、また判 別できる土器は、弥生式土器と須恵器のごくわずかである。

遺構は、遺構編に述べているように、弥生時代中期の方形周溝墓

に施し、同直線文で終る。

を中心としており、その数は第1号から第5号までの5基であるが、遺物の出土量は少なく、さらに盗掘などと合いまって現存の遺物のみで、この地区の弥生式土器をみることにする。

5基の方形周溝墓のうち、第1号方形周溝墓のみに、供献された とおもわれる弥生式土器が11点出土しており、なかには完形に近い 状態のものもある。

第1号方形周溝墓の供 献土器 壺型土器(図版104—11・12) 11は、 東溝の周溝内の底から、底部を下にして立った状態で出土し、第1号方形周溝墓の供献用土器としては、最も完形に近い状態で出土したものである。口頸部は意識的に欠かれたとおもわれ、最大腹径よりやや下方に焼成後穿孔されている。胴部上半部から頸部にかけて9帯以上(口縁部は欠損しているため不明)の櫛描直線文が施され、1帯は10本の直線で構成されている。下半部はたて方向にヘラで整形されており、この東溝の出土遺物としては比較的新しい時期のもので唐古第■様式に比定されるものである。

12は、東溝より細かな破片で出土し、復元すると頸部より胴部や や下半部まで可能であり、さらに同一個体とおもわれる底部が図面 上、復元されているが、上半部と下半部のつながりは不明であり、 穿孔されているとみられる位置は確認できない。口縁部は、11と同 様意識的に欠かれているとおもわれる。胴上半部から頸部にかけて 数帯の(欠損のため不明) 櫛描直線文が施され1帯の直線の数は確認 できるのは9本であり、少なくとも8帯以上の櫛描直線文が施され ていると思われる。13は、南溝より出土し、表面は著しく風化して おり、わずかに胴部上半部に3帯以上の櫛描波状文が認められる。 1帯の本数は判別しにくいが、少なくとも9本以上で施されている とおもわれる。最大腹径より下方に、焼成後穿孔が2ケ所ほぼ対象 的な位置にされている。5は、口縁部のみで南溝より出土し、端面 には3本の凹線文の上に、円形浮文が3個1対の状態で施されてい る。14は、東溝の中間附近で出土し、底部を東向きにして倒れてお り(図版  $105-14 \cdot 16 \cdot 20$ )、胴部から底部にかけてはほぼ完形で あり、頸部・口縁部はないが壺とおもわれる。表面はヘラで整形さ れているが風化がはげしく文様などはみられない。20は、東溝から 出土した高杯であり、22の胴部のみとの2点が出土している。9の 壺口縁より約1m北側に位置しており復元するとほぼ完形に近く、 杯部外面は横へラ削りで、胴部は縦へラ削りで整形されている。16 は、北溝から出土した口縁がなめらかな「く」の字形に外反する甕 であり、端面に刻み目が施されている。北溝から土出した唯一の遺 物である。

以上のように、当調査区においては、全体的に遺物の出土量が少なく、遺構と関連のある土器のみを記述した。この他包含層中からは、唐古第 I 様式に比定される土器等が土出している。最も出土例の多かった第1号方形周溝墓は、調査地区の最南に位置し、そのうち東溝と南溝に土器が集中しており、時期的には弥生時代中期(唐古第 II 様式~第 II 様式~のものである。他の第2・第3・第4・第5号方形周溝墓からは全く遺物は出土しておらずその詳細は不明である。

弥生式土器観察表

			(写真)							
土	器	No.	(図面) 92	1	92	2	92	3	92	4
摘要	種	類	盖		壺		壺		底部	5
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	1.4 (現存 9.85(裾部	A La sir year or a la s	不明		不明		欠損のため不 3.25(現存化 欠損のため不 11.65	直)
出	土地	X	小川水	路	小川水	路	小川水	:路	小川水	路
口	形文	態様	。楕円形の2ヶ みを持ち、3 もので、端正 方に持ち上る る。 。2孔1対の子	形をなす 同はやや上 るものであ	欠損のためる	<b>、明</b>	欠損のため	不明	欠損のためイ	<b>、明</b>
部	整形	内	·}  + # ?							
体	形文	態様			・胴部に沈線で	Ż	。胴部に沈線	文	欠損のためる	~明
部	整形	外 内			。 } ナデ?		。			
底		部			欠損のためる	不明	欠損のため	不明	。木葉底	
色		調	。灰黄色		。黄灰淡茶褐色	<u> </u>	。黄褐色 中核一暗灰	色	。灰黄淡茶褐色	<u> 4</u> ,
胎	質	土:	。0.1~0.3の 含有 。良好	沙粒多量に	- 。0.1~0.3の 。くされ含有 。良好	沙粒含有	。0.1~0.3の 含有 。良好	砂粒多量に	- 0.1~0.3の 。くされ少量 。良好	
備		考	。内面にが以	上黒斑			。黒斑あり		。黒斑あり	

土	器	No.	92	5	92	6	92	7	92	8
摘要	*	重類	壺		底 部		壺		壺	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	不明		欠損のため不 6.05 (現存値 欠損のため不 6.5	直)	16.25 5.8 (現存化 ) 欠損のため不		18.95 3.95	不明
出:	土 地	区	小川水路	 各	小川水路	<b>各</b>	小川水	路	小川水	:路
. П	形	態					<ul><li>・斜めにひろか 口縁部端部は に肥厚する。</li></ul>			わゆる受口
頸 部 (杯	文	様	欠損のため不	明	欠損のため不	明				
部	整形	外内					。	不明	。     ・     ・   共に横ナ	デ
体 部 (脚 部	形 文 整 形	態様	。 壺の肩胴部 。 櫛描直線文		欠損のため不	明	欠損のため不	明	欠損のためる	不明
部)		内部	<ul><li>不明(おそらく)</li><li>欠損のため不</li></ul>		。僅かにあげ <i>底</i> る。 。ナデ	長状であ	欠損のため不	明	欠損のためる	不明
色		調	。灰褐色 中核一暗灰色		。灰黄淡褐色		。緑灰黄褐色		。灰黄淡褐色	
胎	質	土	。0.1 <b>~</b> 0.2の砂 。くされ少量含 。良好		。0.1~0.4の砂 含有 。くされ含有	粒多量に	。0.1~0.5の砂 含有 。0.1~0.3の黒 に含有 。良好		少量含有	少粒極めて
備		考			。4.0×5.0の黒	斑あり。	。口縁部内端面 煤が付着	「に帯状の	。杯部外面に 。外面の黒斑の く煤付着とF 煤付着してい	の位置に薄 内面に濃く

-			T								
土	器	N	o.	92	9	92	10	92	11	92	12
摘要		種类	Į	高 杯	:	複合土器	岩	高杯		甕	
法 量 (cm)	口器腹底	清	圣与圣圣	30.75 3.75 (現存化 欠損のため不		欠損のため不 3.05 (現存値	直)	欠損のため不 8.25 (現存化 大損のため不	直)	14. 25 18. 7 15. 8 4. 9	
出:	土坩	<u>t</u> [	ζ	小川水			各	小川水品	 路	小川水	路
口頸部(杯部)	形 文 整	形分	崽	<ul><li>水平にひろけで、水平にひろけで、特ちは1を持ち出る。</li><li>上端面にのは下のは下では、</li><li>たいへう磨き</li><li>へろ磨き</li></ul>	条の凸帯 がは下方に 可(放射状 が磨き。 可向の細か	台状のものが される。 ・凹線文の上に 指頭圧痕によ 文。	部より器 下に付加 縦方向の	欠損のためイ	<b>示明</b>	・斜めに外反で で端部は僅か ち上る。 ・口縁部外端 文。 横ナデ	>上方に立
体 部 (脚 部)	形文整	形:	態嫌外内	欠損のためる	不明	欠損のためる	<b>以</b>	。凹線文 。剝離のため>	不明	。なだらかなった。 ちない。 ・上半部向 ・上半部向 ・上半部向はは ・上半幕間 ・アルーの ・の ・の ・の ・の ・の ・の ・の ・の ・の ・の ・の ・の ・の	まり張り出 いいラ を いいラ を で の の め 方 向 の め う の の め う の の う の う の う の う う う ら う ら う ら う ら う
底	ı		部							。外面―ナデ 。内面―指頭	
色			調	。黒茶褐色 たれ部から て暗茶褐色	内面にかり	。灰黄色		。黄茶褐色		。灰黄褐色	
胎	質		土	。 0.1 の砂粒 含有 。かくせん石 。良好		。0.1~0.2の 含有 。良好	沙粒多量に	。0.1~0.3の 。くされ含有 。良好	砂粒含有	。0.1の砂粒台 。良好	含有
備			考			。内外共に薄 煤が付着。	く部分的に	-		。外面一頸部 に煤が付着 内面一下半	

					1.0				15		1.0
土	器		No.	92	13	92	14	92	15	92	16
摘要	_	種	類	甕		甕		壺		壺	
法量	器		高	25.65 8.85 (現存	值)	24.95 10.8 (現存f	直)	34.6 11.0 (現存化 、	直)	26.75 6.15(現存	値)
(cm)	腹底		径	} 欠損のため不	明	欠損のため不	明	欠損のため不	明	欠損のためる	「明
出	土	地	区	小川水	路	小川水	路	小川水	路	小川水	路
	形		態	。口頸部は斜め 口縁端部は面		<ul><li>頸部は、ゆる</li><li>外反し内外と</li><li>を持ち、口縁</li><li>平たんである</li></ul>	もに円味 器端部は	端部は下方に	上貼り付け		
頸	文		様			。口縁部外面上 凹線文。	端に細い	。竹管文		。受口状下端に の口縁部にうっ 文があり、『 もう一方に記	げ巻状の浮 司じものが
部	整	形	外	。斜め縦方向の 後に口縁部に 。部分的に横刀	は横ナデ	。縦方向の荒い	刷毛目	。タタキ目及び	が横ナデ	。横ナデ	
			内			。横・斜め方向	可の刷毛目	。横方向の荒り 後に横ナデ	心刷毛目の	。横方向の細 きか	かいへラ磨
体部	文 整		態様外内	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明
底			部	欠損のため	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
色			調	。灰黄淡褐色		。灰黄色 中核一淡灰(	<u> </u>	。灰黄色		。灰黄淡褐色	
胎			土	。0.1~0.4の 。金雲母少量		。0.1~0.8の 有	沙粒少量台	③ · 0.1~0.2の	砂粒含有	∘ 0.1~0.2∅	砂粒含有
		質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考								

				23		23		23		24	
土	器		No.	93	1	93	2	93	3	93	4
44: THE		種	類	壺		壺		壺	<u> </u>	壺	
摘要 法 量 (cm)	口器腹		高径	19.15 2.6 (現存fo 入損のためる		23.4 4.35 (現存作 入損のため不		18.2 7.1 (現存f 欠損のため不		9.85 4.5 (現存化 大損のため不	
出:	底		径区	F-7-E	· E	F-7-E •	E	F-7-E	F	F-7-E •	F
Д .	形	<u></u>	態			・頸部は水平に				・短い頸部にか	
	115		RES.	は外方に開く		口縁部、端音肥厚する。		口縁部、端音僅かに肥厚す	『は下方に		口縁端部
頸	文		様	。口縁端面にす 描波状文	刻目文と櫛	・指圧による排	甲圧痕	。口縁端面に刻	目文	。口縁端面に格	描波状紋
部	整	形	外	。横ナデ		。横ナデ 粗い刷毛目		。縦方向に荒り	心刷毛目	。縦方向にへき	7磨き
			内	。横方向に荒り	小刷毛目	。横ナデ		。横方向に荒り	心刷毛目	。横方向・刷刊 頸部多量に几	
体	形文		態様								
部	整	形	外内	欠損のため	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	<b>ド明</b>
底			部	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
色			調	。黄灰色 中核一淡灰	色	。乳灰色		。黄褐色 中核一暗灰	色	。黄灰褐色	
胎			土	∘ 0.1~0.4の	砂粒含有	0.1~0.50	砂粒含有	∘ 0.1~0.20	砂粒含有。	。0.1~0.3の 含有	砂粒僅かに
	質	Ī		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考			。口縁部端面 親指で押し ぐりよせる っきりと爪 く。	人指指でたために、に	<u> </u>			

			24		20	_	20		20	
土	器	No.	93	5	93	6	93	7	93	- 8
摘要		種類	鉢		壺		壺		壺	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	12.2 3.8 (現存値) } 欠損のため不明	Α.	11. 2 19. 3 17. 8 4. 8		欠損のため不 15.4 (現存付 15.3 4.9	1	12.55 25.75 14.1 3.8	
出:	土地	I X	F-7-E • F		F-7-E •	F	F-7-E •	F	F-7-E	F
口	形文	態	<ul><li>底部から口縁部</li><li>て、やや斜め方</li><li>ろがりをもつ。</li><li>櫛描簾状文</li></ul>	1	。口縁部は斜め るが、内外と を持ち端部は	もに円味			<ul><li>外上方に、や 較的長い頸き 僅かに下へ別</li><li>頸部位に深る</li></ul>	『、端部は 門厚する。
頸		148	把手には2孔1: あり	対の孔			欠損のためる	明	ぶりな波状で	
	整刑	15 外	。横ナデ		° )				。横ナデ	
部	A ANDREAS OF THE PARTY OF THE P	内	。ヘラ磨き		横ナデ				。横ナデ <b>、</b> 頸語の簾状文的	
体	形文	態様			。球形に近い、 横位に張る。		<ul><li>肩からなだ。</li><li>り腰の張る。</li><li>器面の凹凸がの壺に比べ。</li><li>ヘラによる線本線</li></ul>	るのであり が激しく他 ると厚い。	なだらかに	
部	整	形 外	欠損のため不明		。肩部より横ん 磨き、一部 毛目 腰より下位、 へラ磨き 。剝離のためご	その下に刷	0	め不明	。	め不明
底	•	部	。欠損のため不明		。剝離のためる	不明	。底部は、あり 凹凸が激しり		。底の部厚い 。ヘラ?	もの(2.25
色		調	。暗褐色		。灰黄茶褐色		。灰黄褐色		。青黄褐色	
胎		土	。0.1~0.3の砂料 含有	泣多量に	· 0.1~0.40	砂粒含有	0.1~0.40	砂粒含有	0.2~1.00	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		=12	。2~3帯の権抗 が認められるた 来ない。		1	付着			。底部付近に	黒斑

. 1.	1111			23	0		10	20	11 -		12
士.	器		No.	93	9	93	10	93	11	93	1.0
 摘要		種	領	甕		甕		甕		脚部	<u> </u>
法	П:			14.35		欠損のため不		16.7 25.5		欠損のため不 12.2 (現存	
量	器腹		高径	4.35 (現存任	ļ	15.7 (現存値 欠損のため不		25. 5 19. 15		14.4 (901)	但/
(cm)	底		径	欠損のため不	、明	4.15		4.9.		13.15	
出 .	土力	也	区	F-7-E •	F	F-7-E.	F	F-7-E		F-7-E •	F
口頸	形文		態様	<ul><li>斜めに外反す は僅かに立ち つ。</li></ul>				。頸部は円味の の字形を成し 僅か下方に 外端は僅かし みを持つ。	ノ、端部は 肥厚する。		
部						欠損のためる	(間			欠損のためる	下明
(杯 部)	整	形	外	。縦方向に刷毛	丰目	7()(0)(0)		。タタキ目			
			内	。斜め方向に届				。横ナデ			
体	形		態	の上に縦方向	11(公嗣-16日			。なだらかな ち腰はあま ない。		。裾まで、な <i>t</i> がり端部は_ する。	
P.T.	文		様								
部				欠損のためる	て 目目						
(脚				八頭のため	נעיין					- ※字:古(27 ^ ·	<b>二麻</b> %
部	整	形	外			。タタキ目の <sub>-</sub> 目	上より刷刊	三。タタキ目		。縦方向にへ	フ磨さ
10			内			。刷毛目		。横・斜め方 の後に縦方 デ			b
底			部	。欠損のため	不明	。外一タタキ  内一刷毛目 。あげ底		。ナデ 。ヘラ痕もし	くは木葉痕		
				· 灰黄褐色		 。茶褐色	AAAAAA	_    。黄茶褐色		。淡灰黄褐色	
色			調							中核一暗灰	色
胎			土	∘ 0.1~0.20	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有	∘ 0.1~1.0⊘	砂粒含有
	貿	Ţ		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	。外面に黒斑		。外面に煤付	着	。口縁部外端 中頃まで炒 。内面、底音 炭化米付着	某付着 『より腰部に	図。裾部端面に	黒斑

					24		21			10
土	器	No.	93	13	93	14	93	15	94	16
摘要		種類	脚部	5	壺		甕		壺	
法 量 (cm)		る 経 高 径 径 径 径 径	欠損のため不 13.7 (現存 13.95		15.0 11.65 (現存 22.0 欠損のため不		17.45 25.95 20.3 5.75		15.4 4.25 (現存 } 欠損のため <sup>2</sup>	
出	土 均	<u>t</u> X	F-7-E •	F	F-7-E·	F 号土坛	F-7-E	• F 3 号土纮	F-7-E	·F
口頸	形文	態様			。短い頸部でタ 端部は上下に に肥厚する。	方に開き	。頸部は「く_	の字形を は上方に肥	。漏斗状に開	く 頸部に端肥厚
部 (杯 部)	整	形外	欠損のためる	<b>、明</b>	。横ナデ		。タタキ目		。縦方向にへ	ラ磨き
		内			。横ナデ		。横ナデ		。横方向にへ	ラ磨き
体	形文	態様	。有孔				。なだらかな ち腰は、あ さない。			
部(脚部)	整	形外	。縦方向のへ	ラ磨き	。横ナデ		。タタキ目		欠損のため	不明
		内	・ナデ		。ヘラ削り・打	指圧痕	。横方向に刷	毛目	,	
底		部			・欠損のためる	不明	・中央部僅か 味である。	にあげ底気	「。欠損のた <i>め</i>	不明
色		調	。黄灰褐色		。黄褐色		。黄灰色		。黄灰褐色	
胎		土	○ 0.1~0.40	砂粒含有	。0.1~1.0の 含有	砂粒多量に	2 ∘ 0.2~0.30	砂粒含有	0.1~0.30	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考					。外面½位煤 。内面¼位腰			

		·		33		23		24			
土	器	ľ	Vo.	94	17	94	18	94	19	94	20
摘要		種類	領	壺		壺		壺		壺	
法 量 (cm)	口器腹底	î	圣高径径	14.95 4.5 (現存· 】 欠損のためる		21.05 9.8 (現存f } 欠損のため不		11.95 4.7 (現存 } 欠損のためる		10.55 7.8 (現存 11.55 欠損のため <sup>2</sup>	
出:	土 丸		X	F-7-E	F 非I一S	F-7-E	F FI-S	F-7-E	F	F-7-E	・F 構 I -S
	形			<ul><li>・上方にのびる</li><li>部は大きくタ</li><li>下方に折れ由</li></ul>	5頸部。端 外反し丸く 由る。	。斜めに広がり 貼り付けによ ある。	、端部は、る肥厚で	。僅かにひろな	ぶり 端部は	。漏斗状に開 外共に円味	き頸部は内を持つ。
頸	文	7	様	。竹管文 4 個 0	) <i>t</i> 4	。端部に凹線文	ζ			。頸部下に刻	目文
部	整力	色:	外	0		。縦方向に刷毛	5目	。縦方向にへ	ラ磨き	0	
			内	剝離のため	め不明	。剝離のためる	「明	。横方向にへ	ラ磨き	。   剝離のた	め不明
体部	形 文 整	形	一態様外内	欠損のためる	不明	欠損のためる	が明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明
底	v ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) (		部	。欠損のためる	不明	・欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	・欠損のため	不明
色			調	。黄褐色 中核一灰色		。赤褐色 中核一灰色		。暗灰黄褐色		。暗茶褐色	
胎			土:	。0.1~0.2の7 。雲母少量含		∘ 0.1~0.3の7	沙粒含有	∘ 0.1~0.4∅	砂粒含有	。0.1~0.3の 含有	砂粒多量に
	質		none à lected diffe	。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考			。内面に米痕					

量 (cm) 出 当	器 / 口器腹底 上 形	種/ 縁	径高	94 壺 12.3	21	94	22	94	23	94	24
法 量 (cm) 出 出	器腹底上	縁	径高			-4-4					
法 量 (cm) 出 出	器腹底上		高	12.3		壺		甕		変	
			径	12.25 (現存)		10.05 5.15 (現存の 大損のため不		16.75 7.2 (現存 } 欠損のため <sup>フ</sup>		10.45 6.95 12.35 欠損のためる	
	形.	也	区	F-7-E·	F I-S	F−7−E・ 潜	F 非I一S	F-7-E	• F	F−7−Е	F 背I一S
	712		態	.,,		。外方にやや開 凹線文あり。		。頸部は短く5 端部は僅か 方に肥厚す;	であるが下	<ul><li>斜めに外反う</li><li>共に円味を持丸い。</li></ul>	
頸	文		様								
部	整	形	外	。 } 剝離のた&	<b>≻</b> - <b>7</b> . HH	。		。横ナデ		・横ナデ	
			内	o   *リ商店Vフ/この	D 小明 			。ヘラ削り		。ヘラ削り	
体	形 文		態様	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
部	整	形	外内								
底			部	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	・欠損のため	不明
色			調	。淡黄褐色		。茶褐色		。淡黄青灰色	i.	。茶褐色	
胎			土	。0.2~0.4の 含有	砂粒僅かパ	こ。0.1の砂粒少	量含有	∘ 0.1~0.30	砂粒含有	∘ 0.1~0.40	砂粒含有
	星	ĺ		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	・外面に黒斑				。外面、頸音 かけて煤化		て。外面に煤化	·着

土 摘要 法量 (cm)	口縁 行器 言	径	94 甕	25	94	26		27		28
法 量 (cm)	日縁行器	径	甕				94		94	
法 量 (cm)	口縁行器腹				底 部		底 部	3	飯	
н.	124	高径径	21.35 6.4 } 欠損のため不		欠損のため不 4.9 (現存 欠損のため不 4.9	直) :明	欠損のため7 2.4 (現存 欠損のため7 4.55	値) : 明	欠損のため不 3.8 (現存化 欠損のため不 3.25	直) :明
щ.	土地!	X	F-7-E· 溝	F I-S	F−7−E・ 溝	F I — S	F-7-E·	F 非I一S	F−7−E・ 潤	F I-S
		態様	。頸部は丸味が やかに外反す							
頸					欠損のため不	明	欠損のためる	下明	欠損のため不	明
部	整形	外	。 総方向に刷毛	目						
		内	。横ナデ							
	形	態	\ \ 							
体		様	欠損のためる	で明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
部	整形	外内								
底		部	・欠損のためる	<b>、明</b>	。ヘラ圧痕あり	Ò	・中央部あげ) 字にへラ痕。		。あげ底気味で	で穿孔
色		調	。黄褐色		。外一淡黄褐色 内一淡灰色	<b>4</b> ,	。黄茶褐色		。灰黄褐色	
胎		土	。0.1~0.4の何	少粒含有	∘ 0.1~0.201	沙粒含有	0.1~0.40	砂粒含有	∘ 0.1~0.4の}	沙粒含有
	質				。良好		。良好		。良好	
備		考							・外面に黒斑	

土	器		No.	94	29	94	30	94	31	94	32
摘要	_	種	類	高 杯		高 杯		脚部	5	脚	部
法 量 (cm)	口器腹		高径	23.95 3.5 (現存化 入損のため不		23.85 3.9 (現存値		欠損のため不 12.75 (現存)		欠損のため 7.85 (現	
	底		径	F-7-E •		F-7-E •		13.4   F-7-E •	F	10.6 F - 7 - F	- F
出	北		態	潜	排 I − S √端部は僅		I-S	清	Ĭ-S		溝 I 一 S
杯	文		様					欠損のためる	(明	欠損のたる	か不明
部	整	形	外内	。   剝離のたと	〉不明	・横方向に刷毛・横ナデ	目				
脚	形文		態様	<b>)</b>				。裾まで、なが がり端部は する。			rt Lo
部	整	形	外内	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	。縦方向のへ:	ラ磨き	・剝離のた	め不明
底			部								
色			調	。赤褐色 外面一部黄原	灭色	。黄灰褐色		。淡褐灰色		。青黄褐色 中核一赤	
胎			土	° 0.1~0.2⊙₹	 沙粒含有	。0.1~0.2の 。雲母僅かに		0.1~0.40	 砂粒含有	0.1~0.3	の砂粒含有
	<u></u>	T		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考								

				20		21				21	
土	器		No.	94	33	94	32	94	35	94	36
摘要	_	種	類	## ##		甕		脚 音	ß	藍	
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	13.75 16.7 18.15 欠損のためイ	~明	15.55 20.1 17.6 5.45		欠損のため7 6.45 (現存 10.95		13.75 16.7 (現存何 18.15 欠損のため不	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
出:	上:	地	X	F-7-E •	F 溝II	F-7-E •	F 溝Ⅱ	F-7-E •	F 溝Ⅱ	F-7-E • 3	F 溝Ⅲ
П	形		態	。斜めに外反す 丸味のある頸		。頸部外反はF カーブを持 る。				。欠損のため不 。頸部は「く」 外反し上方へ	の字形に
部	文		様					欠損のためる	不明		A CA GARAGE
(杯 部)	整	形	外	。口縁端部から 縦方向の刷目		。頸部、タター り所々に刷:				。	Access Ac
			内	。横方向の刷	毛目	。横ナデ				•	
体	形		態			。なだらかな ち腰は、あ さない。				。肩は張り円ゆ	を持つ。
部	文		様					。凹線文			
脚部	整	形	外	。頸部よりタ 上から縦方[				。縦方向のへ 。横ナデ	ラ磨き	。 } ナデ	
			内	。横方向刷毛		。横方向に刷		裾部内面に あり	爪痕 <b>無数</b> に 	J	
底			部	・欠損のため	不明	。中央部僅か 。木葉痕	にあげ底			・ナデ	
色		a de securio SEO SEO	調	。淡黄赤褐色		。淡暗灰色		。黄褐色		。茶褐色	
胎		<b></b>	土	。0.1~0.2の 含有 。良好	砂粒僅かな	こ。0.1~0.5の 含有 。雲母僅かに 。良好		<b>⊆</b> ∘ 0.1~0.8の	砂粒含有	。0.1~0.2の 。良好	砂粒含有
備			考	・外面に煤付	着						

					24				24	
土	器	No.	95	37	95	38	95	39	95	40
摘要		種類	壺		壺		壺		壺	
法量	口器腹	高 径	21.5 11.75(現存化 入損のため不		12.85 6.45 (現存化 大損のため不		欠損のため不 6.85 (現存化 入損のため不	直)	11.05 7.05 (現存 ) 欠損のためる	
(01.11)	120	径	F-7-E •		F-7-E •		F-7-E •		F-7-E	
出	土地		沼地状落	ち込み	沼地状落	ち込み	沼地状落	ち込み	沼地状落	<b>茎ち込み</b>
口口	形	態	。漏斗状に開く   部は上下に値   する。		。口縁部は外反 僅かに肥厚す		・欠損のためイ	、明	。頸部は僅かに 立ち端部は丸	
頸	文	整形外。		二列点文	。口縁外端凹線	泉文	凸帯の上に相 。頸部の所に見	狀浮文	。凹線文・端面 形浮文	面外部に円
部	整升			5不明	。縦方向に刷毛 上よりタタキ		指頭圧痕文 。  別離のため	) 不明	・   横ナデ	
	形	内態	o ) 30 ppc > 10 0		。横ナデ				0	
体	文	様	欠損のためフ	不明	欠損のためろ	不明	欠損のためフ	不明	欠損のため	不明
部	整	形 外		, ,,,						
底		部	。欠損のためる	不明	。欠損のためる	不明	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明
色		調	。淡赤黄褐色		。赤黄灰色		。暗茶褐色		。暗灰黄色 中核一暗灰	<b>ć</b> i,
胎		土	∘ 0.1~0.3の	沙粒含有	。0.1の砂粒僅	かに含有	。0.1~0.3の 含有	沙粒多量的	こ。0.1の砂粒含	含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考								

	6177			24	4-3	22	40	21	49	22	. 44
土	器		To.	95	41	95	42	95	43	95	44
摘要		種类	頁	藍		藍		壺		壺	
法 量 (cm)	口器腹底	7 1	圣高圣圣	11.95 7.45 (現存 欠損のため <sup>2</sup>	不明	11.8 13.3 (現存f 入損のため不	明	15.6 23.4 21.65 6.5		欠損のため7 18.15(現存 12.85 4.05	値)
出:	土 均	4 [	X	F-7-E 沼地状	・F 客ち込み	F-7-E· 沼地状落	F 客ち込み	F-7-E· 沼地状落		F-7-E· 沼地状落	
	形	Ī	思		かに開く口	。頸部は長く夕		。直立する頸音 折れ曲る口縁		<ul><li>外方にやや原直)端部は大 と考えられる</li></ul>	L味がある
頸	文	1	様			。外面に竹管プラ描き線刻プ		。口縁端面に関	凹線文		
部	整	形:	外	。 } 横ナデ		。横ナデ		。縦方向に刷= 斜めに刷毛		。縦方向の刷言	EB
			内			。横方向の刷	5目	。横ナデ		・ナデ	
体	形		態					・球形に近いりや横位に張		。肩はほとん。 だらかに胴部	
Jak	文		様	欠損のため	不明	欠損のためる	不明				
部	整		外内					。腰位に横方 から底部に 向に刷毛目 。剝離のため	かけて縦刀	言。肩から腰に 向に刷毛目 。ナデ?	かけて縦方
				・欠損のため	 不明	・欠損のため	 不明	・剝離のため	 不明	・中央部が僅	かにくぼむ
底			部		. 1 93		. , ,				
色			調	。黄褐色		。暗灰色		。灰赤黄褐色	l	。黄灰茶褐色	ı
胎			土	。0.1~0.20 含有	)砂粒多量(	ರ ∘ 0.1~0.4の	砂粒を含す	肓。0.1~0.2の	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有
	쯸			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考			<ul><li>内外共にじい。</li><li>外面の竹管れているのある。</li></ul>	文は検出	煤付着	かけて濃	く。胴部に黒弦 。内外共に凹 ため粘土株 がよくわか	I凸が著しい の間隔なる
						1		1			

	nn			22	45		4.0		47		48
土	器		No.	95	45	95	46	95	41	95	40
 摘要		種	類	甕		甕		底 部	5	高档	不
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	14.65 21.9 18.65 3.2		10.0 8.75 7.55 4.65		欠損のため不 6.65(現存化 欠損のため不 4.65	直)	29.0 5.85 (現存 欠損のため <sup>2</sup>	不明
出:	± :	地	X	F-7-E・ 沼地状落	F た込み	F−7−E・ 沼地状落		F-7-E・ 沼地状落		F-7-E 沼地状?	・F 客ち込み
口頸部	形文		態様		の字形を は上下に肥 口線状のく	。口縁部は斜めるが内外とも 持ち端部は対	に外反す に円味を	欠損のためる		。直口の口縁 かに内弯し、	で端部は値
(杯 部)	整	形	外	。タタキ目の役 の刷毛目						。	め不明
			内	。横方向の刷キ	<b>計</b>	。横方向に刷き	5目			•	
体	形		態様	。なだらかなっ ち腰はあまり ない。							
部										欠損のため	不明
(脚 部)	整	: 形	外	。タタキ目		。剝離のためる	不明	。タタキ目			
			内	。刷毛目		。横方向に刷っ	毛目	。ヘラ痕			,
底			部	。輪台状底部		。内面放射状	て刷毛目	。タタキ目			
色			調	。黄茶褐色~	黄褐色	。茶褐色		。茶褐色		。黄茶褐色	
胎			土	○ 0.1~0.20	砂粒含有	0.1~0.40	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有	0.1~0.30	)砂粒含有
	F.	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	の口縁部内端腰部中頃ま		Ī		。内外共に煤 。内面に炭化 付着		。外面に黒野	Ħ.

							22		22	
土	器	No.	95	49	95	50	95	51	95	52
摘要	種	類	高 杯	`	高杯		型 <u>4</u>	ì	器台	
法量		高	25.85 3.0 (現存	直)	欠損のため不 8.55 (現存信		19.15 16.05		15.45 12.15	
(cm)		径径	欠損のため不	明	欠損のため不	明	19.05		欠損のため不	
出.	土地	Z	F-7-E・ 沼地状落		F−7−E・ 沼地状落		F−7−E・ 沼地状落		F-7-E・ 沼地状落	
	形	態	。大きく外反す	る杯部	。ほぼ水平にの	がる杯部	。漏斗状に開く 部は下へ垂れ		。鼓胴形を成す	•
							10.1			
頸部	文	様								
(杯 部)	整形	外	• )		。ヘラ磨き		0		・刷毛目の上かき	ゝらヘラ磨
And the second s	A COMMAND OF	内	剝離のため	)不明	。あん文風			め不明	。刷毛目	
	形	態								-
体										
14	文	様			。刻目文·櫛指	描直線文	。有孔		。有孔	
部			欠損のためる	不明						
(脚 部)	整形	外			。縦方向のへき	戸磨き	0		0	
		内			・ナデ		。	め不明	。 剝離のたる	7、不明
底		部								
色		調	。外一赤褐色 内一黄灰褐的	<u> </u>	。黄灰褐色		。灰黄褐色		。赤褐色	
胎		土	∘ 0.1~0.4∅}	沙粒含有	○ 0.1~0.3の	沙粒含有	∘ 0.1~0.3の	砂粒含有	0.1~0.40	 沙粒を含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
			。内面に黒斑		。脚部上方に	T.痕				
備		考					and the state of t			
					The second				and Artis	

土	器	No		1		- 2		3		4
		No.	第10図	1	第10図	4	第10図		第10図	
摘要	[	重類 	重		壺		器 台	ì	器 台	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	11.0 18.35 15.35 4.75		11.05 12.0 (現存 } 欠損のためる		39.15 11.95 (現存的 入損のため不		欠損のため7 27.7 (現存 25.75	
	土地		H-3-H	十器群C	H-3-H		Н-3-Н	七器群C	Н— 3 —Н	土器群C
	形	態様		からく筒状 ら口縁部は 曲り端部は	の口縁部で、	口縁上方	厚する。 。口縁外端面に その上に、P 刻目文が交互	は上下に肥 こ凹線文と 円形浮文と		
頸部	整于	形 外 内	。 。 。 。 。 。	め不明	。	め不明	でいる。 。頸部に凹線が 。タタキ目 。頸部上面に 毛目 。横方向の刷 デ	部分的に刷	欠損のためる	不明
体	形	態様	。なだらかな き腰位は中 。頸部下より と同波状文	頃にある。 櫛描直線文					。底径の大きい。 四線文、その透し孔。	
部	整	形外内	。		欠損のため	不明	欠損のため	不明	。	め不明
底		剖	。平底		・欠損のため	不明				
色		訓	。灰黄茶褐色 中核一暗灰		。灰黄色		。内外ともに, 色	灰黄淡茶褐	。黄淡茶褐色	1
胎	質	E	: 0.1~0.2の 。良好	砂粒含有	。0.1~0.4の 。良好	砂粒含有	。0.1~0.2の 。良好	砂粒含有。	。0.1~0.2の 少量含有 。くされ含有 。良好	
備		TIP	あり。		姓。片口状の口 。口縁上端面 の黒斑		」。壺型土器 Ø 5 り。	可能性な	5 。裾部に16.5	55×4.8の具

				38				38		38	
土	器		No.	104	1	104	2	104	3	104	4
摘要	_	種	類	壺		壺		壺		壺	
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	14.8 3.9 (現存化 大損のため不		19.7 8.2 (現存 入損のため不		27.0 2.3 (現存 } 欠損のため7		32.6 3.2 (現存 } 欠損のため不	
出			Œ K	A-6-F • 0	G • I •	A-6-F·	G • I •	A-6-F	G·I·	A-6-F	G·I·
口頸	形文		態様	J・K ・頸部より漏 <sup>2</sup> 上面近くでや 折れまがる。 や上方に肥厚 ・口縁部端面に	や水平に 端部はや 厚する。		\$3.	るが、やや力 なるまで外別 はやや下方に	×平に近く えす。端部 と肥厚する どではな	。頸部から口線 大きく外反し 下にやや肥厚	端部は上まする。
部	整	形	外内	。横ナデ、頸部 方向刷毛目 。横ナデ	『一部に縦	<ul><li>・横ナデ、頸部</li><li>う磨き</li><li>・横ナデ</li></ul>	平一部にへ	・横ナデ・横ナデ		。内面横方向の 残るが内外面 が著しい。	
体	形文整		態様外	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
底			内部	・欠損のためる	不明	・欠損のため	不明	・欠損のため	不明	・欠損のため	不明
色			調	。淡黄色		。淡黄色		。淡黄色		。黄褐色	
胎			土	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有
備	<b></b>		考	。良好		。良好		。良好		。良好	

			38		38		38		38	
土	器	No.	104	5	104	6	104	7	104	- 8
摘要		種類	壺		壺		壺		壺	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	28.6 3.7 (現存) } 欠損のため不		9.8 3.7 (現存値 } 欠損のため不		18.8 3.1 (現存 } 欠損のため不		7.3 5.8 (現存 } 欠損のため	
出	土地		A-6-K   第1号方形周	14: +4: -4: 14:	A-6-F • 0	3 • I •	A-6-F •	G·I·	$A-6-F \cdot I \cdot K$	G·I·
	形	態	1	、下に大	J・K 。頸部より丸味 外反し、端部 厚する。					
頸	文 様 。端部には3本の凹線3 の上から3個1対の形で円形浮文 整形外。)			。口縁部内面に 6 個の円 形浮文				。現存部分は 文2帯と同		
部	整刑	整形外。  風化のため不明			。横ナデ		。横ナデ <b>、</b> 下方へラ磨 <b>き</b>		。縦方向刷毛	目
		内。		5不明	。風化のため不	明	・横ナデ		。横方向へラ	磨き
,,	形	態								
体       	文	様	欠損のためっ	不明	欠損のためる	「明	欠損のためっ	下明	欠損のため	不明
部	整	形外								
		内								
底		部	。欠損のためフ	不明	。欠損のためる	<b>、</b> 期	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明
色		調	。茶褐色		。淡黄褐色		。淡赤褐色		。黄褐色	
胎		±	。0.1~0.2の 有	少粒多量含	· 0.1~0.3の種	少粒含有	。0.1~0.3の 有	少粒少量含	0.1~0.30	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	:							

_	~			ĺ	38				37		37	10
-	±.	器	No.		104	9	104	10	104	11	104	12
			重類		藍		壺		垂		壺	
	法 量 cm)	口器腹底	径高径径	1	18.2 11.2 (現存f 欠損のため不		20.4 18.0 (現存f 入損のため不		欠損のため7 25.5 (現存 26.7 6.4		欠損のため不明 38.7 (現存値) 25.8 7.2	
-	出:	土 地			A-6-F · 0	G • I •	$A-6-F\cdot G\cdot I\cdot $		A-6-K  第1号方形周溝墓東溝		A−6−K 第1号方形周溝墓東溝	
	口	形 態 。頸部が長く口縁部に向かって漏斗状に開く。口縁端部は僅かに上下に肥厚する。			き、端部は生	>し凹んで Ł合がりで	欠損のためる	不明	。口縁部は不明 。頸部には数情 線文			
	部	整形外。頸部下方に一部刷毛目内。不明		一部刷毛目	。荒い縦方向刷毛目							
					。横・斜め方向	句のヘラ磨						
	体	形文	態	The second secon			明確な角度を からは丸味を 部に至る。	をもつが肩 をおびて胴 さらに波状	大となり、 だす。 。 頸部より胴	大きくはり 部上半部に	こ。頸部からのホ	節描直線文
6	部	整	形 <i>外</i>	<b>个</b>	欠損のためる	不明	損のため不 。斜め方向刷 と同様に荒 。縦方向へラ	毛目、頸音 い。		くにつれて	* 。縦方向の刷: はヘラ磨き	毛目、底部
	底	1	ž	部	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。中央にむか む。	ってやや	型。横方向への 磨き	乱雑なへう
	色		Ē	調	。黄褐色		。外面一赤褐 内面一黄白		。淡黄茶褐色	L	。淡黄茶褐色	
	胎			±.	∘ 0.2 <b>~</b> 0.5∅	砂粒含有	0.1~0.30	砂粒含有	∘ 0.1~0.30	砂粒含有	∘ 0.1~0.3∅	砂粒含有
		質			。良好		。良好		。良好		。良好	-
	備			考					。腹部穿孔さ	れている。		

			37		37		37		38	
土	器 N	lo.	104	13	105	14	105	15	105	16
摘要	種類	頁	壺		壺		甕		変	The section of the se
法 量 (cm)	口 縁 稿 腹 底 名	<b></b> 至 圣	11.6 31.0 22.3 6.1 A-6-K		欠損のため不 15.7 (現存化 14.4 5.0 A-6-K		9.6 14.2 12.4 3.8 A-6-F	G•I•	29.4 6.0 (現存を) 入損のためる A-6-K	
出.	土地口		第1号方形周		第1号方形周		J • K		第1号方形周	
П		態	。類部からややがら真直ぐにまま終る。		<ul><li>口縁部及び頸 しているが、 少たちあがる わかる。</li></ul>	頸部が多		『はごく僅	・口縁部はない「く」の字形に「コ」の字形に 「コ」の字形に ・口縁部端面に 目文	外反し、 上終る。
頸									,,,,,	
部		外为	。ほとんど表面 め整形技法は る。				。横ナデ。頸部 刷毛目 。横ナデ	形に縦方向	。横ナデ、頸部 にかけて縦が き。 。横ナデ	
体		態様		って底部に 中央辺りま			。肩部は、はら をおびたま る。			
部	整形:	外内	るが風化のた 不明			、ラで整形	1		欠損のためる	不明
底	:	部		复が、かす	。全体的に中央 て凹んでいる		。木葉痕。中 てくばむ。	央にむか-	。欠損のためる	不明
色		調	。淡黄褐色		。淡黄茶褐色		。黄白濁色		。淡黄褐色	
胎		±.	॰ 0.1~0.20र्ष	少粒含有	॰ 0.2~0.4 <i>०</i> ६	少粒含有	· 0.1~0.20}	沙粒含有	· 0.1~0.30	沙粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
			・焼成後の穿る	FL.			1			
備		考								

	器 No. 17					1.31.61		38		37	
土	器		No.	105	17	105	18	105	19	105	20
摘要	_	種	類	変		蓬		高 杉	ς	高 叔	7
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	13. 5 18. 5 14. 8 5. 2		19.2 28.9 (現存( 26.0 欠損のため不	明	欠損のためる 8.4 (現存 欠損のためる	値) (明	23.8 18.9 12.4	
出:	土土	地	X	A-6-K 第1号方形周	溝墓北溝	A-6-F ⋅ 0 J ⋅ K	G•1•	A-6-F ⋅ J ⋅ K	G • 1 •	A-6-K 第1号方形周	溝墓東溝
口頸幣	形文		態様	<ul><li>・丸味をおびな し、口縁端音 か下に肥厚す №16と同様</li></ul>	βはごく僅	。頸部から口縁 て緩やかな「 形に外反しる る。	「く」の字	欠損のためろ	ट मन	。口縁部ややP 端部は、内・ 肥厚する。を らかなカーラ け根にいたる	・外にやや 本部はなだ がで脚部つ
								八頃のため	נעזיו		
(杯 部)	整	形	外内	・横ナデ。頸部には縦方 向刷毛目 ・横ナデ		横ナデ				<ul><li>・斜め方向刷に、ヘラ削り</li><li>磨き。</li><li>・刷毛目</li></ul>	
-	形		態	。百みはさず	7 油性 おお	。戸郊ははより	. じゅらぎ	。欠場のかめ	わかりにく	。脚部つけ根	脚郊端ま
体部	文		様	が胴部下半丸線的に底部に	いらやや直		乳につづき Pな球形の	いが、内面	しぼり目あ	でなだらかり 描きながら 部端面 は上	なカーブを さがり、脚
(脚 部)	整	形	外内	。全面に縦方に	句刷毛目	。荒い縦方向所石の移動がる	みられる。	~ } 不明		。体部下部かれたかけて縦 り、中央下 向刷毛目 。横方向刷毛	方向ヘラ削 半より縦方
底			部	。ほぼ水平で	ある。	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	・接地点は丸 いる。	味をもって
				。淡黄褐色	w (additional 2017)	。黄茶褐色		。淡黄褐色		。赤褐色	
色			調								
胎			土	∘ 0.1~0.20	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	○ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	0.1~0.40	砂粒含有
	摩	Ī		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考								

	二 器 No. 38 21												*****		
土	器	No	o.  -	105		21	-	105	1	105		2	105		3
摘要		種類	Ħ	<b>金</b>	鉢			壺			壺			壺	
法 量 (cm)	口器腹底	录	£ .	17.6 5.2 (現 欠損のたる				12.05 9.65(現存値 欠損のため不		17.65 6.0 } 欠損の			欠損のた 7.3 (3 13.6 3.2		
出	土地	<u> </u>	2	$A-6-F$ $J \cdot K$	· • (	3 • I •	F	H-5-I,	<b></b>	Н—5-	-I,	溝状遺構	Н-5-	I,	<b>購状遺構</b>
П	形文	態			に具	目き端部	:	筒状の頸部を かに外反する 部は丸い。			僅かバ	質部を持ち こ外反し、			
頸													欠損のな	: め不	明
部	整升	形 夕 P		・ヘラ磨き	0		0	               	)不明		のた》	か不明			
体	形文	形態							・最大径はり						
部	整		<b>外</b>					欠損のためる	(明	欠損の	ためっ	不明	。剝離の7 。横方向 <i>0</i>		
底	<u>'</u>	ż	筝	。欠損のた	 .め不	明	0	欠損のためる	下明	・欠損の	ため	不明	・ナデ		
色		1111	調	。黄茶褐色	Li		0	灰黄淡乳褐色	<u>4</u>	。灰黄淡	褐色	-	。灰黄色 中~内-		色~黒色
胎	***************************************	-	£	· 0.1~0.8	3の砂	>粒含有	0	0.1~0.3の何。くされ含石		。0.1~0 含有	). 2の <sup>1</sup>	砂粒多量に	0.1~0.	2の種	少粒含有
	質			。良好			0	良好		。良好			。良好		
備		į	考												

				40						
土	器	]	No.	105	4	105	5			_
_		種	指		,					
摘要		_	_	壺 棺	3	藍				
法	日言器		径高	24.45 36.6 (現存	(首)	23.4 4.2 (現存	串)			
量	腹		径	36.4	IE)	欠損のため不				
(cm)	底		径	欠損のため不	明	人類のためれ	\r)J			
出:	土 ±	也	区	H-5-M		H-5-M				and the second s
	形		態			。二重口縁、夕				
				く漏斗状にタ 頸部。端部に		もって立ち」 部で水平にの				
П				TM EIFO WITH HAVE	a   10/00	は稜をもち丸				
	文		様			.。竹管円形浮戈	Z			
頸				よる貼り付い 刻目文	7凸骨上に					
				23.62						
	整	形	外	0)		0				
部				   剝離のたる	め不明	風化が著し	/く不明			
			内	0		0				
				)		/				
	形		態	。最大径は、l あり、やや						
L				0.	110 DC 12 0					
体	文		154							
	X		様							
						欠損のためる	不明			
	東攵	形	ΔV	0)						
部	IE.	NΟ	7 F							
ПÞ				剝離のたる	め不明					
			内	•				And and a second		
				・欠損のため	 不明	<u>'</u> ・欠損のため <sup>7</sup>	 不明			
					. , .					
底			部							
				。茶褐色~黄	 茶褐色	。外面一赤褐	色			
色			調	内一暗茶褐	色	内面一淡黄	褐色			
胎			士:	∘ 0.1~0.4の	砂粒含有	。0.1~0.2砂	粒多量に含	3		
nH					ل السومت. ر	有				
	FFF	î		o 自ft.		。良好				
	質	Į		。良好		及好				
-				1						
備			考							
									Account of the contract of the	

土	器	No.	0.0	1	0.0	2	26	3	31	4
		重類	96		96 壺 A		96 壺 A		96 壶 Bı	
摘要			壶 A:	2		2		4		
法	日縁器	経高	21.75 7.8 (現存	値)	21.85 5.4 (現存	信)	28.45 9.7 (現存·	値)	31.9 7.9 (現存(	直)
量	腹	径	,		〉 欠損のためる		〉 欠損のためる		欠損のため不	
(cm)	底	径	欠損のためる		)		)		)	
出	土地	区	F-4-N	3-4-B	F-4-N	3 - 4 - B			F-4-N, G	
口	形	態	。漏斗状に開く 縁端部は僅か て下方に肥厚	って内弯し	。漏斗状に開く	く 口頸部	。漏斗状に開く 平に折れ曲り 斜めに肥厚す	端部は下	。頸部は漏斗状 縁部は上方に 受口状のもの	立ち上る
	文	様					。口縁端面に凹しるの上にF	円形浮文	。受口状の部分	ドに凹線文
頸						*	。第四(CDW)	ζ.		
	整开	乡外	0)		° ]		0		0)	
部		内	。	め不明	               	め不明	   。     。   	か不明	。	不明
	形	態								
体	文	様				<b>-</b> 7*H⊓	ケセクシン	-7`UU	欠損のためる	<b>7</b> UU
部	整力	形外内	欠損のため	小明	欠損のため	个明	欠損のため	<b>1</b> 199	<b>大便のにめ</b>	EA-VI
			・欠損のため	 不明	・欠損のため	 不明	・欠損のため	 不明	・欠損のため	不明
底		部								
色		調	。黄褐色		。暗黄灰色		。赤褐色 中核一灰褐	色	。淡灰黄色 一部淡灰色	
胎			. 0.2~0.50	砂粒含有	。0.2 <b>~</b> 0.4の 含有	砂粒多量的	ح ∘ 0.2~0.30	砂粒含有	∘ 0.2~0.3⊘	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		孝	。口縁端部外 。全面著しく		。全面的に象い。	削離が著	し。口縁内端に ったと思わ 内端に一部	れる。口流	あ。内外共に剝縁	離著しい
備		·	j							

					32		32			
土	器		No.	96	96	6	96	7	96	8
摘要	_	種	類	壺 A	壶 C	,	不能	¢	<b>鉢</b> C	>
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	37.0 5.85 (現存値) } 欠損のため不明	14.35 9.7 (現存化 ) 欠損のため不		13.1 4.0 (現存 } 欠損のためる		33.9 9.65 34.75 欠損のためる	<b></b> 写明
出	土力	地	X	F-4-N, G-4-E	F-4-N	-4 - B	F-4-N	5-4-B	F-4-N	3 - 4 - B
П	形		態	。漏斗状に開く口縁部端 部は上下に肥厚する。	。口縁から頸音 した口縁、蛸 に肥厚する。		1		に肥厚する。	
頸	文		様	。凹線文の上にへうによる刻目文と剝離しているが円形浮文			。円形浮文		・凹線文の間を	上に刻目
部	整	形	外内	割離のため不明	・縦方向の刷毛	<b>三</b> 目	。 } ナデ?		。	か不明
体	形文		態様	欠損のため不明	欠損のためフ	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
部	整	形	外内	。欠損のため不明	。欠損のためる	<b>Z</b> . HH	。欠損のため	太阳	。欠損のため	<b></b> ズ 田日
底			部	○ 八頃のため不明	・ 八頃のため	1193	《八頂切记》	1193	《八頂切记》	11193
色			調	。暗茶褐色	。淡黄灰褐色		。暗灰緑青色		。淡暗灰褐色	
胎			土	。0.1~0.2の砂粒含有	。0.1~0.3の7 。雲母含有	砂粒含有	。0.1~0.2の 。雲母含有	砂粒含有	。0.1~0.8の 含有	砂粒多量に
	黨	Ī		。良好	。良好		。良好		。良好	
備			考	。東海地方の土器かとり われる。	思		。円形浮文は に、はみ出 後にへラで いる。すな りも浮文の でも堅い。	した粘土を 切り取って わち器体。	t	着

						36				26	
土	器		No.	96	9	96	10	96	11	96	12
摘要		種	類	鉢		脚	部	脚 部	ζ	脚音	ß
法量	口器腹		径高径	欠損のため不 4.95	明	欠損のたる 5.9 (現		欠損のため不 6.6 (現存)		欠損のためる 4.9 (現存	1
(cm)	底		径	4.15		10.6		12.15		13.85	
出	土 ;	地	X	F-4-N, G	-4 - B	F-4-N,	G - 4 - B	F-4-N, G	-4 - B	F-4-N, (	G-4-B
	形		態		1100000						
П											
頸	文		様								
部				欠損のため不	明	欠損のたる	め不明	欠損のため不	明	欠損のためる	不明
(杯 部)	整	形	外								
		内 能 。下半部より把手									
体	形		態	。下半部より把手		。柱状部から裾まで、なだらかに広がり端面外側に僅かに肥厚する。		外 だらかに広がり端面外 側に僅かに肥厚する。			
部	文		様					。柱状部凹線了	Z.	。断面三角形( 凸带、刻目)	
(脚 部)	整	形	外	0	。剝離のため不明			・剝離のためる	下明	。剝離のため不明	
			内	   。   剝離のたる   。	か不明 	。ヘラ削り。	>	。ヘラ削り。		。横ナデ。	
				・欠損のためる	7明						
底			部								
色			調	。灰黄色 一部赤褐色		。暗茶褐色		。内—青黄灰色 。外—赤黄灰衫		。赤褐色 中核一暗灰	<u>色</u>
胎			土	○ 0.1~0.8のF	少粒含有	0.1~0.4	の砂粒含有	° 0.1~0.4の{	少粒含有	0.1~0.30	砂粒含有
	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	。外面薄く煤( 。内面黒斑	寸着	。円板充塡	法	。円板充塡法		。内面煤付着	

土	器	No.	96	13	96	14	96	15	96	16
摘要	1	重類	脚部 A	. 1	底 部	5	底 部	ß	脚部	В
法量	口緣器腹	径高径	欠損のため不 8.9 (現存		欠損のため不 <b>3.3</b> (現存化 欠損のため不	直)	欠損のためる 3.7 欠損のためる		欠損のため不 8.25	明
(cm)	120	径	11.1		6.75		3.35		19.1	
出	土 地	X	F-4-N, $G$	<del>у</del> -4-В	F-4-N, G	-4 - B	F-4-N, C	G-4-B	F-4-N	-4 - B
口頸部(杯	形文整界			<b></b> 「明	欠損のためる	<b>、明</b>	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
部		内	態。裾までなだらかに広な							
体	形文	態様	。裾までなだらり端部は上っ る。						。凹線文	
部(脚			WANTE OF THE STATE	#F #	・ヘラ磨き				0)	
部	登 7		・縦方向へラ!	Ħ	。横方向刷毛	E	。 。 。 。	め不明	。             	め不明
底	do-carears -	部	・下半部へラト	引り	。ヘラ <b>磨き</b> 。僅かにあげり	底	。 へ う 痕			
色		調	。暗黄褐色		。灰黄褐色		。灰褐色		。淡灰黄色	
胎		土	。0.1~0.5の 。雲母含有	砂粒含有	∘ 0.1~0.4⊘	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有	○ 0.1~0.4⊘	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		老	。外面全面と 煤付着	内面裾部は	こ。外面黒斑		。外面に薄く	煤付着	。内面に黒斑	あり

			26							
土	器	No.	96	17	96	18	96	19	96	20
摘要	種	類	壺 A2			3	·····	>	甕 A	
法 量 (cm)	口器腹底	/ 径高径径	20.55 9.8 (現存f ) 欠損のため不		32.1 7.5 (現存的 入損のため不		37.65 6.65 (現存 ) 欠損のためる		17.05 12.3 (現存 14.8 欠損のため不	
出	土地	X	F-4-N	マウンド	F-4-N	マウンド	F-4-N	マウンド	1	
口頸	形文	態様	折れ曲る口紅	<ul><li>家部を持たに肥厚</li><li>、凹線文</li></ul>	平に折れ曲る に大きく肥厚 。口縁端面に凹	端部は下 する。 『線文を施	に外反し端音 立ちあがりる	『は上方に	。口縁部は水平 り端部は下方 肥厚する。	i i
部	整形	外内	。	)不明	。 剝離のため	77円	横ナデ		。                 	
体	水 文 整 形	態様外内	欠損のためる	<b>以</b>	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	。口縁径より肌に入る。 に入る。 。一部縦方向に 。横ナデ	
底	.!	部	。欠損のためる	不明	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	。欠損のためる	不明
色		調	。淡黄褐色		。淡黄褐色		。淡灰褐色		。外一暗灰赤 内一暗灰赤 暗灰色 中核一灰色	
胎	質	土	。0.1~0.3の 含有 。良好	少粒多量に	。0.1~0.2の7 含有 。良好	沙粒僅かれ	- 。0.1~0.3の 。良好	砂粒含有	。0.1~0.3の 。良好	砂粒含有
備		考	。内面に煤付 。内面剝離著 。管状の櫛使 。内面端に文 思われる。	しい。 目	。口縁端面内 あるが確認 。口縁端面外 ・ 斑あり	できず。			。外面に薄く。 の内外共に凹い。	

		a - Problem Barriera		26		26	and the same of th				36	
土	器	No.		96	21	96		22	96	23	96	24
445		種類		複合土	묾		鉢		脚部	Аз	脚部	С
摘要 法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	2	7.3 9.65 (現存 2.05 で損のためる	値)	欠損のた 8.8 (3 欠損のた 9.15	:め不 現存値	恒)	欠損のため 9.4 (現在 11.25	不明	欠損のため 13.0 (現在 22.6	
н.	土地	,	-	-4-N			N =	フウンド	F-4-N	マウンド	F-4-N	マウンド
ш.	形	態	0 \$	ユ に味のある を持つ。		1 4			1 1 1		1 1	
口												
頸	文	様										
部						欠損のた	こめ不	明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
(杯 部)	整	冬形外。 肉。 刺離のため不明		め不明								
		r,	]   0									
体	形	形態					な。裾までなだらかにひるに がり端部は上下に肥厚する。					
部	文	文 様								。有孔・凹線	泉文	
脚	整	形タ	<b> </b>   0	)		0)			。縦方向へき	磨き	0	
部		P	3   0	           	め不明	。			。絞り目		。   剝離の†	こめ不明
						。剝離の	ためフ	下明				
底		<u> </u>	K									
色		=	周	黄茶褐色		。黄褐色			。黄褐色		。灰黄褐色	
胎		=	E   °	0.1の砂粒値	<b>革かに含有</b>	0.2~0	.3のA	沙粒含有	0.1~0.20	D砂粒含有	0.1~0.40	の砂粒含有
	質		0	良好		。良好			。良好		。良好	
備		-	考			。円板充 。外面黒		b	。脚部裾に	黒斑	。裾部に一	部黒斑あり
						-						

土	器	No.	97	25	26 97		26	97	27	97	28	
Jede alla		種類	売 A			A 2			. 3		А в	
摘要 法 量 (cm)	1	录 径 高 径 径 径	欠損のため不 8.2 (現存値 入損のため不	1)	14.7 13.75 (到 ) 欠損のた	現存値		27.55 14.25 (現 } 欠損のため	存値)	27.15 8.4 (3 } 欠損のた	見存値)	
出	土坩		F-4-N	南溝	F-4-	-N	南溝	F-4-N	1 南溝	F-4-	N 南溝	
口頸	立 文 様。頸部よ 同直線 整 形 外。     割		。欠損のため不 。預部より櫛描 同直線文、同	簾状文、	立ち、斜 口縁端は 肥厚する	めに ま上下 ら。 『外一 『内一	fれ曲る。 に僅かに 櫛描波状	平に折れ曲 は下に肥厚	由り口縁端部 でする。 ト・凹線文円 内端列点文 曲波状文・同	曲る口縁 は上下に 。口縁端部 部・櫛描	に水平に折れ 部を持ち端部 肥厚する。 外・凹線文頸 波状文・同直	
答	整	内・剝離のため不明		不明	。 類部 四級 又 。 縦方向に 荒い刷毛目 。 横ナデ		直線文・四線文 。		劉離のため不明			
体	文 整	態		<b>K</b> 明	<ul><li>・頸部下より直線文</li><li>・ナデ?</li><li>・一部へラ痕。</li></ul>			欠損のたる	め不明	欠損のため不明		
底		部	。欠損のため不	7明	・欠損の†	 ため不	明	。欠損のた	め不明	・欠損のた	とめ不明	
色		調	。外—灰黄褐色 内—暗茶褐色		。灰黄褐色 中核一類			。淡暗灰褐 一部黄灰		。赤褐色		
胎	質	土	。0.1~0.4の配 。良好	<b>沙粒含有</b>	。0.1~0. 。良好	. 2のを	少粒含有	。0.1~0.3 含有 。良好	の砂粒多量に	乙。0.1~0. 。良好	4の砂粒含有	
備		考	。内外共に剝い。	離が著し				。口縁内端 。口縁内端 。2孔1対	に薄く煤付え	§ らしきも	面内側、列点文 のあり内外共 が激しいため不 る。	

						27		27			
土	器		No.	97	29	97	30	97	31	97	32
摘要	_	種	類	壺 A2	2	壶 <i>F</i>	1 2	壺 A	. 2	壺 A	. 3
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	21.85 10.45 (現存化 大損のため不		24.15 13.05 (現在 } 欠損のため		26.8 6.55 (現存 } 欠損のため	• •	36.2 13.33 (現在 } 欠損のため	
出:				F-4-N	南溝	F-4-N	 南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	 南溝
口	形文		態様	・太く短い頸部 僅かにひろか 丸く下方に扩 ・口縁外端に凹 ・頸部に貼りた 指頭圧痕文	ぶり端部は 行れ曲る。 凹線文	平に折れ曲 持つ端部は に肥厚する	る口縁部を  外反し上下 	平に折れ曲 持つ、端部 厚する。	る口縁部を は下方に肥	は僅かに外	反し下に肥 線文の上よ
部	整	整 形 外 。縦方向の刷毛目 内 。横ナデ 横方向刷毛目		5目	・縦方向に荒	い刷毛目	・縦方向に刷	毛目	。斜め、縦方	向に刷毛目	
The state of the s		横方向刷毛目		=	。横方向に荒い刷毛目 指圧痕		。横ナデ 荒い刷毛目		。剝離のため	不明	
体部	形文整	形	様	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
底			部	。欠損のため不明		・欠損のたる	)不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明
色			調	。黄灰褐色		。灰黄褐色 中核一灰色 内面一部。		。灰黄褐色		。淡茶褐色 中核一黒色	3
胎			土	○ 0.1~0.40	砂粒含有	∘ 0.1~0.3	少粒含有	0.1~0.20	D砂粒含有	0.1~0.30	D砂粒含有
	笙	ĺ		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	。内外共に剝	離著しい。			。内面剝離太	落しい。	。口縁端面外あり。	十一部に黒頭

			35		27		37		25	
土	器	No.	97	33	97	34	97	35	第13図	36
摘要	種	類	壺 A		壺 Aa		壺 A	8	壺 A	1
法 量 (cm)	腹	径高径	欠損のため不 17.6 (現存値 大損のため不	直)	30.5 11.3 (現存f } 欠損のため不	_,	19.05 38.85 32.95 8.15		欠損のためる 25.95(現存 21.05 5.1	
出:	土地!	X	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝
口	口 文 様 頸 整 形 外		・欠損のため不 ・頸部に凹線文 から棒状浮文 ・貼り付けによ 痕文 ・頸部下より波 ・	で施して こ る指頭圧	。口縁端面外に	部は下方 し肥厚す 一凹線文を にに刻目文 は列点文 ト刷毛目	に開き端部に れ曲り下に の口縁外端に	は斜めに折肥厚する。 四線文を施に円形浮文の扇状文を施まれていまり	。頸部・断面3	三角形貼り
体	形態						・腰の張った縦長のだ円形 ・頸部直下より櫛描波状 文と同直線文のくりか		ち、中位で ち張る。 、 、 頸部より最	最大径をも 大胴部に、
部	整形外		欠損のため不明		欠損のためる	<b>不明</b>	文と同自線 えし。 。 へラ? 。 荒い刷毛	文のくりカ	<ul><li> 櫛描直線文</li><li>をくり返す。</li><li>最大胴部ま 刷毛目。 ይ き、へラ削 。不明</li></ul>	, で縦方向の 【下 へ ラ 磨
底			・欠損のため不明		・欠損のためる	不明	。 ヘラ?		。ヘラ磨き。	
色		調	。黄茶褐色 中核一暗灰色	<u>五</u>	。黄灰褐色		。淡黄茶褐色		。黄茶褐色	
胎		土	∘ 0.1~0.3⊘	沙粒含有	。0.1~0.4の 含有	沙粒多量に	こ。0.1~0.2の 含有。	砂粒多量的	て。0.1~0.2の 含有	砂粒極少量
	質	24 - T-100 - T	。良好		。良好		。良好		。良好	AND
					。内面に煤付	着	。腰位に黒斑			
備		考								

								34		34	
土	器	N	lo.  -	98	37	98	38	98	39	98	40
摘要		種类	頁	鉢 P	3	鉢 D		<b>鉢</b> D	)	<b>鉢</b> D	)
法 量 (cm)		Ê	圣高圣圣	20.65 10.4 (現存 大損のため不		29.0 5.4 (現存 29.65 欠損のため不		28.8 6.85(現存 28.75 欠損のため7		25.7 8.85(現存 27.45 欠損のため7	
出	土力	也 [	X	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝
	形	į		。椀形の器形で が肥厚。	で口縁内端	。腰に稜を持ち かなカーブを 口縁部。					
	文	ħ	兼	。凹線文		。口縁端面に匹	口線文	。 衛描波状文 &	上同直線文	。櫛描直線文	: 同波状文
頸	1260	TI'Z	61			LH )>		- +tt. \_ =>		。從左向《三郎	÷ 3c
部	整	形。	<b>Y</b>	。 剝離のたる	め不明	。横ナデ		。横ナデ		。縦方向へラ駅   	# <b>3</b>
		-	内	•		。横ナデ		。横ナデ		。一部縦方向~	<b>ヽ</b> ラ
L	形	, and	態								
体	文	;	様	     欠損のため <sup>2</sup>	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
部	整	形:	外								
			内								
底			部	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明
色			調	。黄褐色		。黄灰褐色 中核一暗灰	色	。黄茶褐色		。淡黄灰色	
胎			土	○ 0.1~0.3の	砂粒含有	∘ 0.1~0.40	砂粒含有	∘ 0.1~0.3の	砂粒含有	0.1~0.30	砂粒含有
To the designation of	摩	ĺ		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	1				。口縁から腰 斑あり。	にかけて具	177	

± —	器	No.	34		27	1		. 1		1
		110.	98	41	98	42	98	43	98	44
摘要	種	類	鉢 D	I	台付鉢』	)	器 台		甕 A	7
法 量 (cm)	口縁器腹	径高径径	26.15 2.35 (現存化 大損のため不		39.45 19.15(現存化 41.35 欠損のため不		欠損のため不 18.35 (現存)	直)	14.7 9.9 (現存 19.65 欠損のため7	
出:	土地	区	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝
口頸	_		。段状口縁 。口縁上端に権	描波状文	。腰部で、はった稜を持ち内 つ口縁部 。衛描簾状文				。口縁部は外反 内外共に円明 部はするどし	<b>トを持ち端</b>
部							欠損のため不	明		
(杯 部)	整形	外	。 } ナデ		・横方向へラ磨	E #			。	
		内	0		。剝離のため不	明			0	
	形	態	,				・欠損のためる	<b></b>	・胴部はあまり ず、なだらな を持つ。	
体部	文	様	欠損のためる	~明	。有孔		。口縁内端に 。頸部凹線文	<b></b>		
脚部	整形	外			・縦方向へラ原	き	。横ナデ		。縦方向の刷= 荒い刷毛と約	
		内			。縦方向刷毛目 。わずかに絞り り		・指頭圧痕と約	交り目	。斜め方向の局	<b>削毛目</b>
			。欠損のため不	5明	。欠損のためる	下明			。欠損のためる	不明
底		部								
和		調	。黄灰茶褐色		。赤褐色		。茶褐色	3 Annual (1997) (1997) (1997)	。暗黄灰褐色	
胎	ANALAS WARRENGER	土	。0.1の砂粒少	量含有	。0.1~0.3の 。 雲母僅かに		。0.1~0.8の 含有	少粒多量に	· 0.1~0.2の	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
			。外面黒斑		。円板充塡法	?	。外面黒斑	outside the second seco		
備		考								

		T					36		27	40
土	器	No.	98	45	98	46	98	47	98	48
摘要	種	類	底部	S	甑		高杯 C	1	脚部 A	.3
法 量 (cm)	口縁器腹	径高径径	欠損のため不 3.6 (現存値 欠損のため不 4.95	直)	欠損のため不 4.25 (現存 欠損のため不 9.95	直)	31.85 3.1 (現存 ) 欠損のため不		欠損のため不 7.1 (現存 11.5 (脚部	直)
出	土地	-	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝
口頸部(杯部)	形	態様	欠損のため不		欠損のため不	(明	・水平にひろい ・円形浮文 ・ 横ナデ	ずた口縁部	欠損のためる	<b></b>
体 部 (脚 部)	文 整 形	態様外内	欠損のためる	不明	欠損のためる	<b>ド</b> 明	欠損のためる	不明	。柱状部は短ったらかに広が 上下に肥厚。 ・裾端面凹線 ・刻離のためる。 ・上半部絞り	がり端部は する。 文 不明
底		部	。内外共にへ	ラ削り	。ヘラ削り 。焼成前に穿る	rl				
色		調	。内外共に暗原	灭色	。黄灰淡茶褐色	<del>'</del>	。灰黄色		。茶褐色 脚部裾一部	暗灰色
胎	質	土	。0.1~0.3のi 含有 。良好	砂粒多量に	。0.1~0.4の7 含有 。雲母僅かに 。良好		こ。0.1の砂粒値 。良好	重かに含有	。0.1~0.2の 。雲母含有 。良好	砂粒含有
備		考							~ 同学	

土	器 ]	No.		49	28	50	28		51		- 52
			98		98		98			99	
摘要	į		脚 部	1	壺 F 2			壶 G		壺 4	<del>1</del> 2
法 量 (cm)	腹	径高径径	欠損のため不 11.6 (現存値 10.5 (脚部線	重)	9.8 15.55 13.35 8.8 (脚部	居径)	6.35 15.95 15.3 4.45			13.75 7.2 (現7 } 欠損のため	
出	土地	X	F-4-N	南溝	F-4-N	南溝	F-4	-N	南溝	F-4-N	北第Ⅱ溝
口頸部		態様	欠損のため不	明	<ul><li>腰部ではっきを持ち内弯し を持ち内弯し 縁部</li><li>口縁端面からまで櫛描波状</li></ul>	、て立つ口 ・ 四線文腰	状の口 えぐり 。口縁端 。端面か	1頸部に いとって 岩面に亥	上肥手側を こいる。 J目文 B下より凹	・短い頸部に 曲る口縁部 は下方に外 肥厚する。 ・口縁部端面	を持つ端部 反し上下に
(杯 部	整形	外			。縦方向へラ摩	<u> </u>	° )			。縦方向に需	い刷毛目
		内			。腰部指圧痕		。	-デ		。横ナデ 頸部下より	指圧痕
体		態様	らかに広がり 線文	端部に凹	は上下に肥厚	がり端部	る肩の。頸部が	O横位に いら引き	)出してい に肥手 き続き櫛描 )位置で同		
部(脚部)	整形	外内	<ul><li>縦方向へラ厚</li><li>へラ削り</li></ul>		・縦方向にへう		。縦方向 から札	句にへき 黄方向に			)不明
		17	7 111 7		。所々にヘラ		痕				
底		部			。外一縦方向へ 。内一爪痕 所々にへ 。内面に一部タ	ヘラ	・ヘラ			。欠損のため	)不明
色		調	。黄褐色		。黄灰色		。暗黄袖	曷色		。淡黄茶褐色	<u>4</u>
胎	to an annual to the Art of the Person	土	   0.2~0.3のを     含有	少粒多量に	. ॰ ०.1~०.2०५	少粒含有	∘ 0.1∼	0.301	沙粒含有	0.1~0.20	D砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好			。良好	
備		考			。円板充填法 。口縁端面か で放射線状に されている。	て朱が塗布	範囲 い。 。下半	等は図 部に欠	に朱痕あり   示 で き た 孔 あ り にかけ て 黒	2	

						32		32			
土	器		No.	99	53	99	54	99	55	99	56
摘要		種	類	壺 A	<u> </u>	葚	В 2	壺 B	2	725 727	台
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	欠損のため不 13.45 (現存的 大損のため不	値)	23.15 11.35 (現 ) 欠損のたと		25.7 8.15(現存 } 欠損のため <sup>フ</sup>		37.65 6.3 (現有 } 欠損のため	
出	74.04			F-4-N	北第Ⅱ溝	F-4-N	北第Ⅱ溝	F-4-N	北第Ⅱ溝	F-4-N	北第Ⅱ溝
	形		態	・欠損のためイ	、明	。長く立つ の口縁部。		。頸部は漏斗 縁部は上方に 受口状のもの	て立ち上る		る端部は下
頸部	文		様	。頸部に竹管文 けによる指頭				。口縁受口状の 線文を施し、 ラによる刻	その上にへ	。口縁端部に 形浮文	凹線文と円
(杯 部)	整	形		。	め不明	。   		横方向のへは縦方向の	ラ磨き頸部 副毛目		毛目
			内	°		°		。口縁部・横 き頸部・刷		間の傾りフ	
体 部 (脚 部)	形文整		態様外内	欠損のためる	不明	欠損のた	め不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
底			部	。欠損のため	不明	。欠損のた	め不明	・欠損のため	不明	・欠損のため	)不明
色			調	。赤褐色 中核一暗褐	色	。 黄茶褐色 中核一欲		。黄褐色 中核一淡灰	色	。浮灰黄色	
胎			土	∘ 0.1~0.4∅	砂粒含有	。0.1~0.5 含有	引の砂粒多量で	z ∘ 0.1~0.40	砂粒含有	。0.1の砂粒	僅かに含有
-	堂	<b>T</b>		。良好		。良好	17 var litt / 1240	。良好		。良好	
備			考			。外面一音	8亿煤付着				

			34				34		34	00
土	器	No.	99	57	99	58	99	59	99	60
摘要	<u></u>	<b>重類</b>	把手付鉢	C	壺 G:	3	鉢 I	3	鉢 口	)
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	12.25 5.1 (現存f 大損のため不		欠損のため7 15.55(現存 欠損のため7	値)	31.65 8.0 (現存 33.4 欠損のためる		27.9 9.95 (現存 29.25 欠損のためる	
出	土 地	X	F-4-N :	北第Ⅱ溝	F-4-N	北第Ⅱ溝	F-4-N	北第Ⅱ溝	F-4-N	北第Ⅱ溝
П	形	態	。斜めにまっす 縁部上端は平		<ul><li>僅かな広がり</li><li>状の口縁部る。</li><li>肩位に肥手</li></ul>			で口縁内端	。腰に稜を持ち や傾斜して <u>x</u> 縁部	į.
頸	文	様	。凹線文・刻目	主文	。頸部から腰に 描直線文と同		。凹線文		。口縁部下より 文と同波状で	
部	整形	外	。ヘラ磨きお』 り	はびヘラ削	。	み不明	。横ナデ		。横方向のへ	ラ磨き
		内	。横方向に刷っ	EB	o   NI内EOフ/こ   O	פעיי ו זיכי	。一部へラ磨	<b>3</b>	。縦方向のへ	う磨き
体部	形 文 整 刑	態様外内	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
底		部	・欠損のため	不明	。欠損のため	不明	・欠損のため	不明	。欠損のため	不明
色		調	。黄灰褐色		。淡黄赤褐色		。灰茶褐色		。淡黄赤褐色 中核一黒色	
胎		±	。0.1 <b>~</b> 0.2の 含有	砂粒多量に	0.1~0.6⊘	砂粒含有	。0.1~0.2の 。雲母含有	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		老	;				。外面煤付着	5.1 1.1	。腰部に黒我	Eあり

				36				36			
土	器		No.	99	61	99	62	99	63	99	64
摘要	_	種	類	高杯 A	1	脚	fβ	脚部 A	1 2	甕 P	
法 量 (cm)	口器腹	縁	径高径径	27.05 4.2 (現存) } 欠損のため不		欠損のため <sup>2</sup> 6.15 (現存 19.1 (脚部	値)	欠損のため7 6.85 (現存 7.7 (脚部	值)	22.3 28.8 (現存 27.25 欠損のため7	
出	土:	圳		F-4-N	北第Ⅱ溝	F-4-N		F-4-N	.,,	F-4-N	
	形		熊	。 直口の口縁で 斜する杯部で 厚する。	で外方に傾					。口縁端部は 形に外反し端 に僅かに肥厚	- く」の字 端部は上方
頸	文		様	・細い沈線一第	Ę						
部 (杯	整	形	外	。横ナデ		欠損のためっ	不明	欠損のためる	不明	0)	
部)			内	。縦方向にへき	ラ磨き					横ナデ	
体	形		態			。短い脚部で 広がる。	大きく裾に	・短い脚部です 弯する端面に		。肩から広がり く張り出し と思われる。	宝部に続く
部	文		様	欠損のためる	不明	。凹線文・爪	圧痕文	。脚部裾に凹着	泉文	。上半部縦、	郊外古島で
(脚 部)	整	形	外内			。	め不明	。縦方向へラ! 。上半部絞り 。下半部横ナ	目	利毛目 ・下半部へラド ・肩部斜め方に ・縦方向刷毛に 圧痕	削り 旬に刷毛目
底			部							・欠損のため	不明
色			調	。乳灰黄色		。淡灰黄褐色	1	。淡黄褐色		。茶褐色	
胎			土	° 0.1~0.307	砂粒含有	0.1~0.80	砂粒含有	∘ 0.1~0.2⊘	砂粒含有	0.1~0.40	砂粒含有
	翼	Ĩ		。良好		。良好		。良好		。良好	11.24
備			考	。外面に黒斑 。内面一部に		。脚部裾黒斑。台付鉢		。内面煤付着。台付鉢		。内外共に煤 。内面に一部	

	mm.		28	0.5	28	0.0	32	0.7	31	60
土	器	No.	99	65	100	66	100	67	100	68
摘要	種	類	壺 A2		無頸壺	В1	無頸壺	Ві	壺 A	<b>L</b>
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	21.55 32.55 29.15 7.1		10.05 8.05 (現存 16.05 欠損のため不		21.35 6.4 (現存 大損のため不		16.85 1.8 (現存 } 欠損のため不	
出:	土地	区	F-4-N	北溝	G-4-B 第エオ	大形土拡	G-4-B 第1カ	形土坛	G-4-B 第 I ナ	· 形土坎
П	形	態	。太く短い頸部 漏斗状に開く 下に肥厚する	端部は上		と状口縁部		内方に傾	。漏斗状に開き	
頸	文	様	。口縁端部外は 部内は管状の 。頸部波状文・	扇状文			。口縁端面外は	二凹線文	。外円形浮文 。内櫛描波状3 文、扇状文	文、円形沼
部	整形	外内	。	)不明	。横方向の細い 。横ナデ	ハヘラ磨き	。頸部より横刀 <b>磨き</b> 。横ナデ 。縦方向に刷 より横方向	<b>毛を施し上</b>	                 	
体	形文	態様	。太い頸部のま 広がり腰は厚す。	底く張り出	。腰は底くは	り出す。				
部	整形		帯から始まり 直線文のくり 。肩から腰にな 痕、腰部へ 。腰部横方向の 腰部下、底部	)波状文と )返し かけて指圧 ラ痕 のヘラ磨き 部にかけて	。横方向のへ		欠損のため	不明	欠損のため	不明
			縦方向のへ <sup>1</sup> 。へう磨き	<u> </u>	。欠損のため	工用	・欠損のため	不用	・欠損のため	不明
底		部	・ハン階さ		- <b>八頂</b> 切だめ	(1,6) <u>7</u>	- 八I凤のため	- היי	- \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	€עיין
色		調	。黄灰褐色		。暗灰色		。灰黄色		。淡黄褐色	
胎		土	。0.1~0.3のP 。雲母僅かに		。0.1の砂粒値	重かに含有	∘ 0.2~0.3∅	砂粒含有	。0.1 <b>~</b> 0.2の 有	砂粒少量
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	けて小して	ら底部にか はあるが植	。外面腰部に 。内面腰部に 着物		j			

	ᄪ		.	31	60	31	70		17-1	31	72
土	器		No.	100	69	100	70	100	71	100	12
摘要		種	類	壺 A2	2	壺 A:	2	壺		壺 A:	3
法量	口器腹		径高径	21.35 5.75(現存化 )	直)	23.76 10.8		欠損のため不 17.65(現存 25.75		31.65 4.54 (現存	
(cm)	底		径	欠損のため不	明	<u></u> 欠損のためる	「明	欠損のため不	明	欠損のため不	明
出:	土力	也	区	G-4-B 第Ⅰ大	形土坛	G−4−B 第Ⅰカ	大形土坛	G-4-B 第1カ	术土址	G−4−B 第Ⅰヲ	·形土坛
П	形		態	。短い頸部に水 曲る口縁部、 かに上下に肌	端部は僅 四厚する。	曲る口縁部、 下に肥厚して はり出す。	端部は上 下端は外に	。欠損のため不		。下端に大きく   口縁	
頸	文		様	。口縁部端面外 。端部内は列点 頸部に櫛描直	文	。端部外に凹線 に扇状文 頸部に櫛描記		。口縁下部に権	游描直線文	。口縁外端に四 しその上に四 内端に列点3	引形浮文、
部	整	形	外	。一部縦方向に 目	<b>二荒い刷毛</b>	。横方向に細い	小刷毛目	。縦方向に刷毛	<b>5</b> 目	。	
			内	。剝離のため不	「明	。横方向に荒り	い刷毛	。横ナデ			
体	形		態					。腰が底く張り	)出すもの		
14	文		様	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	。頸部から腰に 線文、波状で えし		1	不明
部	整	形	外内					<ul><li>・頸部から腰を 刷毛目、腰。</li><li>へラ磨き</li><li>・腰から下、終 毛目</li></ul>	より下まで	3	
				・欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明
底			部								
色			調	。灰黄褐色		。淡灰黄白色		。黄褐色	and a second	。暗灰色	
胎			土	∘ 0.1~0.3⊘₹	沙粒含有	。0.1~0.4の 含有 。雲母僅かに		- 0.1~0.3の 。雲母少量含		。0.1の砂粒質	重かに含有
	質	ĺ		。良好		。良好	ш 13	。良好		。良好	
備	and the same of th		考	煤付着	部にかけて	「。内面頸部に 。内面剝離が		・腰部に黒斑・底部付近薄	-	・内外共に煤	付着

土	器	No.	100	73	100	74	100	75	34 100	76
摘要	種	種	壺 As			3	壶 B	1	鉢	D
油安 法 量 (cm)	日縁  お  に	径高径径	28.3 5.15 (現存値 大損のため不		24.1 6.8 (現存f 大損のため不	直)	29.15 4.95(現存 入損のためる	値)	35.8 4.85(現在 } 欠損のため	字値)
出:	土地	X	G-4-B 第 I 大	形十坊	G-4-B 第1大	、形土 広	G−4−B 第Ⅰ→	· 形土 広	G-4-B 第 I	 大形土坛
	形	態	。短い頸部水平 る、端部内は り下に肥厚す	に折れ曲 平らにな		下方に垂		代に開く口 こ立ち上る	。口縁端を外	
頸	文	様	。口縁部端面凹 に円形浮文	線文の上	。口縁端部に世 から円形浮文		。口縁受口状 <i>0</i> 線文	部分に凹	。櫛描波状文	
部	整形	外内	。	不明	。	)不明	。 。 。 。	か不明	。     横ナデ	
体	文 整形	態様	欠損のため不	明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明
部		内	 	· HH	・欠損のため		・欠損のため	<b>エ</b> 田	・欠損のため	<b>大田</b>
底		部	・火損のため不	9	。人類のためん	N-19-1	。人類のため	个明	・八損のため	J-(1-19 <u>1</u>
色		調	。赤褐色 中核一暗灰色	<u>.</u>	。赤茶褐色		。淡黄灰褐色 中核一黒灰	褐色	。暗茶褐色	
胎		土	。0.2~0.7の砂	>粒含有	∘ 0.1~0.3の	沙粒含有	· 0.1~0.30	砂粒含有	。0.1~0.30 有	)砂粒少量含
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	<ul><li>口縁端面外側にかけて一り。</li></ul>		り。口縁端面外 にかけて一 り。					

r	00		34	77	. 34	78		79		80
土		No.	100	77  -	100	18	100	19	100	80
 摘要	種	類	鉢 D	)	鉢 C		鉢 C	)	脚部E	3
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	35.8 6.2 (現存f 欠損のため不		26.45 8.9 (現存付 26.95 欠損のため不		33.2 6.1 (現存 } 欠損のためる		欠損のため7 6.55(現存 欠損のため7 22.2	値)
出:	土 地	区	G-4-B 笠 1-7	大形土	G-4-B 第1カ	形土坛	G-4-B 第 I フ	<b></b> 大形土	G-4-B 第 I フ	大形土坛
ALAMAN MINE	形	能		则下方に折		つ直口の	。腰に稜を持	つ直口の		
頸	文	様	。口縁端面凹線 。口縁下より桁 と同直線紋		。凹線文		。凹線文		欠損のためる	不明
	整形	外	0)		。ヘラ削り		0)			
部		内	   。   。   。	か不明	。所々にへう		。	め不明		
	形	態								
体	文	様	欠損のため	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	剝離のため	不明
部	整形	外内								
	1		。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明		
底		部								
色	13.77	調	。淡黄茶褐色	!	。淡黄灰褐色		。淡灰黄褐色	ı	。黄茶褐灰色	i
胎		£	0.1~0.60	砂粒含有	。0.1 <b>~</b> 0.3の 有	砂粒少量的	含。0.1~1.0の 含有	砂粒多量的		砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	。外面・口縁 けて一部黒				・口縁端面に	<b>光</b> 黑斑	。黒斑あり	

			34		28				28	
土	器	No.	100	81	100	82	100	83	101	84
摘要	種	類	鉢 A		壺 Ga	3	鉢 D		蓋	
法量	口縁器腹	径高径	20.85 8.5 (現存化 18.75	直)	8.55 13.25 (現存化)		44.15 9.05(現存化 49.6	直)	15.15(裾部) 5.75	)
(cm)	底	径	欠損のため不	明	欠損のため不	、明	欠損のため不	明	5.0 (つま	み部)
出:	土 地	区	G-4-B 第 I 大	形土坛	G-4-B 第 I 大	形土址	G-4-B 第 I 大	形土坛	G-4-B 第 I ナ	形土坛
П	形	態	。口縁は短く水 曲る。	平に折れ	。口縁は直口		。腰に稜を持ち 斜して段状口 つ			<b>Cカー</b> ブを
頸	文	様			。凹線文 。頸部から腰に 描直線文	こかけて櫛	。口縁端面に凹 。頸部下より素 線文			
部	整形	外	。縦方向に刷毛 へラ削りの上 磨 <b>き</b>		・所々にへう痘	Į	。横ナデ		。   	か不明
and ,		内	。横ナデ		。横ナデ		。横ナデ		•	
体	形文	態様	欠損のためる	べ明	欠損のためる	不明	欠損のためフ	<b>下明</b>		
部	整形	;; 外 内								
底		部	。欠損のためる	<b>不明</b>	。欠損のためフ	不明	。欠損のため	不明		
色		調	。暗灰黄色		。暗灰褐色		。茶褐色		。淡灰黄色	
胎		土	॰ 0.1~0.3©	沙粒含有	∘ 0.1~0.2⊘₹	沙粒含有	。0.1~0.3の 含有	沙粒多量に	- 0.1~0.4の	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	。煤付着							

1.量 (cm)     出       1.量 (cm)     出       1.2 形     文       2 整     形       3 を     人       4 次     人       4 次     人       5 と     人       5 と     人       6 と     人       7 と     人       8 と     人       7 と     人       8 と     人       7 と     人       8 と     人       9 と     人       1 と     人       1 と     人       1 と     人       2 と     人       2 と     ト       2 と     ト       2 と     ト       3 と     ト       4 と     ト       5 と     ト       6 と     ト       7 と     ト       8 と     ト       8 と     ト       9 と     ト       9 と     ト       1 と     ト       1 と     ト       2 と     ト       2 と     ト       2 と     ト       2 と     ト       2 と     ト       2 と     ト       2 と     ト       2 と     ト	種/ 経高径径 区 態 様 外	101  類	値) み部) 大形土広 持ち笠形の	第16図 蓋 11.35 17.35 (脚部 G-4-B 第 I 大	86 - 網径) 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二		値) <明 大形土 拡 こ「く」の トる口縁部	。口縁部は外反 面に稜を持つ	世) 明 形土拡 するが内
法量(m)     出     口     類     部       口器腹底     土     形     文     整     形     び     整		を 経 欠損のため不 高 3.1 (現存) 経 1.95 (つま) 区 G-4-B 第 I ブ 態 っつまみ部を持 蓋である。	値) み部) 大形土広 持ち笠形の	11.35 17.35 (脚部 G-4-B		20.75 3.1 (現存・ 3.1 (現存・ を担かする) (現存・ (現存・ (現存・ (現存・ (現存・ (現存・ (現存・ (現存・	値) <明 大形土 拡 こ「く」の トる口縁部	9.45 8.65 (現存何 9.3 欠損のため不 G-4-B 第 I 大 。口縁部は外反 面に稜を持つ	世) 明 形土拡 するが内
法量(m)     出     口     類     部       口器腹底     土     形     文     整     形     び     整	高径径 区態       様       外	高 径 径 1.95 (つま 区 G-4-B 第 I J 態 。つまみ部を検 蓋である。	値) み部) 大形土広 持ち笠形の	17.35 (脚部行 G-4-B		3.1 (現存 欠損のためイ G-4-B 第 I ブ ・円味を帯びた 字形に外反す で端部は上	<ul><li>、明</li><li>大形土坂</li><li>こ「く」の</li><li>トる口縁部</li></ul>	8.65 (現存値 9.3 欠損のため不 G-4-B 第 I 大 。口縁部は外反 面に稜を持つ	明 形土 <u>拡</u> するが内
形文整形体部	ぎ 様	第15   歳 。つまみ部を検   蓋である。   様	寺ち笠形の	G-4-B 第I大	形土拡	第1分 ・円味を帯びた 字形に外反す で端部は上	こ「く」の トる口縁部	第 I 大 ・口縁部は外反 面に稜を持つ	するが内
口類部体体部	文 様 悠形外	態。つまみ部を表蓋である。	寺ち笠形の		To be a second of	。円味を帯びた 字形に外反す で端部は上	こ「く」の トる口縁部	面に稜を持つ	i
部体を変響		外 。縦方向のへ	5 麻 3-			・頸部に櫛描》 ・有孔	皮状文		
体が、変響	内		ノ店さ			° ]		。横方向刷毛目	
体が、変響		内。ヘラ削り				。	め不明	。横ナデ	A COMMANDA AND THE STATE OF THE
部		態様		。おそらく長い もち裾部はな ひろがり端部 かに肥厚する	ょだらかに %は上下僅			。口径とあまり 腹径で小型な 甕と比べると い。	がら他の
部						欠損のためる	不明		
底	整形外			。縦方向のへ。 。裾部端面は 。柱部に絞り	黄ナデ			<ul><li>ヘラ削り</li><li>ヘラ削り</li></ul>	
底	Ŋ	内		。 た で た で た で た で の ナ デ ?	=1			) A D HILL	
	书	部				。欠損のため	不明	。欠損のためフ	S眀
色	in the state of th	。暗茶褐色調		。暗褐色		。淡赤茶褐色	·	。灰茶褐色	
胎	質	土 。0.1~0.2の。良好	砂粒含有	。0.2~0.4の 含有 。雲母及びか 少量含む 。良好	,,,,,,	- 0.1~0.2の 。 良好	砂粒含有	。0.2~0.4のF 。良好	沙粒含有
備				。上下に円板 。全面的に煤 。高杯脚部の	が付着			。外面濃く煤( 。内面頸部と 付着	

	nn.		33	00	29		33	0.1	33	0.0
土	器	No.	101	89	101	90	101	91	101	92
 摘要		種類	甕 B		甕 B	•	甕 F	3	甕 B	
法 量 (cm)	口器腹底	<b>経</b> <b>経</b> <b>経</b> <b>経</b>	14.65 5.55(現存化 大損のため不		12.85 11.75(現存 14.35 欠損のため不		12.3 8.9 (現存 13.55 欠損のためる		14.85 7.95 (現存 17.45 欠損のため不	
出	土 地	X	G−4−B 第Ⅰ大	:形土坛_	G-4-B 第 I ナ	形土坛	G−4−B 第Ⅰフ	大形土坛	G-4-B 第 I ナ	形土坎
口	形	-	<ul><li>斜めに外反す で端部は上に</li><li>る。</li></ul>	立ちあが	端部は上に	立ちあが	で端部は上にる。	こ立ちあが		がる。
頸	文	様	。口縁端面は凹	線文	。口縁端部に臣	出級文	。口縁端面は凹	山級又	。口縁端面は凸	出級又
部	整刑	彡 外 内	。横ナデ 荒い刷毛目 。横ナデ		横ナデ		。   		。縦方向に刷毛 。横ナデ	5目
	形	態	刷毛目		。なだらかなっ ち腰はあまり				。なだらかなっ ち腰はあまし	
体	文	様			ه ر ع		ر ئ ا		ە <sup>ر ئ</sup>	
	整子	形外.	欠損のためる	5明	・ヘラ削り		・縦方向の荒	い刷毛目	。刷毛目	
部		内			。縦方向に刷	毛目	。斜め方向の 々に縦方向	刷毛目の所	「。横ナデ	
底		部	。欠損のためっ	下明	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	・欠損のためる	不明
色	AMERICAN AND AND AND AND AND AND AND AND AND A	調	。淡黄灰褐色		。暗茶褐色		。灰黄色		。茶褐色	
胎		<b>±</b>	॰ 0.1~0.5のन	少粒含有	· 0.1~0.20	沙粒含有	  。0.1 <b>~</b> 0.2の   含有	砂粒僅かに	- 0.1~0.200	 砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考			。内外共に濃 。内面に炭化		。外面頸部よ 。内面黒斑	り煤付着	。内外共に煤	付着

			29							
土	器	No.	101	93	101	94	101	95	101	96
摘要		類	甕 C		甕 C		甕 C		甕 C	
法 量 (cm)	腹	径高径径	16.75 $27.6$ $20.65$ $5.15$		27.05 9.15(現存値 入損のため不		39.65 7.75(現存化 】 欠損のため不		36.45 21.75 (現存化 43.75 欠損のため不	
出 .	土地	X	G-4-B 第 I 大	形土坛	G−4−B 第Ⅰ大	形土坛	G-4-B 第Iナ	形土拡	G-4-B 第Iナ	形土坛
口頸	文	態様	<ul><li>・斜めに広がり</li><li>味を持つ「くの端部は僅かがりを持つ。</li><li>・口縁端面に凹</li></ul>	」の字形 >に立ちあ	。斜めに外反 <b>す</b> で端部は僅か りを持つ。		。口縁部は「く に外反する。	」の字形	。円味を帯びた 字形に外反す に端部は上丁 厚する。	る口縁部
	整形	外	0)		0)		。横ナデ		0	
部		内	   横ナデ		横ナデ		。横方向の細い 荒い刷毛目	心刷毛目と	横ナデ	
体	形文	態様	。なだらかなす ち腰はあまり い。						。肩から丸く引	長り出す。
	Total Parket				欠損のためる	5明	欠損のためる	<b></b> 下 明		
部	整形	外	。縦方向に刷き	E目					。縦・斜め方向 あった荒い	
		内	。縦・斜めに引 細い刷毛目	荒い刷毛と					。斜め方向に- 毛目	一部荒い刷
			。内外共にへ	ラ削り	・欠損のためる	不明	・欠損のためる	不明	・欠損のためる	不明
底		部								
色		調	。暗茶褐色		。淡暗灰黄褐色	<u> </u>	。淡暗灰褐色		。黄茶褐色	anna aideanna ann aideach in Iomhaidhe i a dheithe
胎		土	。0.1~0.4の 。雲母含有	沙粒含有	∘ 0.1~0.4⊘₹	沙粒含有	。0.1~0.3の 。雲母含有	沙粒含有	· 0.1~0.30	砂粒含有
100 mm and	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	・内外共に濃	く煤付着			・内外共に薄	く煤付着	。外面・薄く	煤付着
νE		77						A. P. PARTITION OF THE		

1.	יינט	.		0.7		00	32	- 99	34	100
土	器	No.	101	97	101	98	101	99	101	100
摘要		種類	甕底部	3	甔		複合土	器	脚部	В
法量	口器腹	高径	欠損のため不 6.65 (現存 欠損のため不	恒)	欠損のため不 3.85(現存 欠損のため不	直)	欠損のため <sup>2</sup> 5.45 (現存 入損のため <sup>2</sup>	值)	欠損のため7 4.15 (現存 <sup>4</sup>	值)
(cm)	底	径	$\frac{5.9}{G-4-B}$		$\begin{array}{ c c c c c c c c c c c c c c c c c c c$		G-4-B		9.3 (脚部 G-4-B	佐住 <i>)</i>
出:	土地		第1カ	形土坛	第三十	形土坛	第1	大形土坛	第Ⅰカ	大形土坎
口	形 文	態					<ul><li>器台部・口音</li><li>分</li><li>の四線文の上音</li></ul>			
頸	X	134	欠損のためる	下明	欠損のためる	、明	よる刻目文		1	不明
部	整于	形 外 内					<ul><li>横ナデ</li><li>口縁部は垂 面へラ削り</li><li>横ナデまた へラ磨き。</li></ul>	0		
体	形文	態							<ul><li>短い脚部で だらかにひ は少し稜を を持つ。</li><li>四線文・円</li></ul>	ろがる端面 もつが円®
		196					欠損のため	不明		
部	整	形外	・縦方向の刷	毛目	。縦方向に刷	毛目			。 } 横ナデ	
	'	内			。剝離のため	不明			0	
底		溶	。あげ底の底 。木葉痕	<b></b>	。焼成前に穿	FL	・欠損のため	不明		
色		調	。茶褐色	A STATE OF THE STA	。茶褐色		。黄灰色		。淡茶褐灰色	ı
胎		土	∘ 0.1~0.5⊘	砂粒含有	。0.1の砂粒値	重かに含有	0.1~0.30	)砂粒含有	。0.1~0.2の 有	砂粒少量
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
	:		。底部全面黑	斑	。外面黑斑				改黑面代。	
備		考								

								36		29	
土	器		No.	101	101	102	102	102	103	102	104
摘要		種	類	器 台		高杯 A	1	高杯 A	. 1	高杯 A	A 2
法 量 (cm)	口器腹		径高径径	欠損のため不 13.55 (現存的 4.35		32.15 4.45 (現存化 欠損のため不		36.2 4.0 (現存 欠損のため7		16.6 6.8 (現存 17.25 欠損のため <sup>2</sup>	
出	土	地	区	G-4-B 第 1 +	形土拡	G-4-B 第 I +	形土拡	G-4-B ⇔ 1-4	、形土坎	G-4-B 第1-	大形土拡
杯	形		態様				.傾むく杯	。直口の杯部で	端部内方	。ゆるやかに;	<b>カー</b> ブをえ
部	整	形	外内	欠損のためイ	<b>、</b> 明	<ul><li>一部荒い刷毛</li><li>荒い刷毛目</li></ul>	題	。横ナデ 。端面へラ		。縦方向にへ	As a second of the second of t
			1.7					Phoppi		1,42,5 1. 51 -	, ,,,, с
胠	形文		態様	。凹線文		欠損のためる	<b></b> 「明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明
部	整	形	外内	。刷毛目							
底			部								
色			調	。茶褐色		。黄灰色		。黄灰色		。青灰黄褐色	
胎			土	。0.1~0.4の 含有	沙粒多量に	० ०.1~०.2०५	少粒含有	。0.1の砂粒值	かに含有	∘ 0.1~0.5⊘	砂粒含有
	貿	Ţ		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考							。内外共に煤	付着

Militar				36							
土	器		No.	102	105	102	106	102	107	102	108
摘要		種	類	高杯	В	高杯 C	2	脚部 2	A 3	脚部 4	A 2
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	18.55 6.25 (現存 22.25 欠損のため不		21.45 7.05(現存値 入損のため不		欠損のため <sup>2</sup> 8.2 (現存 7.6 (脚部	値)	欠損のためる 8.4 (現存 8.15 (脚部	値)
		rla		大損のためれ G-4-B	\HJ	G-4-B		G-4-B		G-4-B	
杯	土		態様	第1大	形土坂 次子らで内	第 I 大 。口縁部は水平 り端部は上方 立ち上りを持	に僅かに	第15	大形土坊	第15	大形土拡
部	整			。横方向の刷毛	目	。縦方向に刷毛		欠損のためる	不明	欠損のため	不明
			内	。 <b>ナ</b> デ		。頸部ヘラ削り					
脚	形文		態様					<ul><li>短い脚部でかれて外弯すい。</li><li>助部裾に凹り</li></ul>	る端面は丸	。柱状部かられ らかにひろっ 凹線文	
部	整	形	外内	欠損のためる	<b>、明</b>	欠損のためイ	<b>ぶ</b> 明	。縦方向へラ! 。上半部絞り	· 目	<ul><li>縦方向へラ!</li><li>上半部絞り</li><li>下半部へラ!</li></ul>	目
底			部								
色			調	。茶褐色		。淡黄褐色 中核一黒色		。茶褐色		。淡黄白褐色	
胎			土	॰ 0.1~0.3の	少粒含有	。0.1~0.2の配	少粒含有	。0.1~0.2の 含有	砂粒僅かに	。0.1~0.3の 。雲母含有	砂粒含有
	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	・ 外面黒斑あ	b .			。裾部内外共	に黒斑	。脚部裾に黒	斑

									32	
土	器	No.	102	109	102	110	102	111	102	112
摘要	種	類	脚部 A	.1	壶 A:	2	壺 A:	3	壺 D	1
法量	口縁器	高	欠損のため不 11.85(現存		18.65 9.4 <b>5</b> (現存	直)	14.25 6.2 (現存	直)	10.15 14.4 (現存	値)
(cm)	腹底	径径	12.3 (脚部	裾径)	} 欠損のため不	明	} 欠損のため不	明	欠損のためる	明
出	土地	X	G-4-B 第 I ナ	、形土	F-4-N	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝
	形	態			少し開がり端 下方に折れ	端部は丸く	。短く立つ頸音 外反する口線 外側下方に肌	縁部、やや		
頸部	文	様	欠損のためる	下明	る。 。口縁端面に権 。頸部に同直線 状文		。口縁端面外側 る刻目文	則へうによ	。凹線文・櫛技	苗波状文
(杯 部	整形	外			。一部刷毛目		。一部刷毛目		0	and the second
		内			。剝離のためる	不明	・剝離のためる	不明	。   剝離のた?	め不明
体部(脚	形文	態様	。裾までなだり り端部は上 <sup>-</sup> る。	下に肥厚す		不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明
部	整刑	外内	。縦方向へラ月 。上半部絞り 削り 。下半部横方	目一部へき						
底		部			。欠損のため	不明	・欠損のため	不明	・欠損のため	不明
色		調	。暗茶褐色 中核一淡黄	茶褐色	。灰黄褐色		。暗灰黄色		。暗茶褐色	
胎		土	∘ 0.2~0.3⊘	砂粒含有	· 0.1~0.40	砂粒含有	。0.1 <b>~</b> 0.5の 含有	砂粒多量的	て。 <b>0.2~0.3</b> の 含有	砂粒多量に
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	。外面煤付着				。内面に煤付 。内外共に剝			
thi										

_L	дд	N		110		444	30	115	35	110
土.	器	No.	102	113	102	114	102	115	102	116
摘要		種類	壺 B:		壺 B	1	董 E	3	壺	
法 量 (cm)	口器腹底	<ul><li>経高径径</li></ul>	26.6 4.5 (現存付 】 欠損のため不		27.75 6.45 (現存 大損のためる		6.85 10.75 9.5 2.65		欠損のためる 6.4 (現存 20.05 欠損のためる	値)
出	土 地	区	F-4-N 3	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝
口	形文	態様	。直口の口縁で 肥厚している 。凹線文		<ul><li>・頸部は漏斗り 縁部は上方に 受口状のもの</li><li>・口縁受口状の</li></ul>	<u>-</u> 立ち上る )。	外面に折れ る。			
頸		150			線文	H223 ( -			欠損のため	不明
	整用	多外	0)		° )		。剝離のためる	不明		
部		内	   横ナデ		剝離のたる	〉不明	。横ナデ			
	形	態					。腰は底くは	り出す。		of the space of th
体	文	様							。断面三角形 凸帯の上へ	
			欠損のためる	下明	欠損のためる	下明				
部	整升	形 外					。剝離のためる	不明	0	
цþ		内					。横方向のへ	ラ磨き	剝離のた	め不明
底		部	。欠損のためる	下明	。欠損のためる	不明	。ヘラ磨き		。欠損のため	不明
色		調	。淡白黄灰褐色	<u>4,</u>	。淡灰黄褐色		。淡灰黄色		。茶褐色	
胎		土	。0.1~0.2の何。 。雲母含有	少粒含有	· 0.1~0.307	沙粒含有	· 0.1~0.30	砂粒含有	。0.2~0.9の 含有	砂粒多量的
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考					。頸部に2孔り。	 1 対の孔あ		

接量 (cm)   出   口頸部 (杯部)	種	_	102 鉢 C 17.6 2.75 (現存・ 入損のためる F-4-N ・腰に稜を持っ と思われる。	値) 、明 東第Ⅱ溝   の直口の鉢	102 鉢 I 19.2 3.6 (現存 21.0 欠損のためる F-4-N	値)	102 脚部 欠損のため7 8.0 (現存 17.5 (脚部	K明	102 *	
法量(cn) 出口頸部(杯部)		径高径径 区 態	17.6 2.75 (現存 ) 欠損のためる F-4-N 。腰に稜を持つ	値) 、明 東第Ⅱ溝   の直口の鉢	19.2 3.6 (現存 21.0 欠損のためる	値)	欠損のため7 8.0 (現存	K明	36.4 10.85 (現存化	
法量(cn) 出口頸部(杯部)	器腹底 地 形	高径径 区態	2.75(現存) 欠損のためる $F-4-N$ 。腰に稜を持っ	末第Ⅱ溝   つ直口の鉢	3.6 (現存 21.0 欠損のためる		8.0 (現存	值)	10.85 (現存)	直)
出 工 頸部 (杯部)	. 地	区態	。腰に稜を持つ	つ直口の鉢		1 93		裾径)	} 欠損のため不	明
口頸部(杯部)	形	態	。腰に稜を持つ	つ直口の鉢		東第Ⅱ溝	F-4-N		F-4-N	 東第Ⅱ溝
部 (杯 部)	文	様			。腰に稜を持ち やや傾斜して 口縁部を持つ	ら、内方に て立つ段状			。口縁は「く」 外反し端部に かに肥厚する	は上方に僅
部			。刻目文・櫛打 同波状文	描直線文・	。円形浮文		欠損のためる	不明	。頸部には貼り る指頭圧痕了	
	整 形	外内	。   		。             				。     横ナデ	
	形文	態様					<ul><li>短い脚部で だらかにひ。</li><li>有孔</li></ul>			
部(脚部)	整形	: 外	欠損のため	不明	欠損のため	不明	。 } 剝離のた	め不明	横ナデ	
底	99 00 00 00 00 00	部	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明			・欠損のため	不明
色		調	。淡黄白色 中核一灰色	1	。黒色~暗茶	褐色	。灰茶褐色		。明茶灰褐色	
胎		土	。0.1~0.3の 有	砂粒少量含	0.1~0.30	砂粒含有	。0.1~0.3の 含有	砂粒多量的	て。0.1~0.3の 。雲母含有	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
	al-anaman and anaman a		・外面に黒斑	<u> </u>			。外面に煤化	<b> </b>		
備		考			1					

±	器	No.	102	121	102	122	102	123	102	124
商要		種類	底 音	部	底 部	3	底 部	3	底	部
法 量 cm)	口器腹底		欠損のため 3.75 (現存 欠損のため 6.95	値)	欠損のため不 3.05(現存 欠損のため不 6.65	直)	欠損のため不 9.5 (現存 欠損のため不 7.5	値)	欠損のため 5.2 (現有 欠損のため 4.5	萨値)
出:	土 均	k 🗵	F-4-N	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝	F-4-N	東第Ⅱ溝
口	形文	態様								
頸			欠損のため	不明	欠損のためる	下明	欠損のためっ	不明	欠損のため	不明
	敕	形外		,						
部	æ,	内内								
	777.6	440								
	形	態								
体	文	様								
部	整	形外	・横方向へラ	磨き	。縦方向にへ 毛目	ラ磨きと刷	・縦方向にへ	ラ <b>磨き</b>	。ヘラ削り	
		内	· ヘラ?		。不明		。斜め・縦方	向に刷毛目		
底		部	・外面へラ削・木葉底	] b	。ヘラ 。僅かではあ 状である 。木葉底	るがあげ底	· ヘラ		。内面指圧症	Į
色		語	。淡灰茶褐色		。暗茶褐色		。黄灰褐色	ant topy or entire the control of th	。黄褐色	
胎			0.1~0.40	)砂粒含有	。0.1 <b>~</b> 0.3の 含有	砂粒多量に	○ 0.1~1.00	砂粒含有	0.1~0.20	D砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
					。底部内外共	に黒斑			。底部に黒	 <del></del>
備		*	Š							

				30				30		31	
土	器		No.	103	125	103	126	103	127	103	128
摘要		種	類	壺 A		壺 A <sub>1</sub>		壺 A:	3	壺 A:	
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	欠損のため不 12.05 (現存化 】欠損のため不	直)	15.95 9.05 (現存化 ) 欠損のため不		23.0 21.35 (現存f 29.6 欠損のため不		22.55 8.05 (現存	
出:	土 :	地	区	F-4-N 第Ⅱ大	光土坎	F-4-N 第Ⅱ大	形土坛	F-4-N 第 II 大	 -:形土拡	F-4-N 第 II オ	ボ土坎
П	形文		態様		を持った (平に折れ うつものと	。漏斗状に開く 。口縁端面刻目	口頸部	。太く短い頸音 僅かに開き端 へ肥厚する。 。頸部外面櫛指	『に口縁が 常部は下方	<ul><li>、太く短い頸音 僅かに開き端 方へ張出す。</li><li>口縁部端面に</li></ul>	器に口縁が 語部は下外
頸						頸部櫛描波状 内面竹管文	ťΣ.	同直線文		櫛描波状文 。頸部に同直線	東文
部	整	形	外	。ナデと思われ	<b>いる。</b>	。荒い刷毛目		。横ナデ		・剝離のためる	明
	To the second se		内	。頸部絞り目		。横方向の荒い	刷毛目	。剝離のためる	下明	。横ナデ	Haddy Laboure and the second s
体	形		態様					。腰が中頃でするのと思われる。 櫛描直線文		-	
部	整	形	外内	欠損のためる	不明	欠損のためる	(明	。	か不明	欠損のためる	<b>下明</b>
底			部	。欠損のためる	不明	・欠損のためる	不明	。欠損のためる	不明	。欠損のためる	不明
色			調	。暗灰黄色		。黄茶褐色		。黄茶褐色		。黄褐色	
胎			土	∘ 0.1~0.3⊘₹	沙粒含有	· 0.1~0.307	沙粒含有	∘ 0.1~0.3の	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有
- M (1) (0) (0) (0) (0) (0) (0)	鱼	Ī		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考					。内面剝離の	ため不明		

,	nn		1		100	30	100		191			132
土	器	No.		103	129	103	130	103	131	103		134
摘要		種類		壺 A2		壺 Aa		壺 D:	2		壺 Dı	
法 量 (cm)	口器腹底	る 経 高 径 径	1	21.45 9.7 (現存化 欠損のため不		18.05 5.15(現存作 大損のため不	-	11.25 11.15(現存 ケ損のためる		} 欠損の		
出 :	土坦			F-4-N 第Ⅱ大	 :形土坛	F-4-N 第Ⅱ大	:形土広	F-4-N 第Ⅱナ	:形土坛	F-4		形土坛
口頸	形文	態様		平に折れ曲る 口縁端は上方 る。	, 口縁部、 , に肥厚す , 付けによ	。太く短い頸笥 僅かに開き端 方に張出す。 。口縁内外に欠	部は下外	<ul><li>頸部が細くしに広がる。口 値かに内弯。</li><li>口縁端・円折・ の口縁から強き 櫛描直線文と って付け凸帯</li></ul>	1縁近くは rる。 が浮文 塚にかけて : 同波状文	ば直立 しでは る。 。凹線文 目文	し口縁 あるか	近くは少 が内弯 <b>す</b>
	整	形外	.	。縦方向に刷モ	目	。縦方向に荒し	刷毛目	°)		0).		
部		内	]	。横ナデ		。横方向に荒い	心刷毛目	。	か不明	。	のため	不明
体部	文 整	態材少	Ŕ <del> </del>	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損の	)ためる	KIH
底		拉	β	・欠損のため	不明	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	。欠損の	うためえ	下明
色		======================================	周	。黄褐色 中核一淡灰1	色	。淡黄赤褐色 中核一淡灰 <sup>,</sup>	色	。黄褐色		。黄赤衫	易色	
胎		=	Ł.	。0.1の砂粒少	>量含有	∘ 0.1~0.2⊘	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	∘ 0.1~	0.40A	沙粒含有
	質			。良好		。良好 。内面と外面 質である。	の竹材が勇	。良好 。外面に煤付	————— 着	。良好		
備		i k	考			g (0) 00				- AND AND COMPANY OF THE PROPERTY OF THE PROPE		

土 / 接 法 量	器		No.			30 103 134 日		34		34	
法量		103   103			133	103	134	103	135	103	136
法量	_	種	類	壺 Eı		鉢 B		鉢 <i>A</i>	7	脚 部	
(cm)	口器腹底		径高径径	15.95 17.6 28.15 8.35		16.0 17.4 19.75 10.05(脚部)	据径)	19.2 4.95(現存 19.15 欠損のため <sup>フ</sup>		欠損のため不 2.8 (現存化 12.65	
出 :	土 ‡	—— 也	区	F-4-N 第 II +	形土坛	F-4-N 第Ⅱ+	形土坛	F-4-N 第Ⅱ-	大形土坛	F-4-N 第 T 大	:形土坛
口	形		態		側へ折り	。椀形の器体で	了一樣內部	。口縁部は斜め	かに外反す ともに円味		
頸部	文		様	。口縁端面・凹	]線文	。凹線文 。口縁端部有孑	L			欠損のためる	<b>、</b> 期
(杯 部)	整	形		。   横ナデ 。   腰が低く張出す。		。下半部縦方向	]へう磨き		てヘラ磨き		
			内	°		。横方向へラ圏	きさ	。横 <b>ナ</b> デ			
体	形	,	態	) ・腰が低く張出す。 ・櫛描直線文と同波状文		<ul><li>・ 柱状部は短く裾までなだらかに広がり端部は上下に肥厚する。</li></ul>		‡		。裾は内傾する 面は丸い。	脚部で端
部	文		様	。櫛描直線文と	: 同波状文	。柱状部へラル 文 。裾部刻目 2 %		欠損のため	不明	。穿孔・凹線文	Ţ
(脚 部)	整	形	外	。横方向へラス	きき	。裾部外に竹竹		人頃のため	נ <i>פ</i> יין:	0	
	Andreas or sections and sections of the section of		内	。腰の部分横刀 き腰以下横刀 施し縦方向に	方向刷毛を	1 1	ラ磨き			) ) ) )	
				。ヘラ磨き				。欠損のため	不明		
底			部								
色			調	。淡灰茶褐色		。黄灰褐色		。黄褐色		。暗茶灰褐色	
胎			±	∘ 0.1~0.3⊘₹	沙粒含有	∘ 0.1~0.50	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有	。0.1の砂粒生	 ·量含有
	鱼	Ī		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考			。円板充塡法 。椀と脚部に		。外面に煤付	着	。裾部黒斑	

			33					100	30	140
土	器	No.	103	137	103	138	103	139	103	140
摘要	種	重類	甕 A		簉 C		変		蓋	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	11.95 8.7 (現存化 11.35 欠損のため不		35.45 23.8 (現存 43.25 欠損のため不		欠損のため不 22.8 (現存を 欠損のため不 9.55	直)	12.75 (裾径) 8.0 3.1 (つま	
出:	土 地	区	F-4-N 第 II +	形土坛	F-4-N 第 II 大	形土坛	F-4-N 第 N 大	形土坛	F-4-N 第Ⅱナ	、形土拡
П	形文	態様	。口縁部は外反 外ともに円味 部は丸い。	するが内	。斜めに外反す	る口縁で 、端部は丸 重する。	7 9 14	V 12	<ul><li>つまみを持ちす、裾部端音 持つ。</li></ul>	笠形をな
頸		131					欠損のためる	~明		
部	整形	外	°		0				。縦方向へラ原	き
背		内	横ナデ		横ナデ				。横ナデ	
体	形	態	。腹径は口径」	さりも小さ	<ul><li>肩から広がり く張出し底部 思われる。</li></ul>					
	文	様								
部	整刑	乡外			。縦・横・斜 毛目	めに荒い刷	。一部刷毛を放 へラ削りと・			
		内			。肩部斜め方  毛目	句に荒い刷	。横方向・縦 目	方向に刷毛		
底		部	・欠損のためる	不明	・欠損のため	不明	。 <b>ヘ</b> ラ			
色	and the second s	調	。黄灰色		。淡黄茶褐色		。淡黄茶褐色		。暗灰黄褐色	
胎		土	。0.1~0.3の 含有	砂粒僅かに	こ。0.1~0.3の 。雲母含有	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	∘ 0.1~0.2⊘	 砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
					。内外共に煤	付着			。裾部分内面	に煤付着
備		考								
				-						

	nn		No. 第17図 141 25 142 25 145 第12図 類 夢 A A A A A A A A A A A A A A A A A A					140	25	144	
土	器			第17図	141	第11図	142	第12図	143	第15図	144
/ 摘要		種/	類	壺		壺 A2		底 部		高 杉	ĸ
法 量 (cm)	口器腹底	縁	径高径径	欠損のため不 24.75(現存付 23.75 欠損のため不	直)	11.75 20.35 17.15 4.65		欠損のため不 14.8 (現存化 欠損のため不 9.15	直)	20.0 (現存	,,,
出:	± ±	地	区	F-4-N 第Ⅱ大	:形土坛	F-4-N 第7号	土坛墓	F-4-N 第8号	士坛墓	G-4-B 第	1号井戸
口頸	形文		態様	欠損のためる	<b></b>	<ul><li>短い筒状の野に折れ曲る口の、口縁はいいに肥厚する。</li><li>口縁部外端面の内面端にも何があると思わがあると思われる。</li></ul>	は は 上下僅か に 凹線文 が の 文様	欠損のためる	<b></b>	<ul><li>・段状口縁部なであろう。</li><li>・腰部は横方[</li></ul>	
部	整	形	外内			。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	)不明			へラ <b>磨き。</b> ・腰部から柱 縦方向のへ ・細い不規 側 き。	う磨き。
体	形文		態様	部へ張り、中 大径をもつ。 まま張りをも	中位上に最 以下その ち中位下 なだらかに	<ul><li>ほぼ円形で服 にある。</li><li>・ 櫛描直線文と が交互に入る</li></ul>	<u>.</u> 同波状文	欠損のためる	<b>下</b> 明	<ul><li>長い柱状部である。裾かにひろが下に肥厚す</li><li>凹線文状ので、円孔上下段</li></ul>	までなだら り端部は上 る。 直線文
部	整	形	外内	。全面に縦方向 毛目。	旬の荒い刷	。剝離のためる 。へラ磨き状の				<ul><li>縦方向のへ</li><li>裾部は横方</li><li>き。</li><li>横方向のへ</li><li>した後に横</li></ul>	句のヘラ磨 ラ削りを施
底	<u></u>	Amada da Parante	部	。不明		・ナデ		。外面はヘラド 内面は、ヘデ 指圧で絡ま・	ラナデをし		
色			調	。外面一黄茶茶 内面一黒色	場色	。外面一黄灰卷 内~中核一时		。淡褐黄灰色~	~淡暗灰色	。外面一暗茶 中~内面—	
胎			土.	° 0.1~0.5⊘₹	沙粒含有	∘ 0.1~0.200	沙粒含有	∘ 0.1~0.3の	沙粒含有	。0.1~0.3の 。雲母極めて	
	質	Ī		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	あり。		あり。 。全面ともに	7.1.0	して出土し	底部を上に ているの 蓋として使	- 。内面に焼成 が多数みら ・ 円板充塡法	前の押圧痕 れる。

## 第2節 土師器

**F - 7 - E • F** 地区出 土の土師器

第3層 • 黑色粘土層

F-7-E・F地区出土の土師器は、さきの弥生式土器より量は 少ないが、第3層黒色粘土層・溝【-S・溝【-N・溝【・沼地状 落ち込みの各遺構より出土した。以下各遺構別に記述を進める。

高杯型土器(図版 106 —21) 21は、脚部のみであるが、柱部が中空で裾部へなだらかに広がり、裾部端で大きく広がる。端面に稜をもち、外面に縦方向のヘラ磨きを行う。

器台型土器(図版 106 —17・18) 17・18はいずれも脚部のみであるが、17が短い柱部をもち、裾部へ小さく開き、端部で僅かに内弯する。18は直線的に広がり、外面にヘラ磨き、内面に刷毛目を行う。

溝I一S

壺型土器(図版 106-1) 1 は、二重口縁型の壺、筒状の頸部から大きく外反し、小さな段をもってさらに外反し端部で一層反る。

**独型土器**(図版  $106-3\sim5$ ) 3は、口縁部が緩やかに反り、体部は肩の張らないなだらかな形をなし、荒いタタキ目を行う厚手のもの、4は、丸味のある頸部から口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部でつまみ上げられている。肩部内面はヘラ削りはみられない。5は、口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部で内面肥厚する。肩部内面にヘラ削りを行う。

鉢型土器(図版 106 — 7 ・ 8 ・ 16) 7 は、平底底部より直線的に斜上方へ立ち上がる器形をなす。口縁部内面に稜をもち、端面へ器壁が薄くなる。外面のタタキ目は、口縁部に横方向、体部・底部に右上がりに行う。内面は刷毛目調整を行う。 8 は、器壁に指頭圧痕が残る突出平底より大きく広がる浅鉢型をなし、口縁部は稜をもってさらに広がる。外面に右上りのタタキ目、内面にナデを行う。 16は、台付鉢脚部。

小型壺型土器(図版 106 —10) 10は、口縁部が小さくくびれる 頸部より外反し、体部は最大径を中位上にもち、外面に右上がりの タタキ目が残り、底部はヘラ削りを行った平底。

高杯型土器(図版 106 —19・20) いずれも脚部のみであるが、 19は小型高杯の脚部と思われ、内弯ぎみに広がり、端面で僅かに内 面肥厚する。外面に縦方向のヘラ磨きを行なう。20は、裾広がり中 実柱部より、稜をもって裾部へ大きく広がる。

小型壺型土器(図版 106 -12) 12は、頸部が細くしまり立ち上がった口縁部。体部は扁平球形の丸底である。整形は風化が著しく

溝【一N

定かでないが、ヘラ磨きと思れる。

**小型丸底坩**(図版 106 −13・15) 13は、扁平球形の体部より、 屈曲して斜上方へやや広く短くのびる口縁部をもつ。15は、13より 口縁部が内弯ぎみに長く立ち上がる。

溝Ⅱ

**甕型土器**(図版 106 - 6) 6は、口縁部が丸味のある頸部より 外反し、中位より内弯ぎみに立ち上がり、端部で内面肥厚する。

小型壺型土器(図版 106 —11) 11は、口縁部が直口ぎみに短く 立ち上がり、体部は最大径付近で鋭く折れ、底部へ丸くカーブを描 く器形。底部は尖底風を成しヘラ削りが行なわれている。

沼地状落ち込み

**獲型土器**(図版 106-2) 2 は、口縁部径が体部最大径に比べて大きく、器壁が器形に比べて厚い (0.7cm)。外面に右上がりのタタキ目を行う。

**鉢型土器**(図版 106-9) 9は、非常に精製された胎土をもち、口縁部が2段に屈曲して立ち上がる。体部は広く浅い、内外面に細かなへう磨きを行なう。

高杯型土器(図版 106 —23) 23は、中空のやや太い柱部が裾部へ徐々に広がり、裾部で丸く大きく広がる。外面にヘラ磨き、刷毛目を行なう。

H-5-I・M地区出 土の土器 H-5-I・M地区より出土した土器は、包含層・黒色砂質粘土層より唐古第V様式、A-1地区の溝状遺構より唐古第V様式(新)、A-10地区古墳時代前期の壺棺が出土した。

溝状遺構

壺型土器(図版 105 — 1 ・ 2 ・ 3) 1は、太く短い頸部、口縁端部が僅かに外反し端面丸い。 2は、筒状の頸部が僅かに外反し、端面は丸い。 3は、体部が突出平底より大きく張り出し、扁平な球形をなす。

壺棺墓

**壺棺**(図版 105 — 4) 4は、遺構の項で記述したように壺棺として使用されたものである。非常に風化著しく、また底部は意図的に欠いたのか欠損のため不明確である。口縁部は、肩部より短く立ち上がり大きく外反し端部に稜をもち、肩部と頸部の境に断面三角形の凸帯をめぐらしヘラで刻目文を施す。体部は最大径が中位にあり上・下の張りが等しい球形を成し、外面は全体にヘラ磨きを施す。

5は、二重口縁型土器、段をもって外反し、端部で水平にのび端面は稜をもち丸く終る。円形竹管浮文を施す。壺棺4の口縁部付近

より出土した。

H-3-N・P地区出 土の土師器 H-3-N地区より大・小7基の井戸状遺構が検出された。その内5基より土器が出土したが、主だったものを記述し、また同H-3-P地区竪穴住居跡の土器を記述する。

井戸15号

**甕型土器**(図版 107 — 1 ・ 2) 1は、口縁部端部が短く直立して立ち上がり、内面肥厚する。端部外面に櫛描直線文を施す。外面に刷毛目・内面にヘラ削りを行なう。 2は、口縁部が中位より内弯し、端部で両面に僅かに肥厚し丸く終る。体部は肩部が丸味をもち、外面に刷毛、内面にヘラ削りを行う。肩部外面に 2 カ所の籾痕が残る。

井戸16号

**甕型土器**(図版 107-4) 4は、口縁部が「く」の字形に外反し、中位外面で肥厚する。体部は張りの小さい胴長形をなし、底部の稜線までタタキを行う厚手のもの。

**鉢型土器**(図版 107-3) 3は、他に類例の少ない器形をなし、鉢より椀・杯に似たものである。器形は、ヘラ削りを行なった小さな底部より大きく広がり、中位より直線的に立ち上がる。器壁は凹凸が著しく厚手、外面にヘラ磨きを行なう。他に柱部の貫通する器台片が1点出土している。

井戸8号

**鉢型土器**(図版 107 - 6) 6は、口縁径33cmの大鉢。口縁部は 丸味のある頸部より小さく外反する。体部は張りの小さい深鉢形を なし、タタキ目の上にヘラ磨きを行う。他に直口壺型土器・高杯型 土器・甑型土器・小型丸底坩の小破片が出土している。

P-19

壺型土器(図版 107 - 5) 5は、直口口縁部をもち、中位上部より僅かに外反し、肩部はなだらかに落ちる。色調が赤褐色の土器。

竪穴住居跡

高杯型土器(図版 107 — 7) 7 は、杯底部が小さく斜上方へのび、稜をもって大きく開く杯部。脚部は中実の柱部より、小さく開く裾部をもつ。器壁外面に縦方向のヘラ磨きを行なう。

H-3-G地区・井戸 4号出土の土師器

溝 I − 3 (大溝) の東約10mより検出された井戸 4 号より、2 層にわたって、甕型土器 4 点・壺型土器・椀型高杯型土器各 1 点と土錘(土製品の項) が出土した。

第3層

**甕型土器**(図版 107 —11) 11は、口縁部が「く」の字形に外反し、中位外面で僅かに肥厚する。体部は丸味をもち、荒いタタキを

行う厚手。

**椀型高杯型土器**(図版 107 −13) 13は、杯部底部より緩やかな カーブで立ち上がり、脚部は裾部を欠くが、短い柱部をもち、全面 にヘラ磨きを行なう。

第2層

**甕型土器**(図版 107 — 8 ~10) 8 は、口縁部が「く」の字形に 外反し、中位より僅かに内弯ぎみにのび、端部は上方へ小さく肥厚 する。体部は長胴形をなすと思われ、外面に縦・横に刷毛、内面に へラ削りを行なう。9・10は、口縁部が体部に比較して小さく、且 つ短い。体部は最大径が非常に大きく、球形に近い、外面に一部タ タキ目を残すが、ヘラ磨きを行う。内面にはヘラ削りのみられない 厚手。

**壺型土器**(図版 107 —12) 12は、口縁部を欠くが、上方に開く 直口口縁と思われる。体部は最大径が下位にある扁平球形をなし、 外面に細かなヘラ磨きを行なう。

H-3-G地区出土の 土器 H-3-G地区検出の大形溝状遺構(通称「大溝」、以後大溝と呼称 する) の最下層より、「弥生式土器に後続する」土器が一括で多量 に出土した。

溝 Ⅱ - 3 (大溝)

その出土状態は遺構編のごとく、大溝最下層の厚さ 0.5mの暗灰 色粗砂層の中に限られて出土し、その上層からは全く遺物が検出されなかった。このことは最下層の堆積土層に、非常に多量の土器が一度に廃棄され、あるいは流れ込み、その後、自然の変化等によりいっきに大溝が埋没したと考えられるものである。

この一括土器は、完形品約100点を含み、コンテナバットに約150 箱以上にもなり、また器種も、壺・甕・高杯・鉢・甑・器台などほ ぼ同時期の全器種が出土しており、三島地方におけるこの時期の貴 重な資料となるものである。

形態分類 A 壺型土器

Вı

やや筒状の頸部に外反する口縁をもち、口縁部の器壁は厚くがっしりしている。頸部より口縁部にかけて水平に広がるものから、やや斜上方へ広がり、口縁端部内面はつまみあげられ、外端面には横ナデ、櫛描波状文、刻目等施されたものがある。体部整形にはヘラ磨きが施されているものもあるが、その多くは刷毛調整である。

俗に二重口縁と呼ばれるもので、口縁部内外に文様は施されず、 へラ磨きで整形されるものが多い。その方向は一定せず、横・縦・ 斜方向に整形されている。

-138 -

B<sub>2</sub> 装飾のある二重口縁を有するもの。口縁部には、櫛描直線文・波 状文・円形浮文・竹管文・刻目文・刺突文等の文様が施されてい る。

> また、肩部にも同様の装飾があるものが多い。口縁上方の部分は 急な角度でたち上がるものと、穏やかな角度でたちあがるものがあ り、そのために口径の大小がある。

- **B**<sub>3</sub> 口縁部外面に突帯状のものが付き二段となるが、内面には段がな いものもある。
- C1 外上方へ広がる直口縁のもので器高30cm前後の大型のもの。口縁端部は丸くおさまるもので刻目等を施し、体部と口縁部の継ぎ目にも刻目風の文様を有し、その内面には絞りが残っているものもある。また口縁部の高さは大きな体部に比べ約5cm前後のものである。
- $C_2$  形態は $C_1$  と同様であるが、体部に比べ口縁部が大きく、ほぼ同等の直径のもので中型のもの。口縁部は規則正しく放射状にヘラ磨きが施してある。
- $C_3$  形態は $C_1$  と同様で小型のもの。

В

- 甕型土器 A<sub>1</sub> 器高20cm以上の大型で在地のもの。「く」の字形に外反する口縁をもち端部に一部刻目が施されるものがある。また面をもつものと丸くおさまるものもあり、体形は、最大径が中位上でやや長形のものから、中位でやや円形のものまである。器壁の厚みは約 0.4cmか
  - $A_2$  形態は $A_1$  と同様であり、器高 $15\sim20$ cmの中型品で在地のもの。

ら0.7cmで全体的に厚さがあり、タタキの巾が広いものである。

- A<sub>3</sub> 形態はA<sub>1</sub> と同様であり、器高15cm以下の中型品で在地のもの。
  - 「く」の字形に鋭く外反し、口縁端はつまみあげられ稜のつくもので、体部最大径は中位にあり、器壁の厚みは、0.2cmから0.4cmで薄く、タタキも細くその上から刷毛のあるものもあり、色調は茶褐色を呈し、金・黒雲母を含む胎土をもち、いわゆる河内産「庄内式」といわれるもの。
- C 「く」字形に外反し、器壁は薄いものであるが、Bとは色調・胎 土が異なり在地のものと考えられるもの。
- D 他地方のもので「S字状」口縁と呼ばれるもの。
- E 他地方のもので「受口状」口縁と呼ばれるもの。
- 高杯型土器 A 杯部が水平かやや内弯してのび、上部との間にひとつの稜をもって口縁部までのび、内反するものや外反するものと直線的にのびる

ものもある。これらはすべて同一系統のものと思われる。細かい縦 方向のヘラ磨きが施され、脚部は柱部下部より屈曲して広がるも の。

B 杯部下半部が水平に小さくのび、中位で外方に屈曲し大きく広が るものや、中位で確実な面をもつもので内側にはふたつの稜あるい は段を有するもの。脚部は柱部下部より屈曲し、一度段をもって広 がるもので、細かいヘラ磨きが多用されているもの。

C 杯部下半部はやや内弯し、稜をもってたちあがりながら¼円形の 大きなカーブをもって外反し、端部に面をもつもの。

D 杯部下部と口縁端部に、それぞれ面をもって外反し、その面には、円形浮文、刻目などの装飾をもち、丁寧に仕上げられているもの。

E 小さな椀形の杯部をもつもので、脚部は大きく裾まで広がり、そのほとんどが、中・小型品である。

器台型土器 A 浅い皿部に裾広がりの脚部をもつもので、口縁径、器高が約10cm 前後の小型のもの。柱部は充実し短かく広がるものと、皿部の接合 面から広がるものがある。外面にヘラ磨きが多用され、裾部はほと んど刷毛である。皿部内側は、放射状のヘラ磨きが施されている。

B 他地方のもので、鼓の形を模した鼓形器台と呼ばれるもの。精巧な作りで、内面の一部を削っている。

**鉢型土器** A<sub>1</sub> 小型のもので、口縁部に比べて体部が大きいもので、頸部にくびれをもって直線的ないし、内弯ぎみにのびるもの。外面にタタキのあるものからないものまである。

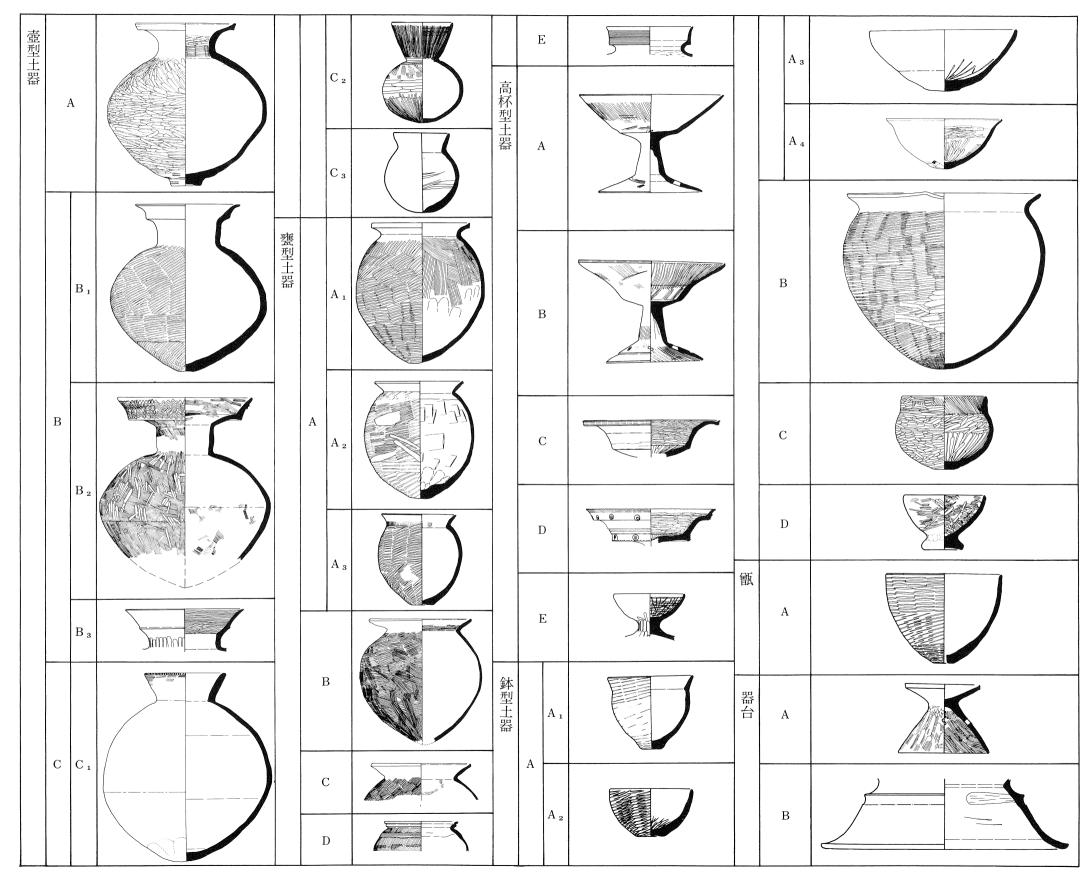
A2 小型のもので、底部より内弯ぎみに口縁端部までのび、丸くおさ まるもの。外面はタタキが施してある。

A3 中型のもので、底部より内弯ぎみに口縁端部までのび、外面に一部タタキがあるものもあるが、そのほとんどはヘラ磨きである。

A4 中型のもので、頸部にややくびれをもって広がり、外面はすべて 丁寧なヘラ磨きが施され、胎土も良好なものが多い。

B 器高約30cm以上の大型のもので、頸部はゆるやかな「く」の字形 に外反し注口をもつもので、外面にタタキが施されているものはほ んの一部で、ほとんどはヘラ磨きである。内面はヘラ磨きが施されている。

C 口縁部は短く直線的にのび、丸くおさまり、体部は丸みをもつも ので、外面は丁寧なヘラ磨きが施されている。



第9表 H-3-G地区 溝Ⅱ-3 (大溝) 土師器の形態と呼称

 $A_1$ 、 $A_2$ の小・中型の鉢に脚台を加えたもので、その継ぎ目に指頭圧痕のあるもの。

底部よりやや内弯ぎみないし、直線的にのび、底部に孔のあるもの。口径は12cm~16cm前後で、器高は10cm前後の大きさに限られている。

編年試案

63

龥

Α

遺構編で述べたように、H-3地区で検出された大溝からは多量の土器が出土している。これらの土器は、厚さ約 0.5mの溝の最下層から出土したもので一括の遺物である。

調査中すでに、器壁が厚く荒いタタキ目を持った土器に混じって、外面に細いタタキ目を施し、内面にヘラ削りのみられる、いわゆる庄内式の甕が含まれていることが注目された。この結果、庄内式に併行する時期に、東奈良の集落で製作され使用された土器を明らかにし得るのではないかとの強い期待を持ったのであった。

しかし、その後整理が進むにつれ、唐古第5様式に含まれるものや、内面をへう削りした薄手の甕で、外部から持ち込まれたことが明らかなものの内にも、庄内式だけでなくやや新しい時期のものが含まれていることや、わずかではあるが布留式とみられるもののあることが明らかとなった。したがって圧倒的に多数を占める厚手の土器についても、当然のことながら、弥生時代後期から布留式に至るまでの間のものが含まれていると予想される結果となったのである。出土状態だけから一括遺物として単純にあつかえないものであり、これらの土器を如何に分け得るのかが問題となった。

最も数の多い甕について観察した結果、全体のプロポーション、 タタキ目、口縁部もさることながら、各々底部に大きな特徴を持っ ていることが明らかとなった。

すなわち、第5様式にみられる突出した平底、突出せずに器壁からそのまま続く平底、平底の周辺をヘラ削りするもの、底にもタタキ目が付けられ、中心線上に底部が位置しない状態のものすら見うけられるもの、失底のもの、丸底のものなどである。しかも各々の特徴を持ちながら、第5様式に含まれると考えられるものと、布留式に含まれると考えられるものを除いて、他はすべて大中小3様の大きさのものがあることが明らかとなった。これは少なくとも製作手法が共通する甕のセットとしてとらえ得るものであろう。

さらに甕と基本的に製作法が似ている鉢や甑の底部を観察してみ

ると、甕に見られると同様のものがあり、これを甕以外のセットとして加えることが可能となった。また壺の一部にも同様のことが言えるものがあって、少なくとも甕、鉢、甑、壺については、すべてではないが、セット関係としてとらえ得るもののあることが判ったわけである。

先に述べた様に、これらの土器は一括出土のものであっても、時間的に差のあるものを含んでいるわけであり、甕を基本としてセットとしてとらえ得る各々の土器は、製作手法が異なるだけでなく、時期差をあらわすものとしてとらえることが最も適当であると考えられる。もとより層位的に分離されて出土したものでないため、今後大巾に修正する必要があると考えられるが、第5様式に含まれるものを最古とし、布留式に含まれるものを最新のものとして、それぞれのセット関係を並べたのである。(編年表)

東奈良』としたものには、底部が平底のもの。東奈良』としたものには、平底の周辺をヘラ削りしたものと、底部にタタキ目を有するものがあり、他より数が多い。将来分離することが可能となるかも知れない。タタキ目を有するものの中には中心線上でなく横にはずれた位置に底部のあるものがみられる。製作にあたって底を意識しながら、使用上は底の意味を持たない底部となっているわけであり、はっきり底部を持つものより新しい段階と考えたわけである。

東奈良で製作され使用されたと考えられる厚手の土器に混じって、内面にヘラ削りのみられる薄手の甕が出土していることは先にも述べた通りであるが、これらの土器にも、外面に細かいタタキ目がみられ、口縁部は内外面ともに外反し、内面のヘラ削りが口縁部の付け根ぎりぎりにまで及んでいるため、頸部内面がするどい「く」の字状となっているいわゆる庄内式と呼ばれるものの他、同様の特徴をもちながら、口縁外面が内弯し、口縁部付け根に横ナデがなされた結果くびれがみられるもの、口縁部は内外面ともに内弯し、端部にはわずかに外に向って肥厚がみられ、器壁外面は刷毛調整されたものなどがみられる。いずれも庄内式から布留式に移行する段階で、外部からもたらされたものであることは、胎土等からみて明らかである。しかし、先に分けた厚手の土器のどの段階に各々が併行するのかを決定することは極めて困難であり、今後同じ東奈良で検出されている他の溝や土拡墓等の出土遺物との対比検討をまつことにして、とりあえず表の中に位置付けてみたわけである。

東奈良「

同様のことは、甕や鉢以外の高杯等についても言えるわけであ り、今後大いに修正すべきものと考えている。

東奈良Ⅰの土器群は、唐古第Ⅴ様式の伝統をもつ突出平底の底部をもつ一群と考えられる。器種、土器量ともに少ない。

壺型土器 東奈良 I の壺型土器は、壺Aに突出平底をもつ6(図版 108)があげられる。口縁部は、筒状頸部から大きく外反し、端面は僅かに上・下に拡張し面をもつ。体部は最大径を中位にもち、上・下段がよく似た無花果形をなす。他に突出平底をもつ壺型土器の底部は、41(図版 110)とともに、破片をも含み総数106点の内、約20%の21点を数える。これらの底部破片から壺の形態を判別するのは不可能であるが、壺Aタイプが多いと思われる。

**甕型土器** 東奈良 「の甕型土器は、完形品では甕A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>に突出 平底の底部が観られる。甕A<sub>1</sub>の55(図版112)、A<sub>2</sub>の56(図版同)があげられ、共に頸部のくびれが小さく、口縁径と最大腹径との差の少ない丈の高い器形をなす。器壁には、やや荒いタタキ目を2段(一部3段)に行い、口縁部は内・外面横ナデを行い、肩部まで横ナデを行うものがある。52は、口縁部端部に刻目を施している。突出 平底をもつ甕は、底部破片をも含み総点数 556点の内、17%の93点を数える。

高杯型土器 東奈良 I の高杯型土器は、出土高杯の内、最も古い 要素をもつ高杯 A98、99(図版115)が位置すると考えられる。98、 99は、杯部下半部が直線的に大きく広がり、上半部は短く外反する 形態をなし、西ノ辻 I 式の伝統をもつ。他の東奈良 I の器種と比較 すれば、やや古い要素が強い。

**鉢型土器** 東奈良  $\blacksquare$  の突出平底をもつ鉢型土器は、鉢 $A_1$ 、 $2 \cdot B$  の器種に観られた。 $A_1$  190(図版119)、 $A_2$  196(図版同)は、いずれも突出平底底部をもちながら、体部外面にはタタキ目が観られず、ナデによって調整を行っている。Bの大形鉢 178(図版 118)は、口縁径に比較し浅い器形をなし、口縁部・体部外面全体に右上りのタタキ目を行う。この大鉢は、器壁外面にタクキを行った後に、口縁部を折り曲げたためか、頸部のタタキ目が変化し幅が狭くなっている。また突出平底底部に僅かながらタタキ目が残り、周囲にもへ∋削りを行っており、東奈良  $\blacksquare$  に属する面もあるが、明確な突出平底であるため、東奈良  $\blacksquare$  に属する面もあるが、明確なでは、突出平底をもつ形態を確認できるものはなく、底部片では14

点検出されている。

他の器種 飯型土器の東奈良 I に属するものは、完形品に近いものはないが、突出平底の底部片で214(図版120)を含み 2 点のみである。

東奈良Ⅱ

東奈良』の土器群は、小さな平底あるいは突出平底を押しつぶしたような形態の底部をもつ一群と考えられる。さきの東奈良』に比べて器種、土器量ともに増える。

壺型土器 東奈良 I の平底をもつ壺型土器は、完形品では C2・43 (図版 111) のみである。他の器種では、口縁部等より後述する東 奈良Ⅲより古い要素をもつB1・B2に、東奈良Ⅱに属すると考えら れるものがある。B<sub>1</sub>の二重口縁型壺型土器11(図版109)は、壺A の外反する口縁部に、さらに口縁部を付加したような形をなす。す なわち、外反する頸部がさらに反り返り、下に張り出しさらに外反 する口縁部をもち、端面で外側に肥厚し小さな稜をもつ。B2の装 飾を施す二重口縁には27(図版109)が属すると考えられる。27は、 外反する頸部より段をもって大きく外反し端部でより反るが、内面 には稜線が観られない。文様は、口縁部端部外面に円形浮文、段部 外面に円形竹管文を2個1対に8カ所施すが、櫛描文は観られな い。この他に口縁部端部が短く立ち上がる、あるいは短く外反し面 をもつ19~23 (図版 109) は、いずれも櫛描波状文、円形浮文が施 されている。これらのタイプが、外反する口縁部端部をつまみ上げ たり、あるいはのばし擬口縁のごとくなしていることから、より古 い要素をもつものと考えられる。

壺 $C_2$ ・43は、体部は最大径が中位にあり、非常に偏平な球形をなし、口縁部は細い頸部より立ち上がり端部でやや内弯する。外壁面には縦・横に細いヘラ磨きを行う。底部は、平底であるが中央部で凹んでいる。

**独型土器** 東奈良 ▮の平底をもつ甕型土器は、A1、A2、A3 に 完形の器種が観られる。A1 55、A2 56・58・59、A3 54・57(図版 112)があげられ、いずれも口縁部は「く」の字形に外反するものと、口縁部内面は外反するが外面に粘土を貼り付け、内弯風に行ったものとがある。体部は、東奈良 ҍり最大径が下がり中位よりやや上位に位置し、口縁径を凌ぐようになる。タタキ整形は、頸部より下位へ全面に行い、器壁の継ぎ目で2段・3段と方向を変る。この中で58は、器高に比較し、体部最大径、頸部径が大きくタタキ

目を他の甕より細かく丁寧に行っている。なお平底には、底部の稜線までタタキを行い小さな平底をなすものと、底部が一度くびれて張り出す、突出平底を押しつぶしたような形をなすものの2種ある。各々に木葉痕、凹部を残すものがあり、いずれも、平底ではあるが、小型化あるいは不安定な底部である。この平底底部をもつものは、甕底部総数の約5%の196点を数える。

東奈良 【に属する他の遺構出土の甕として、H-3-N地区P-16の4(図版 107)が考えられる。口縁部は外反するが、外面中位で肥厚する。体部は胴長であるが最大径は中位にある。

高杯型土器 東奈良 II の高杯は、東奈良 II よりも杯部下段ののびが小さく、上段ののびが大きくなる高杯 A110(図版115)を位置づけた。 110は、杯部下段を欠損するが、外面段部で肥厚し上段へ大きく外反する。しかし、後述する東奈良 III に比較して、杯部の深さは浅い。

**鉢型土器** 東奈良 $\blacksquare$ の鉢は、 $A_1$ 、 $A_2$ 、 $A_3$  の器種が観られる。  $A_1$  191・192は、いずれも頸部から小さく外反し、器壁外面にタタキ整形を行う。 192は、口縁部が端部でやや内弯し、底部も丸味がある。 $A_2$ には、深鉢タイプの197・198(図版119)と浅鉢タイプの199~201(図版同)がある。深鉢タイプは底部より直線的に広がり、浅鉢タイプは内弯ぎみに広がる。いずれも底部の稜線までタタキを行う。 $A_3$  202~204は、いずれも平底の中央が凹んでいる。器壁外面にはナデを行うが、 203は、内面に刷け目の上に放射状のヘラ磨きを行う。他に底部片が5点観られる。

甑型土器 東奈良 ¶の甑は、鉢型土器 A₂の同形態のものである。 212・215~218(図版120)があげられ、器壁外面にタタキ目を残す ものとナデを行うものが多い。いずれも小型の器高10㎝前後のもの である。なお、平底底部は、甑総数の約24%の9点を数える。

東奈良■は、底部の意識が薄れる削り底、タタキ底をもつ一群と考えられる。両底部は、厳密には手法を異とするが、底部の意識が薄れる点から同一群と考えられる。この一群は、溝■-3出土の全器種が揃い、土器量も増大する。

**壺型土器** 東奈良**Ⅲ**の壺は、壺自体にタタキ目を残すものが少なく、またへラ削りを明確に残すものは少ないため、底部のみでの抽出が困難な面がある。壺Aタイプとしては、8(図版 108)を位置づけた。口縁部は、短い筒状の頸部より外反し端面で僅かに上方へ

東奈良Ⅱ

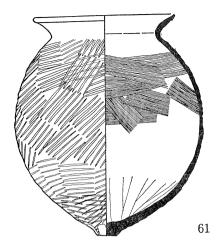
肥厚する。体部は肩部が丸味をもち全体的に球形化する。

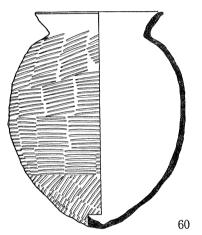
 $B_1$  9(図版 108)は、壺として唯一のタタキ目を残すものである。口縁部は、筒状の頸部から小さく外反し、さらに段をもって外反し端部で一層反り、内外面とも稜が明確になる。体部は最大径を中位にもち、上・下の張りはやや上段が大きい。器壁外面に 3 段に方向を変えるタタキ目を残し、底部にタタキを行い尖底風におさめている。他に口縁部のみであるが、12~14(図版 109)が、口縁部の稜が明確になる点から東奈良  $\blacksquare$  に属すると考えられる。  $B_2$  の装飾を施す30(図版109)は、 $B_1$ 同様明確な稜を内外面にもつ。口縁部は長い筒状頸部から外反ぎみに水平にのび、上段も外反し、端面は丸くおさめる。装飾は外面に櫛描波状文と円形浮文を施す。体部は、最大径を中位上にもつ無果花形をなし、外面に細かい刷毛目の上からへラ磨きを行い、内面の上部にへラ削りが観られる。同口縁部片の25・26(図版109)が東奈良  $\blacksquare$  に属すると考えられる。

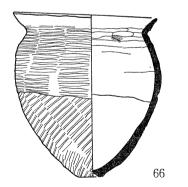
 $C_1$ の中でも最も古い形態をもつと考えられる48が、他の壺 $B_1$ 、 $_2$ の体部形態、整形等に共通点があるため、東奈良IIに属すると考えた。 $C_1$ 48(図版 111)は、直口口縁部が僅かに反り、端部で外面に小さく折れ稜をもつ。胴部やや下に最大径をもち、より丸味を増し、外面にやや荒い刷毛目を縦方向に行う。

C3 152 (図版117) は、底部の稜線にヘラ削りを行っている。溝 ■ -3 出土の小型壺は絶対数が少なく、この直口口縁部をもつものが多い。壺型土器の底部片総数 106点の内、削り底と考えられるものは約27%の29点を数える。

**獲型土器** 東奈良 ■の甕は完形品として最も多い。A<sub>1</sub> 60・61 (第20図)・62 (図版 112)、A<sub>2</sub> 66 (第20図)、A<sub>3</sub> 63・64 (図版112)が削り底底部をもち、A<sub>1</sub> 65 (第21図) 67・72 (図版113) 75 (第21図)、A<sub>2</sub> 68~74 (図版 113)がタタキ底手法をもつ。各器種いずれも、東奈良 ■と大差がなく、口縁部は「く」の字形に外反し、一部に内弯風のものと直口風のものが観られる。体部は、最大径がより大きくなり球形近くになるものと、肩部が張り底部へ細くなり卵形をなすものがある。外面にタタキを3段に行い、一部にタタキの上からへラ削り、肩部に刷毛目を行うものが観られるがその点数は少ない。底部の削り底手法は、突出平底を数回削ったものと平底を削り取ったものがあり、いずれの場合にも、底部の稜線をへラにより数回削りあげて、底部を小さくするようにしている。こ





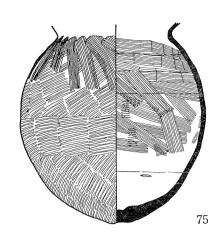


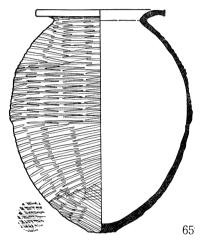
第20図 溝Ⅱ-3出土土器 ¼

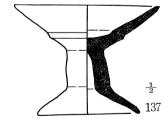
の手法をもつ甕底部は、総数の6%である86点を数える。同様にタタキ底手法を行う点数は総数の26%の156点を数え、その中で突出平底を残して叩いたものが6%、平底を叩き小さな底部をもつものが56%、同じく傾斜をもつものが17%、尖底・丸底風のものが21%となる。

この厚手の甕に、底部の意識が薄れ、一部尖底・丸底風のものが存在することから、Bの薄手の甕は東奈良Ⅲに影響したものとし、Bの最も古い形態のものを位置づけた。B83(図版114)は、口縁部が鋭くくびれる頸部より僅かに外反しながら直線的にのび、端面で僅かに上方へつまみ上げ横ナデ調整を行う。体部は、最大径が上位にあり、肩が張り底部は尖底風である。外面には細かい右上りのタタキ目、中位から下半に刷毛目を行う。内面のヘラ削りは、中位上半のみに行い、下半はナデを行い器壁も上半が薄く下半はやや厚い。83と同一形態をもつC80(図版114)は、胎土がBとは異なり、また右上りのやや太いタタキ目を残し頸部の稜もあまり鋭さがないことから、在地の甕と考えられる。内面ヘラ削りを行った薄手の甕の口縁部破片総数は137点を数える。その内、東奈良Ⅲに属すると考えられるBが25点、同じくCが18点である。

高杯型土器 東奈良Ⅲの高杯Aは、東奈良Ⅱのそれより新し く、杯部上段(上半部)の立ち上がりが大きく、杯部が深くなり、 杯部外面の稜の肥厚が小さくなる。Aには杯部上段が直線的に のびる100~103 (図版115)、同じく内弯ぎみにのびる106・107 (図版同)、同じく大きく外反する111・113(図版同)がある。 高杯Bは、杯部が2段に屈曲して広がる。122(図版116)は、 東奈良▼の高杯Bに比べ杯部が浅く、東奈良■のAに近い率を もつ。高杯 C117~121 (図版 116) は、杯部下半が内弯し、段 をもって14円形に外反し、口縁部端部で水平近くのび、端面に 稜をもち、杯部口径に比べ深さが浅く、率が同Aに近いため東 奈良Ⅲに位置づけた。高杯Dはその装飾性との関係から、壺B2と 併行期に位置づくと考えられる。124(図版116)と他に小破片が出 土したのみであるが、杯部が段をもって大きく外反し端部でさらに 外反する。杯部端部と底部に円形浮文と刻目文を施す。脚部を欠く が、エンタシス形の柱部、杯部と同形態の裾をもつものと考えられ る。 124は、胎土から河内産のものと思われる。高杯 Eは、壺 B・







第21図 溝Ⅱ一3出土土器 ¼

C、甕B・C等の新しい器種が東奈良Ⅲに属すると考えた点から、高杯Eの最も古い要素をもつものを位置づけた。 E138・139・141 (図版 116) は、椀部が深く短い柱部をもち、裾部の広がりが小さく仕上りはやや粗雑である。いずれも他の器種より胎土が精良な明るい色調のものである。

他の遺構出土の高杯Eとして、H-3-G地区井戸4号下層 出土の深い椀部をもつやや粗雑な作りの13(図版107)が、属 すると考えられる。

**鉢型土器** 東奈良**Ⅲ**の鉢は、A<sub>1</sub>~A<sub>4</sub>、Bに削り底、タタキ 底が観られる。

 $A_1$  193・194(図版 119)は、いずれもタタキ底をもち、体部は丸くなり、器壁にタタキ目を残す。  $A_2$  202(図版119)もタクキ底をもつ。  $A_3$  206・208(図版 119)に削り底がみられる。206は平底を削り取り、208は丸底風に仕上げている。いずれもへラ磨き、ナデを多用する。  $A_4$  182~184(図版 118)に削り底が観られ、182・183にタタキ目が残る。 B 179(図版118)は、タタキ底をもち、口縁部が丸味のある頸部より外反し端面に稜をもち、片口を有す。体部は、最大径を上位にもち底部へなだらかに下る。器壁外面に右上りのタタキを行い、一部にへラ削りが観られる。内面にはヘラ磨きを行う。鉢Dは、他の器種と台を付ける関係から東奈良IIに属すると考えた。 鉢D211(図版119)は、口縁部が僅かに外反し、212(図版同)は口縁部内面に稜をもつが、いずれも鉢底部の胎土をのばし、新たに粘土を付けたし、指なでを行い低い台としている。

他の遺構から出土したものとして、H-3-N地区P-16の 鉢 3 (図版 107) が属すると考えられる。平底底部を削り丸く した後にヘラ磨きを行うが、全体に粗雑な作りのものである。

飯型土器 東奈良Ⅲの甑は、他の器種同様削り底・タタキ底があり、その量も多い。いずれの手法の場合も尖底風に行うため、東奈良Ⅳのそれとの判別が困難な面がある。削り底をもつ甑219~224(図版 120)、タタキ底の225~229(図版同)がある。この中には225に代表される底部より丸味をもって立ちあがるものと、227のように尖底風の底部より直線的に立ちあがるものがある。後者は底部にコブ状の粘土を付けたした後に、ヘラ削りしタタキ絞めたものであり底部の厚みが2cm近くあるものが観られる。

東奈良IV

その他の器種 器台型土器の器台Aは、他の新しい器種同様に、 溝 ■ - 3 出土の中で器形の識別できる最も古い要素をもつものを東 奈良 ■ に属すると考えた。小型器台158~160・164・165・167~169、 172~174(図版 117)は、皿部が深く、端部で上・下あるいは上方 に肥厚し、脚部は短い柱部から広がり、柱部に貫通孔をもつものが ある。いずれも皿部に横方向の粗雑なヘラ磨きを行う。

東奈良Ⅳは尖底、丸底の底部をもつ一群と考えられる。ほぼ全器種に観られ、特に壺型土器が多い。

**壺型土器** 東奈良**I**Iの壺型土器各種は、底部のみでは判別が困難なために、東奈良**I**Iより新しい要素を形態、技法等に求めて位置づけた。

B<sub>1</sub> 10 (図版 108) は、口縁部は下段が短く外反し、上段は直線 的にのびより稜が明確になる。体部は、底部を欠くが球形化し、外 面に刷毛目を行う。同15(図版 109)は、筒状の頸部より鋭く屈折 しのび、上段は大きく外反するが浅くなる。B231(図版109)は、 B1 同様口縁部下段が短く外反し、上段は直線的にのび端面に稜を もつ断面三角形をなす。体部は底部を欠くが、球形をなし肩部に横 方向のヘラ磨き、下位に刷毛目を行う。装飾は、口縁部に竹管文、 櫛描波状文、刻目文を施し、肩部に竹管文・櫛描波状文を施す。同 29(図版 109)も同形態をもつ。同39(図版 110)は、形態・技法 よりやや新しい要素をもつものと考えられる。口縁部は短い頸部よ り大きく折れ、上段も僅かに外反し、全体的に浅くなる。体部は、 肩がやや張るが球形に近い形をなしヘラ磨きを行う。装飾は、口縁 部内外面に櫛描波状文、外面に竹管円形浮文、肩部に断面三角形の 貼り付け凸帯文、櫛描波状文、竹管文、刻目文を施す。胎土も明る い色調のものである。また肩部に装飾を施すものに32~38(図版 110) がある。

C1 は、口縁部が体部に比べ短く直線的となり、端面を丸くおさめる。体部は球形・胴長球形を成し刷毛目、ヘラ磨きが盛になる。49・50(図版 111)は、口縁端面に刻目文、49は頸部下にも刻目文を施す。同47(図版同)は頸部に凸帯・刺突文を施す。同51(図版 111)は、特異な器種である。直口口縁部は、端面で内面肥厚する。体部は、球形をなし、全面にヘラ磨きを行う。器壁は非常に薄く一部にヘラ削りを行う。C2 44は口縁部を欠くが、体部は肩部がやや張り下位は丸い。器壁外面にヘラ磨きを行う精製胎土を使用してい

る。体部中央に焼成後の穿孔がある。 $C_3$  157(図版117)は口縁部を欠くが、体部は中位が張る球形をなしへラ磨きを行う。体部中央に焼成前の小さな穿孔がある。他の遺構出土のものとしては、H-3 -G地区井戸 4 号の $C_2$  12(図版107)があげられる。

甕型土器 東奈良IVの厚手の甕は、A176(図版 113)、A277(図版同)が代表される。口縁部は大きく外反し、体部は最大径を上位にもち、下位へ丸く細くなる。器壁外面にタタキを行うが、下位には刷毛目を行っている。尖底底部は甕総数の5%の23点を数える。薄手のBは、87(図版 114)が代表され、口縁部は中位外面で厚みを増し内弯ぎみになる。端面は外面に丸く肥厚する。体部は最大径を中位にもつ胴長球形をなし、丸底風になる。器壁外面に僅かにタタキ目を残すが、全面に刷毛目を行う。内面のヘラ削りも全面に行い器壁は薄い。肩部に3カ所にヘラ痕を施す。同86(図版114)は肩部に櫛描波状文を施す。薄手の甕口縁部総数 137点の内、東奈良IVに属するBは7点、同Cは37点を数える。

甕D93・94 (図版114)、甕E95~97 (図版114) の他地域のものは、地域差ならびにその形態、他遺跡の出土状態から東奈良Ⅳに属すると考えられる。

他の遺構出土の東奈良IVに属すると考えられる甕は、H-3-N地区P-15の1・2(図版 107)、H-3-G地区井戸4号の8~10(図版同)があげられる。2は、口縁部が中位より内弯し端面で両面肥厚する。1は雄町13類の中の王泊6層と類以し、口縁部端面が内面肥厚する。2と共伴関係から東奈良IVに属すると考えた。8は、口縁部が鋭い頸部より外反し、端部でやや内弯する。端面は両面肥厚し丸くなる。9・10は、厚手の甕であるが、いずれも「く」の字形に外反する口縁部中位外面で肥厚する。体部は作りが粗雑で球形をなす。器壁にはタタキ目を僅かに残しへラ磨きを行う。

高杯型土器 東奈良 IV の高杯 Aは、杯部がより深く、下部が小さくなると考えられる。105・108・109・112・114・115(図版 115)が属すると思れる。脚部は、裾部の段が薄れ柱部より明瞭な屈曲をもって広がるものと考えられる。

**鉢型土器** 東奈良 $\mathbb{N}$ の鉢は、 $A_1$ 、 $A_4$ に器種が判明するものとして丸底風のものがある。 $A_1$  195(図版119)は、丸底風の底部から内弯ぎみに立ちあがり、小さくくびれ、口縁部が内弯し立ちあがる。 頸部内面には幅のある稜をもち、外面には底部より放射線上のヘラ 削りを行う。 $A_4$  186(図版118)は、小型のものでヘラ削りを行う。底部を欠くが、Bの181(図版118)は、器壁外面にヘラ磨きを行うことから東奈良 $\mathbb{N}$  に属すると考えられる。口縁部は体部最大径を凌ぎ、端面に刻目文を施す片口鉢である。Dの 212(図版 119)は、東奈良 $\mathbb{N}$  のそれより、鉢部が内弯風になり新しい要素と考えられるが作りは依然粗雑である。

その他の器種 器台Aは、175(図版 117)が考えられる。皿部の底部が落ち込み、直線的にのび端部で立ちあがり稜をもつ。脚部は、接合面からやや内弯ぎみに広がる。皿部は横方向のヘラ磨き、脚部は刷毛目を行う。

甑230 (図版120) は、器壁が薄く底部の整形に刷毛を行う。

東奈良 V は底部が完全に丸底化し、器種は少なくなり斎一化が考えられ、布留式併行期とも考えられる。

壺型土器 東奈良 V の壺 C 2 45 (図版 111) は、非常に精良な胎土であり、薄手に仕上げられている。口縁部は内弯風に立ちあがり、内面には横方向の刷毛目の上から暗文風のヘラ磨き行う。他に同口縁部破片が21点出土している。小型丸底坩150 (図版117) は、河内系の胎土と考えられる非常に良質な胎土を用い、平坦な丸底から立ちあがる浅い体部から、口縁部が直線的にのびる。形態からやや古いものと考えられる。

高杯型土器 東奈良 Vの高坏は、A116(図版 115)とB136(図版116)が考えられる。116は、杯下部が短く水平にのび、極小の段をもち大きく広がる杯部上段をなす。器壁は細かいへラ磨き刷毛目を多用する。脚部は明確な稜をもって大きく広がり、同様にヘラ磨き、刷毛目を行う。136は、杯部が2段に屈曲してのびる。脚部は、裾部に小さな段を残し大きく広がる。全面に細かいへラ磨きを行い、非常に良質の青味がかかった胎土をもつ。E142(図版 116)は、精良な胎土を用い、暗文風のヘラ磨きを行う。脚部146(図版同)は大きく広がり細かなヘラ磨きを行う。いずれも胎土から河内産のものと考えられる。

他の遺構出土高杯としては、H-3-P地区竪穴住居跡の7(図版107)が属すると考えられる。

器台型土器 器台A163・176(図版117)は、皿部底部が水平になるものと丸くなるものがあり、ヘラ磨きを暗文風に行う。いずれも河内産の胎土を用いる。

東奈良V

器台B 177(図版 117)は、底径28cm以上の大形品、内面へラ削り、外面に横ナデを行う。器形から退化的なもので青木 $\Pi$ 期に比定されると考えられる。

以上のように別けられると考えたが、さきにも記したごとく一括 土器であるため判然としない面がある。しかし、この後の東奈良遺 跡の調査で同時期の多量の土器が出土しており、比較検討を続けて 行きたいと考えているが、今回の資料が今後の在地の土器研究なら びに編年研究の路台となることを期待する。

- 注 1 「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡 I 地点の土器」 弥生式土器集成 1 昭和33年 小林行雄
  - 2 「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」 昭和31年 坪井清足
  - 3 「鳥取県米子市青木遺跡発掘調査報告」 昭和51年 青木遺跡調 査団

## 土 師 器 観 察 表

			(写真)		40		40	 )			
土	器	No.	(図面) 106	1	106	2	10	6	3	106	4
摘要	₹ ē	重類	壺		殖			甕	1	甕	-
法	口縁	径	21.85	- I	11.3 (反転)		15.2	(反転)	)	14.95	
量	器	高	6.9 (現存値	<u>i</u> )	5.8 (現存		4.4	(現存		6.1 (現存	値)
(cm)	腹底	径径	} 欠損のため不	明	} 欠損のため不	明	欠損の	りため不	明	} 欠損のためる	不明
出	土地	  X	F-7-E,	F	F - 7 - E	F	F-7	7—Е,		F-7-E	
	形	態	。二重口縁、筒	IーS 状の頸部	<ul><li>沼地状落</li><li>の緩やかに外反</li></ul>		。 外面 <i>i</i> ;		非I一S >に外反、	。 丸味のある	<u></u>
			より大きく外	反し、上	僅かに外面肥		内面は	まややま	大きく反	なだらかに	外反し、中
			段は小さな段 反し端部で一		a transfer of the second		る。端	部断面	は三角形。	位よりやや  は大きく上・	
	文	様	端部に稜あり							げる。	7 & 7 L
頸											
141							TO THE PERSON NAMED OF THE				
	整形	外	。頸部に刷毛目	、横ナデ	。僅かにタタ· り、横ナデ	キ目が残	0			0	
部					9、(典/ /		横:	ナデ		横ナデ	
		内	。横ナデ		。横ナデ		0			0	
	形	熊	  。欠損のため不		・肩の張りがな		。 <b></b>	長らたん	·····································	。肩の張らなり	. ) 休形
		157	7(13(0)160)1		に体部も張ら		/F3 V J	K D GV	トキケルン	月の成りる	· 14-112
体											
	文	様									
	The second secon									OF THE STATE OF TH	
	in the state of th										
	整形	外			。右上りのタタ	・キ目	。右上	りのタタ	キ目	0)	
部										不明	
		内			・ナデ		。肩部	て指頭症	夏	0	
			(-15 o ) -7	-an	(400)		1 , 10	- · · · · -	~* HH	)	
			・欠損のため不	,明	。欠損のためる	>明	。欠損(	ひためっ	仆明	・欠損のため	<b>小</b> 明
底		部									
		***************	・赤褐色及び灰	 裙色	。黄褐色		。 黄褐(	<u> </u>		。淡黄褐色	
色		調									
		,									
胎		土	· 0.1~0.6の砂	·粒·石粒·	。0.1~0.3の例	少粒多量に	0.1	-0.3の積		0.1~0.30	砂粒を含有
			金雲母を含有		含有						
	質		。良好		。良好		。良好			。良好	
							15.000				
L±+:		_l-y	And the second s				1,1,1,1				
備		考									
1							1			<u> </u>	

									39				
土	器		No.		106	5	106	6	106	7	106		8
摘要		種	類		甕		甕		鉢			鉢	
法量	口器		高		l.8 l.3 (現存fi	直)	13.4 (反転) 5.8 (現存		11.3 7.55		欠損のた 7.0	とめ不	男
(cm)	腹底		径径	} ケ	(損のため不	明	〉 欠損のため不	明	3.8		3.55		63
出:	土 ;			F	`-7-Е,	F FI-S	F-7-E,	F 溝Ⅱ	F-7-E,	F 背I一S	F-7-		F I-S
П	形文		態様	立	語部より丸く 中位上よりや 立ち上がり端 四厚。器高く	外反し、 や内弯し 計部は内面	。丸い頸部より 中位下より内 部で内面肥厚 cm。	]弯し、端	。外面は直線的	うに伸び、	。頸部より やや内容 損	(僅か	
頸													
部	整	形	外	° ]			•		・横方向のタク	タキ目	。   圖小	が萎し	いが、横
Пр			内	0	・共に横ナテ	2*	* 共に横ナラ		。左上りの刷	色目	ナデ		
体	形		態	0			。肩の張らない	、体形	。底部より直線 上がり、中の内容ぎみに	立よりやや		り大	きく広が
	文		様	0	〉不明								
部	整	形	外	0			。ヘラ削り		。右上りのタ	タキ目	。右上り	のタタ	キ目
			内	0 7	占上りのへ	ラ削り	。不明		。刷毛目		・ナデ		
底			部	0/	欠損のためっ	不明	。欠損のため	不明	。平底 小さな凹み	あり。		に指頭	領痕が残り いがある。
色			調	o j	<b>淡黄褐色</b>		。淡黄褐色		。乳灰黄色		。乳黄色		i.
胎			士.	į.	0.1の砂粒、 有	、雲母を含	。0.1~0.2の 母を含有	砂粒・金雲	0.1~0.40	砂粒含有	。0.1~0 を含有		少粒・雲母
	貿	Ī		۰.	良好		。良好		。良好		。良好		
備			考								・底部か	ら頸部	形にかけて

		-		39		39		39	The state of the s		
土	器		No.	106	9	106	10	106	11	106	12
摘要	_	種	類	鉢		小型	壺	小型	壺	小型	Ē
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	15.0 5.95 12.30 丸底		欠損のため 6.7 (現在 8.55 2.95	字値)	6.9 8.2 8.0 尖底		欠損のため <sup>2</sup> 8.0 (現存 9.2 丸底	值)
出:	土 ±	地	区	F-7-E, 沼地状落	F ち落み	F-7-E	, F 溝 I — S	F-7-E,	F 溝Ⅱ	F-7-E,	F 冓 I — N
П	形文		態様	。二段に屈曲し り、端部断面 い。			外反。端部	。斜め上方へ 端部でやや		。細い頸部よ 立ち上がる。	
頸											
部	整	形	外内	。 ・ ・ ・ ・	÷	<ul><li>横ナデ、穿刷毛目。</li><li>横ナデ</li></ul>	部縦方向の	。横ナデ <b>、</b> 頸 の刷毛目。 。横ナデ	部に縦方向	。   	く不明
体	形文	er - Laurenta Anna da Carlo	態様	。底部より大き 頸部付近で配 がる。			る。肩部も			。最大径付近 平球形を成	
部	整	形	外内	<ul><li>太い刷毛目と目の上に細がき。</li><li>横方向の細がき。</li></ul>	いいへう磨	位にヘラ削		。肩部は横方 き、以下左 ラ削り。		1 1	しく不明
底			部	。丸底		。平底 壁面指頭症	Į	。尖底 ヘラ削り		。丸底	
色			調	。茶褐色		。淡黄褐色		。淡灰黄色		。赤褐色	
胎			土	。精良、金雲母	母を含有	。0.1 <b>~</b> 0.3 <i>0</i> 含有	)砂粒多量的	- 。0.1 <b>~</b> 0.2の 含有	砂粒多量に	- 0.1~0.20	砂粒含有
	質	Ì		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考					。巻き上げ料 に残る。	;土紐が明確	OH.	

			39		39		39			
土	器	No.	106	13	106	14	106	15	106	16
摘要	種	重類	小型丸底	坩	小型丸底	坩	小型丸底	坩	台位	付鉢
法量(cm)	口器腹底	径高径径	9.25(反転) 3.50(現存値 6.65 欠損のため不	直)	10.1 (反転) 5.45 (現存値 7.2 欠損のため不	直)	11.1 (反転) 5.4 (現存 8.2 欠損のため不	直)	欠損のたる 6.05(現 7.6	め不明
出	土 地	区	F-7-E,	F I-N	F-7-E,	F	F-7-E,	F I —N	F — 7 —	E,F 溝I-S
	形文	態様	。大きく外反し やや肥厚し、 くくびれ端部 肥厚する。	、中位で 一度小さ	。斜め上方へ長 中位で小さく 部へ薄くなる	肥厚し端	。斜め上方へ長	と 外反し		
頸									欠損のた	め小明
部	整形	外内	。 } 共に横ナデ	<b>&gt;</b>	。 。 。 。 。 。 。	,	。 。 。 。 。	2		
体	形文	態様	。最大径中位よ り、肩部はほ 下丸くなる。		。最大径は上位	<u>i</u> にある。	。最大径は上位	江にある。	に開き、	からなだらか 裾部で小さな 端部は稜を有
部	整形		。肩部横ナデ、毛目	下位は刷	で不明				・ナデ	
		内	。ヘラ磨き		。左上りのへラ	'狠	。左上りのへき	7 狠	。刷毛目	
底	1	部	。欠損のため不	、明	。欠損のため不	明	・欠損のためる	下明		
色		調	。淡黄灰色		。淡黄灰色		。やや赤味のã 色	ある淡黄灰	。淡赤褐色	i
胎		土	。0.1~0.5の配 含有	少粒・雲母	。0.1 <b>~</b> 0.7のを を含有	▶粒・雲母	。0.1~1.0の を含有	少粒・雲母	。0.1~0.2 を含有	の砂粒・雲母
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考								

			39		39		14-14-140000			
土	器	No.	106	17	106	18	106	19	106	20
摘要	種	重類	小型高标	坏	小型高	杯	器	台	高	不
法	口縁		欠損のため不		欠損のためる		欠損のため		欠損のためる	
量	器 腹	高径	5.25 (現存)	直)	6.5 (現存	値)	6.55 (現在	子但)	7.5 (現存	10)
(cm)	底	径	5.0		9.3	And the state of t	$\frac{11.85}{F - 7 - E}$		13.9 F-7-E,	T.
出.	土地	X	F-7-E,	F	F-7-E,	F	F-7-E	,F 溝 I 一 S	F-1-E,	構 I − S
	形	態								
杯										
111	文	様						-		
			   欠損のため7	C HH	欠損のためる	X 1111	欠損のため	不胆	欠損のため	不明
			大損のため4	1,132	人頃のため	1,003	八頃のため	-/1,007	八員のため	1,193
-terr	整形	纟外								
部										
		内								
	形	態	。なだらかに口				。大きく開く	脚部	。やや裾広が	
			部でやや内容は内面に肥厚		に広がり、 内弯ぎみに				り大きく広	かる裾部。
脚	ميليد	424				-			   。 4 孔	
	文	俅	。3孔						4 14	
									AAA	
	整用	乡外	。縦方向のへ	ラ磨き。				いがへラ磨	。縦方向のへ	ラ磨き。
部					き、端部は	横ナデ	· **		A CONTRACTOR OF THE CONTRACTOR	
		内	・ナデ		。端部は横ナ	デ	。刷毛目		・ナデ	
底		部								
		****	。灰褐色		。茶黄褐色		。淡黒褐色		。淡黄褐色	
色		調								
胎		土	∘ 0 1~1 0m	砂粒・石料	· 0.1~0.5∅	砂粒、重母	0.1~0.30	D砂粒を含着	i ∘ 0.1~0.4σ	)砂粒を含有
I VILL			を含有	•> 17° 114∏	を含有	VILL XH	0.1	> 1	0.2 0.1	<b>□</b> H [13
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
	-							AND THE REPORTS OF THE PERSON NAMED IN COLUMN TWO IS NOT THE PERSON NAMED IN COLUMN TO THE PERSO		
備		考							ALCOHOLOGICAL TO THE PERSON OF	

土	器	No.	106	21	106	22	23 106	23	41 107	1
摘要	i	種類	高杯		高 杯		高杯	<	簉	
法 量 (cm)	1	 	欠損のため不 8.2 (現存f 10.2		欠損のため不 6.15(現存値 8.75	1	欠損のため7 7.45 (現存 8.2		13.7 21.2 19.2 丸底	
出	土地	区	F-7-E,	F	F-7-E,	F	F — 7 — E, 沼地状态	F ち込み	H - 3 - N	P-15
口頸部(杯部)	文 整 ;	態様外内	欠損のため不	· 明	欠損のため不	明	欠損のためる		・「く」の字形くるようで行りに が開する。というでが、 を関するなるは を回い、体はは を原体はにした。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	直立、口 )返し内面 居高2.2cm。 縁外面に、 線文を施 電す刷毛目
体部	形文	態 ・柱部よりおだやかにがり据部でやや広る。端部に稜あり。		やや広が	。中空の柱部より丸くな がらかに広がり、端部 で中央が凹む稜をも つ。		1	ながり、裾 く広がる。	肩部はやや引 胴長の球形を	長り、やや をなす。
脚部	整	形外内	・縦方向のヘラ磨き。 ・縦方向の荒い刷毛目 ・裾部にヘラ削り。 ・裾部は横方向の刷毛目				。柱部縦方向の 裾部同刷毛!		。肩部から縦刀 12本の刷毛 煤付着によ 。肩部から中 のへう削り、 縦方向のへ	目。底部は り不明。 立へ横方向 下位へは
						The second desirable of the se			。丸底	
底		部								
色		調	。淡黄褐色		。淡灰褐色		。淡灰褐色		。淡乳茶褐色	
胎	土 。0.1~0.3の砂粒・ 母を含有		少粒・金雲	° 0.1~0.2の	 少粒を含有	i。0.1~0.5のi を含有	沙粒・石粒	な。0.1~0.2の 母を含有	砂粒・金雲	
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考							。外壁全面に 内面下位に	
		SOMETHING TO STREET				and a second second				

t.			0		9		4	41	5
土	器 No.	107	2	107	3	107	4	107	9
摘要	種類	甕		鉢		甕		壺	
法 量 (cm)	口 縁 径 高 腹 径	16.1 10.6 (現存値 欠損のため不		14.35 8.0		13.4 21.4 18.0 3.2		14.4 11.15(現存 入損のため不	
	底 径 土 地 区	H-3-N	D15	2.9 H-3-N	P 16	H-3-N	P —16	H-3-N	P19
ш.	1	-						。 肩部より斜上	
口頸		り内弯する。 両面に肥厚して終る。 ・内面は、内弯 頸部の稜はい。	端部は、 、角張っ するが、	がり、口縁端 に厚く 0.7c 面三角形。	端部は非常	位で肥厚し、			江上部より 端部外面
	整形外	٥٦		0)		° )		0)	
部	内	横ナデ			しく不明 のヘラ <b>磨き</b>	横ナデ		風化が著し	<b>ンく不明</b>
体	形態	<ul><li>肩部よりなた</li><li>ち、肩の張らの器形と思わる</li></ul>	ない胴長		び、急激に	肩部よりなが	ごらかに落	。肩部よりな7 ま ちる。	ごらかに落
	文様	。器壁の厚み()	.3~0.4cn	。内面は凸凹 器壁の厚み る。					
部	整形外内	いが <b>、</b> 横方 目。	向の刷毛	。風化が著し	く不明確て デか細かい	。横方向刷毛	りの3段に タタキ目。		しく不明
底	部	・欠損のためっ	不明	<ul><li>・平底をヘラ 丸くした後</li><li>き。</li></ul>				ト。欠損のため	不明
色	調	。淡黄茶褐色		。淡黄色及び	淡黒褐色	。黄褐色		。外面・赤褐 内面・灰黄	
胎	土	∘ 0.1~0.2の}	沙粒を含有	亨。0.1~0.5の 含有	石粒多量に	て。0.2~1.0の を含有	砂粒・石料	立。0.1~0.3の 粒を多量に	
	質	。良好		。良好		。良好		。良好	
		。肩部外壁に	2コの籾罩	亦					
備	考							i de de la constante de la con	

			.	41	_			41	0
土	器 No.	107	6	107	7	107	8	107	9
摘要	種類	鉢		高 杯	;	魙		甕	
法 量 (cm)	口 縁 経 高 程 底 径	33.05(反転) 18.8 (現存値 33.9 欠損のため不	直)	23.1 17.3 13.3		15.4 (反転) 13.7 (現存 22.9 欠損のため不	値)	13.7 20.9 19.8 丸底	
出:	土地区	H - 3 - N	P-8	H−3−P 🕏	区穴住居跡	H-3-G	井戸4号	H-3-G	井戸4号
口頸部	形 態 文 様	。小さくくびれ ら小さく外反 は角張り終る	し、端部	。小さな杯下音 稜をもち、夕 ち上りり弯する やや内さなは丸い く断面は丸い	上方へ立 江上部より ら。杯端部 よち、薄	反し、中位上 や内弯し、端 肥厚し、小さ	に部よりや 端部は両面 な面をも	外面中位でれ 厚する。口編 反り丸くおさ 。中位に継ぎ目	つずかに肥 景端部やや さめる。 目があり上
(杯 部)	整形外内	。   横ナデ		<ul><li>細かな縦方向</li><li>き。</li><li>不明確である</li><li>縦方向のへ</li></ul>	るが、細い 5 磨き。	横ナデ		。                   	
体部(脚部)	形態	。肩部 まままま ままままままままままままままままままままままままままままままま	が体部上 は は は は は は は は は は は に が に は に は に が に は に に に に に に に に に に に に に	に小さく直絡る脚部。 ・裾部の上段に ・柱部、裾部の向の細いへ	泉的に広か て4孔。 ともに縦方 ラ磨き。	肩がやや張。 と考えられ、 。頸部付近はは し、肩部か。 毛目の上よ の刷毛目。 。頸部付近はは	り、胴長形 る。 黄ナギを向方 方が、横 デラー で、 。 で、 。 で、 。 で、 。 で、 。 で、 。 で、 。 で、 。	め、最大腹にある。 左右非対でもが 証がである。 はであるは横すりでで、 で、頸は右よれで、 で、野は右の上にで、 で、中位上にで	圣は中 中 に 日 上 ぎ い 、 荒 ラ 方 う た る り と で 、 で た り と の と で り た り た り る り る り る り る り る り る り る り る
底	常	。欠損のためる	(明			・欠損のため	不明	。丸底、ヘラ が凸凹が残	
色	調	。黄褐色		。淡黄褐色		。淡灰色		。淡黄褐色	
胎	±	。0.1~0.6の 粒、金雲母を		0.1~0.20	砂粒を含す	す。0.1の砂粒を	含有	∘ 0.1~0.4⊘	砂粒を含有
	質	。良好		。良好		。良好		。良好	
				。杯部端に黒	粒あり。				
備	考							-	

				41				41		***************************************	
土	器		No.	107	10	107	11	107	12	107	13
摘要		種	類	甕		甕		壺		腕型高	杯
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	14.1 22.9 22.4 丸底		13.8 13.25 (現存 15.9 欠損のため <sup>2</sup>		欠損のためイ 12.3 (現存 15.0 2.1		11.45 6.2 (現存 欠損のため	
出	上 :	地	X	H-3-G	井戸4号	H-3-G	井戸4号	H-3-G	井戸4号	H - 3 - G	井戸4号
口頸部	形文		態様	。「く」の字に 中位よりさら 端面は丸い。 でわずかに肌 ・中位に継ぎ 方よりかぶ る。	に反り、 外面中位 型厚する。 目があり上	成し、内弯	ぎみに立ち	欠損のためフ	不明	<ul><li>杯下部より。</li><li>カーブをえ。</li><li>端部断面は</li></ul>	がく。
(杯 部)	整	形	外内	。                   		。               		Marco Ices	[ · 93	。 へラ <b>磨き</b> 。 縦方向のへ	ラ磨き
体部	形文		態様	て大きく。旨	最大腹径も い球形に近 明瞭な輪積	みを持ち、 中位にある	最大腹径が	。最大径は下化 扁平な形で <i>と</i>		。短かい充実	した柱部
部	整	形	外内	ともいえる い、全体に	技法を用		タキ目	。全体に3段に る右下りの・ 。不明		1	
底			部	。丸底		。欠損のため	不明	。丸底 わずかにあ わりを削っ			
色			調	。乳黄褐色		。淡灰褐色		。淡茶褐色		。黄褐色	
胎	,		土	。0.1~0.8の を含有	砂粒・石粒	i ∘ 0.1~0.20	砂粒含有	∘ 0.1~0.2⊘	砂粒含有	。0.1~0.3の 含有	)砂粒、石粒
	質	Ĩ		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	。外面と底部 着 外面底部に		j		。底部付近に	黒斑あり		

	nn.			_	42	_					
土	器	No.	108	1	108	2	108	3	108	4	
摘要		種類	<b>壺 A</b>		壺 A		壺 🛭	壺 A		壺 A	
法 量 (cm)	口縁径 器 高 3.95 (現存値) 腹 径 底 径 大損のため不明			23・1 6.6 (現存値)		17.9 6.0 (現存値) } 欠損のため不明		15.8 5.45 (現存値) } 欠損のため不明			
出	土地	区	区 H-3-G 溝II-3		H-3-G 溝Ⅱ-3		H-3-G 溝Ⅱ-3		H-3-G 溝Ⅱ-3		
口頸	形文	態様	。筒状の頸部に水平 く口縁。口縁端は み上げられ、外面 をなす。器壁が口 は厚いが、頸部か 部にかけて器壁は なる。 。口縁端部の稜に3	に緩やかなカ 平に開く口縁 は立ち上がり 張る稜が有る 厚くしっかり 部。	ーブで水 、口縁端 、下位に 。器壁は	カーブで水平 縁、口縁端は げられ、外面 るが、横ナ か、凹んでし	なに開く口 はつまみ上 でに稜が有 デのため いる。	み上げられ外面に稜を			
部	整开	/ 外 内	凹線文。 。横ナデ 。縦方向の刷毛目の ら横ナデ。	)上か	は縦方向のへ	、ラ <b>磨き。</b> デ <b>、</b> 頸部		送方向の刷 は横ナデ。	ラ磨き。口縁端は デ。 。頸部は刷毛目が少し		
体	形文	態様	欠損のため不明		欠損のためイ	明	欠損のためっ	不明	欠損のため	不明	
溶	整刊	<b>多外</b>									
底		部	。欠損のため不明		。欠損のため不	等	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	
色		調	。淡茶褐色		。淡黄茶褐色		。淡赤褐色		。淡茶褐色		
胎		土	。 0.1の砂粒を僅か み、雲母を多量に				° 0.1~0.3⊘∏	少粒含有	0.1~0.20	砂粒を含有	
	質		。精良		。良好		。良好		。良好		
備		考	。外面全体に煤付着	<u>석</u> 되 o					。煤付着		

		42		42		42		42	
土	器 No.	108	5	108	6	108	7	108	8
+xt and	種類	壶 A		壶 A		壺 A		壺 A	
摘要 法 量 (cm)	口 縁 径 器 高 腹 径 底 径	24.5 8.6 (現存値)		16.0 25.9 25.4 4.8		欠損のため不明 23.6 (現存値) 23.0 4.15		14.1 16.35(現存値) 24.3 (現存値) 欠損のため不明	
出	土地区	H-3-G	溝Ⅱ—3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3
口頸部	形 態	広がるのは 立ち上がある。 いておりをいる。 でいる合うでは でいる合うででは の口縁端面はは がに がに がに がに がに がい のの がに がい のが のが のが のが のが のが のが のが のが のが のが のが のが	口縁端はは ト上方とと ははない はなった はなった はなった はなった はなった はなった はなった はなった	する口縁、「 上方へ立ち」 面には斜めい 断面は丸い。 。横ナデ 。頸部には横 目、上位は・	コ 縁端は外 外 た た た た た た た た の の の り き 、 り 、 り 、 り り り り り り り り り り り り り	が、筒状の 反する口縁 る。 。 頸部に横方 縦方向の刷	質部から外 駅と思われ	端内面は立 面は丸く稜域 。頸部から外内 へラ痕が残 肩部の境に する。	コ縁、口縁 ち上がり外 がある。
体	形態文様	らへう磨き。		口縁端は横 。最大径は中 下に有り。 ともに良く ある。3回 で作られ、 とがよく残	位よりやや 上位・下位 似た張りで に区切られ 粘土紐のあ	上位・下位: な形を成す: やや張る。	が同じよう		
部	整形外内				部に残って	浅い縦方向 下位は煤付	の刷毛目、 着により刁	。肩部より下	
底	部	。欠損のためる	不明	<ul><li>・平底</li><li>突出し、壁目が有る。</li><li>凹みがありに線刻が入</li></ul>	中央部には 囲りに十号	が残る。	み、木葉症	。欠損のため 复	不明
色	調	。淡灰赤褐色		。淡青灰褐色	i.	。淡灰黄色		。外面一茶褐 内面一淡灰	
胎	生質	。0.1~0.3の 。良好	砂粒を含有	i 。0.2~0.5の を多量に含 は精良 。良好			砂粒・石料	垃。0.1~0.3⊄ 。良好	砂粒を含有
備	考			。編み包み <i>の</i> とが残って		b。底部から中 着。 編み包みの いる。		付。内面に薄くて	煤付着

				42		42				43	
土	器		No.	108	9	108	10	109	11	109	12
摘要	種類 摘要		壺 B <sub>1</sub>		壺 Bı		壺 B	壺 B1			
法 量 (cm)	法 口縁 径		高径	16.55 26.5 24.9 2.25		21.4 23.2 (現存値) 35.2 欠損のため不明		20.9 6.25 (現存値) 欠損のため不明		17.15 6.06 (現存値) } 欠損のため不明	
出	土土	也	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H—3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3
口頸	形文		態様	。二重口縁。長 頸部から下移 反り、上段に り口縁端部に のびる。内百 く外反する る。	は小さく t大きく反 t水平近く fiは段がな	。二重口縁、作 が外反し、」 立ちあがりら 口縁端部に程	上段は少し N反する。		大きく外	上段は僅かり	く反り <b>、</b> に外反す Bは小さな
部	整	形	外内	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	可の刷毛目		部は横ナデ 方向刷毛目	は縦方向の扇	削毛目。	3。上段は縦方向 き、下段は枝 ラ磨き。 。風化が著しく	黄方向のへ
体	形文		態様	。最大径は中化 上・下が同り つ。		。肩部で張り; ーブで胴部 細長い器形。	へと続き、				
部	整	形	外内	。上部と下部は 下位上段の打 方向の3段は るタタキ目。 。横方向の刷	妾合面は横 て別けられ	に行う。		欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
底			部	。尖底 囲りをタタ 成形し、底 いている。			不明	。欠損のためる	不明	。欠損のためる	不明
色			調	。黄灰褐色		。茶褐色		。茶褐色		。暗茶褐色	
胎			土	。0.1~0.5の 粒、雲母を		i。0.1~0.7の を多量に含有		立。 0.1の砂粒 有	を僅かに含	含。0.1~0.6の7 を含有	沙粒、石粒
	質	Ī		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	黒斑	面にかけて	の二重口 外反してい り水平な薄 している。 から立ち上 をつけたし	る所で止るい器壁を存 その後、」 がりの部分	₹ <b>3</b>			

***************************************			-				1 1	62			
土	器		No.	109	13	109	14	109	15	109	16
摘要		種	類	壶 B1		壺 B1		壺 B <sub>1</sub>		壺 Bs	
法 量 (cm)	口 縁 径 18 器 高 4 腹 径 1		高径	18.75 4.45 (現存値) 欠損のため不明		20.95 4.6 (現存値) 欠損のため不明		23.35 5.5 (現存値)		18.9 3.75 (現存値)	
	生地区			H-3-G	進119	/ H-3-G 溝Ⅱ-3		· H-3-G 溝Ⅱ-3		· H-3-G 溝Ⅱ-3	
щ.	形		態	。二重口縁。丁			.,,			1	
口頸	文		様	一至 「	oずかに肥 重線的にの	く外反し、	外面にわず、上段も大る。口は る。口縁は する。内面 段をもって	頸部が水平に折れ端部で僅かに下に張り出す、上段は広く外反し、端部に丸味のある稜をもつ。 ・下段端に刻目跡が一周		線的にのびる口縁に、 中位外面に三角の凸帯 を付け二重口縁とした もの。	
部	整	形外 ・風化により不明 ・上段は、縦方向の細か			目の上から粗雑なヘラ 磨き。下段は縦方向の 刷毛目の上からヘラ磨		<ul><li>上段は横ナデ、下段は へラ磨き。</li></ul>		共に横方向のへラ磨		
体部	形文整	形	態様外内	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
底			部	・欠損のためる	不明	・欠損のため	不明	・欠損のため	不明	・欠損のため	)不明
色			調	。暗茶褐色		。茶褐色		。淡茶褐色		。外面一青黄 内面一淡刻	
胎			土	· 0.1~0.20	砂粒を含有	∘ 0.1~0.2Œ	砂粒を含有	ı ∘ 0.1~0.2⊘	砂粒を含有	i · 0.1~0.30	)砂粒を含有
	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考			。薄く煤付着	i o				

				43		43			10		
土.	器		No.	109	17	109	18	109	19	109	20
摘要	į	種	類	壺 Ba	3	壺 ]	38	壺 B:	2	壺 B:	2
法 量 (cn)	口器腹底	縁	径高径径	18.75 6.25 (現存化 } 欠損のため不		16.5 6.65(現存 } 欠損のため	·	12.75 3.0 (現存 } 欠損のため不		15.95 3.5 (現存 } 欠損のため不	
出	土	地	X	H-3-G	<b>溝Ⅱ</b> — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ一3
口頸	形文		態様	。二重口縁、第 反し、さらに 口縁部をつけ をなす。内面 口縁部の境に て外反する。	:外反する   たした形   は頸部と	頸部に外上 る口縁、中	方へひろが 位外面に三 付け二重口	に大きく水平 口縁、口縁端 に張り出し程	Zに広上もられた。 にはをく。猫をられた。 が・つみが、大きない。 がいできるでは、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	さく版り出 し、稜は中央 なりをなす。 ・外面に8本の 文と上・下1	上・下に大 し稜をな Rが凹み弓 D櫛描波状 L 個の円形
部		Material Commence	外内	<ul><li>口縁部は横方磨き。頸部にヘラ磨き。</li><li>口縁部は横方磨き、頸部に磨き、頸部に</li></ul>	は縦方向の 5向のへラ	共に口稿 頸部は横	₹部は横ナデ (方向のへう	と放射状の総 いる。	泉が入って ともに、縦	は、7本の影波状文	<b>尾形の櫛描</b>
体部	形文整		態様外内	欠損のためる	不明	欠損のため	>不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
底	1		部	。欠損のためる	不明	・欠損のため	〉不明	。欠損のためる	不明	。欠損のためる	不明
色		11.00	調	。淡黄褐色、-	 一部赤褐色	。茶褐色		。淡茶褐色		。淡赤褐色	
胎			土	· 0.1~0.30	少粒を含有	i。0.1 <b>~</b> 0.20 有	D砂粒極少含	· 0.1~0.20	砂粒を含有	i ∘ 0.1~0.3Ø	砂粒を含有
	貿	Ţ		。良好	<del>计</del> 差	。良好		。良好		。良好	· · ·
備			考	の外共に煤	<b>(1)</b>						

			61		61		61			
土	器	No.	109	21	109	22	109	23	109	24
摘要	種	類	壺 B2	2	壺 B	2	壺 B:	2	壺 F	3 2
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	19.3 2.3 (現存f		19.15 2.5 (現存 大損のため <sup>2</sup>		17.4 3.7 (現存 } 欠損のため不		34.2 (反軸 3.7 } 欠損のため	
出:	土地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3
四頸部	文 整 形	態樣外內	。口縁端部のみ水平近くのひ口縁端は上にり、下稜ににわり、稜、上下荷り、稜、上下衛間を下端にもり、砂川の中でを下端である。	ドる口縁、 こ立ちあが ずかに張 こる。 こ刻目を施 強波状文と	く外反し、2 り出す、上 反し端部は2 する。	少し下に張 役は短く外 外面に肥厚 皮状文と 2 形 竹管 浮	く外反し、小 展り出す。 く外の出す。 くいで反し、対 での外面の でのかるのである。 ち本のの の口縁端部向の の口縁端にのの の口縁端にのの。 の口縁端にののである。 の口縁端にののである。 の口縁端には一 は一 にいるのである。 の口縁には一 にいるのである。 の口縁には一 にいるのである。 の口縁には一 にいるのである。 の口縁には一 にいるのである。 の口縁には一 にいるのである。 の口縁には一 にいるのである。 のいるので。 のいるので。 のいるのである。 のいるので。 のいる。 のい。 のいる。 のいる。 のいる。 のいる。 のい。 のいる。 のい。 のい。 のい。 のい。 のい。 のい。 のい。 のい	、 上 5 お 2 と 上 5 お 3 さ り が は 。 、 、 た た 、 た た た た た た 、 た た た た 、 た た た 、 た た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 た 、 ら た ら 。 ら 。 ら 。 ら 。 ら 。 ら 。 ら 。 ら 。 ら 。	きく外反し 反し、 るし、 るを が文。 では のでは では では では では では では では では では	、上段も外 に稜を有す 本の櫛描波 外面に8本 本の同直線 に9本の同
体	文整形	態様外内	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のためる	不明	欠損のため	)不明
底		部	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	・欠損のたる	7)不明
色		調	。淡暗黄茶褐的	<u></u> 色	。淡黄灰褐色	ı	。淡赤茶褐色		。外面一淡。 内面一淡原	
胎	a	土	· 0.1 · 0.20	砂粒を含有	0.1~0.3€	砂粒を含7	j。0.1~0.3の	砂粒を含る	有。0.1~0.50 を含有	の砂粒、石粒
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考								

			61		61				61	
土	器	No.	109	25	109	26	109	27	109	28
摘要		種類	壺 Ba	2	壺 I	3 2	壺 B	2	壺 B:	2
法 量 (cm)	口器腹底		16.6 4.0 (現存化 ) 欠損のため不		17.3 7.1 (現在 } 欠損のため		23.1 5.1 (現存 } 欠損のため <sup>2</sup>		19.0 2.7 (現存) 】欠損のためイ	
出.	土 地	1 🗵	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3
口頸	形文整理	態様外	し端部で下へ 上段は短く直 上方に立ち上 ・上段外面全面	たれる。 I線的に斜 がる。 Fに18本の 波状文の Jを全部描	きく反りま は、中位は のびる。 ・外面には、 波状文。内 直線文。内	曲り、上段 で外反し上 内弯ぎみに	反し、上段( 立ちあする。 く外反する。 を有する。 を有する。 反る。 ・段の所に20 形竹管浮文:	ま中段まで きらに大き は一次に は一次で は一次で はいま はいま はいま はいま はいま はいま はいま はいま はいま はいま	開く、端部に 形を成す。 。内面端部に「 波状文。	とも大きく は断面三角
部	abbox 7	内	。横方向の粗架	誰なへう磨	。	をしく不明	す。 。横ナデの上: のへラ磨き。 。横ナデの上: のへラ磨き。	。 から横方向	<ul><li></li></ul>	<u>.</u>
体部	文 整 ;	態様外内	欠損のためる	<b></b> 不明	欠損のため	)不明	欠損のため	不明	欠損のためる	不明
底		部	・欠損のためる	下明	・欠損のため	)不明	。欠損のため	不明	。欠損のためる	不明
色		調	。暗茶褐色		。茶褐色		。茶褐色		。淡黄茶褐色	
胎	質	±	。0.1~0.4の6 母を僅かに言		。0.1~0.40 を含有 。良好	D砂粒、雲母	:。0.1~0.2の 。良好	砂粒を含有	i。0.1~0.2のi 。良好	沙粒を含有
備		考	・外面に薄く	某付着			。内面に煤付	着	~~	

					61	1	43		43			
土		器		No.	109	29	109	30	109	31	110	32
摘	要		種	類	壺 B2		壺 E	3 2	壺 B	2	壺	
法 量 (cn	t t	口器腹底		高 径 径	19.8 3.95 (現存値 ) 欠損のため不同	J.	21.6 26.1 (現在 27.5 欠損のため	不明	19.3 口縁器高 5. 体部器高19. 33.9 欠損のためる	2(現存値) ド明	欠損のため7 4.1 (現存 22.8 (現存 欠損のため7	值) 值) 「明
出			1	X	H-3-G 溝		H-3-G		H-3-G		H-3-G	溝Ⅱ-3
平	TILL THE TAXABLE PROPERTY OF TAXABLE PROPERTY	形文整		態様外内	・二重口縁。下 ぎみに伸びる。 線的にり出しる。 でしている。 ・上段の上下に、 8本の中央学文、 形竹門では線、 下本の同直。 ・ 共に横ナデ	上段は直 所 けけた 文 り り り り り り り り り り り り り り り り り り	頸部から水 きくのび、 に外反する。 7本の中央で ・一年の円形浮文 ・細かな縦方 頸部横ナデ	平ぎみに大 上段は僅か 苗波状文2 に2個1対 4カ所。 向刷毛目、。	1.4.	かに張り いに張り いと に に に に に に に に に に に に に	欠損のためる	不明
(2		形文		態様	欠損のため不	明	もち、中位	上で大きく 下位は直線	上・下が同じ 球形を成す。	長りをもち 櫛描波状	<ul><li>肩部が張る。</li><li>6本の櫛描に本の同波状</li></ul>	直線文と 5
SÍ/	Æ	整	形	外内			方向のヘラ 。上部は一き	磨き。 8削ってい	へう磨き、「	中・下部は 毛目。	。縦方向へ ラム : 。横ナデ と 一 き。	
厄	Ē			部	。欠損のため不	明	。欠損のため	不明	・欠損のため	不明	。欠損のため	不明
É	<u>.</u>			調	。淡黄褐色を基 面に淡赤黄色 いる。			Ţ.	。赤褐色一部	黄褐色	。淡茶褐色	
胎	4			土	。0.1~0.2の砂 に含有	粒を多量	。0.2~0.8の を多量に合		t ∘ 0.1~0.20	砂粒含有	。精製粘土	
A STATE OF THE STA		質			。やや軟質		。良好		。良好		。良好	
(fi	tt.			考					。薄く煤付着			

			An annual section of the section of		62				62	
土	器	No.	110	33	110	34	110	35	110	36
摘要	種	類	壺		壺		壺		壺	
法 量 (c:1)	口器腹底	径高径径	欠損のため不 4.0 (現存値 22.7 ( 〃 欠損のため不	直)	欠損のため <sup>2</sup> 13.3 (現存 23.65 ( <i>u</i> 欠損のため <sup>2</sup>	值)	欠損のため <sup>2</sup> 7.2 (現存 30.0 ( <i>u</i> 欠損のため <sup>2</sup>	値)	欠損のため 4.3 (現存 19.05( ル 欠損のため	序值) ′ )
出.	土 地	区	H−3−G Å	<b>場Ⅱ</b> — 3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
	形	態				Outstand				,
П	文	様								: 2
頸			欠損のため不	明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
部	整形	外								
		内								
	形	態	。丸味のある肩	部	。筒状の頸部 る丸い器形	より肩の張	。肩が張り丸	い器形	。肩の張らな かな器形	い、なだら
体   	文	様	。肩部に断面四 帯をはり付け 刺突文。7本	、これに	文と12本の		。 6 本の細い と同 5 本の		。7本の櫛提 波状文が各	
部	整形	外	状文 2 帯、 9 線文、 7 本の 。不明		<ul><li>頸部は横方</li><li>き。体部は</li><li>ラ磨き。</li></ul>		。不明		。不明	
MINISTER PARTY IN PARTY IN TRANSPORTER		内	。横ナデ		の風化が著し	く不明	。横ナデ	,	。横ナデ	
			・欠損のため不	明	。欠損のため	不明	・欠損のため	不明	。欠損のため	不明
底		部								
色	·	調	。暗茶褐色		。青黄褐色		。淡黄灰褐色		。淡茶褐色	
胎		土	。 0.1の砂粒 <b>、</b> 有	雲母を含	。0.1~0.7の 多量に含有		。0.1 <b>~</b> 0.7の を含有	砂粒、石粒	i。0.1~0.6の を含有	砂粒、雲母
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	NATION COMMITTEE
備		考								

			62		62		43		45	10
土	器	No.	110	37	110	38	110	39	110	40
摘要	種	類	蘢		壺		壺 Ba		壺	
法 量 (cm)	口縁行器	径高径径	欠損のため不 6.1 (現存作 21.4 ( <i>"</i> 欠損のため不	直)	欠損のため7 10.85(現存- 23.55( 〃 欠損のため7	値) )	24.6 19.1 (現存付 29.6 欠損のため不		17.75 23.1 (現存 24.95 欠損のため7	
出	土 地	Z	H-3-G	<b>帯Ⅱ</b> — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3
口蜜	文 整 形	態様外内	欠損のためイ	<b>以</b>	欠損のためる	不明	頸部から明確 段は広く外屋 緩やかなカー する。 。外面12本の権 と 2 個 1 対の	催に折れ上 で、大 で外 が描波状文 の円形竹管 2本の同波 を を を を を を を を を を を を を	厚。端部は、 方へ外面が する。	僅かに肥 内面が上 ト方へ肥厚 ト方へ肥厚 日へ は に 下 し に で し に が に が に り に り に り に り に り に り に り に り
体	形	態	。筒状の頸部が 張らない、な 落ちる器形。	ほだらかに		小球形を成	<ul><li>肩部がやや別径は中位、終 一ブをもつ。</li></ul>	爰やかなカ		
-lof2	文 整 形	様外			。11本の櫛描泊 と同直線文 。不明		。肩部に断面三 をはり付け、 4個1対の1 所、その間1 描波状文。 。右下りのへ	刻目文、 竹管文 4 カ C12本の権	,	
部		内	。頸部横へラ 部、ナデと届		。横方向の刷	毛目。	。ナデ(粘土和 1.7cm)	⊞が残り↑	」。横方向の刷 へラ削り。	毛目、一部
			・欠損のためる	不明	・欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明
底		部								
色		調	。黄灰褐色		。淡青黄褐色		。乳黄褐色、	 赤褐色	。乳黄褐色	
胎		土	。0.1~0.4の 含有 雲母		0.1~0.20	砂粒を含有	j。0.2~1.0の を含有	砂粒、石料	立。0.1~0.5の 多量に含有	
	質		。良好		。良好		。良好、軽量	の質	。良好	
備		考	。内面に煤付	着			。この櫛描波 だらかな山 線で描いて	と谷をもつ	i	

,								44		44	l
土	器		No.	110	41	110	42	111	43	111	44
摘要		種?	類	壺		壺		壺 C	2	壺 C	2
法 量 (cm)	口器腹底	ī 1	圣高圣圣	欠損のため不 19.98(現存値 27.1 4.6		欠損のため <sup>2</sup> 22.9 (現存 30.3 4.5		8.05 17.35 17.55 3.5		欠損のためる 13.65(現存 15.05 2.15	
出:	土 地	1 [	X	H-3-G	<b>購Ⅱ</b> — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3
П	形文		態様					。外上方へ立た 部で内弯しま なる。断面に	器壁が薄く	。口縁、頸部は	<b>t</b> 欠損
頸				欠損のため不	:明	欠損のため	不明				
部	整升		外内					。横ナデ、縦 磨 <b>き</b> 。 。横ナデ	方向のへう	。横ナデ(頸き	FK )
			1.3					1,4,7,7		IN TO CERT	127
体	形文		態様		ぶ張り中位	。肩部が張り 大きく一層 ちながら張 急な線で底 いる。	まるみを <b>も</b> る。下位は	中位で一層 形。		。最大径は上位 が少し張り、 くなる。	
部	整			<ul><li>・中位まで右下 磨き、下位は 削り。</li><li>・右下りの刷毛 ら横方向の^</li></ul>	<b>t一</b> 部ヘラ ミ目の上か	ラ磨き。下 ラ削り。 。右下りの刷	位は一部へ 毛目の上か	中位は横方[			
底			部	。突出平底 中央に凹みか りを少し削っ		<ul><li>・平底</li><li>厚みがあり</li><li>中央部凹んりを削って</li></ul>	でいる。囲		然に凹み削	。平底 囲りがよく るため丸底の	,
色			調	。淡青黄褐色		。淡青黄褐色		。暗茶褐色		。外面一淡黄ź 内面一淡黑的	
胎			土	。0.1 <b>~</b> 0.7の砂 を含有	 炒粒、石粒	。0.2 <b>~</b> 0.7の を含有	砂粒、石粒	:。0.1~0.2の を含有	砂粒・雲母	・雲母を含有	
	質			。良好		。良好		。良好		。精製された」	良質の粘土
備			考					。全体に薄く	煤付着	。焼成後、体	部中央に孔

				44		44		44		44	
土	器		No.	111	45	111	46	111	47	111	48
摘要		種	類	壺 C <sub>2</sub>	2	壺 C	1	壺 C	1	壶 C:	L
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	9.65 16.0 12.9 丸底		15.1 7.5 (現存 ) 欠損のためる		13.35 18.8 (現存 28.8 欠損のため <sup>フ</sup>		12.65 25.0 (現存 25.95 欠損のためる	
出:	土 均	13	区	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
口	形文		態様	。肩部と頸部の くびれ、 ½ し、外上方へ 部で一層内容 は三角形を原	まで内弯 、広がる端 いる、断面	さめる。		。外上方に少り 内面はよりり 程薄くなり、 い。 ・類部と肩部の 帯を付け、 突文。	外反し端部 断面は丸 の境に、凸	でやや外反し 稜がある。	
部	整	形		<ul><li>縦方向の細た</li><li>き。</li><li>横方向の刷</li></ul>	三目の上に	へう磨き。	方向の太い		デ	・縦方向の刷目	
			内	放射線上の~ (暗文風)	へう磨き。	。横ナデ		•		。横方向の刷	6目。
体	形文		態様	。最大径は中位 張るが上・ が等しい丸い	下位の張り			。少し肩部がはゆるやか		。胴部一部欠打 肩部がやや で緩やかにが はやや下位に 位では粘土れ る。	長り、胴部 なり最大径 てある。下
						欠損のため	不明				
部	整	形	外中	。肩部に少しばり、中位は 位は縦方向の	黄方向。下			。右下りのへ 。横方向に不		<ul><li>縦方向の刷</li><li>に一部タタ</li><li>・ナデ、粘土</li></ul>	キ目が残る
			内	・ナデ				。傾刀同に小	<b></b> 前	が明確に残	
底		y nervasyen e	部	。丸底		。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	・欠損のため	不明
色			調	。赤褐色		。淡灰赤黄色		。黄褐色		。青黄褐色	
胎			土	。金雲母を含	有	0.1~0.30	砂粒含有	∘ 0.1~0.3Œ	砂粒を含有	j ∘ 0.1~0.3の	砂粒を含す
	質			。精製された	良質の粘土	一。良好		。良好		。良好	
備	and the state of t		考							。編み包みの が残る。	日焼けの症

接   日   日   頸   部   体		高径径 区 態 様	ら横ナデ。 ・横ナデと横方 目の上から一 向のヘラ磨き	直) 明	13.1 29.9 26.9 尖底 H-3-( 。肩部より のびは丸く 。端部する。 。総部方付付残向の ・横方向のはる。 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質のがする。	壁さい で	15.1 26.9 23.0 丸底H - 3 - 5 - 5 - 5 - 5 - 6 - 7 - 7 - 7 - 8 - 7 - 7 - 7 - 8 - 7 - 8 - 	壺 C <sub>1</sub> 一G 溝川・	中位で同時部には、は、大きないである。	稜を有する。端部稜に刻する。 ・端部稜に刻する。 ・ と ・ と と は は り で は り で は り で は り で り で り り で り り り り	溝Ⅱ-3 こきく広が 位で僅かに 端部外面に が丸くたる 目文が一周
法量(x)     出     口     類     部     体     部       (x)     (x)     (x)     (x)     (x)     (x)		径高径径 区 態 様 外 内 態	13.35 23.0 (現存値 23.85 欠損のため不 H-3-G を ・外上方部外 する。 ・頸部にある。 ・縦方向のがある。 ・横方一き ・横方一き い体部等。	直) 明	13.1 29.9 26.9 尖底 H-3-( 。肩部より のびは丸く 。端部する。 。総部方付付残向の ・横方向のはる。 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質径 ・質のがする。	<ul> <li>講Ⅱ─3</li> <li>直線的に短壁は厚く。</li> <li>に刻目文が</li> <li>へ方方向</li> <li>をある。</li> <li>大</li> <li>大</li> </ul>	15.1 26.9 23.0 丸底H - 3 - 5 - 5 - 5 - 5 - 6 - 7 - 7 - 7 - 8 - 7 - 7 - 7 - 8 - 7 - 8 - 	-G 溝Ⅱ・ へ内内の の内容の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の	中位で同時部には、は、大きないである。	17.0 23.7 20.1 4.1 H-3-G 。外上方へかり、外方の中 ふくら有する。 。 をを育をに刻する。 。 よた径は中 上位より下	溝Ⅱ-3 こきく広が 位で僅かに 端部外面に が丸くたる 目文が一周
法量(x)     出     口     類     部     体     部       (x)     (x)     (x)     (x)     (x)     (x)	器 腹 底	高径径 区態 様 外 内 態	23.0 (現存値 23.85 欠損のため不 H-3-G 電 ・外上方部外 する。 ・頸部の付け文 ってが する。 ・縦だした。 ・縦横ナデとかっ磨 ・横っアとかっ磨 ・横っののでいる。 ・肩部が ・肩部が ・肩部が ・原体部、	期 講『一3 まく外反有 と口縁端す にをを有 にをを有 にをを有 にをを有 にである。 ここののに縦方 。 張らず丸	29.9 26.9 26.9 26.9 26.9 26.0 27.0 28.0 28.0 28.0 29.0 29.0 29.0 29.0 29.0 29.0 29.0 29	直線的に短端 は厚る。 に刻目文が へ横。 へ きの る。 大 で る。 た が る。 た る。 た る。 た う ら う ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら	26.9       23.0       丸底       3 H-3-       よって僅す       場方能の部へまたのはの・他。       経形	へ広がり、対 の内容し内 がり、対 方の磨け 方の磨が方向 は は中位に は ま な る に る き に る れ る れ る に る れ る れ る に る れ る れ る に る れ る れ	中位で同時部には、は、大きないである。	23.7 20.1 4.1 H-3-G 。外上方へプリントの中 かくらむ。 をを有する。 。 。 サストをする。 はなっても はなっても のよくを有しても のよくを有しても のよくをできる。 はなっても のよくをできる。 はなっても のよくとしても のよく のよく のよく のよく のよく のよく のよく のよく のよく のよく	できく広が 位で僅かに 位端部外へたる 目文が一周 だ
口頸部体部底	下 文 整 形	態様外内態	・外上方へ小面 する。 ・頸部のが する。 ・頸部のが る。 ・縦ら横が上れる。 ・横が手とはら内 になる。 ・横が手とからを はいる。 になる。 ののへがあまり い体部等。	さく外反 にをを有 いる一周が一周の上から に一部に縦方 で で で の の の の の の の の の の の の の の の の	。肩部より のび、く は丸く のはれ部分。 。端部する。 。縦行付近残の のはする。 横方向のはなる。 ででである。	直線的に短端 は厚る。 に刻目文が へ横。 へ きの る。 大 で る。 た が る。 た る。 た る。 た う ら う ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら	くの力上大かと大かにかかよかはのかはのかはのかはのかはのかはのの<	へ広がり、対 の内容し内 がり、対 方の磨け 方の磨が方向 は は中位に は ま な る に る き に る れ る れ る に る れ る れ る に る れ る れ る に る れ る れ	中位で同時部には、は、大きないである。	・外上方へプリング リング リング リング リング リング リング リング を を できる できる できる できる できる いまる から は いっぱい アング リング リング リング リング リング リング リング リング リング リ	できく広が 位で僅かに 位端部外へたる 目文が一周 だ
口頸部体部底	文 整 形	様外内態	し、端部外面する。 ・頸部の付け根なる。 ・頸部の刺目文なる。 ・縦方向の刷毛。横ナデとかっ磨も、横ケーののへがあまりい体部、下位	に稜を有 と口縁端が一周す 目の上か 同のに縦方。 張らず丸	のび、器 が丸く ・端部する。 ・縦方付が残向の ・横方向近はるの。 ・横変経が小	壁さい で	部 で 僅す 端毛 ・ 端方 ・ 端方 ・ 端方 ・ 高内 ・ 高内 ・ そらは をかる	内弯し、 対容し内面 横方向磨け方向 をいる。 は縦方向の は縦やかに は緩やかに	語記記は横へ りちち	り、外面中 ふくらむ。 稜を有する。 端部をで が端部を ・端部を ・端部を ・端部を ・端部を ・端部を ・端部を ・端部を ・	位で僅かに 端部外面に が丸くたる 目文が一周 デ
第 第 体 部 底	整 形	外内	部に刻目文える。 。縦方向の刷毛 ら横ナデと横方 同のへっ声 ののへっ声き い体部、下位	が一周する目の上からでは、一周の別に一部に縦方で、張らず丸	周する。 ・縦方向の 部付近はる ・横方向の ・ ・ の の の の の の の の の の の の の	へラ磨き、! 横方向の刷: 。 へラ磨き。  さく、最大:	端毛 ・端部はの ・病向部・他。 を最大のは を表すのは	へう磨き。 頸部付近には縦方向の は中位にあ 緩やかに落	は は 横方 うり、 うち、	する。  。  ・  ・  ・  ・  ・  ・  ・  ・  ・  ・  ・  ・	デ位にあり、
部体体部底	形	内態	ら横ナデ。 。横ナデと横方 目の上から一 向のへラ磨き 。肩部があまり い体部、下位	「向の刷毛 ・部に縦方 ・ 張らず丸	部付近は 目が残る 。横方向の 。頸径が小	横方向の刷。 へう磨き。 <u></u> さく <b>、</b> 最大	毛 方向の 。端部・ 向際き。 径 。最大径 形 形 に に に に に に に に に に に に に	へう磨き。 頸部付近には縦方向の は中位にあ 緩やかに落	は横方 Oへ ラ o り、 疼ち、	。 対に横ナ 。 最大径は中 上位より下	位にあり、
体 部 底			い体部、下位				形 肩から 下位は	緩やかに落	等ち、	上位より下	
底							る。器	壁は薄い。	さくな	やや小さく	
	整 形	外	。深い縦方向の 上から所々に					右下り、T Iのヘラ磨き		<ul><li>肩部は横ナ</li><li>上りのタタ</li></ul>	
		内	。右下りの刷毛	目。	・ナデ		。ナデ、	一部削って	こいる	。横方向の刷	毛目
色		部	・欠損のため不	明	。			削っており常に薄い。	)、器	。突出平底 木葉痕、籾 れるあとか る。	
	она сополнико на подгора	調	。茶褐色		。淡黄茶褐	色	。淡黄灰	色		。淡黄茶褐色	1
胎		土	。0.1 <b>~</b> 0.5の砂 含有	が粒多量に	。0.1~0.8 に含有	の砂粒を多		0.7の砂粒 雲母を含有		0.1~0.30	砂粒を含有
,			。良好	:	。良好		。精良粘	i土		。良好	
備	質		。内外共に煤付	<b> </b>	。全体に集	 付着		『址溝SD6 』に酷似して		。煤は底部と 較的少なく く付着して	最大径に多

±	器	Ne	46	53	46	54	46	55	47	56
		No.	112	99	112	04	112	90	112	00
摘要	<u></u>	類	甕 A1	ı	甕 Aa		甕 A	1	甕 As	3
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	15.15 17.95 15.85 3.7		11.55 14.1 12.35 4.8		14.1 20.1 18.7 3.2		12.0 14.4 13.5 3.6	
出:	土 地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
П	形文	態様	。「く」の字に 位で僅かに服 部は、立ち上 に稜がある。	2厚する端	。「く」の字に 部で一層外反 に僅かに稜を	でし、外面		巴厚し、端	<ul><li>頸部のくびれ 短く外反する 薄くなる。</li></ul>	
頸										
部	整形	: 外 内	。 。 。 。 。 。 。	<del>.</del>	。		。	デ	。頸部に縦方 目、他横ナラ 。横ナデ	
体	形文	態様	。最大径が中 り、下位が3 め細長い器形	長らないた			。最大径は中の り、肩部が 下位は張ら、	やや張るが	。最大径が中位 やかな器形。	
部	整形	<b>乡</b> 外	<ul><li>肩部は横ナラ ぎ目で変化で 目 2 段。</li><li>・刷毛目</li></ul>			占上り、一			。右上りのダ: 下段にへラ、 整が数ヵ所。 ・ナデ	. 刷毛の記
底		部	。突出平底 中心部が僅; 凹んでいる。		。平底 突出平底を たような形 木葉痕を残	をなす。	<ul><li>・平底</li><li>タタキが稜 れ、中央が『 の粘土が入 底部は器壁 や薄い。</li></ul>	⊴み、まわり っている。	)	みが有る。
色		調	。淡茶褐色		。淡茶褐色		。淡黄褐色		。淡灰茶褐色	
胎		土	0.1~0.30	砂粒を含有	i · 0.1~0.30	砂粒を含有	i ∘ 0.1~0.3⊄	砂粒を含有	<b>∃</b> ∘ 0.1~0.3⊘	砂粒を含
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
					。底部に黒斑		。底部のみ煤	付着	。内外共に煤	付着
備		考								

			47		47		47		48	
土	器	No.	112	57	112	58	112	59	第20図	60
摘要	₹	重類	甕 Aa	3	甕 A <sub>2</sub>		甕 A	. 2	甕 A:	2
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	13.55 12.3 13.65 5.1		18.4 17.4 19.9 3.45		12.8 17.2 15.5 3.2		14.5 23.5 19.6	,
出:	土 地	X	H-3-G	溝Ⅱ一3	H−3−G ¾	<b>靠</b> Ⅱ — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
口頸	形文	態様	。緩やかに外 <u>-</u> き、端部で- る。頸部内面に ふくらみがあ	ー層外反す に突出し、	。外反し立ち上 位より一層反		。ゆるやかに <sub>E</sub> 上方へのび、 り反り、断i	端部でよ	。外反し、中位 増し、端部 り、外面に値 り。	で一層反
部	整形	外内	。		。頸部に縦方 [i 目、横ナデ 。横ナデ	句の刷毛	。頸部の一部 が残る。横 。横ナデ		・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·
体	形文	態様	あり、短い	器形を成	。最大径が中位 り、器高より きく、頸径( 大きい鉢に近 す。	腹径が大 (15.5) も	と下位の張 で、ずんぐ	りが同程度	くにあり、脂	同部は張り
部	整形		<ul><li>右上りのタタ 下風化により</li><li>風化により</li></ul>	不明	タキ目。	i上りのタ	と下位は右 キ目。	下りのタタ		へラ削り。
底		部	。平底 一方が押して んでいる。	のぶされ歪	・平底・中央に僅かな	:凹をもつ	。平底		。削り底 削り取った卵 凹が多い。	夏が残り凸
色		調	。淡茶褐色		。乳黄褐色		。乳黄褐色		。淡黄褐色	
胎	THE STATE OF THE S	土	。0.1~0.4の形	妙粒を含有	。0.1~1.0の砂 を含有		。0.1~0.4の 含有	砂粒・石粒	° 0.1~0.5の何	妙粒を含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	。煤が全体に作	寸着	。底部以外全体 内面下位に 内面には巾 3 紐が 4 段に種 るのが残る。	化物付着 cmの粘土	面最大径付: 付着		1	

				48	0.1	48	00	47	60	47	0.4
土	器		No.	第20図	61	112	62	112	63	112	64
摘要		種	類	甕 A	1	<b>甕</b> A	1	甕 As	3	甕 A:	3
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	15.4 23.7 20.6 2.7		15.0 26.6 22.7		17.7 12.9 15.9 3.8		13.45 $14.1$ $13.8$ $2.45$	
出 :	土土	地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3
口	形文		態様	。ゆるやかにタ 部でつまみ上 面に稜を有す	:げられ外				/、やや内 ) 、端部で	。小さくくびす ら、緩やかい	
頸											
部	整	形	外内	。	黄ナデ	。	デ	。頸部にタタ <sup>3</sup> 横ナデ 。横ナデ	₣目が残り	。	~.·
体	形文		態様		より下位の	あり、頸径	が小さく胴	り、口径が脚	夏径より大	。最大径が中位 高と腹径の く、ずんぐり	差が小さ
郑	整	形	外内	。右上りのタク 段。 。横方向の刷目		。右上りの浅 所々へラ削		。右上りの急値 細かなタタ <sup>き</sup>		。右上り、右 りの3段の 。刷毛目。	
底			部	。削り底 側面を7面/ する。	こ削り突出	。削り底 突出した底 っている。	部を削り取	<ul><li>削り底</li><li>中央部に大きある。周囲はが残り、へきれている。</li></ul>	こタタキ目 ラ削りがな		
色			調	。淡灰黄色	and the Accommon	。灰黄褐色		。黄茶褐色	and the second s	。淡茶褐色	
胎			土	。0.1~0.2の み、やや軟質		○ 0.1~0.3砂	粒を含有し	° 0.1~0.3⊘f	 沙粒を含有	i。0.1~0.5の を含有	砂粒・石粒
	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備		uniquesco i servicio	考	。全体に薄くが 面底部に炭		。底部に黒斑		。全体に煤付ま 内面に炭化		。内外共に煤 内面底部炭	

			48		49		49	0.5	49	00
土	器	No.	第21図	65	第20図	66	113	67	113	68
摘要	<b></b>	重類	甕 A	1	甕 A	2	甕 A	1	甕 A2	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	14.0 23.9 19.8 3.0		15.6 17.3 15.9 2.6		15.7 22.4 20.5 1.5		13.9 17.1 16.7 3.05	
出	土 地	X	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	<b>帯Ⅱ</b> — 3
	形文	態様	<ul><li>水平近く外及でつまみ上げを有す。器を</li><li>低い。</li></ul>	げられ、稜	位でやや肥厚	厚する。端	<ul><li>外上方に中位上がり大きる。端部が5稜をもつ。</li></ul>	く外反す		かに稜が
頸										*
部	整用		。   	ŕ	。頸部にタタ <sup>*</sup> 横ナデ 。横ナデ	‡目が残る	・ 対に横ナ	Ť	。	<u>.</u>
体	形文	態様	。最大径は中位 位置し、頸径 ため胴張りの	圣が小さい		が大きく張 い体形を成	上位が張る		。最大径が中位 あり、上・一 が等しく、品	下位の張り
部	整升	形 外	。深い横、右 りの3段の				。右上りのタ	タキ目 3 段	は。横方向のタク	タキ目。
		内	・ナデ		。ナデ、刷毛	目が残る。	。縦方向の刷	毛目。	。縦方向の刷	毛目。
底		部	。タタキ底 底面を2回	叩く。	。削り底 中央に凹み	有り	。タタキ底 底面にタタ れる。	キが入り舌	。タタキ底 僅かに突出 2回以上叩 も深いタタ	き、周囲に
色		調	。茶褐色		。茶褐色及び	淡赤褐色	。茶褐色		。淡茶褐色	
胎		土	∘ 0.1~0.4⊘	砂粒を含有	す。0.1~0.6の 多量に含有		\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	砂粒を含す	河。0.1~0.2の	砂粒を含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	煤付着。	内面下段和	と。外面全体に 内面下位に		1		着。外面に僅か 内面全体に 付着。	
									!	

				49						50	
土	器	I	No.	113	69	113	70	113	71	113	72
摘要		種	類	甕 A2	2	甕	A 2	甕 』	A 2	<b>甕</b> A	<b>.</b> 1
法 量 (cm)	口器腹底	i 1	圣高径径	14.7 17.15 15.55 2.8		16.0 19.1 18.0 4.1		15.8 17.2 16.7 3.8		16.2 25.2 22.95 2.3	
出:	土土	也	X	H-3-G	<b>溝Ⅱ</b> — 3 │	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3
Д	形文		態様	<ul><li>頸部が大きく 反し、端部、</li><li>り、外面肥厚</li></ul>	で一層反	部で一層別	字に外反し端 反る。器壁は なり稜をもつ			。「く」の字 部で一層反	
頸											
部	整	形:	外	。頸部にタタキ 歪つになって		。僅かにタク 横ナデ	タキ目が残り	。頸部にタタ 横ナデ	キ目が残り	。 } 共に横ナ	デ
			内	。横ナデ		。横ナデ		。横ナデ		•	
体	形		態	。最大径が肩部 非常に肩部か 部へ細くなる	漲り、底		上位に位置 C張りが大き	。最大径中位 位置し、 が りした器	が張りずん	。最大径が中 し、上・下 た器形。	
部	文整	形	様外内	<ul><li>右上りのタタ 位で右下りの と交差、一音</li><li>ナデ</li></ul>	)タタキ目		差する。	下段は縦方 目と交差。	「向のタタキ	。比較的細か タタキ目犯 ヘラ磨き数 。横方向の刷	设。右上りの カ所施 <b>す。</b>
底	20 To 10 To		部	。タタキ底 タタキ目が終 傾斜がありる				。タタキ底 タタキ底に いが、傾余		。タタキ底	
色			調	。灰黄茶褐色		。乳黄茶褐色	<b>E</b> 1,	。淡黄茶褐色	i.	。淡茶褐色	
胎			土	。0.1~0.5ので に含有	少粒を多量	0.1~0.3	の砂粒を含有	。0.2~0.3 <i>0</i> 含有	D砂粒多量に	: 。0.1~0.8の を含有	砂粒・石粒
	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備	:		考	。中位より下位 煤付着。	立の内外に	。薄く全体	に煤付着。	。全体に煤化	才着。	。胴部に多く	煤付着。
	and a second										

			50		49		50		50	
土	器	No.	113	73	113	74	第21図	75	113	76
摘要	和 i	重類	甕 A <sub>2</sub>		甕 A:	2	甕 A	1	甕 A	1
法 量 (cm)	口縁器腹	径高径径	14.2 18.6 17.5 3.0		13.8 19.8 17.1 2.7		欠損のため <sup>2</sup> 21.4 (現存 20.3		欠損のためイ 22.05(現存 20.0 尖底	
出	土地	X	H−3−G }	<b>毒Ⅱ</b> — 3	H-3-G	<b>溝Ⅱ</b> — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ—3
	形文	態様	。くびれた頸部 し、端部に稜		。外反し、中位 反る。端部に 断面は丸く、 でいる。	稜が有り	頸部よりゆる		<ul><li>「く」の字り</li><li>曲しながらり</li><li>口縁端部はり</li></ul>	反する。
頸										
部	整形	外内	。頸部にタタキ 横ナデ 。横ナデ	-目が残り	。横ナデ 。横ナデ、横万 目が残る。	5向の刷毛	。	デ	。刷毛目 頸部付近はオ タキ目 。横方向刷毛目	
体	形文	態様	。最大径が中位 あり、上・T が似た、ずん 器形	で位の張り	。最大径は中位 あり、頸部の	Oしまりが こ・下位の	し、上・下の		。最大径は中位 胴下半部より ぎみに底部 形。	り、とがり
部	整形	<b>外</b>		カ所へラ磨	*。右上りのタク 下段は右下り 目と交差し、 後から叩かれ 。横方向の刷	)のタタキ 右下りか 1ている。	肩部に縦方	司の刷毛目 、下位縦方	に刷毛目、別 剝離のためる	同下半部は
底		部	。タタキ底 傾斜をもち <sup>7</sup> 底部は厚く1		。タタキ底		。タタキ底 底面を叩き 削り尖底風 凹みあり			
色		調	。黄青褐色		。茶褐色		。淡赤黄褐色		。淡茶褐色	N.
胎		土	。0.1~0.5の6 を含有	少粒・石粘	2 ° 0.1~0.3⊘4		3 ∘ 0.1~0.2⊘	砂粒を含有	ョ。0.1~0.6の 多量に含有	砂粒・石料
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	。外面全体煤作 内面下段炭		・粗雑な作り。	)	・全面に煤付	着。	・全面に煤付	着。

			51		51					
土	器	No.	113	77	113	78	114	79	114	80
摘要	種	類	甕 A2		甕 A:	2	甕 E	3	甕(	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	14.15 17.5 16.3 尖底		13.35 15.4 (現存・ 15.9 欠損のため7		18.05 2.7 (現存 } 欠損のためる		15.6 5.9 (現存 】欠損のため <sup>フ</sup>	
出	土 地	区	H-3-G 清	丰 🛚 — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
口頸	形文	態様	。「く」の字に 部で一層外反 に稜を有 <b>する</b> 。	し、外面	<ul><li>緩やかな頸音 反し、端部 り、端面にを</li></ul>	で一層反	・外上方へ大き 内面は上方/ は外上方へ は外上方へ。 器高2.6cm。	、 外面端		立で厚みを ごつまみ上
部	整形	外内	。横ナデの上か の刷毛目。 。横方向の刷毛		。 。 。 。 。 。	<del>.</del>	。 。 。 。 。 。 。	<del>,</del> ř	。                   	Ŧ.
体	形文	態様	。最大径が中位 位置し、下位 小さい器形			立にある丸			。やや肩張り( 壁の厚み0.2	
部以	整形	外内	。肩部に横方向 目を残す、他 で不明 。縦方向の刷毛	は煤付着		細かいへう まで行う。 かなへラ磨		不明	。右上りの太 僅かに浅い 。横方向のへ 毛目が残る	利毛目。 ラ削り、刷
底		部	。尖底		。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明
色		調	。茶褐色		。茶褐色		。淡黄褐色		。暗褐色	
胎		土	。0.1~0.2の例		0.1~0.30	砂粒を含有	「。0.1~0.2砂 僅かに含有		を 0.1の砂粒 な粘土。	 含み <b>、</b> 精良
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備	- And	考	。全体に煤付着 に著しい付着 器壁は厚い 最も精巧に作る。	言。 (0.5)が、	i		。煤付着。		。煤全体に付	着。

			51					51					
土	器	No.	114	81	114		82	114	ļ.	83	114		84
摘要		重類	甕 B			甕 B			甕 B		甕	С	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	16.8 8.25 (現存化 } 欠損のため不		15.5 10.85 } 欠損の	(現存信	直)	16.3 19.6 19.5 尖底	(現存作	直)	17.95 7.75(ヨ } 欠損のた		
出	土 地	X	H-3-G	<b>毒Ⅱ</b> — 3	H-3-	-G }	<b>購Ⅱ—3</b>	H 3 -	-G i	<b>溝</b> Ⅱ−3	H-3-0	G /	<b></b>
	形文	態様	。「く」の字型に 端部でより反 内側へ長く げ、外面に稜 器高2.3cm。	り、端は つまみ上	し、中	位より 外面に	やや内弯 稜を有す	反、端	部で	ウ字型に外立ち上が きあり、器	り、端部	位に 内側	
頸													
部	整形			781-5-8		横ナデ		・横ナデ		. 2 4th 1v	。横ナデ、る。	タタ	キ目が残
		N	◎横ナデ、一部	》制-石目	外面	((二)	:の継ぎ目	。刷毛目	の上が	ゝり 愑 ア ア	・傾アア		
体	形文	態様	。なだらかな 窓へ続く器形 他より厚く0.	% 器壁が	り張る	。器	壁の厚み	あり、	肩の! 第内距	なり上に 張った器 同に鋭い稜	部。器壁		1
部	整开	<b>多外</b>	刷毛目。 。粘土紐巾 1.0	、縦方向の E <b>cm</b> と規則	。細かい 底部か 毛目。	、らの総 、横 <b>、</b> 脂	ž方向の刷 引部は縦方	目。上 毛目を	こから約 2 下位に	送方向の刷 こ主に施す	ヘラ削り	•	
底		部	・欠損のため不	、明	。欠損の	ため不	明	。僅かに 尖底。	<b>二</b> 欠損し	っているが	・欠損のだ	: めイ	、明
色		調	。暗褐色		。暗褐色	li.		。暗褐色	<u></u>	-	。暗褐色		
胎		土	。0.1~0.2の例 母を含有	炒粒・金雲	。0.1~( 母を含		か か 粒・ 金雲	。0.1~ 母を含		少粒・金雲			砂粒を含
	質		。精良な粘土。	良好。	。精良な	粘土。	良好。	。精良な	な粘土。		。良好、精	青良た	3粘土。
/##		-J×			・全面に	上煤付着	<u>북</u>   0	。刷毛的 内外却		》衬着。	。口縁部に	二煤作	<b>才</b> 着。
備		考											

					51		51			
土	器	No.	114	85	114	86	114	87	114	88
摘要		類	甕 B		甕 B		変	В	甕 B	•
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	14.8 8.5 (現存fd		14.1 12.45(現存化 19.6 欠損のため不		15.75 22.95 20.3 丸底		15.3 5.55(現存付 入損のため不	
出:	土 地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝口一3
口頸	形文	態様	<ul><li>中位で厚みを 面は緩やかに 面は鋭く「く 反する。端部 稜をなす。器</li></ul>	ン外反、内 . 」字に外 .   な僅かに	。「く」の字型に 中位で外面が 端部は外面に する。器高2	ジ肥厚し、 土丸く肥厚	。「く」の字型 器壁外面に し、内弯ぎ 端部外面に る。器高2.	僅かに肥厚 みになる。 丸く肥厚す	なり。端でつ	ジ段々薄く ウまみ上げ
部	整形	外内			。 ・ 。 。 。 。 。 。	~*	・ と は は は は は は は は は は は は は は は は は は		。縦方向の刷毛目が複残り上から横ナデ。 発り上から横ナデ。 部にヘラで押えた症 ・横方向刷毛目の上に ナデ	
体	形文	態様	。なだらかな肩、体部の 張りが小さい。器壁の		。最大径は上位にある が、おだやかな丸い肩 器壁の厚み0.2~0.4cm 。肩に8本の櫛描波状文		位置し、肩い器形。		。なだらかな』 厚み0.3~0、	
部	整形	外内	。右上りの細点 目、僅かに帰 。横方向のへ	<b>削毛目。</b>	。横、縦方向の	の刷毛目。	<ul><li>肩部は横、の刷毛目。</li><li>肩部は横、のへう削り</li></ul>	以下右下!	。縦方向の刷 。横方向のへ (肩部には 毛目)	、ラ削り、
底		部	・欠損のためる	不明	・欠損のためる	不明	。丸底 縦方向の網 が交差。	田かい刷毛目	・欠損のため	不明
色		調	。暗褐色		。暗茶褐色		。暗茶褐色	·	。茶褐色	
胎	質	土	。0.1~0.2の 母を含有 。良好	砂粒・金雲	。0.1~0.3の を含有 。良好	砂粒・雲母	型。 0.1の砂料 含有 。精良な粘土		を ・ 0.1~0.3の 母を含有 ・ 良好	砂粒・金雲
備		考	が厚い。	で最も胎土	: 。全面に煤付	着。	号。	力所のへう	記。全体に煤が とぼれの痕 玄。	

土	器	No.		89		90		91	44.4	92
1		類	114		114		114		114 	В
摘要 法 量 (cm)	口器腹底	_	変 E 17.0 3.85 (現存・  ) 欠損のためる	値)	変 C 15.1 3.3 (現存) 入損のためる	值)	変 C  14.95 (反転) 5.0 (現存的  入損のため不	(直)	13.25 9.2 (現在 17.05 欠損のため	字値)
出:	土地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
	形文	態様	。やや丸い頸音 かに内弯ぎる がり、端部も ち上がる。暑	みに立ち上 も僅かに立	弯する。端音	、りやや内 郊内面で上 凹みを有	端部で外面肌 は2.1 <i>cm</i> 。	) 外反し、 E厚。器高		は り 内 面 へ つ ま に 肥厚 す
頸										
部	整形	外内	。	デ	。	ŕ	。頸部に縦方 目、ヘラ圧症 。横ナデ		1 1	- デ
体	形	態様	。		。 。 。 不明		。なだらかな♪ 器壁の厚み(		位置し、扉	P位より上に <b>育部の張りは</b> 器壁の厚み m
執	整形		。へう削り		。へう削り		・横方向の刷		ら上へ縦	- 胴部は下か 方向の刷毛目 方向、下位は
							,		縦方向の	へラ削り。
底		部	・欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。 欠損のたる	め不明
色	11700	調	。淡黄褐色		。淡黄褐色		。淡黄褐色		。外面一黄 内面一青	
胎		土	∘ 0.1~0.3⊄	砂粒を含	有。0.1 <b>~</b> 0.2の を含有	砂粒・雲	母。0.1 <b>~</b> 0.3の 母を含有	砂粒・金	雲。0.1~0.2 母を含有	の砂粒・金雲
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		2	,		。煤付着。		。煤が薄く付	着。	。全面に煤	付着。

			51							
土	器	No.	114	93	114	94	114	95	114	96
摘要	種	類	甕 D		魙	D	<b>甕</b> E	<u> </u>	甕 E	;
法量	口縁器	高	11.65(反転) 4.8 (現存信		18.3 (反転 9.8 (現存	.,	12.7 (反転 4.5 (現存		13.65(反転 4.45(現存	
(cm)	腹底	径	欠損のため不	明	} 欠損のため	不明	欠損のためる	5明	欠損のためる	7明
出	土 地	区	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
	形	態	。 S字状口縁・ って断面が丸		<ul><li>緩やかに外 近で外面に らに端部で</li></ul>	肥厚し、さ	上方へ立ちり	るより、垂		ら上がり端
П	文	様			上がり丸く断面は丸い	外反する。	る。端部で外する。			
頸										
部	整形	外	。   	2	。 } 共に横ナ		。   	=·^	。	<u>-</u> 3
		内	0		•		。 <del></del>		。	
体	形	態	。やや肩部が張	<b>る。</b>	。なだらかな	肩部。			0	
14	文	様					欠損のためっ	不明	。	
部	整形	外内			。縦方向の刷 形の刷毛目 削り。 。横方向の刷 に一部へラ	。一部へラ 毛目、肩部			・ヘラ削り	
底		部	。欠損のためる	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明	。欠損のため	不明
色		調	。淡黄茶褐色		。茶褐色		。茶褐色		。淡黄灰茶褐	<u>色</u>
胎		土	。精良な粘土		。0.1~0.4の 含有	砂粒多量に	- 0.1の砂粒を	含有	。0.1の砂粒を	含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	。全面に薄く紫 (東海系土器				。全面に煤付	着。	,	
				APPROX. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1.						

土	器	No.		97			98		99		100	
_		類	114		115			115		115		
摘要			甕 E		高			高杯		高杯		
法量	日縁器腹	径高径	24.1 (反転) 7.5 (現存化	値)	22.6 ( 4.7 (			21.3 (反 4.3 (現		20.75(反軸 5.25(現在		
(cm)	底	径	欠損のため不	7明	欠損のた	こめ不	明	欠損のたる	め不明	欠損のため	不明	
出:	土地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-	·G 🏄	<b>井</b> Ⅱ — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3	
П	形	態	<ul><li>外反し、ほほち上がり、立が長い。端部角形</li></ul>	エち上がり 邓断面は四	上部は知断面は対	逗く外 れい。	反し、端		上部は短く外	。下部が不明 外上方へ広 端で一層広	がり、口縁	
部	文	様			<ul><li>端部に約</li><li>1周する</li></ul>		利日又か					
(杯 部)	整形	整形外。			。 共に横ナデの上から 放射線状のへう磨き			・ 対に横	ナデ	<ul><li>・横ナデ、上部には太い 横ナデが残り縦方向。</li><li>へラ磨きが上から施れる。</li><li>・横方向のヘラ磨き。</li></ul>		
	形	形態			,					1 (A) (A) (A)	· / /G & 6	
体	文	様								欠損のため不明		
部(脚部)	整形	⁄ 外	欠損のためる	不明	欠損の	ためる	不明	欠損のた	め不明	欠損のため	的不明	
ALCOHOLOGY PA ANDRESS		内										
底		部	。欠損のため	不明								
色	Allegador (Bridger	調	。暗茶褐色		。灰褐色			。淡黄赤褐	色	。淡黄赤褐色	<u>4</u>	
胎		土	。0.1 <b>~</b> 0.2の 含有	砂粒僅かに	-。0.1~0 含有	1.3のf	少粒多量に		2の砂粒を含 いに雲母を含す		の砂粒含有	
	質		。良好		。良好			。良好		。良好		
					。内外共	に煤液	<b>尊く付着。</b>					
備		考										
									-			

土	器		No.	115	101	115	102	115	103	115	104
摘要		種	類	高杯	A	高杯	A	高杯	A	高杯	A
法量	口器腹	縁	径高径	21.65 5.5 (現存化	值)	22.6 5.5 (現存f	値)	20.0 5.85(現存·	値)	21.8 6.05(現存	値)
(cm)	底		径	欠損のため不	明	欠損のため不	明	欠損のためる	5期	欠損のためる	5期
出	土力	地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
杯	形文		態様	<ul><li>外上方に広;</li><li>に、外上方に 緑を有す。 口縁端は内弯 つまみ上げら</li></ul>	に広がる口 写し僅かに	反する杯部。			気がる。 レながら水	肥厚する段を 方へ広がり、	e有し外上
部	整	形 外 。不明 。 口縁上面は横方向の ラ磨き、その上より 射状にヘラ磨き。		紫方向のへ	。杯下部は横方 磨き。	方向のヘラ	5。縦方向のヘラ磨き、口 縁端は横ナデ		。端部は横ナラ 段の部分は枯		
			内	ラ磨き、その	D上より放	。放射状の凹凸 う磨き。	らのあるへ	。縦方向のへ	ラ磨き。	。縦方向の細な	かなへう磨
脚	形文整	形	態様外	態 様 欠損のため不明		欠損のためっ	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
部	The second secon		内部								
色			調	。外面一茶褐色 内面一淡黄素		。淡青黄褐色 中核一褐色		。暗灰茶褐色		。淡黄褐色	
胎		economica d	土	° 0.1~0.3⊘6	少粒含有	∘ 0.1~0.2⊘₹	沙粒含有	0.1~0.20	砂粒含有	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有
	質	Ī		。良好		。良好		。良好		。良好	And And For All (1974), 1974, 1974, 1984, he do be a subsection of the contract of the contrac
備			考								

土	器	No			105		106		107			108
1				115	100	115	100	115	101	115		100
摘要		種類	1	高杯	A	高杯	A	高杯	A	高村	不了	A
法 量 (cm)	口器腹底	禄 径 高 径 径		22.2 6.7 (現存化 欠損のため不	,	23.05 5.75 (現存 欠損のため7	/	19.25 5.0 (現存 欠損のため <sup>2</sup>	,	20.75 6.2 (型 欠損のた		
Н.	土地		-	H-3-G		H-3-G		H-3-G		H-3-0		
	形	態	_			 。外上方に広か			.,.			
杯	文	杉		し、大きく外り深い。端部断面は丸い。	上方へ反	小さな段を有 しながら外上 る口縁。 端¼程は厚み 内面端が反り	f し、内弯 上方へ広が かを増し、	広がり、僅次 む段を有し、 がら外上方に 端光程で一川 断面は丸い。	かにふくら 内弯しな ま広がる。 翼内弯し、	広がる下 有し、外 ½~¾程	部たたと	*凹む段を iへ広がる ]弯し口縁 iくなり丸
部	整刑	多夕	- 0	共に縦方向き	]のヘラ磨	。不明		。杯下部にタ っている。	タキ目が残	。放射状の	へう	磨き
		内。 下部は横方向の ラ磨き		黄方向のへ	。横、右下り <i>6</i> 上に下方向な へラ磨き				。横、右下りの刷毛目が 残っている。		)刷毛目が	
部	文 整 3			<b>ド</b> 明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のた	こめる	<b>以</b> 明	
底		拉	B									
色		711		。淡茶褐色		。黄茶褐色		。淡黄灰色		。黄茶褐色	<u>4</u> ,	
胎		-	E	॰ 0.1 <b>~</b> 0.4 <i>ा</i>	少粒含有	。0.1~0.6の を多量に含っ		i。0.1 <b>~</b> 0.3の 含有	砂粒多量に	0.1~0.	30€	少粒含有
	質			。良好		。良好		。良好		。良好		
備		- - -	经									

				11/10/10/10/10/10/10/10/10/10/10/10/10/1					52		90/06-04/- T.A. (1770-06-07-07-07-07-07-07-07-07-07-07-07-07-07-	
土	器		No.	115	109	1:	15	110	115	111	115	112
摘要	_	種	類	高杯	A		高杯	A	高杯	A	高杯	A
法量	口器腹		径高径	20.65 6.4 (現存	値)	20.8 4.1	5(現存	値)	20.3 10.0 (現名	戸値)	22.2 6.7 (現存	値)
(cm)	底		径	欠損のため不	明	欠損	のためっ	不明	欠損のため	不明	欠損のためる	下明 -
出:	± ±	地	X	H-3-G	溝Ⅱ-3	н— 8	}—G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3
杯	し大きく外上方へる口縁を有する。内部底面に粘土の         文様目があるが中心部くまっすぐ外上方がる。		上方へ広が 「る。 占土の継ぎ 中心部が深	。稜を る杯 下部	部	外上方へ反	。下部は中心 り、広い。 端部付近で 反する。	稜を有し、	。内弯した下音 し、大きくタ り深い。端音 断面は丸い。	ト上方へ反 ポは反り、		
部	整	内 。横方向の刷毛目の上 ら放射状にへう磨き		毛目の上か	1 3.	外共に らへう!	横ナデの上 <b>奢き</b>	<ul><li>口縁端付近 ラ磨き</li><li>縦方向の刷 横方向のへ</li></ul>	毛の上から	り外共に う磨き 杯下部は	従方向のへ 貴方向のへ	
脚	形文	形態 文様		7 3-1	欠損のため不明			<ul><li>短く充実し</li><li>きく開く報</li></ul>	た柱部に大			
部	整	形	外内	欠損のためる	不明	欠擅	のため	不明	。ヘラ磨 <b>き</b> 。ナデ(不調	]整)	欠損のためる	不明
底			部			The state of the s						
色			調	。黒褐色					。青茶褐色		。淡茶褐色	
胎	makina di Associatione dell'Associatione		土	。0.1~0.5の7 多量に含有	砂粒、石粒	0.1	~0.20	砂粒含有	。0.1~0.3 <i>0</i> 含有	)砂粒多量的	< 0.1~0.4∅	砂粒含有
	質	Ī		。良好		。良好	F		。良好		。良好	
備			考	。円板充填型		。内夕		斑を有する			。稜の所には の継目が出	

						- Control of the Cont				52	110
土	器		No.	115	113	115	114	115	115	115	116
摘要	_	種	類	高杯	A	高杯	A	高杯	A	高杯	A
法量	口器腹		径高径	18.8 11.3 (現存何	直)	20.75 6.9 (現存·	値)	22.7 (反転) 10.8 (現存		22.95 $15.95$	
( <b>cm</b> )	底		径径	欠損のため不	明	欠損のためる	5明	欠損のためイ	<b></b> 「	16.4	
出:	士:	地	X	H-3-G	<b>溝Ⅱ</b> — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ一3
杯	形文		態様	<ul><li>下部は張り、</li><li>る。上部は少がり大きく外がる。内面はする下部にゆカーブで立ち</li></ul>	。 し立ち上 上方へ広 は傾斜を有 うるやかな	きく反る杯舎 口縁端はわず 上がる。 ・上部にタタ <sup>3</sup>	『で深く、 げかに立ち ‡目が一部		ハ大きく る。内面は なる。稜 は明確な粘	をもち、外_ く広がる杯! 下部の内面! 部は薄く断!	上方へ大き 口縁。 は平坦、端
部	整	形	外内内	。ヘラ磨き 立ち上がり⊄ ナデ 。ヘラ磨き	)所のみ横	施されている	削毛目があ へう磨きが る。 毛目の上か	。下部は横方向	逆方向のへ	。刷毛目と細っき 。刷毛目とへ 端部は横ナ	う磨き
脚	形文		態様	<ul><li>充実したエンの柱部</li></ul>	ンタ シス状			。やや太い充刻	実した柱部	。中空で裾広; に大きく広; をつけてい 。 3 孔	がった裾部
部	整	形	外内	。縦方向のへ 5 。刷毛目	う磨き	欠損のためる	不明	。縦方向に太  き。 。不明	目のヘラ磨	。柱部は横方 ヘラ磨き。 な刷毛目と ・内面は風化 不明	裾部は細か ヘラ <b>磨き。</b>
底			部								
色			調	。黄茶褐色		。淡灰黄色	:	。灰黄褐色		。黄褐色 。内面中核一	茶褐色
胎	STATE OF THE STATE OF THE		土	॰ 0.1~0.3 <i>०</i> व	沙粒含有	。0.1の砂粒倉	<b>ま</b> む	。0.1 <b>~</b> 0.3の に含有	砂粒、多量	量。0.1~0.5の 含有	砂粒、石粒
	<b>E</b>	Í		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		na an de de Periodo de	考					。杯部内面に	煤付着	。差し込み型	

	R.D	.		110		110	9,000	110		100
土	器	No.	116	117	116	118	116	119	116	120
摘要		重類	高杯	С	高杯	С	高杯	С	高杯	С
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	21.9 5.9 (現存 欠損のため7		20.0 3.9 (現在 欠損のため		20.45 5.55 (現存 欠損のため <sup>5</sup>	,	14.2 3.5 (現存 欠損のため <sup>5</sup>	
	土 地		H-3-G		大損のため H−3−G		大損のため。   H−3−G		大損のため。   H−3−G	
	形	態	。広く、やや耳			113 22 -			・少し深い下	
杯	文	様	に立ち上がり に外反する。 近でより一届 端部は外上方 みあげがある 稜をなし、月	深く直角 口縁端付 層外反し、 方への可は ウ央が凹み	が深く、正し、端部外し立ち上が	直角に外反 面に稜をな	深い立ち上 り、短かく し、口縁端 立ち上がり い。 。端部横ナデ	がりが有 直角に外反 はわずかに 、断面は丸 、細かな横	かなカーブ り、外上方 っている口 端部でつま れ、外面に	で立ち上が へ大きく反 縁を有し、 み上げら
部	整形	外内	<ul><li>へう磨き。</li><li>の動きがありいるとも考え。</li><li>横方向のへき</li><li>部は放射状の</li></ul>	(一部砂粒 )、削って えられる) 5磨き。下	ら放射状の 端部付近は	へラ <b>磨き。</b> 横ナデ 上から細か	ち上がりの や太目で外	ラ磨き。立 部分までや 反部分は細	共に横ナ	デの上から 荒くへラ磨
脚	文様整形外		欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
部		内部								
							-			
色		調	。外面一暗灰衫 内面一暗褐色		。淡青黄灰褚	1色	。茶褐色		。淡茶褐色	
胎		土	。0.1~0.5の 含有	沙粒、石粒	。0.1~0.20 雲母極少台		0.1~0.30	砂粒含有	0.1~0.20	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	。粘土紐の痕が 巾で屈折し							

_1.	ELE!		N		101		100		100	52	124
土	器		No.	116	121	116	122	116	123	116	124
摘要	_	種	類	高杯	С	高杯	В	高杯	В ;	高杯	D
法量	口器腹		径高径	14.3 4.4 (現存	値)	22.65 5.45(現存	值)	27.0 4.5 (現存	値)	20.65 5.7 (現存	値)
(cm)	底		径	欠損のため不	明	欠損のため不	明	欠損のため	不明	欠損のためる	1明
出:	土 :	地	区	H-3-G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
杯	形文		態様	。内弯しながら 部にゆるやがり で立ち上がり る。端部で し、丸い断面	♪なカーブ )、外反す 一層外反	<ul><li>やや平坦なす</li><li>立ち上がりか</li><li>上方へ有し、対</li><li>縁を作り、</li><li>がある。</li><li>がりは緩やが</li></ul>	が有り、外 、広がる口 品部外面に つまみあげ 面の立ち上	上がりがあ 角度で大き 上方へ立ち	り、15度の く広がり外 上がる。 デ、へラ磨 がりの部分	く外反し、第 反り断面は対 。端部と下部の 目、それぞれ 管円形浮文な	上段は短か 端部は一層 れい。 D稜とに刻 1の稜に竹
部	整	形	外内	きの多方向に細な		方向。一部村	ラ磨き、立 ※分は、横	ら横ナデ、 が残ってい 。へラ磨き。 の部分は横	─部横ナデ る。 立ち上がり	<ul><li>端部横ナデ</li><li>下部は放射</li><li>き、上部は、</li></ul>	
脚	形文		態様	*		っている。		目		ヘラ磨き。	
部	整	形	. 外	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
底			部								
色			調	。淡暗赤褐色		。淡黄茶褐色		。淡黄赤茶褐	色	。淡茶褐色	
胎			土	0.1~0.50	砂粒含有	。0.1~0.3の 含有	砂粒多量的	こ。0.1~0.2 <i>0</i> 含有	)砂粒多量(	こ。0.1~0.3の 金雲母極少	
	<u></u>	<b>T</b>		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考								

-			I	52	1					52	
土	器		No.	116	125	116	126	116	127	116	128
		種	類	高 杉	T	高	kr	高 7	kr	高 杉	
摘要	Д;	_		同 1 <sup>2</sup>  欠損のためる				欠損のため			
法量	器		任高	4.25 (現存	1	4.15 (現存		3.4 (現有	1	9.15 (現存	
(cm)	腹底		径径	16.7		21.9		21.95		16.15	
	12. I			H-3-G	港Π_9	H-3-G	进口9	H-3-G	港口9	H-3-G	жп 9
н.	形		態	11 0 0	仲口 9	11 0 G	144日 9	11 0 0	1件口 0	11 0 G	(母日 9
	אכו		池水								
杯											
	文		様		E						
				欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のためる	で問
				)(Jgo/co)	193	)();(v)(c)	193	)( <u>)</u> (())(())	-163	XIX O ICO	1.03
dere	整	形	外								
部											
			内								
	形		態	・段のある裾	邹	。段のある裾	部、上坦部	。段のある裾	部	・充実したエ:	 レタ シ <b>ス</b> 状
				。上坦部はなが	1	はなだらか をもつ (数				の柱部、段を 部。上坦の上	
脚						。稜に刻目が				内面は比較的	
	文		様	する。下部に	には8孔あ	方に外反す は 5 孔ある				柱部までくしる。	ってんでい
	and the state of t			00		19 0 1 100 0	٥			್ ಎಂ	
	東攵	形	M	。ヘラ磨き。	押端け構刷	。へう豚き		。ヘラ磨き		・ヘラ磨き。	(海部14柱
部	J.E.	/12	71	毛	PEI-IIII (20 INCHES	1,20		1,743.0		部より細か	
			内	。横ナデ		。風化のため	不明	。横ナデ、一	部へう寝有	き。)  。構ナデ	
						24/007100	123	9.	11 / A 13		
								MANAGEMENT OF THE PROPERTY OF			
底			部								
				。 暗茶褐色		。赤褐色		。青黄褐色		。淡赤褐色	
色			調	. L. / (14)		77 [FI]		1.7		中核一淡灰	色
胎			士.	0.1~0.30	砂粒多量に	∘ 0.1~0.20	砂粒多量に	. 0.1~0.30	)砂粒含有	0.1~0.40	砂粒含有
				含有		含有				雲母含有	
Mary Addition of the Park	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考								

土	器		1		400	52	100				100
	,,,,		No.	116	129	116	130	116	131	116	132
摘要	<u>i</u>		類	高 杯		高	杯	高。	杯	高	杯
法量	口器腹	縁	径高径	欠損のため不 6.55(現存値		欠損のため 8.95(現在		欠損のため <sup>2</sup> 8.0 (現存		欠損のため 9.4 (現在	
(cm)	底		径	14.35		13.65		15.3		15.8	
出	土	地	区	H-3-G	<b>冓Ⅱ</b> — 3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
杯	形		態								
	文		様	欠損のため不	明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
部	整	形	外								
	形		内態	・充実した柱部	『、段を有	。充実し、額	広がりの柱	。充実したま	っすぐの柱	・短かく充実	ひた柱部よ
脚	文		様	する裾部。 。柱部よりなた り、4 孔を有 のため少し3	ごらかに下 百する。段	部。少しも 内弯した額 面に少し肥	りあがり、 目部。裾部内	部でやや盛	りあがりな り、裾端で する。断面	りラッパ状	
	敷	: 形	· 外	下方に外反し 。裾端に刻目か いる。 。 へう磨きの」	ぶ一周して		裾端のみ構	かに外反し くいこんで 。柱部一縦方	いる。		歴き
部			内	向に刷毛目が ている。 ・中心部には漏り がている。	が施こされ 脚毛目が有	ナデ	PH 114 2 17 12	\$	磨きとナデ		
	<u> </u>			10(00							
底			部								
色			調	。淡黄赤褐色		。茶褐色		。青黄茶褐色	<u>,</u>	。淡茶褐色	
胎			土	。0.1~0.3の 金雲母含有	少粒含有	。0.1~0.3 <i>0</i> 雲母含有	D砂粒含有	∘ 0.1~0.30	砂粒含有	0.1~0.50	)砂粒含有
	<b></b>	<b>Y</b>		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考								

/ 据要	口器腹底	No. 類 径高径径 区態	116 高 杯 欠損のため不 10.5 (現存付 13.75 H-3-G ?	明	116 高 杯 欠損のため不 9.4 (現存	明	116 高 杯 欠損のため不 9.8 (現存・	明	116 高杯 23.45 16.3	B 136
法量(m) 土 杯 部 脚	口器腹底 土 地 形	径高径径区	欠損のため不 10.5 (現存付 13.75	明	欠損のため不 9.4 (現存	明	欠損のため不	明	23.45	В
法量(m) 土 杯 部 脚	器腹底 地 形	高径径区	10.5 (現存化 13.75		9.4 (現存					
出土杯	底 地 形	径区								
杯部	形		H-3-G		14.05		12.6		15.15	
杯部		態		溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ—3	H-3-G	溝Ⅱ— 3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
部	~	様	欠損のためる	5明	欠損のためる	不明	欠損のためる	、明	。下部が張り、 立ち上がり、 より一層大 端部は立ち 有し、断面 面は下部が ち上がり、	、中位下できく開き、 上がり稜をは丸い。内 広く深く立
脚	整形	外内							きく開がる。 ・右横方の向の をきずい ・刷毛目の上 に横方向へ	毛目の上か 細かなへラ 端付近は横 から放射状
	形文	い柱部に、下方にひた がる裾部				広がる裾部	の柱部からた	<b>ょだらか</b> に	に段を有す	る裾部 5の孔を有 より長い。 丸い。内面
部	整形	外内	。縦方向のへう 。内面は縦方 目、裾部は	向の刷毛	ヘラ磨きが いる。 ・柱部には絞	は縦方向の	<ul><li>縦方向のへ</li><li>柱部内面は</li><li>回転のへう</li><li>され、器壁</li></ul>	黄方向に一 削りが施こ は薄い。 複	横り回の細	を 絞面。かはか し目後坦へか刷 てがか部ラな毛
			D. Manhan	<b>典                                    </b>	30		1) (4.20		11四(3)(1	WL01,91h1_
底		部								
色		調	。淡黄褐色	•	。赤褐色 一部黄赤褐	<u>色</u>	。茶褐色、中	核一灰色	。青黄茶褐色	ı
胎	質	土	。0.1~0.3の 雲母含有 。良好	沙粒含有	。0.1~0.2の 有 。精良な粘土 。良好		。0.1~0.2の 。良好	沙粒含有	。0.1の砂粒音 。金雲母含有 。非常に精良 。良好	Ī
備			1				1		。 差し込み型	

			53		53		53	1	53	
土	器	No.	第21図	137	116	138	116	139	116	140
松田		類	小型高杯	A	高杯	E	 高杯	E	高杯	E
摘要 法	口縁	径	7.65		11.5		11.15		12.65	
<b>金</b>	器腹	高径	5.8		7.5 (現存	値)	6.8 (現存	值)	5.7 (現存	値)
(cm)	底	径	5.5		欠損のためる	不明	欠損のためる	不明	欠損のためる	不明
出:	土 地	区	H-3-G	<b>溝Ⅱ</b> — 3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
杯	形文	態様	。僅かに反る下 有し、大きく 広がる。内面 深く僅かに る。	外上方へ iも下部が	。椀形の杯部。 弯し、刻目が いる。			さく立ち上 で内弯し、	。 椀形の杯部。 広く、緩や; をえがき、! 弯する。	かなカーブ
部	整形	外内	。   内外面とも   毛の様なも   ている。		へう磨きを放	から粗雑な 施こしてい	<ul><li>口縁端横ナラ</li><li>き (風化がう</li><li>へう磨きを終める</li></ul>	§るしい。) 従横に行っ	共に横ナ	デの上から へラ磨き。
脚	形	態	<ul><li>エンタシス状 柱部より下方 ながら広がる</li></ul>	万に内弯し			。やや長目で 部に大きく <u>[</u>			
	文整形	様外	1-11-11-11-11-11-1		0		。縦方向のへ	ラ磨き	欠損のため	不明
部		内	り。裾部は約 ラ <b>磨き。</b> 。ナデ		風化の為す	不明	・ナデ			
底		部								
色		調	。黄茶褐色		。淡黄褐色		。茶褐色		。淡黄灰色(-	部黄褐色)
胎		土	。0.1の砂粒多 雲母含有	量に含有	。0.1~0.4砂	粒含有	。0.1の砂粒極	<b>少含有</b>	0.1~0.20	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考								

					53					
土	器	No.	116	141	116	142	116	143	116	144
摘要	種	類	高杯 ]	Е	高杯	Е	高杯	Е	高杯	E
法量	口縁器	径高径	7.95 5.7 (現存化	直)	11.35 4.3 (現存	値)	欠損のため <sup>2</sup> 3.7 (現存		欠損のため 3.7 (現在	
(cm)		径	欠損のため不	明	欠損のためる	下明	16.05		15.55	4.
出:	土 地	X	H-3-G	溝Ⅱ—3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
杯		態様	。深い椀形の杯から曲がり。 から曲がり。 り、口縁端に 面は丸い。	立ち上が	坦で広く立た いる。端部に 断面は丸い。 非常に厚い。 。端部横ナデ、 細かなへラ	ら上がって は内弯し、 接合面は 横方向の 磨き、下部	欠損のため	不明	欠損のため	不明
部	整形	外内	。 共に横方向	可のへう磨	に僅かなへ。 。細かな横方 きの上からま かいへう磨	句のへラ磨 放射状に細				
脚	形文	態様	。短かく充実し 横に大きくD 。 4 孔		1		。短かな充実 低く大きく で裾端は丸 る。 。4 孔	広がる裾部	みがあり、 ながら大き	(した柱部で)面の所に凹低く内弯しく広がる裾 裾端で僅か
					欠損のため	不明			。4孔	
部	整形	外	・柱部は縦方向	句のへう磨			。	なへう磨き	。刷毛目の上 へう磨き。	から細かな
		内	・ナデ				0		。縦横方向で が交差して	
底		部								
色		調	。淡赤褐色 内面一黒灰的	<b>当</b> ,	。茶褐色		。淡赤褐色 (一部淡	(黄褐色)	。赤褐色、万	ひ暗褐色
胎	質	土	。0.1~0.3のA 含有 。良好	沙粒多量に	- 。砂粒を含ま 土を使用 雲母含有 。良好	ず精良な料	i。0.1~0.5 <i>0</i> 含有 。良好	)砂粒、石料	並。0.1~0.30 雲母含有 。良好	D砂粒含有
備		考		,	・脚部は組みる。	合せ型であ				. 3

			53						54	
土	器	No.	116	145	116	146	116	147	117	148
摘要	1	重類	高杯	E	高杯	E	高杯	E	壺 B	1
法量	日器腹	高 径	欠損のため7 4.35(現存		欠損のため不 2.45(現存		欠損のため <sup>2</sup> 2.9 (現存	下明	11・6 4・0 } 欠損のためる	<b>788</b>
(cm)	底	径	17.4		16.7		18.4		) Massessi	
出.	土地	X	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
杯部(口頸部)	形 文 整形	態様	欠損のためる	<b></b> 「明	欠損のためイ	<b>、明</b>	欠損のためる	不明	<ul><li>二重口縁、短から大きくター</li><li>から大きくター</li><li>縁に、外面中をつけて段をもの。端部にちあがる。</li></ul>	ト反する口 □位に凸帯 Ŀもたした
類部)	金加	内			·				。	<b>∵</b>
脚部	形文	態様	<ul><li>短かな充実し 低く内弯した く広がる裾き 裾端で僅から 厚</li><li>4 孔</li></ul>	ながら大き ※な有す。	る。					
(体部)	整刑	彡 外· 内	<ul><li>細かなへラりと裾部の境にある。</li><li>風化の為不明</li></ul>	てヘラ痕が	<ul><li>細かなへう関</li><li>縦横に荒い届が交差している</li></ul>	训毛(14本)	。細かな刷毛 。縦横に刷毛 交差してい	(10本) が	欠損のためっ	不明
底		部						·	。不明	
色		調	。茶褐色		。茶褐色		。外面一淡黄 内面一淡黄		。淡黄灰褐色	
胎		土	• 0.1~0.3⊘f	少粒含有	。0.1~0.2の 雲母含有	少粒含有	0.1~0.30	砂粒含有	。0.1の砂粒含	有
	質		。良好		。良好	i i	。良好		。良好	
備		考							・小型壺の二	重口縁
								CORPORATION AND AN ADMINISTRATION AND ADMINISTRATIO		

摘要 「	種/ 	No. 類 径高径	117 小型電 7.0	149	117	150	117	151	117	152
法 量 (cm) 出 土		径高	7.0	£	.1. ಪರ್ಚ. ಆ					
量 (cm) 出土	器 腹 底	高			小型丸匠	定坩	蓋		小型壺	Сз
	. trl.	径	5.0 (現存)		10.0 5.8 6.2 丸底		5.9 15.2		6.4 $9.0$ $8.2$ $2.5$	
]	. 10	区	H-3-G	溝Ⅱ一3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
	形文	態様	。垂直に立ち」 部で器壁が猿 く終る。			泉的に大き	。笠形の蓋であ	53.	。「く」の字 し、端部付近 弯、端部は5 厚する。	ェで少し内
頸										
部	整 形	外内	。 。 。 。 。 。	Ŧ`	<ul><li>横方向のへ 部横ナデ</li><li>横方向の刷 へラ磨き、</li></ul>	毛目、一部	一部削り取っつまみの部分	っている。	。横方向の細っき。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	
体	形文	態様	。なだらかな <sup>所</sup>	肩をもつ器	。広い丸底か る浅い器形 で肥厚し、 ナデし凹ん	、内面頸部 指の巾に横			。肩が張り、1 位にある。 が明確。	
部	整形		<ul><li>へラ磨き。</li><li>・ナデ、粘土が明確</li></ul>	紐の継ぎ目	。横方向のへ 。刷毛目の上				<ul><li>肩部に細かき、胴部下</li><li>ナデ</li></ul>	
底		部	の欠損のため	不明	・丸底 削っており がある。	僅かに凹凸	1		。削り底	
色		調	。黒灰色		。茶褐色		。青黄茶褐色		。黄茶褐色	
胎		土	。0.1~0.2の 含有	砂粒多量に	こ。 0.1の砂料 母を含有	拉極小、金雲	₹ ° 0.1~0.20	砂粒含有	。0.1~0.4の を含有	砂粒・石料
	質		◦粗		。精製された	胎土	。良好		。良好	
備		考								

				54						54	
土	器		No.	117	153	117	154	117	155	117	156
摘要		種	類	小型壺	Сз	小型	虚	小型量	É	小型	壺
法 量 (cm)	口器腹		径高径径	6.25 9.5 8.9 1.3		欠損のため 6.6 (現7 8.25 1.8		欠損のため7 6.0 (現存 7.2 1.9		欠損のため 5.3 (現在 8.75 1.75	
出	土土	也	区	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
口	形		態	。「く」の字形 る	形に外反す			。口縁部欠損、 広がる頸部、 合のため肥原	内面は接		
	文		様								5 · · · · · · · · · · · ·
頸						欠損のため	不明			欠損のため	不明
部	整	形	外	。ヘラ磨き				0			
			内	。不明				不明。		-	
体	形		態	。最大径は中化い器形。	位にあり丸		『部から、大	。張りが小さった。 だらかに小さい 形。			
	文		様								
部	整	形	外	。		。 } 共に横っ	トデ	。ナデ、一部: 残す。	タタキ目を	・横方向のへ	ラ磨き
			内	0		0		。横方向の刷	毛目	・ナデ	
底			浴	。平底 丸底に近い。	0	<ul><li>・平底 中央部が る。</li></ul>	<b>たき凹んでい</b>	。平底 中央部が凹,	んでいる。	。平底	
色		erence of the control	調	。黄茶褐色		。淡青黄褐色	4	。淡黄灰色		。淡赤褐色	
胎			土			0.1~0.40	D砂粒を含有	· 0.1~0.30	砂粒を含有	i。0.1~0.5の 含有	砂粒・石粒
	質					。良好		。良好		。良好	
備			考								
										And the second s	

				54							
土	器		No.	117	157	117	158	117	159	117	160
摘要	_	種	類	小型壺		器台	A	器台	A	器台	A
法量	口器腹		高径	欠損のため不 7.5 (現存化 8.6		10.8 1.75(現在	字値)	9·25 2·1 (現存	(値)	10·4 2·35 (現有	至値)
(cm)	底		径	0.5 尖底		欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため:	不明
出:		地	X —	H-3-G		H-3-G		H-3-G		H-3-G	
口頸	形文		態様	。口縁部欠損、 さく大きく外		稜をなし中	央部に凹が 端は立ち上	をなしてい	る。端部は		端部は外反
部 (杯 部)	整	形	外内	。	!	へラ磨き。 。端部には横	方向にへう	<ul><li>端部横ナデ</li><li>無雑作なへ</li><li>放射状にへ</li></ul>		\$	伏のへラ磨 が暗文風で 上げ
体 部 (脚 部)	形文整	形	態様外内	。体部中位が り、器高より 。上・中位は様 位は右下りの 。ナデ、底部に	大。 黄方向、下 Dへラ磨き	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
底			部	のへラ痕・尖底底部の器壁は	は厚い。						
色			調	。茶褐色		。淡黄褐色		。淡黄色		。外面一淡黄 内面一薄茶	
胎	182		土	。0.1~0.2の配 含有	少粒を極小	。0.1~0.3個	>粒含有	。0.1~0.3砂	粒含有	。0.1~0.4の 含有。	砂粒、石粒
	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考					。円板充塡型		。円板充塡型	(3 cm)

土	器		No.	117	161	117	162	117	163	117	164
摘要		種	類	器台	A	器台	A	器台	A	器 台	ì
法量	口器腹		径高径	10.65 2.7 (現存化	值)	8.95 2.3 (現存	値)	10·0 2·55(現存	值)	欠損のため不 4.35(現存	1
(cm)	底		径	欠損のため不	明	欠損のためる	下明	欠損のため	不明	欠損のため不	明
出:	土 共	la La	X	H-3-G	溝Ⅱ—3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ—3	H-3-G	溝Ⅱ—3
杯	形文		態様	<ul><li>深い器形。端 丸くふくらみ 反</li></ul>		。浅い器形。 stylia 外上方へ立:端でより一! いる。内面に 立ち上がり、 いる。	ち上がり、	<ul><li>浅い器形。</li><li>然な形で僅立っている。</li></ul>	かに端部が	欠損のためる	で明
部	整	形	外	。端部横ナデ、	へう磨き	。横方向のへ	ラ磨き	<ul><li>暗文風の美</li><li>きで仕上げ</li></ul>			
			内	。ヘラ磨き		。縦方向のへ	ラ磨き	。不明			
脚	形文		態様							<ul><li>・充実した柱き より貫通した る。柱部よ 方へ広がる。</li><li>・4孔</li></ul>	こ孔を有すり緩かに外
部	整	形	外内	欠損のためる	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	。縦方向にへ 部接合付近 毛 。ナデ	
底			部								
色			調	。淡黄色 一部 淡	黒灰色	。茶褐色		。淡茶褐色		。青黄褐色	
胎	質		土	。0.1~0.3の 。良好	砂粒含有	。砂粒を含ま 粘土 。金雲母含有 。良好		は。砂粒を含ま 土 。金雲母含有 。良好		ら。0.1~0.3の 。良好	砂粒含有
備			考	。円板充塡型 。黒斑	(ハヶ痕有)	。胎土異質					

土	器	No.	117	165	117	166	117	167	117	168
摘要	種	[類	器台		器;	<b>=</b>	器	台	器	台
法量	日縁器腹	径高径	欠損のため不 5.15(現存値		欠損のため <sup>2</sup> 4.45(現存		欠損のため 6.5 (現有		欠損のため 6.15(現る	
(cm)	底	径	欠損のため不	明	10.4		10.7		10.7	
出	土 地	X	H−3−G ?	<b>溝Ⅱ</b> —3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ一3
	形	態								
杯	文	様								
	整形	. М	欠損のため不	明	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	不明
部		内								
		LJ								
脚	形	態	<ul><li>充実した柱部 より貫通した る。柱部より きく広がる。</li></ul>	:孔を有す		した柱部	緩やかに広	がった裾部 ト面は外反	<ul><li>充実した柱 かなカーブ 続く。全体 ある。</li></ul>	で脚底部に
	文	様	· 4 FL				• 4 孔	C 4 .30	。4孔	
部	整形	· 外,	。 総方向にへ <i>ラ</i>	き響き	。横方向のへ	う磨き	・縦方向のへ	ラ磨き	II.	、ラ磨き、下 ・目が残って もしきってい
	cond-analysis (in the little)	内	・ナデ		。横ナデ		・ナデ		ない) ・ナデ	
底		部								
色		調	。青黄褐色		。黄褐色		。黄褐色		。淡黄褐色 一部茶袍	<b>3</b> 色
胎		土	。0.1~0.3のを	少粒含有	∘ 0.1~0.4⊘	砂粒含有	0.2~0.40	砂粒含有	0.1~0.30	)砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考	Andrew Andrews							
		-								

,	nn.		55	100	55	4.50			55	150
土	器	No.	117	169	117	170	117	171	117	172
摘要		重類	器台	•	器	台	器	台	器台	A
法 量 (cm)	口器腹章	高径	欠損のため不 7.5 (現存値		欠損のため 7.45 (現在		欠損のため 7.5 (現存		11.15 6.75 (現存	
	底	径	12.3	# TT 9	11.5	э#-гг о	13.75	J#+ П 0	欠損のためる	
出 .	土地形		H-3-G	第11一3	H-3-G	海川一3	H-3-G	海山一3	H-3-G	
杯	文	態様	欠損のため不	初	欠損のため	不明	欠損のため	不明	・下部が落ち込 方へ広がる。 には下に張 を有し、内記 ち上がってい	端部外面 り出した稜 面端部は立
部	整形								<ul><li>端部横ナデ、</li><li>へう磨き</li></ul>	Act of the second
		内							。横方向のへ	フ磨さ
脚	形文	態様	<ul><li>充実した短か 緩かに広が、端でより一層 いる。</li><li>4 孔</li></ul>	た裾部、	中位で一層 部がなく中 内弯し内面	広がる。柱空。裾端で に粘土の折 る。器壁は	外下方へ広 がなく中空 は丸い。	がる。柱部	充実した柱	邹をもち、
部	整形	乡外	・縦方向のへき	7磨き	。刷毛の上よ へう磨き	り縦方向の	。縦方向と孔 下りのヘラ		・縦方向のへ	ラ磨き
To the second sec		内	。刷毛とナデて いる。	ご仕上げて	・ナデ		。ヘラ削り、	美しい仕上	・ナデ(不調	整)
底		部								
色		調	・黄褐色及び赤	示褐色	。黄褐色		。黄褐色 一部茶褐	色	。黄褐色 中核は赤褐 色	色、淡青黄
胎	and design the second second second	土	。0.1~0.3の配 含有	少粒多量に	。0.1~0.3の 量に含有	砂粒やや多	0.1~0.20	砂粒含有	∘ 0.1~0.2⊘	砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
備		考								

						55		55		 55	
土	器		No.	117	173	117	174	117	175	117	176
Jectr and		種	類	器 台		器台	A		Δ	器台	Δ
摘要	口;	 緑	汉	8.95		9.5		9.0	21	8.9	
法量	器腹		高径	6.21 (現存信	直)	8.85		8.3		7.2 (現存	値)
(cm)	底		径	欠損のため不	明	10.2		10.8		欠損のためる	不明
出:	土 ±	也	X	H-3-G	<b>溝Ⅱ一3</b>	H-3-G	溝Ⅱ一3	H - 3 - G	溝Ⅱ—3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
杯	形文		態様	<ul><li>下部が落ち込する。端部内方へ立ち上か丸く稜をなし</li></ul>	面は外上  う外面は			<ul><li>浅い器形。</li><li>に落ち込ん</li><li>部外面に稜</li><li>は立ち上かる。</li></ul>	でいる。端 を有し内面	平。端部は、 立ち上がる。	外上方へ
部	整	形	外	<ul><li>口縁端横ナテ のヘラ磨き</li></ul>	、横方向	。横方向の細; き	かなヘラ磨	。口縁端横ナ き	デ <b>、</b> へラ磨	。端部横ナデ 刷毛の後に	ナデ
			内	<ul><li>横方向のへき</li></ul>	磨き	・ヘラ磨き		。ヘラ磨き		・全面ナデの 文風のヘラ	
脚	形文		態様	。杯部接合面か なカーブで相 き。柱部充実	E部へと続	裾部接合面:	から緩やか 描き、裾部	やや内弯し ・柱部がなく で内弯し、 し肥厚する ・4孔、孔の 土は外面は	でいる。 中空、裾端 内面折り返 。 為生じた粘 残し、内面	みに広がる。	
部	整	形	外内	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		<ul><li>・柱部は縦方</li><li>き。裾部は</li><li>・ナデ</li></ul>		は削ってい。刷毛接合面・刷毛		。縦方向のへ 合面付近は 。へう削りと	その後ナデ
底			部								
色			調	。淡青黄色 裾部内面及乙	ド中核黒色	。紫黄赤褐色 杯部黄土		。淡黄色		。茶褐色	
胎	質		土	。0.1~0.3の 精良な粘土位 。良好		。0.1~0.4の 含有 雲母含有 。良好	砂粒多量に	。0.1~0.4 <i>0</i> 含有 雲母含有 。良好	)砂粒多量に	<ul><li>精良</li><li>雲母含有</li><li>良好</li></ul>	
備			考			。裾部内面に	薄く煤付着			。杯部と裾部 煤付着	内面に薄く

		on of Philosopherodel		55		56		56			
土	器		No.	117	177	118	178	118	179	118	180
摘要		種	類	器台	В	鉢	В	鉢	В	鉢	
法量(cm)	口器腹底		径高径径	欠損のため <sup>2</sup> 8.5 (現存 28.3		34.3 17.0 31.85 5.6		30.4 27.8 32.1 4.0		32.7 19.9 (現存 34.8 欠損のため不	
出:	土 ±	H	区	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ—3
口頸	形文		態様			<ul><li>頸部でくてる。外面が 稜をもつ。 っている。</li></ul>	少し肥厚し	る。端部外	面に稜を有 や丸みがあ		に稜を有
部 (杯	整	形	外	欠損のため	不明	。体部からそ	·のまま続く	・ナデ		0)	
部			内	·		右上りのタ	01012	・横方向のへ	う磨き	共に横方向	可のヘラ磨
体部	形文		態様	<ul><li>・中位でくび: 部上方まで: 確な稜を持 で広がる。</li></ul>	外反し、明		にあり、ナ		器形。口径	・最大腹径が「	下位にある
脚部	整	形	外内	。ナデ 。ヘラ削りの はナデ	まま、下方	・右上りのタ	タキ目		) へ ラ 磨 き ) を施こし	北次総構で	方向のヘラ
底			部				を形し、思いた。 でわずかに約	`  ら縦方向の	・形をなして 目にはあとか り叩きが行れ こになってい		下明
色			調	。淡黄茶褐色		。黄褐色一部	暗青灰色	。淡黄褐色		◦黄褐色	
胎			土	。0.1~0.3の 含有	砂粒多量に	∘ 0.1~0.3 <i>Œ</i>	)砂粒含有	。0.2~0.5の 多量に含有		र्थ ∘ 0.1~0.3⊘ह	少粒含有
	質		connected PVV	。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考					Yes			

,					56				56	
土	器	No.	118	181	118	182	118	183	118	184
摘要		種類	鉢 B		鉢 A.	4	鉢 A	4	鉢 A	4
法量	口器腹	径高径		直)	$15.65 \\ 7.4$		17.0 (反転 6.05	)	18.1 8.0	
(cm)	底	径	欠損のため不	明	4.2		1.9		1.6	
出:	土地		H-3-G	溝Ⅱ—3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
口	形文	態様	ブをなし、か ち上がる。 端 稜をなし刻目	ト上方へ立 計部外面に  が一周し	内面は体部よ 稜をつけてい	端で外反。 、り外反し 、る。口縁 器壁の厚	り、端で僅か がっている。	<sup>)</sup>	り、端で立 外面に稜を	ち上がる。
部	整刑		共に横方向	]のヘラ磨	<ul><li>急な右下りの 々をナデで消 は器高の光程 との境ではな</li><li>刷毛とナデ</li></ul>	当す。 刷毛 呈あり体部			・横方向のへ	ラ磨き
体	形	態	。ゆるやかなた がく	ローブをえ	。底部が広く、 ちながら広がる		。底部より外_ く広がり、注		。底部より外 り、深みが	1
部	整 刑	様	・ 共に横方向 下りのへき	磨き	。 傾万回の刷きれ、底部付近				。横方向のへ 部より縦方 き	ラ磨き、底
底		部	。欠損のためイ	、明	。削り底 。突出し、後え 付け足され、 ラ削りが施さ 央部の突出が ある。	囲りにへ こされ、中	。削り底?		。削り底 。無方向のへ 底面は不安 ある。	ラ削りの為 定で凹凸で
色		調	。淡黄色		。淡茶褐色		。暗灰黄色		。淡茶褐色	
胎	質	<u>±</u>	。0.1~0.2の配 含有 。良好	か粒多量に	。0.1~0.3の配 。良好	少粒含有	。0.1~0.2ので 含有 金雲母含有 。良好	沙粒多量に	。0.1~0.3の 。良好	砂粒含有
備		考			。%黒斑で口絲 ある。	家内面にも				

		-			 56					
土	器	No.	118	185	118	186	118	187	118	188
摘要	₹ d	重類	鉢 A <sub>4</sub>	L .	鉢 A <sub>4</sub>		鉢 (		鉢 (	C
法量(cm)	口器腹底	径高径径	19.6 8.6 (現存f 欠損のため不		12.2 5.5 欠損のため不	明	17.6 9.2 (現存 18.1 欠損のためる		13.4 11.7 15.6 3.3	
出:	土 地	X	H-3-G	溝Ⅱ—3	H-3-G	溝Ⅱ—3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
口頸	形文	態様	。端は外反し圏 である。頸部 に外反。		<ul><li>外面は真直く へ開く。内面 稜をなす。 <sup>第</sup></li></ul>	5は外反し		る上がり内 器壁が段々 部で外反す		り、端部は
部	整形	<b>外</b>	きくなっています。		。ナデ、粘土約が残っている。 が残っている。 細かな横方向	,	。横方向のへから刷毛目が あら刷毛目が る。 。右下りの刷	が残ってい	。横方向のへ 毛目の痕が 。右下りの刷 へラ磨き。	残っている
体	形文	態様	。底部より外_ く広がり、原 深い。		。浅い埦形で、 く、外上方 いる。			屈折。粘土	。底部より外 : く広がり屈	折し、最大 の継ぎ目が
部	整刑	<b></b> 例	。頸部付近は	のヘラ磨き	. 0		<ul><li>横方向のへ 位から縦方 き。</li><li>右上りのへ 雑な仕上げ</li></ul>	向のへラ磨 ラ <b>磨き、</b> 粗	いる。 。底部より放 磨き、最大	目が残って
底		部	。欠損のためる	不明	。尖底(丸底に 。放射状に内: 削り。器壁	外共にへき	)。欠損のため	不明		/て凹凸な底 はっきりと )形をしてい
色		調	太岳		I 。淡茶褐色、 色	中核は赤袖	易。茶褐色		。茶褐色	
胎		土	。0.1~0.2の に含有	砂粒を多量	き。0.1~0.3の に多い	砂粒が表面	面・0.1~0.6の 含有	砂粒、石料	立。0.1~0.40 位の石粒も	
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	:
備		孝	÷		。外面に黒斑		。一部黒斑			

	***********					56		56		56	and the same of th
土	器		No.	118	189	119	190	119	191	119	192
摘要		種	類	鉢		———— 鉢 A	1	鉢 A:		鉢 A	1
法	口	縁	径	18.2		11.6	-	10.35		10.4	
量	器腹		高	14.9 (現存信	直)	8.5		8.8		7.9	
(cm)	底		径径	欠損のため不	明	3.9		2.3		2.5	
出	土 :	地	X	H-3-G	<b>溝Ⅱ</b> — 3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
	形文		態様	<ul><li>端は、内弯ぎ 上がり、断面 に稜を有して</li></ul>	iは、内側	<ul><li>外反する口 く、端部は の括れが内外</li></ul>	丸い。頸部	。頸部で括れ、 広がる口縁で い。			る。少し内 5 で細 くな 中央部に粘
頸											
部	整	形	外	• ]		°		。右上りの浅に	)タタキ目	0	
пр			内	・ 対にナデ		・ 対 に ナデ		・ナデ		。	
体	形		態	。底部より外上 上がり、深い	:方に立ち  器形	。底部より外 上がる。深い		。底部より外上 り丸みがある		。底部より丸 立ち上がる。	1
Part	文		様								
部	整	形	外	。横方向の浅い	タタキ目	・ナデ		<ul><li>底部と口縁付</li><li>キ目があり、</li><li>ナデで消され</li></ul>	中央部は	<ul><li>細かな浅い</li><li>上よりナデ</li></ul>	タタキ目の
			内	・斜方向の刷毛	目	・刷毛とヘラ		・ナデ		・ナデ	
底	and the second s		部	。尖底?				。削り底 。突出し、一番 っている。* の方へ付着			
色			調	。淡黄褐色		。淡茶褐色		。淡黄褐色	-	。茶褐色	
后			土	。0.2~0.8の砂 多量に含有	<b>〉粒、</b> 石粒	∘ 0.1~0.3Ø	沙粒含有	。0.1~0.3の配 金雲母含有	少粒含有	0.1~0.30	砂粒含有
N T	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備	TO CONTROL MANAGEMENT		考	。甕Aの体部上 た形である。	半を欠い			。内外共に煤作	才着	。底部全面に	黒斑

				57		57		57		57	
土	器		No.	119	193	119	194	119	195	119	196
摘要	_	種	類	— 、 鉢 Aı		鉢 A	1	鉢 A	1	鉢 A:	2
法 量 (cm)	口器腹底		径高径径	12.0 8.4 11.1		13.2 7.2 10.1 2.6		10.9 7.3 9.6		8.7 5.4 3.3	
出	土 :	地	区	H-3-G	<b>⋕</b> Ⅱ一3	H - 3 - G	溝Ⅱ—3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
口頸	形文		態様	。頸部で外反し ながら外上だ がる。外面端 継ぎたしナテ 断面三角形	iへ立ち上 は粘土を	し、端部で内	可弯し立ち 選は段々と	弯し、立ち <sub>-</sub> 面は丸い。勁 巾のある稜 <sup>*</sup>	上がり、断 頚部内面は		断面は三
部	整	形	外内	。右上りのタタ からナデでい ・ナデ		<ul><li>へう磨きとっ 頸部付近にっ</li><li>横方向の刷</li></ul>	タタキ目	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		不明	
				,		12/201-3-2 //		J		J	
	形		態	。胴が張り丸は	1	。底部より丸 に広がる。	く、外上方	。底部より外 立ち上がる。		<ul><li>底部より外上</li><li>上がり、大</li><li>比して小さい</li></ul>	きな底部に
体	文		様								
部	整	形	外	1	乍用 してい	々へラで消	されている	削りの上よ	りナデ	末が不十分 が多くある。	のため亀ゑ ,
			内	・触刀回のする	Γ	。横方向の刷	七日	が全体的に		。へラ痕のある。	とか多くの
底			部	。削り底 。粘土をつぎた ぎみに削りた デている、 壁は厚い	そのあとナ	は刷毛の上				<ul><li>・突出平底</li><li>・突出した底</li><li>になると緩</li><li>でいる。</li></ul>	
色			調	。外面一淡赤花 内面一淡黄花 中核一赤褐色	喝色	。茶褐色		。赤褐色 —	部灰黄褐色	色。青灰色	
胎	Æ.	Í	土	。0.1~0.5の7 含有 金雲母含有 。良好	沙粒、石粒	2。0.1~0.3の 雲母含有 。良好	砂粒含有	。0.1~0.3の 赤褐色の礫 。良好		。0.1~0.2の 精良な粘土 。良好	
備			考	<ul><li>器高 1.5cm がなくそれ 煤が付着、 ない</li><li>内面底部に 残存</li></ul>	以上一面に質部やや少	2			:		:

				57		57			1	57	
土	器		No.	119	197	119	198	119	199	119	200
摘要		種	類	鉢 A <sub>2</sub>		鉢 <i>A</i>	A 2	鉢 4	A 2	鉢 A	1.2
法量	口器腹		径高径	11.7 8.5		9.9 8.4		10.4 6.35		11.5 6.5	
(cm)	底		径	4.35		3.3		2.8		3.0	
出	土 ‡	也	X	H−3−G Å	<b>第Ⅱ</b> —3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
П	形		態	<ul><li>内弯している 常に歪んで、 にゆがんでい</li></ul>	上下右左				って、歪つ	。端部は内弯 上がり。断	
頸	文		様								
部	整	形	外	。タタキ目の上	からナデ			・ナデ		0	
			内	。ナデ(へラ痕	も有る)	。		。横方向の細	かな刷毛目	。	
体	形		態	。底部より外上 上がり深い。	方へ立ち	。底部より外 上がる。	上方に立ち	。底部より外 る。	上方へ広が	。底部より タ き。口縁付 ている為椀	近が内弯し
	文		様								
部	整	形		<ul><li>急な右上りの目。土器をねな仕上り。</li></ul>	じった様	キ目、表面 飛んで凹凸	の石が多く			。右上りのタ	
			内	。ナデ(へラ痕 いる)	が付いて	<b>る。</b> ・ナデ		。不明		。放射状のへ	ラ痕
底			部	<ul><li>・平底</li><li>・突出して、中 んでいる。</li></ul>	央部が凹	<ul><li>・平底</li><li>・内面はへラ</li><li>為か凹凸が</li></ul>				・平底 ・底部は突出 壁は1.5∼2	
色			調	。黄茶褐色		。淡青黄灰色	1	。茶褐色		。青灰黄色及	暗茶灰色
胎			土	。0.1~0.5の砂 含有	粒、石粒	· 0.1~0.30	砂粒含有	0.1~0.30	砂粒含有	· 0.1~0.30	砂粒含有
***************************************	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	。全体的に薄く 。黒斑¼程	煤が付着				-		
					TO NATE WAS ADMINISTRAÇÃO ORGANIZAÇÃO						

,				1000000	004	57	200		000	58	904
土	器		No.	119	201	119	202	119	203	119	204
摘要		種	類	鉢 A	2	鉢 A:	2	鉢 A	3	鉢 A:	3
法量	口器腹		径高径	9.9 5.8		12·2 6·4		14.7 6.9		12.3 5.2	
(cm)	底		径	3.3		2.0		3.7		3.3	
出.	土土	地	区	H - 3 - G	溝Ⅱ一3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	<b>帯Ⅱ−3</b>
口	形文		態様	<ul><li>端部外面がP 壁が薄くなり 丸い。</li></ul>		<ul><li>端部外面は肥面端は立ち上る。内面は端 の一程下で稜を る。</li></ul>	二がってい 計より 1.7	。端部断面はま	Γζ	。端は器壁が厚 は丸い。	区く、断面
頸											
部	整	形	外	。		。端部横ナデ		。横ナデ		・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
			内	o \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \		・ナデ		。不明			
体	形		態	。底部より外 り、丸みを		。底部より外」 り中位より5 ている。			っすぐ上が	。外上方へま- る。	っすぐ上が
部	文整	形	様外内				目、一部削 良が放射状	<ul><li>・ナデ 下位( あとが僅か)</li><li>・細かな刷毛 射状のヘラ)</li></ul>	残っている の上から放	   共にナデ	
底			部	。平底 。中央部が僅 いる。	かに凹んで	。削り底 。底面が小さ 刷毛のあとが		<ul><li>・平底</li><li>・突出した底</li><li>いときりの</li><li>土があとか</li><li>されている</li></ul>	様な形。料 らつけたと	5	不明
色			調	。茶褐色		。淡黄茶褐色		。外面一淡黄 内面一茶褐		。淡赤褐色	
胎			土	∘ 0.1~0.3⊘	砂粒含有	。0.1~0.3の 雲母含有	砂粒含有	。0.1 <b>~</b> 0.3の 含有	砂粒多量的	三。0.1~0.3の 雲母含有	砂粒含有
	讆	ĺ		。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考	・内外共に煤	付着	。底部全面に	黒斑	。口縁内外に	煤付着		

			58		58	La constant			58	
土	器 1	Vo.	119	205	119	206	119	207	119	208
摘要	種類	領	鉢 A <sub>3</sub>		鉢 A	.3	鉢 A	. 3	鉢 A	8
法量	口縁行器	圣高圣	13.8 5.3		15.8 6.8		11.6 (反転 5.0	()	17.6 7.35	
(cm)		圣	3.9		2.3		1.3		3.9	1.0
出:	土地(	X	H-3-G	<b>溝Ⅱ</b> — 3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
口	,	態	。端部が角張っ っている。	て太くな	<ul><li>端部内面はなき、外面はなれる</li><li>丸くなってなってなってなってなってなってなってなってなってない</li></ul>	やや肥厚し		なり、断面	。端部は内弯し い。	)断面は丸
部	整形;	外力	。 } 不明		。	デとへラ磨 している。	。 。 。 。 。 。 。	デ	不明	
体		態様	。底部より外上 り、中位あた と肥厚してい 接合面ではへ たあとが残り なっている。	:りで一段 いる。底部 .ラで押し			。底部より外 る。	上方へ広が	。底部より外_ く広がる。	上方に大き
部	整形:	外	・ナデ		。縦方向のへ	ラ磨き	。縦方向のへ に横方向の		・ナデ	
	i	内	。ナデ、ヘラ痕 についている		。ヘラ磨き		。横方向のへ	ラ磨き	<ul><li>ナデ 底部を 削った痕がる</li></ul>	
底		部	。平底 。中央部が凹ん 底面は石粒が 凹凸になって	ぶとんで、	。削り底 。小さな底で みがある。 う削り				。丸底 。あとから粘 していて不知	
色		調	。青黄茶褐色		。淡黄褐色		。茶褐色		。淡黄色 一部青灰]	<b>黄</b> 色
胎		士.	。0.1~0.3の砂	〉粒含有	。0.1~0.4の 有	砂粒小量含	。0.1の砂粒含 非常に精良		0.2~0.407	沙粒含有
	質		。良好		。良好	FREEDOM STOLEN ST. AMERICAN	。良好		。良好	W. S. SERVICE P. SERVICE STREET
備		考								

١,	mm			58		58		58	0.10
土	器 No.	119	209	119	210	119	211	119	212
摘要	種類	鉢 As		台付鉢	D	台付鉢	D	台付鉢	D
法 量 ( <i>cm</i> )	口器 腹底 径	19.3 8.5 (現存値 欠損のため不		11.3 7.8 (現存 10.6	值)	12.1 7.5 5.3	!	9.8 6.6	
	土地区	H-3-G 和		H-3-G	進口 9	H-3-G	進口 9	H-3-G	ЖЕП 9
	形態	。端部外面は少						。端部外面が内	
口	文様	反している。 い。			、端部は		『で立ち上 は頸部で稜	面は三角形	
頸									
部	整形外内	。		。   	<u></u>	。右上りのタタ からナデで浴			
体	形態文様	。底部より外上 く広がる。	方に大き	。最大径が上位 い。	立にあり丸	。底部が広く5 器壁が比較的 で押えるたる る。	内薄く、指	で立ち上がり	) 内弯ぎみ 面が小さく
部	整形外内	<ul><li>右上りの刷毛 底部の方より へラ磨き</li><li>全体的な仕上 である</li></ul>	暗文風の		から放射状		ラ磨き、底 毛目のあと	共に横方向	可の細かい
底	äß	。欠損のため不	明	。台を付け足で 粘土は止っで 柱部は指でいる。	ている。	をつけ足した	た台で中央	。厚手の低いだ。 。囲りを指でが が自然に凹ん 指圧痕が多。 る。	甲え中央部 しでいる。
色	調	。黄茶褐色 一部淡赤褐	色	。茶褐色		。淡茶褐色		。乳赤褐色	
胎	1	。0.1~0.2の砂 金雲母含有	>粒含有	0.1~0.304		∘ 0.1~0.201	沙粒含有	。0.1~0.3の 含有 0.5の石粒も	
	質	。良好		。良好		。良好		。良好	
備	考					。全体的に指 き、凹凸に			

			59							
土	器	No.	120	213	120	214	120	215	120	216
摘要		重類	館		甑		魱		部	i i
法量	口緣器腹	径高径	12.15 9.6		欠損のため 4.6 (現有		欠損のため <sup>2</sup> 4.5 (現存		欠損のため <b>9.1</b> (現	不明 存值)
(cm)	底	径	4.15		4.9		3.9		2.6	
出.	土地	X	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3
口頸	形文	態様	<ul><li>・中位付近でー り、端部で紹 は丸い。粘土 折り返えり、 上げである。</li><li>ぎ目が明確で</li></ul>	Hく、断面 上が外面に 粗雑な仕 粘土の継	欠損のため	不明	欠損のため	不明	欠損のため	)不明
	整刑	乡外	・ナデ							
部										
		内	。波型に刷毛目							
体	形	態	。底部より外上 上がり、中位 ぐに立ち上か	なより真す	。底部より外 る。	上方に広が	。底部より外 く広がる。	上方に大き		ト上方へ広が ま比較的薄い
	文	様								
部	整力	多 外 内	<ul><li>縦方向にタター</li><li>こされ中位 は</li><li>ナデー</li><li>縦方向の刷</li></ul>	より上では	1		。右上りのタ 。ナデ		。   	デー部へラ削り
					)		(放射状に	ヘラ痕)	<u> </u>	
底		部	。平底 。突出した底部 底面に巻いた 返えしている 。1孔、2.0cm	c形で折り る	。突出平底 。突出した底 面に対象を 面に面に 。 1、2.4 み	、粘土が両 -	部 1 1 0 0			細い孔であ
色		調	。外面一淡茶衫 内面一淡青衫		。淡黄褐色 。外面は黒斑 いている。	£が全体に付	。青黄茶褐色	ı	。外面一次原 。内面一茶 褐色	曷色(一部赤
胎		土	∘ 0.1~0.3⊘	沙粒含有	。0.1 <b>~</b> 0.3の 含有	砂粒多量に	。0.1 <b>~</b> 0.4の 含有	砂粒、石粒		の砂粒含有
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
			。黒斑あり							
備		考								

					59					
土.	器	No.	120	217	120	218	120	219	120	220
摘要	種	類	督瓦		甑		魟		<b>P</b>	Ä.
法量	口縁器腹	径高径	欠損のため不 6.0 (現存値		13.4 6.2		欠損のため <sup>ス</sup> 8.7 (現存		欠損のたる 4.4 (現	
(cm)	底	径			4.5		2.1		2.0	
出:	土地	X	H−3−G #	<b>歬Ⅱ—3</b>	H - 3 - G	溝Ⅱ一3	H - 3 - G	溝Ⅱ一3	H-3-G	溝Ⅱ一3
口	形文	態様			<ul><li>端部で外反</li><li>反り返えっ</li><li>面には折り</li><li>が付着し広</li><li>る。</li></ul>	ている。外 返しの粘土				
頸			欠損のため不	明			欠損のため	不明	欠損のたる	め不明
部	整形	外			0					
ць		内			・ 対にナデ					
体	形	態	。底部より外上 上がり、内弯 る。		をもちなが る。器壁は	ら立ち上が		上方へ広が	。底部より に広がる。	
	文	様			ەر ئ					
部	整形	外	。横方向のタタ	キ目。	。急な右下り の上からナ		・横方向のタ	タキ目。	。右上りの:	タタキ目。
		内	。縦と横方向に 刷毛目	交差した	。刷毛とナデ		。ナデ (放射状の	へラ痕)	。放射状にわれてい	へラ痕が行な る。
底		部	<ul><li>・平底</li><li>・底部の粘土がへ付着</li><li>・内外両面より面に粘土付着</li><li>・1孔、1.5cm</li></ul>	穿つ、両 	つけ足して	いる。 し、外面に に付着	。 削突囲る 別の いか の の の の の の の の の の の の の の の の の の	削りしてい から粘土を いる。	囲りをへ	小さな底部で ラ削りしてい <b>1<i>cm</i>の</b> 厚み
色		調	。淡茶褐色、中 色	核は赤褐	。黄褐色		。淡黄赤褐色		。淡灰茶褐	生,
胎		土	。0.1~0.2の砂	 <b>b</b> 粒含有	。0.1~0.3の 含有	砂粒・石粒	。0.1~0.4の 多量に含有	砂粒、石粒	i。0.1~0.20 僅かに石	
	質		。良好		。良好		。良好		。良好	
			。黒斑あり					N. O. P. LEWIS CO., Married Management of the Co.		
備		考								
										77000000

				59							
土	器		No.	120	221	120	222	120	223	120	224
摘要		種	類	饀		甑		饀		飯	
法量	口器腹		径高径	14.4 7.3		15.4 11.1		欠損のため <sup>フ</sup> 3.5 (現存		欠損のため 6.4 (現7	
(cm)	底		径	3.0		1.5		0.7			
出	土 ±	地	区	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	<b>購Ⅱ</b> — 3	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	溝Ⅱ-3
口	形		態	。僅かに反り、 弯している、 角形		。体部より一段 外上方へ広か 端部断面は丸	ぶっている				
	文		様								
頸								欠損のためる	不明	欠損のため	不明
部	整	形	外	* 共に横ナラ	デ 目を消して	。右上り浅いタ	タキ目				
			内	。	日を付して	。横ナデ					
体	形		態		まく、土器	。底部より外上 上がる。上位 っている。			上方に大き		上方へ大き 丸みがある
,,,	文		様								
部	整	形	外	。上下左右交差 いタタキ目。		。右上りのタタ 。お上りのタタ 。ナデ <b>、</b> 中位 』		(後から縦)	方向のタタ	。右上りのタ 化が著るし	
			内	・ナデ		指押えで凹い。				。刷毛目が剖	分的にある
底			部		外面に粘	。削り底 。縦方向のタタ 僅かに削って 。1孔、1.5~ み	こいる。	。1孔、1.6cm		。削り底 。尖底ぎみて 。1孔、1.6	
色			調	。淡青黄灰褐色	<del>4</del> ,	。淡黄茶褐色 中核一赤衫	<b>曼色</b>	。黄茶褐色		。青黄褐色	
胎			土	॰ 0.1~0.3のव	沙粒含有	。0.1~0.6の配 多量に含有	少粒・石粒	· 0.1~0.30	砂粒含有	0.1~0.40	砂粒含有
	質			。良好		。良好		。良好		。良好	
備			考								
											T THE STATE OF THE

		60	A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.A.			59		60	
土	器 No	120	225	120	226	120	227	120	228
摘要	種類	飯		甑		飯		飯	
法量	口 縁 径 器	10.85		欠損のため不 8.4 (現存値		11.7 11.2		16.1	
(cm)	底 径	2.4				1.3		1.3	. ' ' '
出:	土 地 🗵	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G	<b>帯Ⅱ</b> —3	H - 3 - G	溝Ⅱ-3	H - 3 - G	溝Ⅱ一3
	形 態	る。 断面は 3			·	。端部断面は三 外面端が内容		。端部で外反 薄くなって	
口	文 椁	ic c							A A DE MINISTER POR PORTO DE LA CONTRACTOR DE LA CONTRACT
頸				欠損のため不	明				n northern
部	整形外	                 				。	目を消して	。横方向のへ	ラ磨き
体	形態文格	上がり、上が に立ち上が っている。	位より垂直		らしながら	。外上方に立た 長い。底部に た粘土が下 り、器壁が いる。	<b>こつけ</b> 足し 位で重な	り、中位で 増す。	
部	整形多	目	段のタタキ	・右上りのタク	タキ目		句のタタキ てなってい	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	位で縦方向
底	1 2 E	。タタキ底 。1孔、1.0cm	<b>m</b> の厚み	。タタキ底 。コブ状に後が され、最終的 目で仕上げ 。1孔、1.9cm	的にタタキ ている。	・タタキ底・コブ状に後	からつけ足 句のタタキ てなってい	。タタキ底 ・1孔、1.36	<b>m</b> の厚み
色	31 H	。淡灰黄褐色		。淡黄褐色		。淡黄赤褐色		。淡暗赤褐色	i.
胎		上 。0.1~0.3の 多量に含有		° 0.1~0.2の	 沙粒含有	○ 0.1~0.2の		∘ 0.1~0.20	砂粒含有
	質	。良好		。良好		。良好		。良好	
備	ā	考							

				60		60	1	:		
土	器		No.	120	229	120	230			-
	_	種	類	飯		魱				
摘要	口	<u>%</u> ⊋!	奴	14.6						
法量	器		往高	9.25		11.15 $5.9$				
里 (cm)	腹		径							i de la companya de l
	底		径	1.5		1.9				
出.		地	X	H-3-G	溝Ⅱ-3	H-3-G				
	形		態	。端部は外上方   やや外面に肌		。端部は内弯し く、器壁が厚				
,,				( ) PERCO	71-12 3 30	一 一	₹V '0			
П	ميليد		<b>+</b> 深							
	文		様							
頸										
	整	形	外	0)		0)				
部		112	71							
			内	<b>共に横</b> ナテ	<u>.</u>	共にナデ		ananominate is		
			ΥJ	° J		$ $				
	形		態	。底部より外上	:方へ立ち	。底部より外」	 上方に広が		THE STATE OF THE S	
				さがり口縁付	が近で内弯	る。				
体				する。						
	文		様							
	整	形	外	。右上りタタキ						
部				より不規則な	メダタキ目					
			内	。右下りの刷毛						
				より横方向の	)刷毛目	)   ,				
				<ul><li>タタキ底</li><li>粘土を後から</li></ul>	きといてい	。丸底 。外面より穿~	<b>)</b>			
底			部	る。		。1孔				
				。1孔、1.7cm	の厚み					
				。淡黄褐色		。淡茶褐色				
色			調			DC/N PAJ CJ				
Ľ			H/H]							
胎			土	  ・0.1~0.3の後	が名号に	。A 1 小砂料A	右			***************************************
n.i				含有	バルグ里(	- 0.100砂似召	H			
	府戶			。 白 #7		± 47				
	質			。良好		。良好				
						。全体に同一	手法で仕上			
						げ、乱雑でる				
備			考							
		Maria a Maria da Santa da San					***			

### 第3節 須恵器

須恵器は、東奈良遺跡のほぼ全域より出土しており、今回はA-6-G・I・J・K、H-3-B・C・G・H・J・K・M・N・O・P、F-7-E・Fの各地区から出土した須恵器について記す。 (図版121・122)

器種としては、杯蓋( $1\sim4\cdot6\sim11$ )・杯身( $12\sim19$ )・有蓋高杯( $20\cdot21\cdot22$ )・甕( $27\sim34$ )・器台(26)・ 廛(23)・壺( $24\cdot25$ )等がある。しかし他の弥生式土器や土師器にくらべると、出土量はきわめて少ない。さらに出土状態においても、H-3一下地区の溝I-1より出土した廛(23)、 $F-7-E \cdot F$ 地区の溝I-Nより出土した杯蓋( $1\cdot3\cdot4$ )・甕(27)、H-3-O-8地区のP-23より出土した甕(34)が遺構に伴う他は、すべて直接遺構に関連のない包含層より出土したものである。

時期は陶邑のⅠ期からⅤ期までの各時期のものがある。

5世紀の須恵器としては、杯蓋 (1~4)・杯身 (12~14)・甕 (27・30・32・34)・器台 (26)・高杯 (20) がある。

杯蓋・身の天井部・底部はほぼ全体の%ほどへラ削りにより、丁寧に成形・調整されている。杯蓋( $1\sim4$ )の天井部と口縁部との境界はやや突出し稜をなしている。口縁部は比較的高く、(1)の端部は丸く仕上げられ、他の( $2\sim4$ )より古い時期のものである。杯身( $12\sim14$ )のたちあがりは、やや内傾はしているが比較的長く、杯蓋( $2\sim4$ )とともに定形化したものであろう。

甕(27・30・34)の口縁端部は張り出した様になっている。

器台(26)は、上段には長方形、中・下段には三角形の三段の三 方向の透しがあり、透しのまわりにはナデがあり、透しと透しのあ いだには櫛描波状文がある。

高杯(20)は、短脚1段透しの有蓋高杯の脚部である。

6世紀の須恵器としては、杯蓋(6~8)・杯身(15~19)・高杯(21・22)・高杯の蓋(5)・횷(23)・甕(31)がある。

杯蓋(6~8)は、天井部は粗いヘラ削りで成形され、口縁部はゆるやかに外上方に広がり、端部は丸くおさめられている。天井部と口縁部の境界には、(6)は凹線が、(8)はあいまいな凹線がめぐらされてはいるが、(7)は判然としない。いずれも6世紀後半の須恵器である。

杯身は、扁平な天井部で、粗いヘラ削りがなされ、たちあがりは 内傾し、 $(15 \cdot 17)$  は短く、 $(16 \cdot 19)$  はさらに短い。 $(15 \cdot 17)$ 

### 5 世紀の須恵器



第22図 須恵器杯蓋

#### 6世紀の須恵器



第23図 須恵器杯蓋



第24図 須恵器杯蓋

7 世紀の須恵器

まとめ

8世紀の須恵器

は 6 世紀前半で、( $16 \cdot 19$ )は 6 世紀後半に位置づけられるであろう。

高杯の蓋(5)は、天井部をヘラ削りし、後カキ目調整をおこない、頂部には平たい円盤形のつまみをつけている。口縁部はやや湾曲しながら外へひらき、やや短い。時期としては6世紀前半のものであろう。

高杯(21)は、長脚のつくものであり、また聴(23)は頸部の長大化していく時期のものであり、高杯(22)とともに6世紀前半の新しい時期のものであろう。

杯蓋(9)・壺(24)・甕(28・29・33)がある。

杯蓋(9)は端部の内面にかえりがつき、天井部の頂部に宝珠つまみのつくものである。

甕(28・29)は外反する口頸をもち、端部を折りまげている。甕 (33)は口頸部に一帯の粗い櫛描波状文があり、この粗い波状文は TK43までにはほとんど消滅したものが、一時復活するものであ (性2) る。

いずれも7世紀前半の時期の須恵器である。

杯蓋(10・11)であり、天井部と口頸部との境界は段をなし、口縁部は短く屈曲したものである。

壺(25)は底部のみであり、糸切り底で平安時期以後のものである。

東奈良遺跡から出土した須恵器には、【期から▼期のものが認め られる。また全域からその出土をみるが、量的にもわずかであり、 遺構も少ない。

5世紀代の須恵器には、杯蓋(3、4)、杯身(12)でみられるように割れ口が暗紫色を程し、泉北陶邑で製作された可能性のあるものがある。6世紀~7世紀代の須恵器には、胎土に砂粒を多く含むものが多くみられ、これらの須恵器は、この時期にすでに成立していた千里古窯跡群から供給されたものと考えられるが、詳細は今後胎土分析等によって決めるべきものと考えている。

注 1 陶邑古窯跡群 I 平安学園

2 /

# 須 恵 器 観 察 表

		-	(写真)第22図						63		
土	器	No.	(図面) 121	1	121	2	1 1	3	121		4
摘要		重類	##. ##.		蓋		蓋			蓋	
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	13.0 4.2		11.8 3.95		11.0 4.0 (現存	値)	12.3 4.85		
出:	土地	区	F-7-E·	F I -N	F-7-E •	F	F-7-E·	F 【一N	F-7-	-E•F 溝 [ -	N
口頸	形文	態様		がに外へ 部の径よ がやや大 端は丸く	<ul><li>口縁部はわす</li><li>へひらき、をよりも口径の大きい。口縁</li><li>対かに内傾し四線が一条を</li></ul>	度線部の径 )方がやや 表下端はわ 、端面に		。やかに彎 「方にのび は内傾し、	ひらき、	tわずか! 稜線部: 译の方が 1縁下端	に外へ の径よ やや大 はわず
部	整	形	。内外面とも様	黄ナデ調整	。内外面とも様	黄ナデ調整	。内外面とも杭	黄ナデ調整	。内外面と	こも横ナ	デ調整
体	形文	態様	は、突出して 稜をなす。ヲ 較的平らでは	Tやや鈍い E井部は比 ほとんどへ	た天井部は、 にへう削りさ が、焼ひずみ 心部が少し	てやや鈍い L味をもっ ていねい されている なにより中	は、突出して をなす。天5 をもち34ほど されている。	や鈍い稜 中部は丸味 ごへラ削り	は、突出 なす。ま	さして鋭 Lい天井 NCへラ Nを不定	い稜を 部は、 削りさ 方向に
部	整	形	。ヘラ削り及ひ ナデ調整。 。ヘラ削り方向 まわり。 。仕上げナデに	可は、時計		冬。	<ul><li>へラ削り以外は横ナデ調整</li><li>へラ削り方に計まわり。</li></ul>	<b>~</b>	は横ナラ	デ調整。 ) 方向は	
底		部									
色		調	。淡灰色	A CONTRACTOR OF THE CONTRACTOR	。淡青灰色		。暗灰色		。暗灰色		CORTAGORIA (COLOR)
胎		土	。精良ながらや	や粗砂含	。精良であるが を含	がやや粗砂	。精良ながら)	組砂含	。精良		
	質		。やや軟質		。堅緻		。堅緻		。堅緻		
備		考							。天井部	と白斑ア	IJ

	пп		第23図	_		e	63	7		8
土.	器	No.	121	5	121	6	121	1	121	0
摘要		類	蓋		蓋		蓋		蓋	
法 量 (cm)	口縁腹	径高径径	14.8 (反転) 7.6		13.8 (反転) 4.3	)	14.4 (反転 4.4	)	14.8 4.0	
出	土地	X	F-7-E •	F	A-6-G·I	• J • K	A-6-G·	. J • K	$A-6-G \cdot 1$	• J • K
口頸	文 文	態様	。口縁部はやや がら外へひら 下端は丸く、 ぶい凹線を一 す。	く。口縁 内面にに	下方にひろか	ぶる。口縁 sさめられ oずかに凹	ら外下方にの 縁下端 は丸	)びる。口	るやかにひる	がり口縁 っさめる。 fiに、にぶ
部	整	形	。内外面とも様	黄ナデ調整	。内外面とも様	黄ナデ調整	。内外面とも	黄ナデ整整	。内外面とも杭	黄ナデ調整
体	形文	態様		がつく天井 )境界はに ざる。天井 ,ちほとん	くらみがなく	□線をめぐ 邶は余りふ く、¾弱粗	は、あいまい めぐらす。 りふくらみ	ハな凹線を 天井部は余 がなく <b>、¾</b>	<ul><li>は認められる</li><li>部は余りふく、口縁部</li></ul>	ない。天井 くらみがな まで粗くへ
沿	整	形	。ヘラ削り及び ナデ調整。 。ヘラ削り方向 わり。 。仕上げナデリ	句は時計ま	は横ナデ調 。ヘラ削り方 計まわり。	整。 句は、逆時		向は、逆時	<ul><li>内面は横ナ</li><li>へう削り方 計まわり。</li><li>仕上げナデ</li></ul>	句は、逆時
底		部								
色		調	。淡灰色		。淡灰色		。暗灰色		。淡灰色	
胎		土	。精良ながられ	组砂含	。精良ながら)	粗砂含	・精良ながら	 粗砂含	。精良ながら	 粗砂含
	質				。堅緻		。堅緻		。堅緻	
備		考	。やや大型品、	である。	。天井部に白	斑アリ	。内面に白斑 焼けひずみ		。焼けひずみ	が著しい

土	器	No.	121	9	121	10	121	11	121	12
摘要		種類	藍		壺		蓋		杯	
法 量 (cm)	器腹	縁 径 高 径 径	9.2		13.2 1.8 (現存信	直)	17.6 (反転) 1.3 (現存)		9.7 3.9 (現存	值)
出 .	土±	也 区	A-6-G · I	• J • K	A-6-G · I	• J • K	A-6-G · I	• J • K	F-7-E.	F
П	形文	態様	かえりをもつ りは口端部よ し突出する。	が、かえ		0	。口縁部は、小 し内側にや・ る、外側に第	やふくれ	する。	語部は内傾
頸										
部	整	形	。内外面とも様	きょぎ調整	。内外面とも様	サデ調整	。内外面とも様	サデ調整	。内外面とも相	黄ナデ調整
体	形文	態様	みがつく。天 段高くふくら らみ部分をへ	ご井部は一 み、ふく		は不明瞭 部近くに	は段をなす。			L味を持っ 『は丸く仕
部	整	形	<ul><li>内面は横ナラ 上げナデは認い。</li><li>へう削り方向 計まわり。</li></ul>	思められな			。内外面とも様	貴へラ調整	。外面はへラ削 の方向は時間 ある。 。内面は、横っ	†まわりで
底		部								
色		調	。淡青灰色		。黒灰色		。灰白色		。青灰色	
胎		土	。精良		。精良であるか の砂粒を含む		。精良		。精良である7 砂を含む	が、やや粗
	質		。堅緻	R05. dda 14 da 1			。堅緻		。堅緻	and the second s
備		考								

				40	63	1.4	第24図	4.5		1.0
土	器	No.	121	13	121	14	121	15	121	16
摘要	<u></u>	重類	杯		杯		杯		杯	
法量(紐)	口器腹底	径高径径	10.2 5.0		12.5 5.3		14.4 5.3		11.6 2.4 (現存	値)
出	土地	X	F-7-E•	F	F-7-E •	F	F-7-E •	F	A-6-G •	[ • J • K
口	形文	態様	。たちあがり端 し、ややあま つ。				。大型の杯であ あがりはやそ 低い。	うる。 たち • 内傾し、	。たちあがり! 低い。受部! 方へのびる。 丸くおさめ;	は水平に外 口端部は
頸										
部	整	形	。内外面とも様	黄ナデ調整	。内外面とも核	黄ナデ調整	。内外面とも村	黄ナデ 調整	V.	
体	形文	態様	。受部は水平で 丸味をもって 部は丸く仕」	ている体底	びる。体部に	<b>外上方にの</b> は扁平であ	<ul><li>受部は外上 部は丸味を る。体部は である。</li></ul>	もってい	であろう。	わめて扁平
部	整	形	。底部の約%を 削りし、方向 まわりである 。内面は横ナ	句は逆時計 る。	<ul><li>外面は、体原 約%を荒い し、方向は りである。</li><li>内面は横ナー</li></ul>	へ ラ 削り 逆時計まれ	し、方向は	逆時計まれ		
底		部								
色		調	。灰白色		。青灰色		。灰白色		。淡青灰色	
胎	,	土	。胎土はやや:	キメが粗い	、精良である。 砂を含む。	が、やや米	1。精良である 砂を含む。	が、やや¥	阻。精良	
	質		。やや軟質で	ある。	。堅緻	NAMES OF THE PROPERTY OF THE P	。やや堅緻で	ある。	。堅緻	
備	and the second s	考					・底部にヘラり。	記号一本。	あ	

					63					
土	器	No.	121	17	121	18	121	19	121	20
摘要	₹	重類	杯		杯		` 杯		高	杯
法 量 (cm)	口器腹底	径高径径	14.0 3.3 (現存化	直)	15.4 3.2 (現存値	直)	14.8 3.1 (現存	值)	欠損のため 6.0 (現 8.4	
出	土 地	X	A-6-G·I	• J • K	A-6-G · I	• Ј • К	H-3-P		F — 7 — E	. • F
П	形文	態様	。たちあがりに やふくらみ い、端部は対 られている。	を持ち低			。たちあがりに 低い。 受部は水平に びる。			
部	整	形	。内外面とも様	黄ナデ調整	。内外面とも様	黄ナデ調整			欠損のため	)不明
体	形文	態様	。受部は水平に びる。体部に じであると思	は扁平な感		であろう	。体部はきわめ	って扁平で	部付近は直	<u>重立する</u> 脚端 すさめられて
部	整	形			。外面へラ削り				。ヘラ削り割	驅
底		部								
色		調	。灰白色		。青灰白色		。灰黄色		。暗灰色	
胎		土	。精良である。		。精良ながらや	や粗砂含	。精良ながら	や和砂含	。精良	
	質		。やや堅緻でと	<b>ある</b> 。					。堅緻	
備		考								

			63		63		63			
土	器	No.	121	21	121	22	121	23	121	24
摘要		類	無蓋高林	不	高 杯				र्द्र	Ē
法量(cm)	口 器 腹 底	径高径径	11.0 4.0 (現存信	直)	13.6 7.4 9.0		欠損のためる 9.8 (現存 9.2		13.2 (反 6.65(現 } 欠損のたる	存値)
出.	土地	区	H-3-P		A-6-G·I	• Ј•К	H-3-F	溝 [ 一1	A-6-G	• 1 • Ј • К
口	形文	態様	。口縁部は外上 る。	方にのび	。口縁部は外上 端部は丸くお		。口縁部は欠損 明。外反する 面に櫛描波り こす。	5頸部、外	反ぎみにP 口端部は、	やや長く外 内弯する。 丸くおさま 一条の凹線を
頸	整	形	。内外面とも様	(ナデ調整	。内外面とも様	サデ調整	。内外面とも杭	黄ナデ調整	。内外面とも	も横ナデ調整
部		and the second second second								
体	形	態	。体部は比較的	J浅い。	<ul><li>口縁部と体験</li><li>は、にぶいを</li><li>部はあまり務</li></ul>	きをもつ体				
	文	様	。凹線に区画さ 櫛描波状文を	ほどこす		ラ削り 子	。肩部に凹線を らし、その 状文をほどる	- 下に櫛描波		め不明
部	整	形	デ調整。 。内面は横ナテ	*調整。 ]は逆時計		) 以外は横 可は時計ま	。体部下半か は、ヘラ削	りされた後 、カキ目語		
底		部			。下方にのび、 をもちひろか 面とも横ナラ	ぶる。 内外		,	。欠損のた?	め不明
色		調	。淡灰色		。灰白色		。灰白色 。中核は紫黒	褐色を呈す	。淡青灰色	
胎		土	。精良ながらや	や粗砂含	。精良ながら巻	且砂含	。やや粗砂を1	 含	。精良	
	質		。堅緻						。やや軟質	
備		考	。内面に白斑な	5 9			。内面に自然 認められる。			
Vessivendendendendenden						***************************************				,

					63		63			
土	器	No.	121	25	121	26	122	27	122	28
摘要		種類	壺 (底部)		器台		変		<b>河</b>	
法量		禄 高 径	欠損のため不明		欠損のため不明 10.1 (現存値)		25.3 (反転) 5.6 (現存値)		22.0 (反転) 3.6 (現存値)	
(cm)	底	径径	9.3 (推定)	)	欠損のため不	明	} 欠損のため不明		} 欠損のため不明	
出 .	土坦	也 区	A-6-G·I	• J • K	1		F-7-E	F FI-N	$A-6-G \cdot I \cdot J \cdot K$	
П	形	態					1	は、口端	広がり、丸。	N方へやや
	文	様							れている。	
頸		1.34	欠損のため不	明	欠損のため不	明				
部	整	形					。内外面とも入念な横ナ デ調整		。内外面とも横ナデ調整	
体	形文	態様			<ul><li>3段3方向に</li><li>る、あまり高</li><li>で、上段の透</li><li>形、中・下段</li><li>三角形で面ど</li></ul>	くない脚 しは長方 の透しは				
凇	整	形	欠損のため不	明	いる。 。外面にはやや 描波状文がほ ている。 。内面は、横ナ	どこされ		<b>以</b>	欠損のためる	不明
底	ı	部	。糸切り底であ 。底部中央に、 穿った穴が認	焼成後に			・欠損のためる	下明	。欠損のため	不明
色		調	。灰白色		。灰白色		。暗灰色		。淡青灰色	
胎	***************************************	土	。精良		。精良		。精良		。精良	999867566
AND	質		。堅緻		。堅緻		。堅緻		。堅緻	
備		考	。焼き台か							

						0.0		0.4	63	90	
土	器	No.	122	29	122	30	122	31	122	32	
摘要	<u></u>	重類	魙		死		甕		蹇		
法量	口器腹	径高径	21.3 (反転) 4.7 (現存を 入損のためる	值)	18.4 (反転) 4.4 (現存化 大損のため不	直)	22.0 (反転) 3.6 (現存値) 入損のため不明		58.9 (反転) 7.3 (現存値) 欠損のため不明		
(cm)	底	径	)		J		)		)		
出	土地	X			$H-3-B \cdot C$ $J \cdot K \cdot M \cdot N$				1		
П	形	態	。口頸部は、 し、口端部に り返し肥厚す	は外側に折	。短く外反する 端部で外側に 線を一条めく	肥厚し凹		方へやや	によって三分 れた間に、 どこす。口質	をに区画さ 対状文をほ 端部は、外	
wri	文	様							側にやや面をくおさめられ		
頸											
部	整	形	。内外面とも様	黄ナデ調整	。頸部外面によ どこし内外面 デ調整してい	īとも横ナ	。内外面とも植	サデ調整	・円外面とも和	黄ナデ調整	
体	形	態	・欠損のためるが、肩部のる	. ,							
r	文	様									
	整	形	。外面は、タ	力 之 日 字 徑	欠損のためる	不明	欠損のためる	下明	欠損のためる	不明	
部		NO	カキ目調整。	, 心円文を粗							
	ļ		くナデ消して		(	***************************************	<u> </u>	7,00	/	7.00	
底		部	・欠損のためる	<b>不明</b>	・欠損のためる	<b>仆</b> 期	・欠損のためる	<b>小</b> 明	。欠損のため	小明	
色		調	。青灰色		。灰白色		。青灰色	Annual Control of the	。暗灰色		
胎		土	。精良		。精良		。精良		。精良		
	質		。堅緻		。やや軟質		。堅緻		。堅緻		
備		考					。口縁内面に 白斑あり	自然釉及で	ys.		

土	器	No.	100	33	63	34		and the same of th		
		種	122 甕		122 <b>甕</b>			1		
摘要 法	口縁器	 径 高	30.9 (反転)							
量 (cm)	腹底	径径	欠損のため不		48.6 欠損のため不					And deliminary or
出:	土 地	X	A-6-G·I	• J • K	H-3-O-8	, P-23				
	形	態	は外側に折り 肥厚する。口	返しやや  端部上面	ずかにのび稜	上下にわ				
頸	文	様	に、にぶい凹 内側につまる た立ち上りを 。口頸部外面に かな波状文を	、上げられ さもつ。 こ、ゆるや	。端面に、ゆる めぐっている					
部	整	形			。口頸部外面は 整、内面は植					
体	形	態			。最大腹径は、 方にあり、や 部をもつと思	や長い胴				
	文	様	欠損のためる	「明						
部	整	形		,,	。外面はタタキ キ目調整	一目文後カ				
底		部	・欠損のためる	<b>下明</b>	・欠損のためる	、明				
色		調	。暗灰色		。青灰色			STATE OF THE STATE		
胎		土	   。精良であるが   砂含	ぶ、やや粗	l。精良				1	
	質		。堅緻		。堅緻					
備		考								
		M. Th. Advances in particular in the contract of the contract				MONEY CONTRACTOR CONTR				

### 第4節 石 器

区

石器・土製品 小川水路・F-7-E、 F地区・H-5-I、 M地区・I-3-B、 F、G、H地区・H-3-J、K、M、N、O、P地区・H-3-B、C、F、G、H地区・F-4-N・G-4-B地区・A-6-F、G、I、J、K地 今回報告する石器・土製品は、小川水路地区、F-7-E・F地区、H-5-I・M地区、I-3-B・F・G・H地区、H-3-J・K・M・N・O・P地区、H-3-B・C・F・G・H地区、F-4-N・G-4-B地区、A-6-F・G・I・J・K地区の合計8地区より出土した遺物である。個々の遺物についての詳細は、石器・土製品観察表と図版(123~125)を参照されたい。

。石鏃は、平基無茎式( $1 \cdot 2$ )・凹基無茎式(3)・円基無茎式( $5 \cdot 8$ )・凸基有茎式( $6 \cdot 7 \cdot 9 \cdot 10 \cdot 11$ )が出土しており、 凸基有茎式が大形の傾向を示している。遺構に伴なう遺物として は、(11)のF-4-N、G-4-B地区方形周溝墓北溝出土の石 鏃が唯一のものである。

。磨製石剣( $16 \cdot 17$ ) 2点の内(16)は、柄部に桜の樹皮などを巻きつけた痕を残している。本来は、大阪府恩智遺跡出土の打製石剣のように樹皮を巻きつけていたのであろう。(17)は、A-6-K地区で検出された第1号方形周溝墓南溝より出土したもので、伴出した土器は唐古第 $\blacksquare$ 様式である。

。石斧(26・34)は、ともにF-4-N地区で検出された方形周溝 墓北溝から出土しており、伴出土器は唐古第■様式から第Ⅳ様式で ある。

。自然石( $49 \cdot 50$ )のうち、(49)は部分的に火を受けた痕跡があり何か火を使う作業工程に使用されたものであろうか。(50)は $H-5-I \cdot M$ 地区A-10で検出された壺棺付近より出土しており、壺棺に対する墓標的役割の可能性が考えられる。

土錘(35・36・37・38・39・40)は、(41)を除いて全て小川水路採集遺物であるので、時期を決めがたい。(37・38・39・40)のうち、(37)と(39)・(38)と(40)が同質であり同時製作と考えられる。この4個について共通に見られる特徴は、一方の小口に整った面を持っていることである。この事から棒状の工具に粘土を巻き付け一方の小口を水平面にあて整えた後、適当な大きさでもぎ取って製作されたと考えられる。他方の小口が不整形であるのはこのためで、量産には適した方法であったと考えられる。

以上が石器・土製品の大略である。今回石器の出土量が少ないのは、各々の調査地区において弥生時代前期・中期の住居などの遺構がほとんどなかったからであろう。

- 注 1 今回の報告に際しては、剝 片等の遺物は除外している。
  - 2 考古学雑誌第63巻第2号 日本考古学会 S52年9月 図版Ⅱ恩智遺跡出土の木文・ 打製石剣 P81~84恩智遺 跡出土の木文・打製石剣に ついて 瓜生堂遺跡調査会

# 石器・土製品観察表

	工农吅毗宗衣		
図版番号	出 土 地 点	長さ 法 幅 ( <b>cm</b> ) 厚 (二)現存値	備考
1	F — 7 — E ・ F 包含層	$\begin{array}{c c} 1.6 \\ (\underline{1.2}) \\ 0.2 \end{array}$	打製石鏃(平基無茎式) 一逆刺を欠損 断面は扁平な菱形
2	F — 7 — E ・ F 包含層	$ \begin{array}{c c} (1.4) \\ 1.5 \\ 0.2 \end{array} $	打製石鏃(平基無茎式) 先端部を欠損 断面は扁平な菱形
3	F — 7 — E • F 包含層	$ \begin{array}{c c} (\overline{1.4}) \\ 1.4 \\ 0.3 \end{array} $	打製石鏃(凹基無茎式) 先端部を欠損 断面は扁平な三角形
4	F-7-E・F 溝 I - S	(2.2) (1.5) (0.7)	打製石鏃 基部を欠損。断面は菱形
5	F — 7 — E • F 包含層	$ \begin{array}{c c} 2.9 \\ 1.6 \\ 0.6 \end{array} $	打製石鏃(円基無茎式) 断面は菱形
6	F − 4 − N 、G − 4 − B 包含層	$\begin{pmatrix} 4.0 \\ (\underline{1.7}) \\ 0.4 \end{pmatrix}$	打製石鏃(凸基有茎式) 一側辺を欠損 断面は菱形
7	F — 7 — E ・ F 包含層	4.3 1.1 0.5	打製石鏃(凸基有茎式) 断面は扁平な菱形
8	A-6-F・G・I・J・K 包含層	4.3 1.6 0.4	打製石鏃(円基無茎式) 先端部を欠損 断面は極端に薄い
9	F − 4 − N 、G − 4 − B 包含層	$ \begin{array}{c c} 4.5 \\ 2.1 \\ 0.7 \end{array} $	打製石鏃(凸基有茎式) 断面は菱形
10	F−4−N、G−4−B 包含層	4.8 1.8 0.6	打製石鏃(凸基有茎式) 断面は菱形
11	F-4-N 方形周溝墓北溝	4.7 2.4 0.6	打製石鏃(凸基有茎式) 先端部は欠損 断面は扁平な菱形
12	F-4-N、G-4-B 包含層	$ \begin{array}{c c} (2.4) \\ 3.5 \\ 1.3 \end{array} $	打製石槍 中央部破片で断面は菱形
13	F-4-N、G-4-B 包含層	4.1 1.1 0.5	打製石錐。最大幅は頭部付近にあり、断面は三角形 錐部に使用痕が見られる。
14	F-4-N、G-4-B 包含層	$\begin{array}{ c c } \hline (4.0) \\ 1.5 \\ 0.6 \\ \hline \end{array}$	打製石錐。頭部と錐部に破損がある。 断面は楕円形で最大幅が中央部にある。
15	F−4−N、G−4−B 包含層	$egin{array}{c} 9.9 \\ 3.4 \\ 1.5 \end{array}$	打製石器、裏面に自然面を残す。表面の風化がひどく縄文期の遺物ではないかと考えられる。
16	71年度 小川水路採集	$ \begin{array}{c c} (10.4) \\ 3.2 \\ 0.7 \end{array} $	磨製石剣。全面に研磨痕が見られる。先端部は欠損。柄部には刃 がなく面取りされ、桜の樹皮などを巻きつけた痕を残す。

図版番号	出土地点	長さ 法 量 (cm) 厚 ①現存値	備考
17	A-6-K 第1号方形周溝墓 南溝(西スミ)	$ \begin{array}{c} 11.5 \\ 2.4 \\ 0.7 \end{array} $	磨製石剣。刃部に一部破損がある。研磨痕が全面に見られる。
18	F — 4 — N 方形周溝墓西溝	$ \begin{array}{c} (\underline{6.8}) \\ (\underline{1.4}) \\ (\underline{0.6}) \end{array} $	磨製石器。破損石器に再加工を施す段階のものであろう。石包丁 の刃部か。
19	A-6-F・G・I・J・K 包含層	$ \begin{array}{c} (\underline{6.7}) \\ (\underline{1.8}) \\ (\underline{0.7}) \end{array} $	磨製石器。破損石器に再加工を施す段階のものであろう。刃部は 両刃である。全体的に研磨痕が見られる。
20	F-4-N、G-4-B 包含層	$\begin{array}{c} (\underline{4.5}) \\ (\underline{2.7}) \\ (\underline{0.6}) \end{array}$	磨製刃器の破損石器の再加工であろう。 片刃
21	F-4-N、G-4-B 包含層	$ \begin{array}{c c} (\underline{4.8}) \\ (\underline{3.0}) \\ (\underline{0.7}) \end{array} $	磨製刃器の破損石器の再加工であろう。 両刃で刃縁に使用痕あり。
22	F-4-N、G-4-B 包含層	$\begin{pmatrix} (3.5) \\ (3.4) \\ (1.2) \end{pmatrix}$	扁平片刃石斧。刃面を破損している。
23	F-4-N、G-4-B 包含層	4.8 3.4 1.2	扁平片刃石斧。刃先に使用痕がみられる。
24	F — 7 — E • F 包含層	6.4 3.4 2.2	磨製石器。形態的特徴より男性性器石器か。頭部(端部)に磨滅 痕があり穿孔具の可能性もある。
25	F-4-N、G-4-B 包含層	$ \begin{array}{c c} (\underline{7.6}) \\ (\underline{8.1}) \\ (0.7) \end{array} $	磨製石器。大型石包丁の破片か。一部に片刃の刃部がみられる。 再加工を施す段階のものであろう。
26	F-4-N 方形周溝墓北溝	(5.6) $(2.4)$ $(2.1)$	柱状片刃石斧。基部破損のために抉りの有無不明。 刃面の一側面に2ヶ所の打撃痕がみられる。 断面は台形である。
27	F-4-N、G-4-B 第 I 大形土拡	$ \begin{pmatrix} 9.6 \\ 2.9 \\ 0.9 \end{pmatrix} $	石包丁(直線刃半月形態)。片刃。刃面に対して彎曲している。 全面に研磨痕が残存し、刃部に研ぎ直しが見られる。背面、刃線 に条痕が見られる。端部に打撃痕がある。
28	F-4-N、G-4-B 包含層	(7.0) $(3.6)$ $(0.7)$	石包丁(直線刃半月形態)。片刃。背面は平坦で光沢を持つ。 刃部に一部研ぎ直しが見られる。未紐孔が一ケ所ある。
29	A — 6 — F ・ G ・ I ・ J ・ K 包含層	$ \begin{array}{c c} (10.6) \\ (5.2) \\ (0.7) \end{array} $	石包丁(杏仁形態)。全体的に剝離がひどい。 両刃、背面は平坦で光沢を持つ。
30	A-6-F・G・I・J・K 包含層	(10.2) (5.7) (0.9)	石包丁(杏仁形態)。両刃。全体的に研磨痕が見られる。紐孔は 4ヶ所で1ヶ所が未紐孔である。
31	F-7-E・F 包含層	$ \begin{array}{c c} (10.2) \\ (5.7) \\ (0.9) \end{array} $	磨製石器。大型石包丁の破片か。一部に片刃の刃部 を残している。破片の再加工を施す段階か。 研磨痕と剝離痕が見られる。
32	H-3-J·K·M·N·O·P 整地層	(8.3) $5.0$ $3.2$	大型蛤刃石斧。未製品で研磨段階で表面の刃面を破損している。 断面は楕円形をしている。
33	A-6-K 第1号方形周溝墓溝中	$ \begin{array}{c} (\underline{10.8}) \\ (\underline{7.0}) \\ (\underline{4.1}) \end{array} $	大型蛤刃石斧。刃部を破損している。 断面は楕円形して、基端に対して細くなる。

図版番号	出 土 地 点	長さ 法量 (cm) 厚 (_)現存値	備考
34	F-4-N 方形周溝墓北溝	$ \begin{array}{c} (8.0) \\ (3.6) \\ (3.5) \end{array} $	大型蛤刃石斧。4分の1破損 断面は扁平な楕円形である。断面に研磨痕を残す。
35	71年度 小川水路採集	$ \begin{pmatrix} 2.2 \\ (1.1) \\ (1.2) \end{pmatrix} $	土錘。胎土は少量の砂粒 含む。 焼成は不良。色調は橙色、36と同質
36	71年度 小川水路採集	$egin{array}{c c} 3.2 \\ 1.2 \\ 1.2 \\ \end{array}$	土錘。胎土は少量の砂粒を含む。焼成は不良 色調は橙色、35と同質。重量5.0 <i>g</i>
37	71年度 小川水路採集	4.7 4.0 1.3	土錘。胎土・焼成は良好。色調は橙色 $39$ と同質。重量 $65.5$ $g$
38	71年度 小川水路採集	$4.5 \\ 5.1 \\ 1.3$	土錘。胎土、焼成は良好。色調は乳白色 $40$ と同質。重量 $90.1$ $g$
39	71年度 小川水路採集	4.1 4.1 1.0	土錘。胎土、焼成は良好。色調は橙色 37と同質。重量61.7 <i>g</i>
40	71年度 小川水路採集	3.9 4.9 1.3	土錘。胎土、焼成は良好。色調は乳白色 $38$ と同質。重量 $66.5$ $g$
41	H-3-G 井戸4号	6.1 2.9 0.9	土錘。胎土、焼成は良好。色調は乳白色 表面に線刻がある。重量 $61.49$
42	F — 7 — E ・ F 包含層	$egin{array}{c} 4.2 \ 3.9 \ 0.9 \ \end{array}$	円板。胎土は少量の砂粒を含む、焼成は良好。色調は乳白色、土 器片の再利用で紡錘車を作る目的であろう。
43	F-4-N 東端土器群	5.6 4.9 0.8	円板。胎土、焼成は良好。色調は淡褐色で外面に煤の付着あり。 土器片の再利用で紡錘車を作る目的であろう。
44	F-4-N、G-4-B 第 I 大形土拡下層	$(\frac{5.5}{2.6})$ $0.8$	紡錘車。胎土、焼成は良好。色調は褐色 土器片の再利用
45	F-4-N、G-4-B 第 I 大形土拡	9.3 5.7 3.5	砥石。重量 201.8 <i>g</i>
46	F-4-N、G-4-B 包含層	8.0 4.9 2.4	砥石。重量 118.9 <i>9</i>
47	F−4−N、G−4−B 包含層	$6.5 \\ 4.7 \\ 1.9$	砥石。重量 81.0 <i>9</i>
48	F-4-N、G-4-B 第N土拡	16.6 $9.0$ $3.6$	砥石。重量 709.1 <i>9</i>
49	H-3-B・C・F・G・H 包含層	10.4 10.3 4.2	自然石。影の部分に火を受けた痕がある。
50	H-5-M A-10壺棺付近	14.8 10.6 5.8	自然石。一部に打撃痕あり、 壺棺に対する墓標石の可能性がある。

# 第5節 木 器

木製品

F-7-E • F地区

F-7-E・F地区においては、弥生時代~古墳時代の遺構より 木製品が出土している。

溝【一S、溝』より多量の自然木、加工木が出土しているが製名は、9点ある。沼地状落ち込みからは、腰掛形木製品 1点が単独で、溝【一Sからは、木槌1点、つちのこ1点が、溝【からは、竪杵2点、杭2点、有頭棒1点、異形木製品1点などがある。これらのうち腰掛形木製品は、唐古第 V様式併行の土器と伴出しており弥生時代後期であろう。木槌、つちのこ、竪杵、杭、有頭棒、異形木器は、弥生時代後期~古墳時代前期のものと考えられる。

腰掛形木製品(図版 126 — 1) 弥生時代の木製腰掛けには、尻受け台と脚とを一木から作ったものと、尻受け台に柄を穿って別木の脚を組み合わせたものの二種があり、本遺跡出土の腰掛形木製品は前者である。残存しているのは全体のほぼ半分で、尻受け台は縦33cm、横11.3cm、厚さ 3.5cmの長楕円形であり、脚の幅24cm、高さ8cm、厚さ4cmである。尻受け台の上面は長辺側約1cm、短辺側それぞれ 2.5cm残し、中央に向って四方からなだらかに刳っている。長辺側の中程に長さ4cmのくぼみがみられる。脚は尻受け台の下面より、角度110°とやや開きぎみに作り出されている。用材はコウヤマキである。

木槌 (きぬた) (図版 128 — 8) — 木作りで槌部は円筒形、槌部の一端より把り柄を造り出している。槌部は、全体が残存しており、残存長21cm、槌部長19cm、直径8.5cm、把り柄直径2.5cmとなっている。槌部の側面下方は、周囲を面取りしており、槌部中程は、使用により幅 4~7 cm摩滅し、くびれている。用材には、木心を有するユズリハの丸太材を使用している。

つちのこ(図版 128 — 9) 完形品である。全長16.5cm、丸太の中央部がくびれ、両側にふくらみをもつものであり、くびれ部直径3.7cm、ふくらみ部直径約7cmである。用材が枝分かれの部分にあたっているため、左右の大きさが多少異なる。この種の木製品は、民俗例によれば一名"つちのこ"と称され、こも・俵などを編む時に使用されるものである。

竪杵1 (図版 127 - 4) 搗部先端と握部から半分以上が欠損、 全体の約5分の2が残存しており、残存長49.5cm、搗部直径約8 cm で全体的にやや弯曲している。搗部の全側面に幅 1.5cmの面取りが なされており、非常に明瞭な加工痕がみられる。用材は、クヌギの 丸太材を使用している。

竪杵2(図版 127-5) 握部から半分が欠損している。残存長40cm、搗部最大直径 4.5cm、搗部先端は、丸くなっている。用材はシキミの割り材を使用しており、木目が荒く堅い。

杭(図版 127 — 6 • 7) 杭は 2 点出土しており、いずれも同じ 形状を呈しており、かなり荒い加工が施されている。しかも、その 加工痕は、非常にシャープなものである。

6 上方部が欠損。残存長48cm、直径6cmの木心を含むマッの丸太 材を用いている。上端より10cmは、樹皮を剝いだだけの自然面で加 工痕は見られない。それ以下38cmは下方に向って、次第に細くなる 様に削られており、下端近くは全側面に削り痕が見られる。

7 上方部と先端が欠損。直径約5cmのエゴノキの丸太材を用いている。上端より14.5cmは、樹皮を剝いだだけの自然面である。29.5 cm以下には(3)と同様の加工が施されている。

有頭棒(図版 126-3) 樹皮を剝いだモミの細い丸太に、くびれをいれ、頭を削り出した木製品である。残存長30cm、直径 4 cm、頭長 7 cm、頭の先端は、丸くなっている。えぐれ部、先端のみに加工がなされており、他は自然面である。使用用途不明である。

異形木器(図版 126 — 2) 長方形の板状の一長辺中央部を、半円形に挟ったものである。ほぼ完形品と思われる。全長23cm、幅 9 cm、厚さ 1.8cm、半円直径 7 cm、用材はクスノキである。使用用途不明である。

F—**4**—N、G—**4**— B地区 G-4-B地区、第【大形土拡とF-4-N-5地区、第】大形土拡より、自然木、加工木、木製品10点が出土しており、木製品の中には、6点の未製品も含まれている。第【大形土拡からは、又鋤1点、丸鍬未製品2点、朱塗り板2点、用途不明木製品1点、割り材3点が、又、第】大形土拡からは石斧の柄の未製品1点が単独で出土している。これらの木製品は、いずれも唐古第■様式新段階~第】V様式併行の土器と伴出していることから、弥生時代中期のものと考えられる。

丸鍬(図版 129 — 12・13) 柄穴の穿たれていない丸塚の未成品 2点である。2点とも同形で陣笠状を呈しており中央が盛り上がっ ている。材質はいずれもカシである。

12 一部欠損、全表面の3分の1程度は、腐蝕がひどく表面が剝離 している。縦26.5cm、横29.5cm、中央の厚さ2.5cm、刃部の厚さ0.5 cmである。加工の状態からみると、ほとんど完成品にちかくあと柄 孔を穿つのみと思われる。

13 一部欠損、表面はほとんど腐蝕、剝離している。縦 $25\,\mathrm{cm}$ 、横 $28.5\,\mathrm{cm}$ 、中央の厚さ  $3.5\,\mathrm{cm}$ 、刃部の厚さは不明である。加工状態は確認できないが(1)と同じと考えられる。これらの製品は、 $1\,\mathrm{d}$  所に重って出土している状況からみて、同時に製作され、一緒に保存されていたのではないだろうか。

又鋤(図版 128 —10) 二本歯の着柄鋤の鋤身のみである。着柄部は多少欠損し、残存長42.8cm、着柄部残存長 7.8cm、幅 4 cm、鋤身の長さは、 3.5cmで、二本の歯は、長さ27.3cm、幅 3.5cmと長さ26.5cm、幅3.1cmで、間隔は、約5 cm、厚さは、上方 2 cm、先端0.5 cmと序々に薄くなっている。鋤身の断面は、それぞれかまぼこ形を呈している。二本の歯の中央には、わずかに稜がみられる。先端には使用による摩滅痕がみられる。又、着柄部にも着柄の際についたと思われる摩滅痕がみられる。

朱塗板(図版 129 —14・15) 全体に小さな穴を数列穿ち、表面に朱を塗布した薄い偏平な板状木製品である。本遺跡からは、2点出土しており同じ形状を呈している。いずれも周囲が欠損しており全体の形態は不明である。2点は、形状及び材質から同種の製品に属するものと思われる。材質は、いずれもモミであり、ヒビ割れがひどい。

14 残存長30cm、残存幅 3.5cm、厚さ 0.8cm、全面に直径0.15cm~0.2cmの穴が0.7cm~1.2cmの間隔に 8列穿たれている。列の間隔は、3cm~5cmである。穴は全部で29確認でき、そのうち、3カ所の穴の中より、長さ 0.8cm、直径0.12cmの小さな木製釘が見出された。釘の表面にも朱が付着している。

15 残存長31.7cm、残存幅 4.6cm、厚さ 0.6cmである。全面に直径 0.15cm $\sim 0.2$ cmの穴が0.8cm $\sim 1.0$ cm間隔に 6 列穿たれており列の間隔は、4cm $\sim 5$  cmである。穴は全部30確認でき、いずれも貫通している。

以上 2点の使用用途は不明であるが表面に朱が塗布されていることより、一般の生活用器ではなく、特殊な用途をもつ製品であると 思われる。

#### [参考]

本製品と同形のものが、東大阪市瓜生堂遺跡、山賀遺跡から、

又、上記のものよりやや形状の明らかなものが、大阪市長原遺跡より出土している。

用途不明木製品(図版 129 —16) 一部欠損しているが、全体の形状より弓型を呈す板状加工木である。残存長55cm、中央幅7.2cm、両面の曲線側に幅 1.2cm~8 cmに厚さ 1.8cmの線が削り出されている。他は、厚さ約 0.9cmで全体的に偏平であり、直線側は平面に直角に切断されている。用材は、カシで材質は木目が荒く、堅く強いが弾力性に豊んでいる。使用用途は不明である。

石斧の柄(図版 128-11) 石斧着装部が未完成な柄である。全長43.3cm、技分れを利用し技の把り部と幹の活用部から成っている。把り部長38cm、直径2.5cm、活用部長21cm、直径5.3cm、把り部と活用部は $60^\circ$ を成している。把り部は、手元がわずかに弯曲しているが、ほぼ直である。所々に樹皮を剝ぐ際の刃物痕が見られる。活用部は、幹を縦2分の1 に割裂き断面がほぼ丸くなる様に整えたものであり、幅2.5cm $\sim 1$  cmの面取りが見られる。用材は、石斧の柄として多くに用いられているサカキではないかと考えていたが、解剖観察の結果、モミであった。石斧の柄の用材については、今後検討してゆきたい。

板状原材(図版 131 —19・20・21) 同種のもの3点が同一地点より出土した。出土状態、形状より、それらは鋤又は、鍬を作るための用材であると考えられる。カシの原木を一定の長さに切断した後、断面が楔形になる様に割り裂き、製品に近い大きさに製材し保存したものであろう。これら3点のうち2点はほぼ同じ大きさ、他の1点は幅がほぼ同じであるが、長さが約2分の1となっている。これより一定の寸法基準があったことも考えられる。又、加工状態、断面より割材からの加工方法、加工段階をも知る事ができる。そこで、以上の事を明示するために3点の板状原材についての事項を第10表にあらわしてみた。

H-3-G地区

H-3-G地区においては、古墳時代の遺構より木製品が出土している。溝 I-3 (大溝) より鋤 2 点が出土しており、これら 2 点の鋤はいずれも弥生式土器から土師器への過渡期の土器と伴出していることから、古墳時代前期の遺物と考えられる。

注 上記の木製品出土状況について詳しくは、遺構説明を参照された い。

**鋤1** (図版 130 -17) 着柄鋤の鋤身である。上方部は欠損し、

鋤身は先端のやや狭まった方形を呈し、上方に着柄のため鋤身の中央部に、長方形の孔が穿たれている。全体的に薄く、断面は偏平である。残存長45cm、上方幅推定約19cm、先端幅14cm、厚さは、上方1.5cm~下方0.7cmと先端にゆくに従って薄くなっている。孔は、縦8cm、横3cmであり切り口は、非常に鋭い。用材にはカシ類を用いている。

動2(図版 130 -18) 動1と同一地点にて出土した。長柄鋤の柄で先端欠損、柄の着け根がわずかに残存している。動身は長方形と推定される。厚味は下方に序々に薄くなっており、断面は上方がかまばこ状、下方は偏平である。残存長36.9cm、同幅13.3cm、柄残存長約1.7cm、幅3cm。用材には、カシを用いている。

木製品については、その製作にあたった工具にも目を向ける必要がある。本遺跡出土の木製品は、弥生時代後期~古墳時代前期のものが多い。その加工状態や調整痕などは、金属器の使用を如実に示していると思われる。特に、木槌、杭、鋤にその様子が顕著にあらわれている。

No.		21	20	19		
法量	長 さ 幅 最大厚 分割角度	82.6 <i>cm</i> 27.6 <i>cm</i> 9.0 <i>cm</i> 30°	75.8cm 24.5cm 6.7cm 40°	42.3cm 23.2cm 5.7cm 30°		
製材状態	横断面	D C B	D C B	D C B		
I	A 面	正目面 刃物痕なし	正目面 刃物痕なし	正目面 刃物痕なし		
F	3 面	正目面 刃物痕なし	正目面 刃物痕なし	正目面 刃物痕なし		
(	0 面	木目にそって刃物痕	木目にそって刃物痕	木目にそって刃物痕		
I	) 面	木目に直角な刃物痕が 平行にならぶ	木目に直角な刃物痕	木目にそって刃物痕		
7	大 口	① 両面より斜め切断 ① 垂直切断	① 両面より斜め切断 ① 両面より斜め切断	① 両面より斜め切断 ⑤ 垂直切断		
佢	吏用用途	鋤又は鍬	鋤又は鍬	鍬又は小型鋤		

第10表 板状原材木どり模式図及び考察表

木器の材質鑑定

小結

古代遺跡出土木器の材質を知ることは、木製品の形態、用途、加工と同様に重要であり、又、自然木については、当時の自然環境を

知る上に必要事項とされている。しかし、材質鑑定にあたって、自然木はともかく木製品については、遺物保護の立場から多量の切断面を必要とする顕微鏡観察は躊躇され、ほとんど裸眼観察のみで済まされていた。しかし、古代の遺物に関する限りでは、裸眼による材質鑑定はきわめて不明確なものであり、断定的資料としては適当ではないと考える。

ところが今回、嶋倉己三郎氏により、少量の試料で科学的観察を していただける機会を得、本遺跡出土木器の鑑定を依頼した。それ について、次の様な結果を得た。なお自然木については、多量のた め鑑定終了までには至っていないので、結果は次の機会に譲ること にする。

#### 茨木市東奈良遺跡出土材調查報告

嶋倉已三郎

茨木市東奈良遺跡から出土した試料21点につき、切片を作って解 剖学的に調べた結果、次の樹種を識別した。

カシ Quercus (Cyclobalanopsis) sp. (第25・26図 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9.)

試料: 1丸鍬【(図版129-12) 2丸鍬【(図版129-13) 3 鋤【(図版130-17) 4 鋤【(図版130-18) 5 弓形木製品(図破126-16) 6 板状原材【(図版128-19) 7 板状原材】(図版131-20) 8 板状原材】(図版131-21) 9 つちのこ(図版128-9)

放射孔材で、巾の広い放射組織がある。近畿地方のカシ類には、 アラカシ、アカガシ、イチイガシ、ウラジロガシ、ウバメガシ、シ ラカシ、ツクバネガシなどがある。材もそれぞれ多少の違いを示す といわれるが、一般に区別がむずかしいので、ここでは一応カシ類 とした。そのうちでもアラカシなどによく似ている。

カシ材は硬く強靱なので、古くから農具、器具の柄、銃、家具、 車輌材などに用いられてきた。

モミ Ables firma Sied. et Zucc マツ科 (第26・27図10. 11.12.13)

試料:10朱塗板 【 (図版129-14) 11朱塗板 【 (図版129-15) 12石斧の柄 (図版128-11) 13有頭棒 (図版126-3)

放射組織の水平および切線壁に肥厚が認められ、放射壁の各分野には小さな半有線膜孔がある。

モミは広く本州に分布し、現在は建築・建具・家具材などに多く 用いられるほか、心材と辺材とであまり色調の差がなく、器具材と しても償用されている。

コウヤマキ Sciudopitys Verticillata Sied, et Zucc コウヤマキ科 (第25・29図14.21)

試料:14腰掛型木製(図版 126-1) 21F-4-N地区方形周 溝墓第 1 号木棺(図版84)

放射組織の各分野には大きな単紋孔がある。樹脂道や樹脂細胞はない。

現在コウヤマキは数も少なく、限られた分布をしているが、過去に於いては広く茂ったものである。近畿や東海地方から出土した棺材は筆者の調査した限り(十数例)すべてコウヤマキであり、ここにも1例を加えたことになる。なお、コウヤマキはマキと誤称されている。

クヌギ Quercus (Lepidobalanus) acutissima Carr ブナ科 (第28図16)

試料:16竪杵 [ (図版127-4)

環孔材で春材部の導管は1-2環、巾の広い放射組織がある。アベマキにもやや似るが、クヌギに最も近い。コナラとは夏材部における導管の配列から区別できる。

クヌギは温帯の山野に分布し、材は現在、器具、家具、薪炭材と して**多**く用いられている。

シキミ Illicium religiosum Sieb, et Zucc シキミ科 (第28 図17)

試料:17竪杵 【(図版127-5)

散孔材で、導管は小さく、放射壁に階段状膜孔がある。

シキミは本邦の暖帯に分布し、枝葉を仏前に供える。材は肌目が やや密で、現在、施作・小器具などに用いられるという。杵材とし ては珍しい。

マツ Pinus (Diploxylon) sp マツ科 (第28図18)

試料:18杭1 (図版127-6)

放射仮導管に鋸歯状肥厚があり、二葉松類に属するが、アカマツ かクロマツかは構造上の区別がむずかしいので、ここでは単にマツ とした。

アカマツもクロマツもわが国に広く分布し、現在建築材・土木材

その他広く用いられている。

アサガラの類 Pterostyrax sp エゴノキ科 (第29図19)

試料:19杭 【(図版127-7)

散孔性であるが、導管はやや放射状に並ぶ。エゴノキにも似るが 導管の複合状況や放射組織の構造が多少異なる。試料が不十分で確 認できないのでかりにアサガラの類としておいた。

この属にはアサガラとオオバアサガラとあり、わが国の暖帯に分布し、材は器具材、呑口、マッチの軸木等に用いられるという。

クスノキ Cinnamomum camphora Sied クスノキ科 (第29 図20)

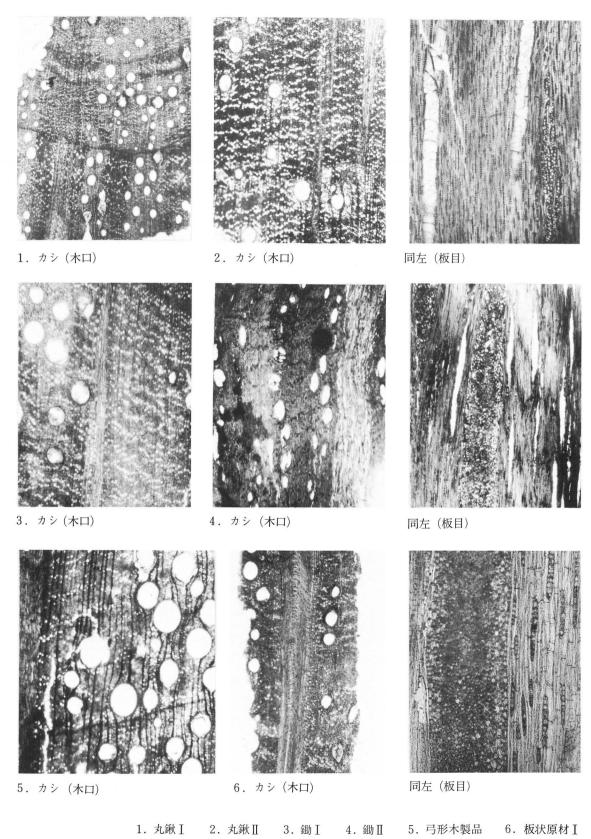
試料:20用途不明木器(図版126-1)

散孔材で導管はやや大きい。周囲状柔細胞が著しい。

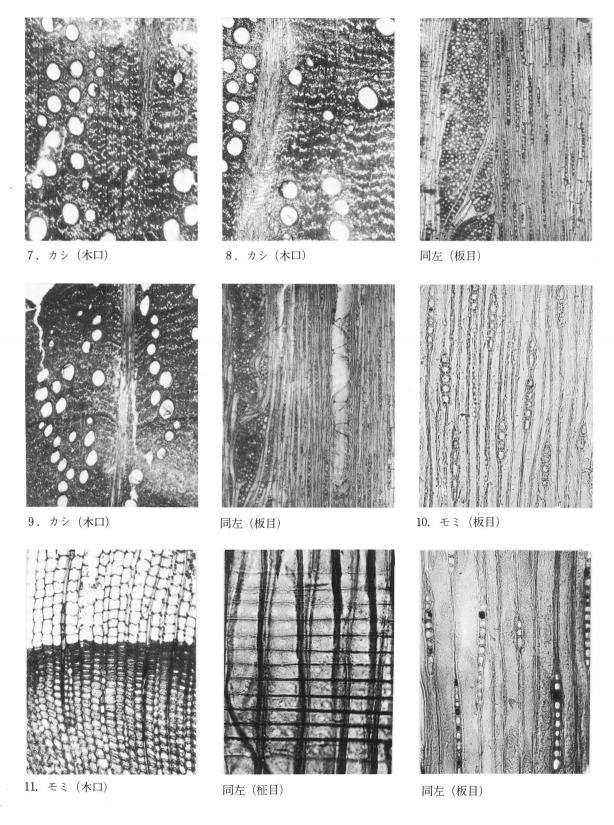
クスノキは本邦暖帯から中国・台湾に広く分布し、材は現在、建 材・器具・家具などに用いられているが、昔から彫刻にもよく使わ れてきた。

追加 木槌 (図版128-8) はユズリハ・又鋤 (図版128-10) はカシと考えられる。

12・15は適切な写真が撮れなかったので次回に委ねる。



第25図 木器材質鑑定顕微鏡写真



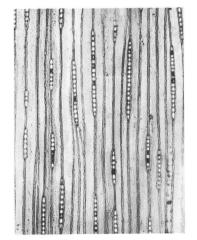
第26図 木器材質鑑定顕微鏡写真

8. 板状原材Ⅲ

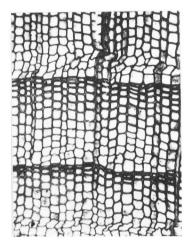
10. 朱ぬり板Ⅱ 9. つちのこ

7. 板状原材Ⅱ

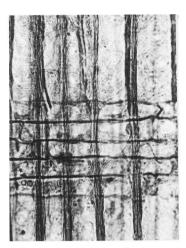
12. モミ (木口)



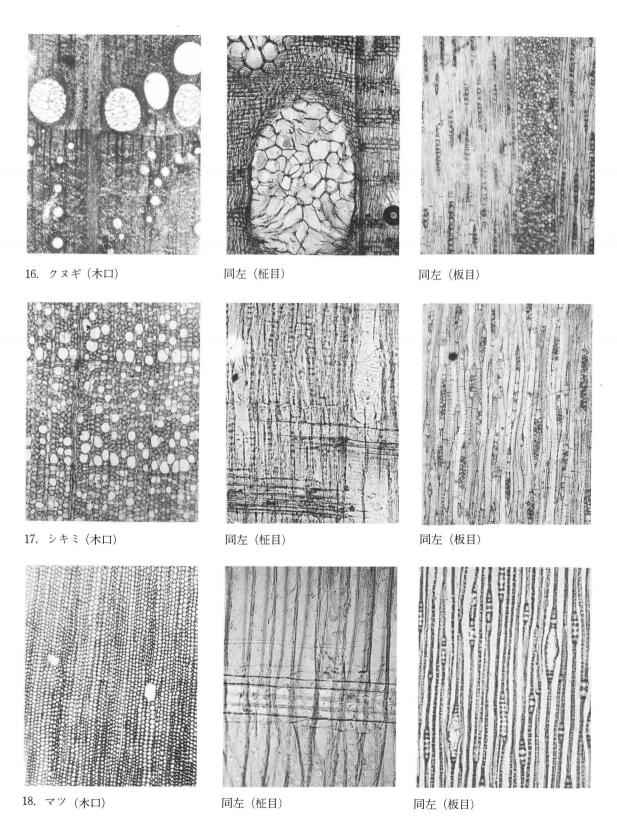
13. モミ (板目)



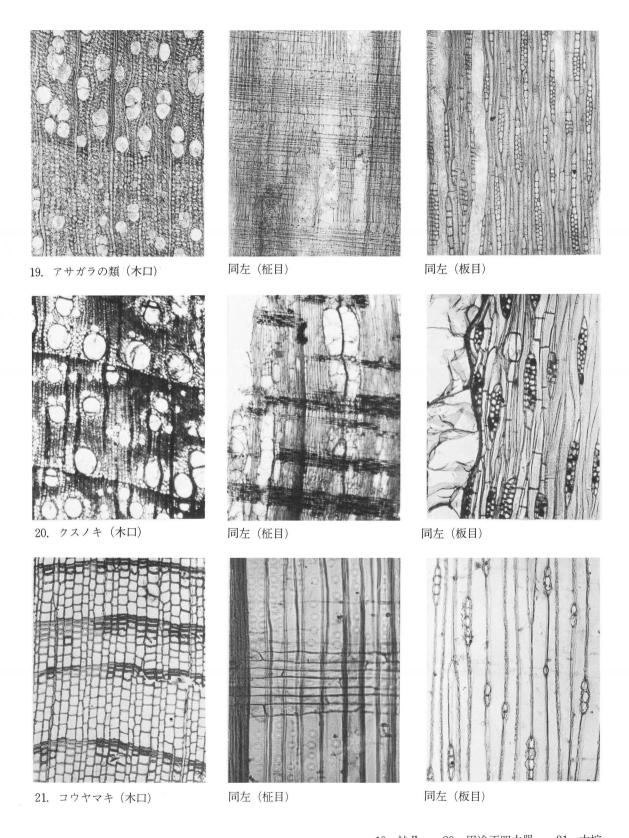
14. コウヤマキ (木口)



同左(板目)



16. 竪杵Ⅰ 17. 竪杵Ⅱ 18. 杭Ⅰ



19. 杭 Ⅱ 20. 用途不明木器 21. 木棺第29図 木器材質鑑定顕微鏡写真

### 第Ⅵ章

# 考察

F-4-N地区 方形周溝墓の供献土器 について F-4-N地区で発見された第1号方形周溝墓の、南溝、北溝、東第 $\mathbb{I}$ 溝からは、ほとんど破片となっているが、 $\mathbf{3}$ くの土器が出土した。

これらの土器は、方形周溝墓の外側からでなく、内側すなわち、 盛土され埋葬のおこなわれた内側から、溝内やさらにそれを越えて 溝外にまで流出し堆積したものであることが、出土状態から明らか である。埋葬毎に内側の盛土の肩に近い部分に、次々と並べられた 土器が、後に盛土の流出とともに溝の内外に堆積したものとみてま ちがいのないものと考えている。

各溝	器位置	種	壺	変点	鉢	高 杯	水差	器台	計
	溝	Ħ	37 (53.6)	16 (23.2)	3 (4.3)	9 (13.1)	4 (5.8)	0	69
南	溝	肩	8 (50.0)	4 (25.0)	3 (18.8)	1 (6.2)	0	0	16
溝	溝	外	19 (52.9)	6 (16.6)	8 (22.2)	3 (8.3)	0	0	36
( <del>11)</del>	計		64 (52.9)	26 (21.5)	14 (11.6)	13 (10.7)	4 (3.3)	0	121
東	溝	中	5 (31.3)	5 (31.3)	3 (18.7)	3 (18.7)	0	0	16
第 Ⅱ	溝	外	5 (38.5)	6 (46.1)	1 (7.7)	1 (7.7)	0	0	13
溝	<del>□</del>		10 (34.5)	11 (37.9)	4 (13.8)	4 (13.8)	0	0	29
北第日溝溝	溝内	·外	(30.8)	56 (39.2)	15 (10.5)	23 (16.1)	3 ( 2.0)	2 (1.4)	143
	溝総	計	118 (40.3)	93 (31.7)	33 (11.3)	40 (13.6)	7 ( 2.4)	2 ( 0.7)	293

(注) 北溝は、遺構編で記述したごとく、取り上げ時に別けていないため位置は不明。 第11表 各溝・供献土器集計表・( )内は百分率(%)

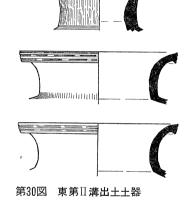
各々の溝から出土した土器の器種等については、第11表に示すとおりである。壺、甕、鉢、高杯はすべての溝に認められる他、南溝には水差し、北溝では器台が含まれている。時期的には唐古第 II 様式から第 IV 様式に含まれるものであるが、明確に分けることが困難なものも多く、今回は一括して取り扱った。

遺構からみると、北溝には拡張がみられ、また東第 I 溝は東溝が埋まった後、さらに東側に掘り直されたものであり、この方形周溝墓では最も新しい溝と言えるであろう。

内部主体としては、明らかに木棺であったことが判る2基の他に、5基の土拡が検出されている。土拡のうち底が平なものについては木棺であった可能性が強いものである。

合計7基の埋葬が行なわれていることから、溝中から出土した土器は、それぞれの埋葬に際して次々と供献されたものとみられるが、各々の埋葬に際しどの位置にこれらの土器が置かれたかは明らかにし得ない。ただ西溝及び東溝では土器が出土しなかったことから、埋葬に当ってあちこちばらばらに置くのではなく、南あるいは北溝の上方盛土上にその都度並べて置かれた可能性が強いものと考えられる。

各々の溝から出土した土器の内、南溝では壺が全体の½を占めるのに比べて、北溝では壺甕ともに約½となり壺が少ないのが目立つ。鉢、高杯は両溝ともにほぼ似た比率を占めるようである。ただこのような比率が出たと言っても、これらの土器が数回の埋葬に際して供献されたものである限り単純に考えることはできないわけであり、はたして埋葬の時期が新しくなるにつれて、壺が全体に占める割り合が減少するととらえ得るのかどうかについては、今後、より単純にとらえ得る資料の増加を待って比較検討を加えたいと考えている。



**WWW/SWGA** 

土器焼成実験から観た 黒斑

弥生時代から古墳時代前期の土器には、必ずといってよいほど、 黒い斑点、「黒斑」が付いている。弥生時代中期以降の明るい色調

#### |・黒斑への疑問

の土器には特に目立つものであるため、従来より黒斑の生じる原因 について種々論じられてきた。例えば、土器焼成時の火の回りが悪 かったために生じる。又は、焼成後冷え切る前に高熱の土器を取り 出し、木板等の上に載せて冷す間に木がくすぶることによって生じ るといった見解がいわれた。いずれも具体性を欠くものであるが、 (注) その後紫雲出遺跡の報告書の中において、弥生式土器の製作技術か ら観た黒斑の生じる原因について、『黒斑の黒色が、土器の表面ある いはそれに近い器壁のみに認められ、器壁深層では認められないこ とから、火の回りが悪くて生じるものではなく、焼成後に生じたも のとされた。』そして、その焼成後に生じる原因としては、多数の 土器を観察されて、『黒斑の位置関係から、焼成中の高温の土器を 取り出すために、木の棒・藁束・布等によって持ち上げることによ って、そのものがくすぶるために生じる。』と初めて具体的な論述 をされた。その後は、この見解が最も適切な意見とされ、黒斑につ いてはあまり触れられないようになった。しかし、依然この見解の みでは説明できない、黒斑の全くみられない土器、1ヵ所のみに付 く土器など、上記説明にあてはまらない所に付く黒斑が多くある。 今回この疑問点を1歩進め、佐原氏の見解、従来の意見等を参考と し、黒斑の生じる原因について「土器の焼成実験」を行って一つの 見解を考えて観た。以下黒斑の生じる原因について述べていくが、 焼成実験とはいっても、当時の焼成技術自体にも不明確な部分が多 く、また土器を焼いた跡も検出されていないため、現在考えられて いる当時の焼成方法を想定して行った。さらに、実験回数が少な く、多くのケースを想定して行っていないため不十分な所も多いこ とを付記する。今回の実験によって、一つの黒斑に関する見解が得 られたことと、当時の焼成方法の一端にもふれられたが、今後の研 究課題も残った。

Ⅱ・焼成実験に先立っ て黒斑の生じる原因の 想定 黒斑は、従来の見解でも明らかな様に、土器の焼成中及び焼成直 後に生じるものと考えられ、土器の製作段階に生じることは考え難 い点を前提として原因を5通り想定する。

#### 焼成中の原因

これまでのように焼成中の原因として火の回りが悪く温度が上が らないのではなく、焼成中に他のものとの接触による炭化現象、低 温化現象によるものと考えた。

①土器と地面の接触による場合。

- ②土器と木 (炭や燠を含む) の接触の場合。
- ③土器と土器との接触による場合。

次に焼成直後に生じる原因は、従来通りのものを考えた。

- ④焼成直後に土器を木等で挟んで取り出す場合。
- ③焼成直後に土器を取り出して、木の上に載せて冷やす場合。 以上の5通りを想定して焼成実験を行った。

また黒斑の性質を考えるために、種々ある黒斑にも注目した。黒斑は、土器表面の他の異物との炭化現象ではあるが、色調は真黒・黒色・灰色に近いもの、形も大形から小形、円形、楕円形、点のようなものまで種々ある。これらの相違がなぜ生じるかも今回の実験結果に期待した。

#### 焼成実験・Ⅰ

実験 I では、焼成中に生じる黒斑の実験を試みた(原因①~③の追求)

- 1 実験場所、周囲よりやや高く(10~20cm)なった台状の所で、凹 凸の著しい比較的やわらかい平面上で行なった。
- 2 実験土器、壺・甕・高杯・台付鉢など約30点である。粘土は、 東奈良遺跡の調査区(遺構面)から採取したものを使 用した。これらの土器は、製作後1~2週間の自然 乾燥を経たものである。
- 3 焼成実験土器の配置、最も大きな台付鉢を中心にして、それを取り巻くように、逆にしたり、横に倒したりして山 状に積みあげた。(第36図-1)
- 4 焼成方法、土器群から50cm前後離れた所から4ヵ所に火を付け (第36図-2)次に火を横へとのばし土器群を次第 に取り囲んで行った。完全に土器群を取り囲んでから約2時間ほど焼き、胎土中の水分を蒸発させた。 水分が蒸発すると土器の色調は暗褐色に変化した。 (第36図-3)この時点で、火を土器群に近づけて 行き、次第に土器群を包み込んでしまう形になる。 (第36図-4)この状態で数時間焼くのであるが、 今回の実験では種々の制約から約1時間で終わった。(第36図-5・6)

#### 焼成実験・▮

実験』では、焼成直後に生じる黒斑についての実験を行なった。 (原因④⑤) 上記と同様の工程で、粘土小塊を用いて行なった。焼成 直後に、木で挟んだ場合、木の上に載せてみる場合の2種の実験を

#### 行なった。

#### 実験結果

焼成実験 I の結果、そのほとんどの土器に黒斑が認められ、焼成中にも黒斑が生じた。しかし、黒斑のほとんどが小形で不整形なものであり、遺物にみられるような円形、もしくは楕円形に近いものは、僅かな数のみであった。以下焼成実験 I を行なった実験土器の中から、抽出し記述する。

	焼成時の設置状態	黒 斑 の 付 着 状 態 (胴部最大径を腰部)
a 壶型土器	地面に横転。	・接地部の口縁端外面、腰部に灰色の黒斑。(第35図―1) ・上記対面、小形・不整形な黒斑数ヵ所。(第35図―2)
b壺 型 土 器	地面に横転。	<ul><li>・接地部の口縁端外面、腰部に円形に近い黒色の黒斑。(第35図-3)</li><li>・上記対面、小形・不整形な黒斑数カ所。(第35図-4)</li></ul>
c甕型土器	口縁部を下に伏せる。	<ul><li>・口縁内側に僅かな黒斑。(第35図-5)</li><li>・体部に小形・不整形な黒斑数カ所。(第35図-6)</li></ul>
d高杯型土器	杯部を下に伏せる。	<ul><li>・杯部内側に黒色の黒斑。(第35図-7)</li><li>・杯部外面、脚部内面に小形・不整形な黒斑数カ所。(第35図-8)</li></ul>
e 台付鉢型土器	地面に横転。	・杯部・脚部の最大径に黒斑。(第35図—9) ・上記対面、小形・不整形な黒斑数ヵ所。(第35図—10)

#### 第12表 実験 I・焼成土器の観察表

Αı	同一面の口縁端部と脚端部・腰部の2カ所に黒斑が認められるもの。
A 2	A1の部分と共に、反対面に対になるような黒斑が認められるもの。
В1	下腹部分に黒斑が認められるもの。
Ва	B1の部分と共に、反対面の肩部に黒斑の認められるもの。
C 1	底部全面に黒斑が認められるもの。
C 2	C2の部分と共に、反対面の口縁部・肩部に黒斑の認められるもの。
D	土製品などの半面を覆う黒斑があるもの。

#### 第13表 黒斑の位置関係の分類表

原因①による黒斑・b壺型土器の黒斑は、出土土器に認められる様な比較的整った形を呈している。他は、色調は薄いが、黒斑状のものが多い。 d 高杯型土器の杯部内面すべてが黒色を程しているのは杯部を下に伏せて焼いたために、地面との接触によって生じたと考えられる。

原因②による黒斑・上記のすべての土器に小形、不整型な黒斑が 生じた。これは、燃料にした薪が完全に焼えつきる前に土器を取り

模 式 図	器種	時期	黒斑の位置・形態(胴部の最大径部を腰部とする。)	黒斑の分類
	壺型 土器	弥中 生 時 代期	○口縁外端部・腰部に小型・大型の黒斑。(第34図 1) ○上記対面・頸部と胴部の接する部、腰部の 2 ケ所の不定 形な黒斑。(第34図 2)	A 2
	壺 型 土 器	弥後 生 時 代期	○底部全面に黒斑。(第34図3)	C 1
	水差型土器	弥中 生 時 代期	○腰部下位より底部へ大型の黒斑。(第34図5) ○上記対面・口縁部外端に非常に小型の黒斑。(第34図6)	В2
	無頸壺型土器	弥中 生 時 代期	○鉢・腰部と脚部端面に黒斑。(第34図7) ○上記対面、鉢、腰部に薄い色調の不定形黒斑。(第34図8)	A 2
	壺 型 土 器	古前 墳 時 代期	○腰部下位より底部へ大型の黒斑。(第34図9) ○上記対面、肩部に小型・不定形な黒斑数ケ所。(第34図 10)	C 2
	壺型 土器	古墳 時代期	○底部周囲より一部、腰部下へのびる黒斑。(第34図4)	C1
	甕 型 土 器	古前 墳 時 代期	○腰部から底部へ大型の黒斑。(第34図11)	Ві
	高杯型土器	古前 墳 時 代期	○杯、口縁端部と脚部端部に黒斑。(第34図14)	Α1
	土錘	弥後 生 時 代期	○外面½に黒斑。(第34図15・16)	D
0	紡錘車	弥後 生 時 代期	○片面に黒斑。(第34図12・13)	D

第14表 黒斑の位置観察表

出したために、薪が載っていた部分に生じたものと考えられ、その ために大きさや形が異なる黒斑が生じたのであろう。

原因③による黒斑・今回の実験では、土器と土器の接触では黒斑 は生じなかった。

焼成実験▮の結果、いずれのものにも黒斑が認められた。

原因④による黒斑・木で挟む実験の結果、木の当たった部分は濃く、その木の形を残し、それに順じて薄く広がった。

原因⑤による黒斑・木に接する部分は濃く、煙ののびて行く方向 にも黒斑が生じた。

以上の結果により、原因③の土器と土器の接触による黒斑のみが 今回の実験では、生じなかった。①②、④⑤では不明確なものがあ るが、黒斑は生じ、またその中でも原因②による土器上に炭、燠等 がのることで小形、不整形な黒斑がすべての焼成実験土器に観られ た。

東奈良遺跡出土土器の 黒斑 焼成実験 【・ 』より得られた黒斑を生じる原因、黒斑のありかたを考える上において、当東奈良遺跡出土の土器・遺物の黒斑を観察した。(以下抽出した土器は、黒斑のあり方が明瞭に判るほぼ完形の、弥生時代唐古第Ⅱ様式から古墳時代の各種土器と土錘・紡錘車である。)

東奈良遺跡出土土器と 実験結果の比較 以上のように、黒斑のあり方を出土土器より $A_1 \sim C_2$ 、 $D_07$ 通りにわけたが、実験土器との比較のために黒斑を細かくみてみる。

このうち、 $A_2$ 、 $B_2$ 、 $C_2$ のそれぞれ対になる黒斑をもつものは、それぞれの一方の黒斑が、色調も薄く、小形・不整形であることで共通している。これらの黒斑は、反対面に認められる色調の濃い整った形のものとは異なった原因により生じると考えられる。さきの色調が薄く小形・不整形な黒斑は、焼成実験Iの土器に多数認められた小形・不整形な黒斑と似ている。この黒斑は、実験結果表でも記述したが、原因②によるものである。焼成時に燃料の薪が真赤に焼けて炭の様になっているものが土器に密着している場合に生じ、この炭が完全に燃え切らない内に取り出した場合、小形・不整形な黒斑が生じた。また、この黒斑は、焼成時の土器の置き方、他の土器の関係から、いろいろな位置に付くが、その多くは焼成時に土器の上面になった部分であった。この原因②の黒斑は、俗に言われている黒斑とは異なり、土器に付着する炭の燃焼状態により、生じない場合もあり、また非常に不鮮明な場合もある。

今回観察した出土土器では、A2、B2、C2の対になる黒斑のあ

り方の一方が、原因②によって生じる黒斑ということになる。では、 $A_1 \sim C_2$ 、Dに観られる黒斑は、なぜ生じるのであろうか、実験  $\| \cdot \|$ により、一方が原因②による黒斑となる場合は除外され、原因③は実験で黒斑は生じなかった。残る原因①、④、⑤で黒斑は生じる。出土土器、 $A_2$ 、 $B_2$ 、 $C_2$  と原因①の地面との接触によって黒斑を生じた実験土器、壺 $1 \cdot 2$ 、器台を比較して観ると、いずれも大きな黒斑と小さい黒斑をもつものである。そこで出土土器  $A_2$ の壺型土器、 $B_2$ の水差型土器、 $C_2$ の壺型土器の小さい黒斑の認められる部分を上にして置くと、対になる大きな黒斑の部分が接地し、安定するようになった。また他の小さい黒斑が認められない他の出土土器も、黒斑部分を接地させると安定した。これらの点から出土土器にみられる黒斑は原因①によって生じたものとみられる。なお、Dの土製品にみられる黒斑は原因①によるものであろう。

次に原因④は、焼成実験 II のように小粘土塊の場合は木等で挟み上げることが可能であるが、焼成直後の土器を底部と肩部をもって 挟み上げるのは難しい面がある。同様に原因⑤も困難な作業であり 実際に行なわれたかどうか疑問である。

以上のような実験結果と出土土器との比較によって、焼成中に土器と地面が接触している場合、大きな黒斑が生じ、土器と薪 (炭・燠)等の接触では不明確な小さい黒斑が生じることが明らかとなった。なお、焼成直後木で挟んで取り出したり、木の上にのせた場合も接触した部分に小さい黒斑が生じる。また今回の実験では土器と土器の接触によっていずれの黒斑も生じなかった。

小結

黒斑の生じる疑問に対して今回の実験と出土土器の比較検討によって、一つの解決案が出た。いままで言われていた「焼成直後に土器を木・藁束・布等で挟み上げる時」と「焼成直後に土器を冷やす間木板等の上に置いた時」に黒斑が生じること以上に、焼成中に地面との接触によっても生じ、また焼成中の土器に付着する薪・炭・燠等の状態によっても黒斑が生じることが判ったのである。このように、黒斑は1つの原因で生じるのではなく、種々の原因が関係し合って生じるのである。

次に新たな疑問点も起こった。弥生時代・古墳時代前期の土器は、どのような場所でどのように焼成されたのであろうか。原因①

の地面との接触によって黒斑が生じることを前提にして、東奈良遺跡出土の土器の黒斑を観ると、弥生時代中期の土器は壺・甕・高杯・鉢型土器等の多くを横に倒して焼成している。古墳時代前期の土器は、高杯型土器には横に倒して焼成しているものが多く、他の土器は、多くが底部・下腹部を下にし、自然に安定するような位置で焼成している。

このように時代により、焼成状態に違いが認められるようである。この違いは、焼成時の熱効率を考えたものか、焼成土器の量によるものか明らかでないが、今後これらの点から観る黒斑のあり方を追求する必要があろう。

注 「紫雲出」 昭和39年

高杯型土器と台付鉢型 土器の杯部と脚部の接 点について 高杯・台付鉢型土器等の脚部の接合方法は、筒状の脚部を絞りしめ、杯部と脚部の誘い口として成形した後に、球状の粘土を充填する、いわゆる円板充填法である。この手法は、畿内地方において、弥生時代中期(唐古第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式)から後期(西ノ辻 I 式を含む唐古第 V 様式)まで用いられたとされている。しかし、これ以降の土器を観察してみると、もろもろの方法こそ違うが、古墳時代前期の土器から奈良・平安時代の土師器までに及んでいる。

また円板充填法と並行して、弥生時代後期以降から、さし込み 法、貼り付け法なども観られるようになると考えられる。

以下、各製作方法を各時期に追って変化をみる。

- ①弥生式土器唐古第 【様式の時期
- ②弥生式土器唐古第 1 ・ 1 様式の時期
- ③弥生式土器唐古第 ▼様式の時期 (西ノ汁 | 式を含む)
- ④土師器(古墳時代前期)
- ⑤土師器 (奈良・平安時代)

①の時期は、他の時期とは異なり、柱部は充実しているが、杯底部が落ち込んでいるため充填(補足といった方法といえる面がある)して補ったのであろう。この時期の高杯・台付の土器のうち充填したものと充填しないものの比率は、各々約50%である。

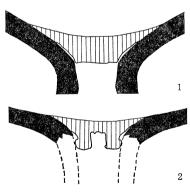
②の時期は、柱状部中央を周囲からしめつけて細くする。杯部には底部がなく中空であるため、粘土をその部分に充填してふさぐ。 後に脚部中頃より下端面まで、ヘラ削り調整を行なう。まれに柱状部までヘラ削りを行なうものもある。

③の時期は、②の時期とほとんど変化はないが、充填の時に指な 2 どで受けとめたのであろうか、円板が逆台形のものが多い。また、 柱状部上端までヘラ削りが行なわれている。

④の時期は、さきの弥生式土器とは異なり、かなり変化する。杯部底部の穴が小さいため、脚部を付けた後に、杯部底部内面のヘラ磨きを行う時に、ヘラについた粘土によって小さな空間を埋めたと考えられる。この点から、円板充填法といえない点があり、補足的な充填方法とも考えられる。

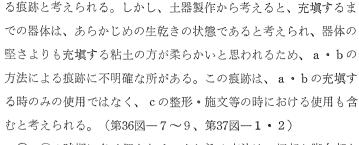
③の時期は、充填円板の下面に、棒で支えたと思われる痕跡が観られる。この痕跡から、a充填する時に粘土が下がらない様に棒等で支える。b充填する時の圧力で脚部が、崩れないように棒で支えた。c外面の整形・施文の時に棒を支えとして用いる等の方法によ

#### 1 円板充塡法



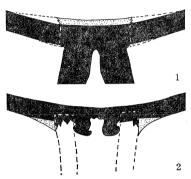
第31図 杯部と脚部のとりつけ方法

2 さし込み法



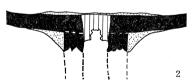
①、⑤の時期に多く観られる。さし込み方法は、杯部と脚台部とを別個に作り、あらかじめ杯底部となる部分は脚部上端の径の大きさに穿孔しておく。そして、接合の時に、柔らかい粘土(ドロ状のもの)または水を杯部と脚部の接点部分に塗り、杯部に脚部をさし込む。最後に杯部内面、杯部と脚部の接合外面にヘラ磨き等を行い、接点部分を消すと共に強度を増す方法を用いている。しかし、さし込んだ時点での杯部と脚部の粘着度が違うためか、接合点はもろく、構造的に弱い面がある。またこの時期の脚部は、絞りしめ後に2内面上端までヘラ削りを行い、器壁の薄いものが多い。(第37図一3~5)

②の時期の大形台付鉢、台付無頸壺等、④の時期の高杯に観られる。この方法には2種ある。 a 鉢・無頸壺等の底部角部分にヘラ削りを行い、丸底状に仕上げ、脚台部を付加する。 b 鉢・無頸壺等の底部に直接付加するものと、充実の短い脚部を直接付加する方法がある。 a の方法は、円板状に剝落するものが多いため、円板充塡法と誤解されやすいが、明らかに異なり、特に大形のものにはこの方法が用いられている。(第36図—10、第37図—6~8)



第32図 杯部と脚部のとりつけ方法 3 貼り付け法





第33図 杯部と脚部のとりつけ方法

回転台について

弥生式土器の製作技法の説明に、「回転台」という言葉がしばしば登場する。しかし、現在の所、明確な「回転台」と呼ばれる土器製作用具が、発見・検出されたとの報告はないが、その存在が想像遺物として使用されている。

この「回転台」という言葉が使用されはじめたのは、弥生式土器と呼ばれる新器種の発見からである。日本の考古学は縄文式土器の研究から始められたが、縄文式土器にない均整のとれた美しい弥生式土器は、「轆轤」を使用して製作されたものと考えられた。しかし、その後の研究により、我国の「轆轤」の使用は、古墳時代中期

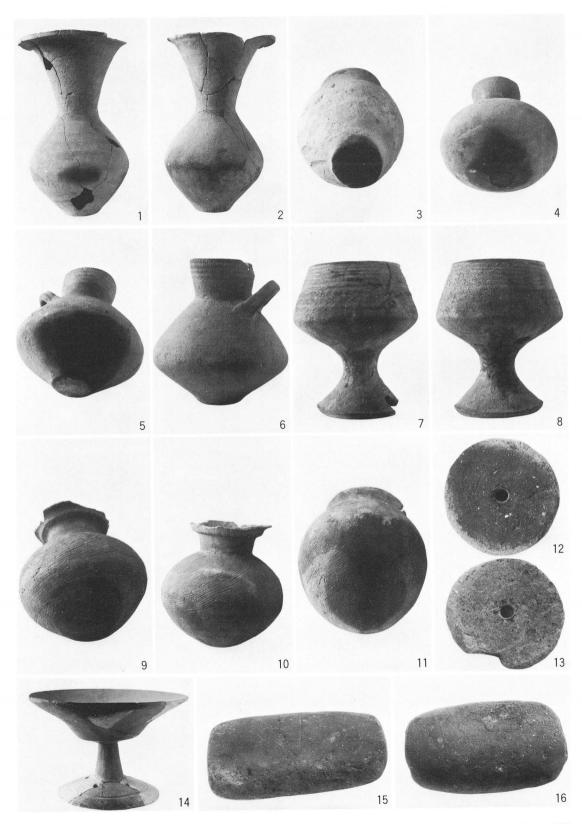
に須恵器の製作技術と共に朝鮮半島から伝えられてからはじまったことが明らかになった。その時点で、上記の技術を説明する上に、「轆轤」に近い道具として「回転台」が考え出された。その後、昭和34年に佐原真氏が土器製作技術の面から、「回転台」の存在の可能性を一歩進められた。

「回転台」とは何か

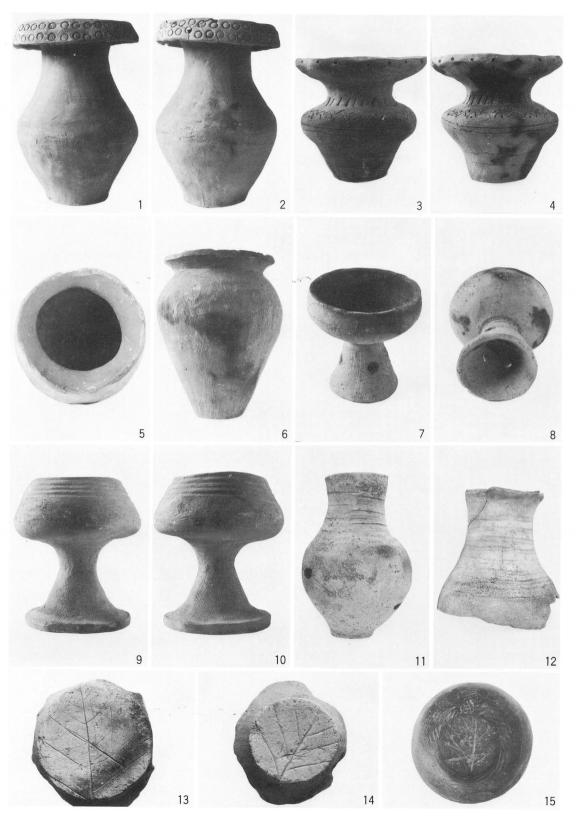
「回転台」とは、「轆轤」とは区別され、必要に応じて台そのものを回転させて使用するものとされている。しかし、現在考えられている「回転台」とは、弥生時代中期後半には単に回転する台ではなく、回転軸をもつ真正円運動をするものとされている。ここまで進歩したとするならば、一種の機械と言えるものであろう。そのために畿内地域のみが使用でき、他の地域では使用できうる単純なものでないとさえ想像されている。しかし、現在のように全国の多数の箇所で発掘等の調査が行われ、何千万・何億点といわれる遺物等が出土しているにも拘らず、その実体をみない。確かに土器製作用具も遺物としての出土例が少ない面があるが、これほどの道具が出土していない上に、「回転台」が土器製作過程において、調整・施文等の段階にのみ使用されたものでありながら、当時としてはこれほど高度な道具へ技術進歩したという点に疑問をもち「回転台」を再考してみる。

|回転台|

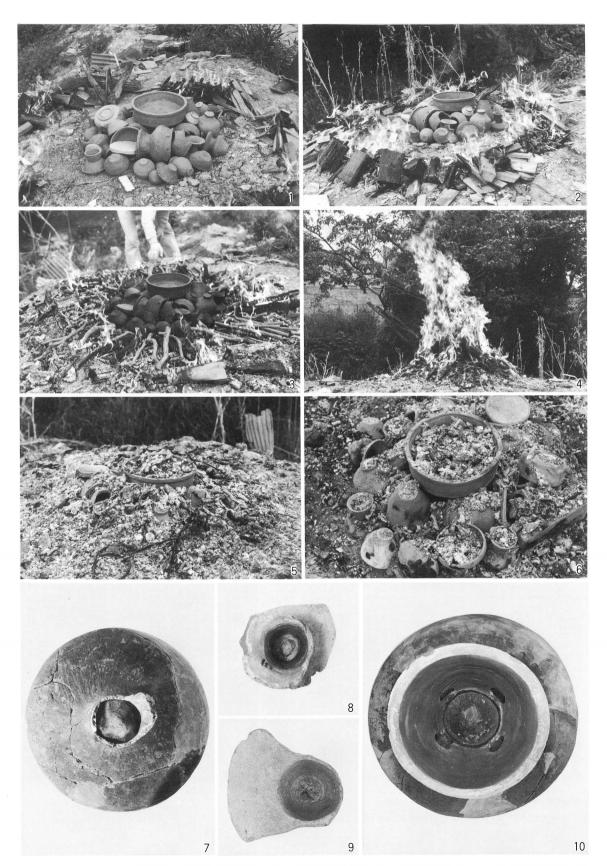
そこで「回転台」の存在を肯定させる櫛描文、凹線文、横ナデ等 を考えてみる。畿内型櫛描文A種においても、唐古第 I 様式の時期 には描き継ぎが認められるものがあり、中には $5\sim10$ 箇所を数える ものさえある。 (第32図-11・12) また同時期末から第 順 様式初頭 の畿内地方の一部にみられる櫛描簾状文は、回転運動からの文様と いうよりも、停止目が文様化したものと考えられ、同様に櫛描流水 文も往復運動とも考えられ、回転運動と異なると考えられる文様が ある。次の唐古第Ⅲ様式は、畿内型櫛描文A種の隆盛期に至り、確 かに描き継ぎは少ない。唐古第Ⅲ様式(新)から第Ⅴ様式(古)に かけての凹線文に至っては、「回転台」の存在を十分に考えさせる ものである。さらに唐古第▼様式から古墳時代前期にかけては、土 器自体の製作技術が大きく変化し、今までの「回転台」上の調整・ 施文等の作業を破棄するため、唐古第 V 様式末から古墳時代初頭に 再びあらわれる櫛描文が描き継ぎの多い手の運動によるⅡ種のもの に変る。この流れは「回転台」の使用状態の変遷と考えられるが、 別の視点「回転台」がないものとした場合には、単純な回転補助具



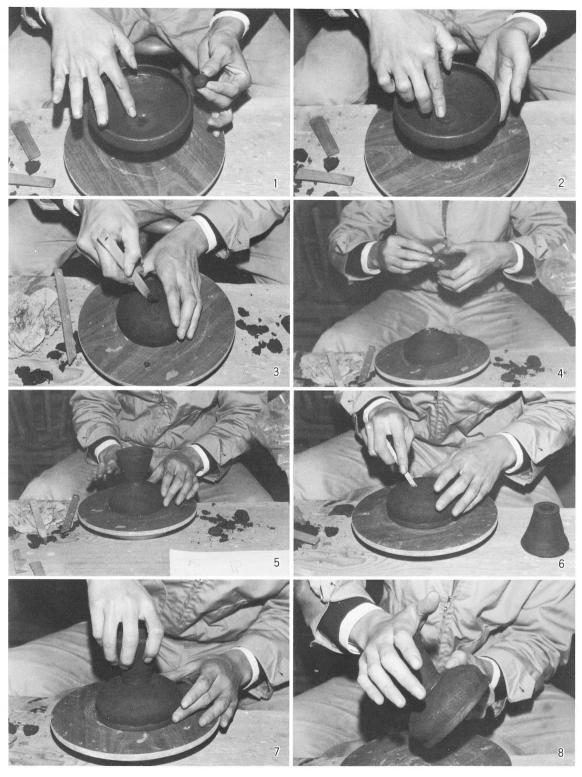
第34図 東奈良遺跡出土土器・土製品の黒斑



第35図 焼成実験土器 (1~10) 唐古第 I 様式壺型土器・櫛描文の描き継ぎ (11.12) 木葉痕の残る土器底部 唐古第 I 様式 (13.14) 土師器 (15)



第36図 土器焼成実験 $(1 \sim 6)$  脚部の取り付け方法 円板充塡法(7.8.9) 貼り付け法(10)



第37図 杯部と脚部の接合実験 円板充塡法(1.2) さし込み法(3.4.5) 貼り付け法(6.7.8)

でも長年つちかってきた櫛描・横ナデ技法を施すことによる熟練化が進み、唐古第 II 様式の畿内型櫛描文を生み、あるいはその頂点が凹線文であるとも考えられる。そして、一時衰退した櫛描文が再び施される唐古第 V 様式末から古墳時代初頭では、製作技術の変化により以前のような丁寧な技法を使ったものを必要としなかったために、描き継ぎが多く認められるものとなったとも考えられる。

この考えから単純な「回転台」として、以前から言われている土 器底部に残る木葉痕に注目し、「木の葉」による回転台を考えた。 この木の葉は、縄文式土器より網代・布等と共に土器を作る下敷と して使用され、弥生式土器の製作においても使用し、土器底部にそ の圧痕を残す。ただ、弥生時代各時期によって僅かながら異ってい るため、分類し3形態に分けてみる。

a 形態。唐古第 【・ 】様式の時期、木葉痕は 1 葉の圧痕が多い。 b 形態。唐古第 ■・ 【V様式の時期、土器底部までのへラ削り、へ ラ磨きを行うために木葉痕を残すものが少ない。大形の 土器は木葉痕が 1 葉、小形の土器は何葉にも重なってい るものが稀に認められる。

c 形態。唐古第 V 様式・古墳時代前期、多くの木葉が重なりあっている。(第32図-13~15)

以上のような分類を考えた。b形態の櫛描文、凹線文の隆盛期に木葉痕を残すものが少ないのは、他の形態に比べて底部が非常に薄く、削り取りがあるからと考えられる。また回転運動から離れた縦方向のヘラ磨き、ヘラ削り作業を行うことに重点を置く面がある。これらの点からb形態の時期にも、木の葉等の下敷を用いた可能性が考えられる。

では何ぜ、各時期(特にa形態の畿内第II様式)に木葉痕を残すのであろうか。「回転台」の存在を考えたならば、木葉痕を残すことに疑問を感じる。つまり、木の葉等を下敷として使用して回転台に載せた場合、真に回転台の回転運動を利用できるとは思えない。回転台に固定してこそ利用価値があると考えられるからである。木の葉は、下敷としての機能と共に、下敷ごと回転する機能をもつものとして使用されたものではないだろうか。また高度な「回転台」が存在したとすれば畿内第V様式に、簡単に廃絶することは理解できない。むしろ木の葉等の単純なものであるからこそ、道具の廃絶でなく、その時間と労力を使った技法の廃絶であったと考えたい。

これらの点を総合すると、単なる製作用の台は十分に考えられるが、そのものが回転運動するのではなく、そこに下敷として使用した「木の葉」等が回転運動を助け、これに弥生時代前期よりつちかってきた調整、施文技術の向上と熟練化によって可能となった櫛描文、凹線文等が施文されたと考えられる。ここであえて、「回転台」という名称を残すとするならば、木の葉等に与えられるべきであると思われる。

- 注 1 「勝部遺跡」 昭和48年 回転台が出土したと報告されたが後 に否定される。
  - 2 「紫雲出」 昭和39年
  - 3 轆轤とは整った回転軸を、台に適当な重さを与えて惰力で急速度 に回転させ、台にのせた粘土塊から直接水挽きによって作り上げる もの。
  - 4 「古代の技術」 小林行雄編
  - 5 東奈良遺跡より昭和49年、叩き板出土。

第37図 杯部と脚部の接合実験は、西念秋夫氏による。

# 東奈良遺跡発掘調査概報 I

## 本 文 編

発行日 昭和54年6月1日

発 行 東 奈 良 遺 跡 調 査 会

住 所 〒567 大阪府茨木市天王2丁目1-8

TEL (0726) 27 — 3 0 3 7

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所